
魔法。 ～ 鐘の音が響く街で

ガラクタ・エントツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法。 鐘の音が響く街で

【Nコード】

N9711N

【作者名】

ガラクタ・エントツ

【あらすじ】

「死の鐘」の音を聞くと、異形が徘徊する異界に連れ込まれる。そんな噂が流れる東京郊外の街。「死の鐘」の音を聞いた近藤信也は、異界で悪魔を封印した魔法のカードを手に入れ、魔法が引き起こす事件に巻き込まれる。 気軽に読める短編の連作です。 『赤い系編』『出会い編』『赤マント編』『吸血鬼編』 完結 『魔女の鉄槌』編スタート。

『魔女の鉄槌』 家出少女たちが、渋谷の街から消えていく。暴力団が売春目的で家出少女たちを監禁しているという噂がある一方、

消えた少女たちは、魔女の儀式の生贄にされているという噂があった。

【赤い系編】 プロローグ その1

「ここは一体何なんですか。悪い夢でも見ているんですか」

近藤信也は、異形の怪物が街を徘徊し、人間を襲うこの奇怪な世界について、黒髪の女に尋ねた。

「良く判ったわね。ここは夢の世界」

「夢の世界。夢か。そうだよな。こんなの現実なわけないもんな」

ほっとして、緊張が切れたら、背中が痛み始めた。

「それにしても、傷が痛いとは、ずいぶんリアルな夢を見るもんだよな。自分だけなのかな、それとも夢の中では痛みがないっていうのが、嘘なのかな」

「知らないわ。傷が痛いのは、半分現実だから。ちゃんと傷治療しないと、現実世界でひどい目にあうわよ」

この女が言っていることの意味が判らない。夢だから滅茶苦茶とも考えられるが。

「何を言っているんだ。さっき、夢の世界って言ったじゃないか」

「ここは、現実の世界であり、夢の世界でもある、人々の思いが具現化する『あいの世界』」

「ねえねえ、小野寺。『死の鐘』って噂、知ってる？」

朝の教室で久保恵は、ミディアムヘアの可愛い友人である小野寺瞳に話しかけた。

「知らない。知りたくもない」と小野寺は目を閉じ、耳をふさぐ。

小野寺が怖い話が苦手なことを知っていて、話しかける久保だ。こんなことで、話が止まるわけがない。

久保から見ると、ここまで反応が良いと話がいがある。

そして、小野寺は、弓道をやっている時は凛々しいのに、こういうところで、子供っぽい仕草をする。

このギャップが、久保にはたまらない

「自分にしか聞こえない鐘の音が聞こえたら、もうすぐ死んじゃうんだって」

「どうして死んじゃうの？呪い」

小野寺も怖いなりに聞いている。

「鐘の音が聞こえると、生きたまま死者の世界に連れて行かれて、殺されるんだって」

「……. どうしたら、避けられるの」

「たいてい、こういう都市伝説には回避方法があるものだ。」

「口裂け女ならポマード。ドラキュラなら十字架に、ニンニクだ。」

「魔法を使うのよ。ポケットの中にタロットカードがあつて、『カードの名前』を叫ぶと、魔法が使えるようになるんだって。それで怪物を倒すの」

「なんか、急にゲームみたい」

小野寺は、急に怖くなくなった。

「でも、噂なんてそんなものですよ。途中から、とんでもない回避法が追加されるのは。でも、話には続きがあるんだ」

先程まで、耳を塞いでいた小野寺が聞き耳を立てている。

久保は、小野寺を焦らす。

「生き残っても、死神が現れて、結局殺されちゃうんだって」

「はあ」

近藤信也は、演劇部の部室で深いため息をついた。

「先輩。好きな人がきたんですね」と後輩の山村美紀がツーサイドアップの髪を揺らしながら声をかける。

「えっ？」

「誰だっかわかりますよ。私は、今恋患い中ですって顔してますもん」

噂好きの人懐こい後輩。

こいつに話したら・・・部活中、いや学校中に知られることになりかねない。

「そんなことないよ」

「先輩。嘘つくの下手なんですから。嘘ついても駄目ですよ」

「・・・」

「先輩。恋の悩みなら、私に任せてください。悪いようにはしませんから」

その割にしては、いつも失敗してるじゃん。という言葉が頭をよぎる。

しかし、彼女居ない暦〓年齢の自分よりは、ましであることは間違いない。

「私の占いによると先輩のモテ期は幼稚園で終わっています。」

山村は、近藤の手相を見て断言した。

「誰が、お前の手相占いなんか信じるか!!!」

「冗談ですつてば、先輩。私、凄く良くあたる占い師知っているんです。告白する前に行ってみては、どうですか？」

山村に連れられ、試しに行ってみた。

そこで得た答えは、

『僕と彼女は赤い糸で繋がっているということ。』

世界は、自分次第で変わるとのこと。

そして、僕は新たなスタートラインに居るとのこと。』

告白することにより始まると言う。

「運命の赤い糸ですよ。めっちゃくちゃ良いじゃないですか？先輩の人生の中で、これ逃したら、次はないですよ」と山村が興奮気味に言う。

それにしても、解釈が、どうとでも取れる答えだ。

人生、初めての告白。

乙女じゃなくても、人生の転換期なのは間違いないだろうけど。

【赤い系編】 プロローグ その1 (後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

設定・プロットをあまり書かずに長編を書いたのは初めてなので、修正が入りまくりです。

知り合いに指摘された箇所を直したので、以前よりましになって
いると思うのですが・・・

良い点は残し、悪い点は直すように頑張っています。

プロローグ その2

私の住んでいる街は、池袋や新宿に快速で20分ほどの東京郊外の街。

特に名産もなく、正直言って特徴はない俗に言うベットタウン。

23区に比べれば、緑や畑の多い田舎だけど、私はそこが気に入っている。

都心には遊びや買い物で良く行くけど、どうしても疲れてしまう。所詮田舎者ということだ。

もちろん、田舎といっても、埼玉の新座ほど田舎ではない。

吉祥寺にだって自転車で20分で行けるし（全速力だけど）、近頃、渋谷にも直通で行けて、結構便利だと思っている。

あくまでも東京の郊外なのだ。ここ重要。

この街に住んで10年。私の人生が、15年だから、ほとんどこの街に住んでいる。

近所のおばあちゃんに比べると、まだまだ、だけど、街のことは、それなりに詳しいつもりだ。

そんな私が言うのも、変だけど、このところ街がおかしい。

別に大きな事件や事故が多発しているわけではない。

私は霊感が強いわけでもないから、幽霊もUFOも見たことないけど、何かおかしいと感じている。

まず、家出する子が増えている。遊んでいる子ならまだしも、家出なんてしそうな子の子の家出が増えている。

警察や先生、大人たちは、普通の子の家出なんて珍しくないとい

う。

だけど、私から見れば、彼らは個人や子供を良く見ていないのだから、普通という言葉で一括りにして判断する。

あと、妙に突然、別れる人たちが多い。

確かに、4月に出会い、数カ月後に別れるのは珍しくないんだけど、別れる気配が一切ないラブラブだったのが、突然別れるんだから、不思議としか言いようがない。

もつとも、私にとって現在、一番おかしくて、一番気になるのは、部活動の先輩（男）の恋の行方。

恋に疎い先輩が、右往左往している姿は、正直、見てられない。そこで、いろいろアドバイスするだが、どうにも駄目だ。

先輩は、見た身も悪くないし、優しいんだけど、男として『カッコよさ』『頼もしさ』が、まったくくない。

典型的な、草食系。

良いお友達にはなれるが、彼氏としては頼りない。

その辺が、母性をくすぐるといふ人も居るけど、私はパス。

相手は、カワイイ私から見ても、カワイイ先輩。

正直高嶺の花だ。

普通に考えると玉砕だけど、良く当たる占いによると、先輩と相手は『赤い糸でつながっている』らしい。

うーん、信じられない。

その構図は異常だった。

薄汚れた路地裏で、中年男が頭を地面に付け、涙を流しながら、髪を後ろで束ねた女子高生らしきの長髪少女に命乞いをしていた。

それだけならば、不良少女にオヤジ狩りの獲物にされた中年オヤジかもしれない。

しかし、少女の左手の手元から伸びるバラの茨に縛られ、サブマシンガンを突きつけられている構図は、異常としか言えなかった。

「なあ、頼む。命だけは助けってくれ。何でもする。あんた仲間がいるんだろ。俺も仲間にしてくれ役に立つからさ」と涙を流しながら、懇願する。

「正直言っただあんたみたいな男、趣味じゃないけど・・・そう・・・なんでもしてくれるんだ・・・」

「あんた、カードが欲しかったんだろ。なあ、やるから許してくれ頼む。助けてくれ」

「あなた。そうやって命乞いをした人に、今まで何をしたの」

「それは・・・夢の中の話だろ。犯罪じゃない」

「その通りよ。そして、これも夢の中の話」と少女は引き金を引いた。

少女が手にしていたのは、違法改造されたエアガンだった。高圧力のガスにより、金属の球が発射され、男の体を蜂の巣にした。

少女は、何事もなかったように平然としていた。

しばらくすると、男は完全に死んだ。

すると、男の死体は、解けるように消えて行った。

少女は、ポケットの中から一枚のカードを取り出すと、カードの絵柄を見た。

「聖杯の5。やっぱり、この程度か」

少女は、カードを自分のポケットに入れると、髪を束ねていたり

ボンを解いた。

もう、夜中の2時。

明日は学校があるので寝なくてはならない。

しかし、寝たくはなかった。

不眠症ではない。

というか、猛烈に眠い。

しかし、できれば寝たくない。

以前は、趣味は「寝ること」と答えていた。

しかし、近頃は寝るのが、少し怖くなってきた。

ゲームのやりすぎだろうか。

それとも、マンガの見すぎだろうか？

近頃、変な夢を見る。

しかも、同じ夢を。

自分が、気味の悪い錆ついた街でゾンビのような怪物たちから逃げ回っているのだ。

夢の舞台は、見知らぬ街ではなく、全て見覚えのある場所。

ただし、特定の場所ではなく、あるときは、見知らぬ学校、あるときは近所の繁華街などで夢は始まる。

そして、その臨場感が半端じゃない。

美術は得意ではないのだが、自分に、これだけの想像力があるんだと驚いてしまう。

怪物たちを倒し、飛び散った血肉の匂いと感触。

そして、攻撃を受けたときの痛み。

通夢の中で顔をつねると痛くないというのだが、物凄く痛い。

朝起きなければ、とても夢とは思えない内容だった。
そして、十分な時間寝ているにも関わらず猛烈に精神的に疲れている。

こんな夢を見始めたのは、つい一週間前からだ。
好きな女子を夢で見るなら判るが、なぜ気味の悪い夢を見なくてはならないのだろうか？

夢を見るのは自分だ。変な夢を見たとしても、自己責任なのだが
.

目が覚めると、僕は棺の中にいた。

正確に言うならば、目が覚めたのではなく、そういう夢を見ているのだ。

目が覚めたならば、早急に棺から抜け出し、逃げる必要がある。
この世界には、怪物が存在していて、グズグズしていると襲われるからだ。

棺の蓋を押し、身を起こし辺りを見渡した

今回の場所は・・・街中・・・吉祥寺駅北口のサンロード商店街
入り口の路上・・・

今までの中で一番最悪だ。
人が多いところは、ゾンビも多い。この一週間で少し判ったことだ。

前回の小平の商店街とは、比較にならない程、人が多い。

案の定、駅や商店街の店舗などから、次から次へと怪物が出て来る。

しかし、調子に乗って、戦い続けるようなことはしない。

戦うよりも、逃げる。これがこの世界に来て学んだこと。

幸運なことに、寝巻きではなく、ちゃんと外出ように私服で、靴も履いている。

怪物と戦っても、怪我すると痛いし、得るものは無い。

たいていのゾンビは動きも鈍く力もたいしたことは無いのだが、中には、バットや刀、斧など凶器を持った奴らが居る。

二日目に、油断をし、刀に切りつけられたことがあったが、その時は、左手の手首から下を切り落とされた。

そんな体験をしたことはなかったが、激痛で意識がその瞬間遠くになった。

朝起きたときにも、手首の周りに、ミミズ腫れができていた。

催眠術にかかっている人に、焼けた石だと言って、氷を手で持たせると、手に火傷の水腫れが出来ると聞いたことがあるが、それと似たようなものだろうか？

ならば、首を切られた場合、どうなるんだろうか？

首にミミズ腫れができるのだろう。

それとも、ショック死だろうか？

とてもじゃないが、試す気にはなれなかった。

近藤はとりあえず、建物の屋上へと逃げた。

人が来ないところには、ゾンビも少ない。

そのため、出来る限り屋根など高いところに逃げるようにしている。

中には、這い上がってくる怪物や襲ってくる鳥などもいるが、集団に囲まれるよりはるかにましだ。

夢を見始めて、一週間、この世界も多少は判る様になってきた。

この夢は、やはりゲームをベースにしているのだろうか。

ゾンビたちとは違う特殊なボスキャラのようなキャラがいて、街

を徘徊しているのを時より見ることがある。

そいつを倒さないと、話が進まないのだろうか？

逃げてばかりだから、同じ夢ばかり見るのだろうか？

自分の夢ながら、面倒なフラグがあるもんだ。

せめて事前に、粗筋を聞きたいものだ。そうしないと、倒さないといけないのか、どうかすら判断できない。

近頃の出来の良いゲームであれば、ストーリーを楽しむために、序盤には無茶苦茶強い敵は出てこないのだが、自分の夢だ。

ゲームバランスがとれている保証はない。

第1話 近藤信也の憂鬱

「はあ」

近藤信也は、体育館の壇上で、台本を持ちながら深いため息をついた。

まるで悪夢の世界に居るようだ。夢なら早く目覚めてほしい。

「先輩、振られたくらいで、いつまで、しょげているんですか」と後輩の山村美紀が背後から声をかける。

「青春は短いんですから、いつまでも未練たらしくしてないで、私みたいに、前向きに次の恋へ行きましょう。」

一応、気を使って慰めてくれる優しいカワイイ後輩なのだが・・・お前みたいに、毎月好きな人が変わるような女みたいにはいけないよ。

小野寺さんは、同じクラス。学校には来たが、教室に行く気にはなれなかった。気がまぎれるだろうと、部活には出たが、ため息は止まらない。

「その通り。小野寺さん以外にも女は沢山いる。だから、前向きに生きる。俺のように」と同級生の鈴木がニヤリと笑って自分を親指で指さした。

演劇部にいるだけあって、行動が濃い、無駄にオーバーアクションだ。

無駄に濃いのは今の時代はやらないが、二枚目で、演技も上手いので、当然もてる。

「お前のようになって・・・お前は斎藤さんという彼女がいるじゃないか。俺とは違うよ」

小野寺さん・・・

彼女のかわいい笑顔、髪を後ろに束ねた部活の時の凜々しい顔、そして、振られたシーンが頭を再びよぎる。

思わず、また、ため息が出る。昨日、今日と振られてから、一日中、こんな感じだ。

「ため息を聞くと周りも気が滅入るから、部活中は、ため息禁止。やるんなら家でしなさい」と部長の三上さんがたしなめる。

部長の言うことは、もつともだけど…

学校に来ているが、授業には出ていない。小野寺さんと顔を合わせるのが嫌だからだ。

だからといって、家で何もしないより、部活をやっている方が気が紛れるだろうと部活には出ているが、ため息は止まらない。

「三上先輩の言うとおりです。先輩。ため息をすると幸せが逃げつつていいですよ。あつ、もう逃げたから関係ないのか」と美紀。

美紀、お前わざと言っているだろう。

幸せが逃げる。胸に刺さる言葉だ。

特に、今まで幸せだったという訳ではないが、今、手元にはないのは間違いない。

「まあ、近藤が小野寺さんを落とそうなんて、百万年早いだよ」と同級生の田中が涼しい顔をして、毒を吐く。

細めの目、毛先を揃えたワンレングスのショートボブが、田中の冷酷さ、いやクールさをさらに増している。

「相変わらず、きついな田中は」と鈴木。

「だって、事実じゃない」

「まあ、勇気を出して、告白しただけでも、近藤としては、上出来、上出来」

勇気を出しでか。

勇気を出したというよりも、暴走した。気持ちを抑えられなかつ

たというが正解かもしれない。

「初恋は成就しないって言うし。もともと縁がなかったんだよ」

「そんなことないよ。占いだと『運命の赤い糸』で結ばれているって言われたもん。ねえ」

『小野寺さんと自分は、運命の赤い糸でつながっている』

自称恋愛の専門家、山村美紀に連れられて行かれた占い師の占い。山村美紀が赤い糸にこだわるのは、近藤のためではなく自分も、将来幸せになれると言われたためだ。

「確かに言われたけど・・・結果は、この通りだ。占いなんて当てにならないんだよ」

お前に進められた占い師さんを信じた俺がバカだった。

占いなんて、いつもは信じないのに、その時ばかりは、妙に信じて、正直うれしかった。励みになった。

そして、舞い上がった。ほんと、バカ。

「そんなことないよ。あそこの占いは良く当たるんだから」と山村美紀が珍しく強く否定する。

「確かに、あそこの占いは良く当たるらしいわね。でも、占いだから絶対はないのよ。私の知り合いでも、『運命の赤い糸で結ばれている』って言われたのに、近頃、別れちゃった人いるしね」と田中。「そういえば、私の知り合いもそうだったな。ラブラブだったのに、近頃、急に別れちゃったし」と美紀が呟く。

「お前そういうことは早く言えよな」

「だって、盛り上がっている所に水差すとと悪いじゃん。結局、先輩の告白の仕方が下手だったんだよ。演劇部として問題あり」

確かに下手だった。それは認めます。

でも、急に話をそつちに持っていくか。

「そうよね。問題よね。」と、なぜか田中が話に乗ってくる。

「すいません。僕は、音響兼道具係兼エキストラなんですけど・・・

」

「関係ないわ。エキストラだろうと木だろうと、わかめだろうと、

舞台に立つ以上は、役者なのよ」と三上部長はビシツと言いつつ切った。

「あなたには、役者魂が足りないよ。だから失恋したの。今から私がお前のひねくれた役者根性をたたき直してあげる」

たたき直す以前に、ないんですけど。役者根性なんて。

それに三上部長、何かの役になりきっているし。こうなると部長は止まらない。

「問答無用。さあ、無駄話は辞めて、稽古よ！稽古！」と三上部長は、無駄に気合を入れて強引に話を締めくくった。

すくなくとも、皆といると楽しいし、部活中は気が紛れそうだ。

でも、部活が終わったら、また、ため息をし続けるのだろうか、近藤は不安になった。

東京都内、×市内にある某大学の検死室。

ベットの上には、中年男の裸の遺体が置かれ、司法解剖が行われていた。

その男の顔は、少女に殺された男と同じものだった。

「死因は神経原性ショック死ですね」

検死を行った若い医師は、立ち会っていた多村に報告した。

「今月に入って三人目か」と多村は一人呟いた。

正確に言うと、多村が知っている範囲で、三人目ということだ。実際はもっと、多いのかもしれない。

このところ、新聞などでは報道されていないが、東京を中心に怪死が相次いでいた。

死因の大半は、神経原性ショック死。

通勤中、突然倒れてそのまま死亡、自宅の居間や部屋で死後発見されるなど、どれも一見、事件性はない。しかし、ある奇怪な共通点があった。

死因ではないのだが、生体反応から見て、直前に付けられたミミズ腫れ、水腫れが体に残っているのだ。

そのため、とりあえず司法解剖されるが、結果、事件性なしと判断されている。

さらに、彼らの部屋を調べてみると、全員がタロットや魔法といったオカルトに異常な興味を持っていた。

「事件性はないのか」

「そうとは、言っていない。他殺ではないと言っただけだ」

「未知の毒による毒殺の可能性は」

「可能性はゼロではないですが・・・調べようがないですよ」と医師は諦め気味に答えた。

「死体検案書には、どう書くんだ」

「神経原性ショック死と書くしかないでしょうね」

若いのに融通が利かない医師。

いや、職務に忠実な医師というべきか。

「そうか．．」

この変死は、事故ですらない。病死として処理される。そして、病死である以上は、2日も経てば火葬にされ、灰になる。

三体目の変死体。おそらくは、三人目の犠牲者なのだ。

おそらく、自分が知らないだけで、類似な事件は以前でも起きているのだろう。

何か、得体の知れない事件が起きていることは明白だった。

しかし、病死として処理される以上は、警察としては、どうしようもない。

いや、この場合、融通が利かないのは自分だ。頭を使い考えれば、事件にすることも可能なはずだ。しかし、自分はそうしない理由を探している。

事件は毎日起き、仕事はいくらでもある。

病死と診断された変死体に付き合う暇はない。

多村は、そう自分に言い聞かせて、その場を後にした。

5月×9日

授業中。細田注意された。あいつの糸もきってやった。

それにしても、眠い。一日中眠い。近頃、気が付かないうちに眠りに入っていることが多い。

6月×1日

切るのは、楽しい。

奴らの人生は、私しだい。まるで神にでもなったようだ。

6月×2日

全身黒づくめ男に声をかけられた。中性的な二枚目の良い男だ。

どうもこの男には、私がやっていることが判るようだ。

男は言った。ポケットを探してみると。ポケットの中には、一枚のタロットカードがあった。

図柄は「運命の車輪」。私の奇怪な能力は、魔法のカードに選ばれたためらしい。

要件は、ある男女の赤い糸を切ってほしいとの依頼だ。

なぜ、この男が、この男女の赤い糸を切ってほしいのか、そんなことはどうでもいい。

私にとって重要なのは、私の趣味がじゃまされないことだ。

6月×4日

あの黒髪の女、私のやっていることに気が付いているのではないだろうか。

あの男と違い敵だと感じる。少し、派手に動きすぎたか。

6月×7日

男の依頼通り、赤い糸を切ってやった。

どんなことが起きるのか楽しみだ。しばらく観察することにしよう。

それにしても、あの黒髪の女が気になる。

第2話 失踪

小野寺さんが学校に来ていない。それを知ったのは、部活の後、家に帰る直前だった。

話を聞くと、家にも帰っていないらしい。

学校内では、告白が原因ではないかということになり、彼女の友達たちから事情聴取を受けた。

確かに、振った側も、気不味く学校に来にくくなる。

しかし、夕方のメールを最後に、携帯の電波が届かないところに居て、友達にメールを出さないというのは、可笑しい。普通なら、気晴らしに、しゃべるか、食べるか、遊ぶかだろう。

もしかして、僕の告白後、気分転換に、街に出て、事件に巻き込まれたのではないだろうか？

自分のことばかり考えていて、小野寺さんのことは何も考えていなかった。俺はダメなやつだ。彼女を好きになる資格なんてなかったんだ。

何かあつたら、自分の責任だ。

どうしよう、自分に何ができるんだ。

自分にできることは、小野寺さんを探すことだ、逆に迷惑かもしれないが、家や学校でじつとなんかしてられない。

僕はとりあえず夜の街へと飛び出した。でも、どうしたら良いんだろうか？

彼女の好きな街、お店、学校外での友人、何も知らない。

改めて、僕は彼女について何も知らないことを実感した。

ヒントは、学校で彼女の友達から事情聴取を受けた時の言葉だ。

少なくとも、自転車通学している彼女の自転車が、学校にも家にもないということだ。

ストーカーではないが、彼女の自転車は見て判る。自転車を見なければ、少なくとも電車で都心に出たかは判るかもしれない。

可能性は低い、でも、彼女がいきそうな場所で、地道に自転車を探すしかない。僕にはそれしか思い浮かばないのだから。

昨日、彼らが消えたのは、この辺りか？

長身で長い黒髪の少女は、大きなスポーツバックを背負い、手にはダウジング用のL字型棒を持ちながら、あたりを見回した。

場所は吉祥寺駅と井の頭公園の中間地点の梅 和夫の赤い家がある住宅街。そして・・・ラブホテル、いや、レジャーホテルの前だ。「よおお、ねえちゃん。さっきからホテルの側でうるちよろしてさ。相手でも探しているのかい？ 相手いないなら、俺が相手してあげるよ」

酔っ払いだ。焼き鳥で有名な「いせや」の本店や公園店が近いせいか、酔っ払いが多い。

「判ってる。これは、気配を正確に追跡されないように、意図的に撒いてる感じね。」

「出ていった感じはないわ」

「そうね。この付近に『扉』があるのは間違いないと思うわ」

「レポートなんて20分もあれば書けるわ。大丈夫。今日中には見つかるわよ」

「なあ、ねえちゃん。一人でぶつぶつ言っていないで、おじさんの相手をしてよ」と酔っ払いがしつこく、酒臭い息を吐きながら声をかけてくる。

「五月蠅い。私は今イラついているんだ。声をかけるな」

「何言っているの。こんな夜遅くにラブホテルの前に居てさ。生理のイライラ？ おじさんと一発、すれば収まるよ」

「...」

少女は、無言のまま、スポーツバックから大型の銃、「S & a m p : W M 2 9」を取りだすと、その酔っ払いを撃った。

今日は何時に鳴るのかな？ 今日は何時に鳴るのかな？

始まりの鐘は、今日何時？ 終わりの鐘は、今日何時？

今日は何時に鳴るのかな？ 今日は何時に鳴るのかな？

第2話 失踪（後書き）

第3話 街で

学校の側の駅にも、家の側の駅にもない。

ということは、都心に電車で出た可能性は低い。なら、一番近い繁華街、吉祥寺に絞って探してみることにした。

吉祥寺は、大通りの路上駐輪に五月蠅い街だ。

そのため、路上駐輪の多い場所は限られる。

多くの場合はデパートの駐輪場か、一時利用だろう。

それに、吉祥寺の北西に住んでいる人間が、吉祥寺大通や線路を越えて、駐輪する可能性は少ない。しかも、24時間の駐輪場は少ない。

一晩中停めていたら、管理人に脇に寄せられる。全部の自転車を見る必要性はない。

近藤は、路上駐輪に注意しながらも、駐輪場を回った。

そして、見つけた。彼女の自転車だ。学校の駐輪マークも付いている。間違いない。

さて、これからどうするか。彼女がこの街に留まっているのか、都心に出たのか、判断できない。手詰まりだ。

都心に出られていたら、お手上げ、僕には、どうしようもない。

僕にできることは吉祥寺の街を探すくらいだ。それも、店の中に入られていたらおしまい。

幸運なことに、彼女の写真は持っている。一軒一軒、カラオケ店や彼女の行きそうなところを探すしかない。

僕は、僕ができる範囲のことを徹底的にやるしかない。

彼女がこの街に居ることを信じて、街を探し始めた。

「ちょっと良いですか」

横断歩道で止まっていると、突然、若い女性に話しかけられた。大人びている感じだが、年齢は、僕より少し上くらいだろうか。

「今、人を探して忙しいんです。勧誘なら別の人にしてください」

なんなんだろうか、この女性は新手の宗教の勧誘だろうか。それとも、デート詐欺だろうか。

「君に大切な話があるの。小野寺さんのことで」

「なぜ知っているんですか？」

「だって私、小野寺さんの友達ですもの」

この女を信じて良いのだろうか？

ひよっとしたら、誘拐犯の一味かも。

「忠告するけど。探すのやめた方が良いわよ。世の中には知らないほうが良いこともあるのよ。知ることにより、もっと悪くなることだってあるのよ」

「小野寺さんの居場所を知っていますか？」

「居場所は知らない。でも、何をしているかは知っているわ。」

「無事なんですか？教えてください。」

「無事よ」

「よかった。どこに居るんですか？」

「だから言っているでしょ。知らないほうが幸せだって。身の安全が判ったんだから、すなおに帰った方が良いわよ」

「教えてください。それに、僕だけじゃなくて、家族や友達だって心配しているんです。場所を明確にしないと」

「判ったわ。教えてあげる。今頃、ホテルでHしているわよ。」

「えっ？」

「昨日、彼氏とホテルに入って行くの見たのよ。学校に行っていない

ってことは、まだ、そこにいるってことかもしれないでしょ」

「.....」

「判ったでしょ。知らないほうが良いって」

「そんなことないです。事故にあっただけでもうれいんです。ありがとうございます。さすがに僕の口から言いづらいので、もし彼女に会ったら家に連絡するように言ってください」

帰るとするか。

結局、僕は何をしていたんだろう。

僕の告白が原因で家で？

過大評価も良いところだ。小野寺さんは、僕のことなんて気にかけてもいない。今頃、彼氏と遊んでいるだ。

バカだ。

涙が出てきた。

泣くな。

泣くななんて、惨めさが増えるだけじゃないか。

しかし、あの女は怪しい。

小野寺さんの友達だとして、なぜ僕のことを知っているんだ。写真で僕のことを見たことがあるのだろうか？

確かに、こんな奴に告白されたと見せる可能性は高い。だったら、知っただけでもおかしくないか。

それにしても、あの女は僕が聞いてショックを受けるのを楽しんでいた。

正直言って、小野寺さんとあんな女が知り合いだなんて、意外だな。やはり、僕は彼女のことをよく知らないということだ。

疲れた。家に帰って寝よう。

『？』

なぜ、彼女が僕の写真を持っているんだ。彼女に写真に撮られた覚えはない。

昨日、振られてから彼女と一度も会っていないし。

振られてすぐに、部室に逃げ込んだ。

わざわざ出待ちしていたとは考えられない。取れるタイミングなんてないはずだ。

僕が彼女の写真を持っているのは、判るとして、彼女が以前から僕の写真を持っているとは考え難い。

彼氏と遊んでいるという言葉が、ショックで理性を失っていた。

あの女は、やっぱり怪しい。もっと、問い詰めるべきだった。

あっ、雨が降ってきた。

第3話 街で（後書き）

第4話 鐘の音

東武裏の駐輪場に戻る途中、雨がどんどん強くなってきた。

ある者は、帰宅を急ぎ。そうでない者は、雨宿りをする。

恋人たちは、傘をさし、2人で一つの傘に入る。

羨ましい。どうせ、もうひとつ傘持つてるんじゃないの。貸してよ。哀れな僕に。

さすがに、吉祥寺でも、だんだん人通りが少なくなる。店のシャッターはだいぶ前に閉まっていて、雨の暗さもあり、通りは物悲しくなってくる。

カーン…ゴーン…カーン…ゴーン……………と鐘の音が街中に響く。

こんな夜中に鐘か。

寺じゃないな。教会の鐘みたいな音だ。

確か、『死の鐘』の噂なんてあったな。

夜中に変な鐘を鳴らすから、そんな噂が立つのだろう。

それにしても、こんな夜中に鐘を鳴らすなんて、非常識だな。

今何時だろう。

携帯を取りでしてみる。

12時ちょうど。どうやら、さっきの鐘は12時の鐘らしい。

ずいぶん、遅くなっちゃったな。

しまった。家にも連絡していない。全速力で帰っても、1時近くか。怒られるなこりゃ。

とりあえず、連絡だけはしよう。

…通じない。

アンテナは・・・一本も立っていない。
ここ、吉祥寺だよな。

防水のくせに、雨で壊れたか。
ついていない。とことんついていない。

づぶ濡れだ。びしょびしょ。

傘もない。どうやって帰ろう。

づぶ濡れだから、そのまま、帰るか？

今は、まだ6月。日中は温かいが、夜になるとそれなりに冷える。
先ほどまでは、寒さなんて感じなかったのに。

天気も雨、僕の心も雨模様・・・

身も心も寒い。

財布の中も・・・寒い。

我ながら、全然、詩的センスがない。

自分のセンスが一番寒い。

風が出てきた。濡れた服に、冷たい風、このままだと確実に風邪
をひく。

雨宿りでもするか。

場所は東武の裏。店は閉まり、雨を防げるところは少ない。雨風
を防げるところ・・・とりあえず、アーケードを目指そう。

カーン・・・ゴーン・・・カーン・・・ゴーン……………

鐘の音は、雨宿りをしている長身の黒髪の少女のもとにも届いた。

「こんなときに、始まりの鐘か。ついてない。」

鳴ったよ。鳴ったよ。
鐘が鳴ったよ。

楽しい遊びが始まるよ。
楽しいゲームが始まるよ。

今日は誰が、消えるかな？
今日は誰が、死ぬのかな？

アーケードに誰もいない。

そんな、バカな。ここは吉祥寺だぞ。うちの近所なら、まだしも
12時で人が居ないなんてことないだろ。

もう少し早く気が付くべきだった。
さっきから誰とも会っていない。
もしかして、さっきの鐘は合図？
何か災害があつて避難中？

そういえば、子供のころ、近所の畑で爆弾が発見されて、爆弾を
中心にして半径500メートル、立ち入り禁止、住民全員避難して、
誰も居なくなつたことがあつたな。

いや、爆弾処理だけとは限らない。
バイオハザードやそれに匹敵するような大事件が起きたのかもしれない。

もしかして、知らないの僕だけ？
何で知らせてくれないの。

探すのに夢中で気が付かなかったのか。ショックのあまり聞こえなかったのか。

．．．もしかして、超緊急事態！！

運が悪い、とことん運が悪い。

それにしても、どっちに逃げればいいんだ。

第5話 人影

どつちに逃げればいいんだ。

聞こうにも、誰も居ない。電話も通じない。

どうすれば良いんだ。

誰か居ないのか？ ここは吉祥寺だぞ。さすがに、誰も居ないということはないだろう。

近藤は、アーケードの中を奥へ奥へと進んだ。

アーケードのほぼ中央、メンチカツ目当てに行列のできる肉屋まで来たが誰も居ない。

静かだ。

いつもは喧騒に包まれた街なのに、今は雨と風の音しかない。

神経が研ぎ澄まされる。

何か、重いものを引きずっているような音がする。

音の方を見ると、人影のようなものが見えた。

自分以外にも誰かいる。

その人影に向かって走り出したが、その影は深い霧の中へ消えていつてしまった・・・

足元を見ると、路地へと何かを引きずったような黒い跡が路上にある。

黒い跡は、路地から大通りを横ぎり、反対の路地へと続いている。油だるうか？

暗くてよく分からないが、近寄ってみると、赤く見えなくもない。

『血！』

人の血だるうか？

暗闇のなか目を凝らすと、黒い跡の先に、ワンピースを着た女性がうつぶせに倒れている。

恐る恐る近づくと、女性は動いているように見えない。

死んでいるのだろうか？

近づいてみて初めて判ったのだが、女性の上半身を中心として、既に血溜まりができています。女性は、どうやら顔に傷を負っているようだ。

路上にこれだけの血溜まりがあるということは、かなりの怪我を負っているのだろう。

しかし、誰が。考えられるのは、先程は、人影の人物だろう。

火事場泥棒ならぬ、殺人鬼。

既に周囲には、人影は居ない。

その時、女性の体が、かすかに動いたような気がした。

「大丈夫ですか」と話しかけると、女性は声に反応して、顔をあげる……

「!!!!!!!!!!」

悲鳴を上げることも忘れて、その場に座りこむ。

目や鼻だけではない……肉がえぐられ、まはや顔と呼べるようなものがなかった。

「あああああああああああああああ」

女は口がないため、空気が漏れるようなうめき声をあげる。

女は声のした僕の方に、手を伸ばすが……僕は腰が抜けて立えない動けない。逃げることもしなければ、助けることもしない。ただ、腰を抜かしているだけ。

女は這うようにして、ゆっくり僕に近づいてくる。

怖い。

その一方で、僕の中で別の感情が生まれた。

情けない。

かつこ悪い。

惨めだ。

こんなことだから、振られるんだ。

こんな男だから、振られるんだ。

このまま惨めで良いのか？

僕は意を決した。

逃げるためではない。彼女を助けるために。

僕は、彼女の手を取ると、彼女を励ました。

突然女の動きが止まる。

「に．．．て」

彼女が声にならない声で何かを訴えている。

背後から、それも靴音ではなく素足で歩くような音がする。

振り向くが暗くて良く見えない。、

音はどんどん近付いてくる。そして、間隔も短くなって行く。いや、数が増えているんだ。

音の主が、姿を現した。

暗闇に見えるその姿は．．．9割がた人間なのだが、頭という肝心な部分がなかった。

首なし人間。

そして、爪だけが異常に長い。

しかも、1人ではない。判るだけでも、8人。

僕は理解した。これは現実ではない。夢だ。まぎれもなく、悪夢だ。

第6話 異形

首なし人間が、徐々に近づいてくる。

恐怖。しかし、それ以上に、心の底から湧きあがるのは、闘争の意思。

覚悟を決めた瞬間、勇氣は出てこないが、不思議と力が湧いてくる。

「うお、りゃ〜」

側にある自転車を掴むと、遠心力をつけ怪物へとブン投げる。

「ガシャン」

自転車は、思いのほか飛ばず、怪物の目の前の地面に落ちる。

しかし、勢いはすぐに落ちず先頭の2匹の怪物の足元を直撃。

足元をすくわれた怪物どもはボーリングのピンのように次々と転倒した。

意外と行けると思ったが、怪物どもは、ふたたび立ち上がる。

大したダメージになっていないようだ。

近藤信也は、女性を抱え逃げた。

決して細身の女性ではない。良く言えばグラマーな女性だ。

普段の僕からは考えられない力だ。

火事場の馬鹿力だろうか。

しかし、女性を抱えて動くのは容易ではない。

幸運なことに、怪物の足は遅い。より深刻な問題は、彼女の怪我をどうするかだ。

まだ血が止まっておらず、手が徐々に血まみれになっていく。

これだけの大怪我だ。傷薬や包帯だけではだめだろう。

「！！！」

前方にも、首なしの怪物が居る。
挟まれた。

近くの扉も、カギが閉まっていて、開かない。

もう、強行突破しかない。

左右を見た。右は9人。左は、もっと。

迷わず、右の怪物の群れに、突進する。

ほとんど体当たりと言っている、飛び蹴り。先頭の怪物を跳ね飛ばす。

続いて、横蹴りで、二匹目。

背後から鋭い爪で切りつけられる。痛みが走るが・・・背後の怪物に対して、連続回し蹴りで、三匹目。

さすがに、これは人を抱えていている状態では無理だった。

バランスを大きく崩してしまう。

四匹目が迫ってくるが、立っているのがやっとで蹴りが間に合わない。

銃声の直後、目の前の怪物から血飛沫が飛び、崩れ落ちる。

連続して、銃声が聞こえ、怪物が次々に倒される。

上を見ると、黒髪の女子高生が、大型の銃を撃っている。

「私がかい止めておくから、さっさと行きなさい。待ち合わせはパルコの裏よ」

「はっ、はい」

この場合は、彼女に任せて、僕は女性を抱えて、全速力で走った。

ハサミ女め。余計なことを。これでは、縁を切った意味がないじゃないか。それにスポーツバッグの女。あいつは何者なんだ。同じ契約者か。儀式を邪魔されないように、早めに排除すべきだが。どうしたものが。

第7話 あいの世界

待ち合わせの場所に行くと、彼女はすぐに表れた。

彼女は、カギを取りだすと、側の喫茶店のシャッターを上げ、店の中に入る。そして、僕たちが入るとすぐにシャッターを下ろした。僕は、近くテーブルの上に女性を置く。

「ここなら大丈夫よ。もう安心して」

彼女は、彼女は女性の脈を測る。

「どうなんですか」

「まだ、かろうじて息はあるけど、私に怪我を直す能力はないから、どうしようもないわね」

僕は頭を抱えた。そして、涙が出てきた。

「この人はあなたの恋人」

「違います。失恋した僕に恋人はいません」

思わず余計なことまで言ってしまった。

「友達？知り合い？」

「知りません」

「あなた知らない人を抱えて逃げてたの？変な人ね」

おもむろに彼女は、女性のポケットを探り始めた。

「何をしているんですか」

「カードはないわね。安心して、上手くいけば死なずに済むわ」

「『上手くいけば死なずに済む』、どういう意味なんですか」

「あなた、ここに来るのは、初めてみたいね」

「初めてです。こんなところ、何度も来てたまりますか」

「私は何度も来ているわ」

「何度も？」

「どういふことだ。」

「それより、あなた背中をこっちに向けて」

「訳が判らないまま、彼女の言うとおりにする。」

「彼女は、背中から何かをはがしたようだ。」

「良いわよ」

振り向くと彼女は、お札のようなものを持っていた。

「どうやら、あなたは、たまたまというよりも、誰かに招待されたみたいね。心当たりはない？」

「心当たりと言われても．．．あつ。きっと、あの女だ」

恐らく、声をかけるついでに、背中につけたのだろう。

あの女は、何者なんだ。なぜ、僕にこんなことをする。僕はこんなことをされるような特殊な人間ではない。思い当たることといえば、小野寺さんの失踪ぐらいだ。

「どうやら、心当たりがあるみたいね。話して」

自分に起きたこと、小野寺さんのことを話した。

「どうやら、私も関係ありそうね。でも、これ以上、この件には手を出さないことね。この程度は済まなくなるわよ」

「あの怪物は何なんですか」

「『ヘッドレス』。自分の意志とは別の行動をとっている人の罪の意識と言われてるわ。ここは、そういうのが具現化する世界」

「ここは一体何なんです。悪い夢でも見ているんですか」

近藤信也は、異形の怪物が街を徘徊し、人間を襲うこの奇怪な世界について、黒髪の女に尋ねた。

「良く判ったわね。ここは夢の世界」

「夢の世界。夢か。そうだよな。こんなの現実なわけないもんな」
ほっして、緊張が切れたら、背中が痛み始めた。

「それにしても、傷が痛いとは、ずいぶんリアルな夢を見るもんだ」

な。それとも、夢の中では痛みがないっていうのが、嘘なのかな」
「知らないわ。傷が痛いのは、半分現実だから。ちゃんと傷治療しないと、現実世界でひどい目にあうわよ」

この女が言っていることの意味が判らない。夢だから滅茶苦茶とも考えられるが。

「何を言っているんだ。さっき、夢の世界っていたじゃないか」

「ここは、現実の世界であり、夢の世界でもある、人々の思いが具現化する『あいの世界』」

第8話 魔は、悪魔の魔

「愛の世界？愛じゃなくて、地獄の間違いじゃないか」

「ラブの方じゃなくて、ハザマの方の間よ。現実と夢の間。物質世界と精神世界の間。真実と偽りの間」

「良く分からないけど。どうしたら戻れるんだ。元の世界に」

「さあ。始まりの鐘も突然だけど、終わりの鐘も突然だから。でも、たいていは1、2時間で、戻れるわよ。生きてればだけど」

『生きてればだけ』か。僕は生き残れるのだろうか。

「もしかして、多くの人がこの世界に引き込まれたりするの？」

「カードさえなければ、たいていは悪夢で終わるわ。運が悪ければシヨック死だけだ」

「じゃあ、帰れなくなつて、失踪者になることはないんだ」

近藤は、小野寺さんが巻き込まれた可能性について考えた。

「ないわけではないわ。カードの所有者に捕まって監禁されたりした場合は帰れなくなるわね。その場合、家出や失踪として認識されるけど。知り合いに失踪者でもいるの」

「昨日から家に帰っていないらしい」

「そうなの・・・問題はあなたよ。どう？」

ポケット探ってみた。

『！！』

何やら・・・カードのようなものがある。こんな入れた記憶はないのに。

取り出して、絵柄を見るとトランプとは違う。何やら、剣が書いてある。

「見せて」

図柄を見せた。

「剣のエースか。カードを持ってることとは、死ねないわね。」

「どういうことなんですか？詳しく話してもらえませんか」

彼女は大きくため息をついた。

「．．．良いわ。まあ、時間もあることだし、あなたはもう逃れられないし、私の知っている範囲で話してあげるわ。何ついて知りたいの」

「その．．．カードについて知りたいんですけど」と手元にある剣のエースについて見せる。

「カードは悪魔を封印した魔法のタロットカード。そのカードの所有者は、魔法を使えるようになるのよ。その代わり、普通の人よりも、より強い影響下に入るわ。普通の人なら、悪夢で済む話でも、カードの所有者には現実になるの」

「つまり、悪夢の中で死ぬと死んでしまう」

「そう。」

「その．．．そういえば、お名前を聞いていませんでしたね」

「そうね。でも、最初にあなたが名乗るべきじゃないの。お礼もまだ出し」

彼女は、悪戯っぽい笑顔で言った。

「助けて下さって、ありがとうございます。僕の名前は、近藤信也です。よろしくお願いします」

「私の名前は、清水葵。よろしく」と素っ気なく答える。

「清水さん。清水さんは、何回くらい、この世界来たことあるんですか？」

「プライベートについてはあまり話したくないわね。でも、このくらいなら良いか。5回まで数えて辞めちゃったけど、だいたい20回くらいかな」

「こんな地獄に、20回も．．．」

「こんなのまだ優しい方よ。氷や炎の世界だってあるんだし、あんな怪物は雑魚よ。それにあなたには、契約者になるためのテストが待っているんだから」

「契約者になるためのテスト？」
「あなたは、カードの所有者だけど、まだカードの契約者ではないのよ。今後、カードの契約者となるべく、試練があるわ」
「契約者になれないと、どうなるんですか」
「カードの契約者になれない者は、カードの悪魔に魂を食われる。なるか、死か、選択肢は二つしかないのよ」
「頭が痛くなってきた。」

この日は、怪物の襲撃もなく、いろいろなことを聞きながら、無事生き残ることができた。

第9話 禍の赤い糸

世の中に運命の赤い糸なんてものがあるのだろうか？

運命の人とは、小指と小指が赤い糸で、つながっている。

そんな、おとぎ話みたいなことがあるのだろうか。

友人が赤い糸を見えると言ったら、信じるだろうか？

目の前で、言われたらどう思うだろうか？

友人の前では、否定しないだろう。むしろ、『不思議ちゃん』と
いって、笑顔で、その場を流す自信がある。

しかし、友人の精神を疑うだろう。そして、病院へ行けと心の中
で思うだろう。

では、自分が、赤い糸を見えるようになったら、どうしたら良い
のだろうか？

精神病院に行くべきだろうか？

始めて、赤い糸に気がついたのは、英語の授業中。

顔をあげると、空中に赤い糸が見えた。普通の糸だと思った。

しかし、良く見ると隣の席の人の小指から出ている。さらに、周
りを見渡すと、クラス中に縦横無尽に、赤い糸が張り巡らされてい
た。そして、自分の小指にもついている。

取るうとするが、手が通りぬけて、触れることができない。

運命の赤い糸だとわかった。

もつとも、その糸の大半は、教室の外へと伸びている。自分の糸
もだ。

クラスの中で付き合っている人たちもいる。しかし、彼らの多く

は、つながっていない。つまり、運命の相手ではないということだ。

私は、自分の糸と好きな人の糸が、つながっているか確かめた。そして．．．私と彼が、つながっていないことが判った。

それどころが、彼と私の友人のカナが、つながっていることが判った。

正直、糸が、ぜんぜん違う方に延びていたので、自分が繋がっていないことは、なんとなく判っていた。

でも、なぜ、カナなの？

どうして、私じゃないの？

こんなのウソに決まっている。

見えないほうが幸せだ。

こんな糸なんて、ない方が良い。

近藤君の告白は、下手だった。どうしようもなく下手で、私の顔すらまともに見ていない。

意気地なし。

ほんと、勇気のない意気地のない男。でも、彼が私のことを本当に好きだということは判った。

近藤君のことは、正直よく知らない。でも、全く知らないかという、そんなこともない。

何回か、活動を一緒にして、ある程度判っている。

小野寺瞳は、予備校のそばにあるお気に入りのカフェで、これまたお気に入りの甘いココアを飲みながら、カウンターに座りながら考えた。ここは、1人になりたいとき、考え事をするときに使う、誰も知らない私だけの秘密の場所。

正直、OKでも良かった。でも、なぜか、OKと言えなかった。何でだろう。

彼のことをよく知らないからだろうか。

良く知らないけど．．．良い人なのは知っている。頑張り屋ながら、ちよつと、頼りないところも、母性をくすぐる。

でも、それは好きになる理由になるのだろうか？

そんなことを考えながら、甘いココアを少し口に入れる。ゆっくり、ゆっくり甘さを楽しみながら、時間をかけて飲む。

そんなことをしていると、隣に黒服に身を包んだ男が座った。スラリとした、長身の二枚目。美系とっていいだろう。ここは、そんなに混む店ではない。開いている席もたくさんある。なぜ、わざわざ私の隣に座るのだろうか。

私に気があるのだろうか？

たぶん、そうだろう。

彼も私の方を見た。吸い込まれそうな美しい魅力的な瞳。そして何よりも、どこか懐かしい。

自分の顔が赤くなって行くのが、鏡を見なくても判った。

これを運命の出会いというのだろうか。

私は、今、なぜ、近藤君を断つたかを理解した。そして、そんなことは、もうどうでも良くなった。

本当に好きなら、その子の幸せを第一に考える．．．そんなの綺麗事だ。恋愛なんて、究極のエゴじゃないか。

僕と君とは、運命の赤い糸の赤い糸でつながっているんだ。君がどう思っても、これは運命なんだよ。

恋愛、それは神聖なる狂気である。

<ルネサンス期の言葉>

僕が狂ってるって？ 所詮君たちの愛は、その程度ということさ。
人は、愛している人のためには、命すらも捨てられるんだ。理性な
んで、なおさら簡単さ。

第10話 それぞれの朝

とある女子校の朝の教室。既に女の子達は、おしゃべりに夢中だ。

「私、昨日、運命の人にあったの」

早乙女愛は、朝の挨拶がすむと、友人たちに宣言した。

「どこで？」

「夢の中で」

一瞬呆れたが、早乙女が少しずれていることに友人たちは慣れていた。

「まあ、そんなことだろうと思ったわよ」

「相変わらず。夢見がちだな」

「で、どんな夢だったの。白馬の王子でも出てきたか」

小中高と女子校の早乙女が、擦れることなく妙に恋愛にあこがれ、現実的ではない男性像を求めていることを友人は知っていた。

「怪物が出てきた。すごい怖い夢だったの。私、怪物に襲われて、顔を食べられたの」

「なんだその夢は・・・話が読めないんだけど」

「その時、彼が助けてくれたの。醜い私を抱えて、一緒に必死に逃げてくれたの。結局、私は、死んじゃったんだけどね」

「・・・大変だったのね」

早乙女がずれているのに慣れていたが、今日は今までの中でも、最高峰だと友人たちは呆れた。

「彼こそ、私の運命の人よ」

「で、夢の中で会った彼氏は、どんな顔していたの」

友人は念のため、聞いてみた。いつもは、早乙女の好きな芸能人なのだが、この時ばかりは返答が違っていった。

「それが判らないの。顔を食べられて、目がなくなっちゃったから。声は覚えているんだけどね」

通学路は、投稿する女子高生たちで溢れていた。そんな中、長髪を風になびかせ、1人、通学路の上り坂を歩いている少女。

「でも、ちゃんと終わらせたじゃないの」

清水葵は、1人スポーツバッグに話しかけていた。

「確かにそうだけどさ」

何か独り言を言っている。

「おはよう。葵ちゃん。」

背後から声をかけるのは、友人の香取奈々枝だ。隣には、同じく友人の山崎保奈美。

「おはよう。葵」

「おはよう」

香取奈々枝は、身長は小柄だが、ふんわりポニーテルが似合う学年一の元氣娘。そして、山崎は、内面はともかく、学年屈指の才色兼備な優等生、しかも毛先にウェーブをかけた長髪が似あう真正のお嬢様。

香取と山崎の存在と一緒に居る時間は、今の清水にとって数少ない安らぎの時間だ。何気ない挨拶だが、今の清水は、こんなことでも幸せを感じてしまう。

「葵ちゃん。今日は、なんか寝むそうだね」

「ちよつと、レポートに手間取っちゃってね」

「葵にしては珍しいな」

「そりゃ、手間取るよ。葵ちゃん、前の授業中寝てたもん」

「そうだったっけ・・・」

確かに、このところ、連戦で寝不足だったからな。授業中が格好の寝る時間になっていたのは、間違いない。

「葵ちゃん、受験生なんだから。成績良いからって油断しちゃ駄目

だよ」

「香取の言つとおりだな。気をつけるよ」

「ところで、奈々枝。お前、今日の日直じゃなかったのか」

「おお、そつだ急がなきゃ。先行くね」と急いで学校へ行く。

「昨日も、調べてたのか」

山崎が小声で清水に尋ねた。

「ああ．．．少しだけだよ」

「嘘付くなよ」

「山崎には隠せないな」

山崎は、清水が秘密を打ち明けた数少ない人間の1人だ。

「葵が嘘をつくのが下手なんだよ。奈々枝だつて、うすうす何か、気付き始めているぞ。あいつ、感は良いからな」

「気をつけるよ」

話したら楽になるのだろうか。おそらく香取を心配されるだけだろう。しかし、私は山崎という理解者が居て幸せだと思う。学校では、私が変わった、おかしくなったと噂するものが居る。確かにそうだと思う。魔法は普通の人には理解されない。当初、自分の置かれていた立場が誰にも理解されず苦しんだ。そんな中、香取と山崎が友人でいてくれることは、嬉しい限りだ。

孤独ほど辛いものはない。

昨日、出会った彼は元気にやっていけるだろうか。

家をどうにか出たものの学校に行くのは気が重かった。

小野寺さんの失踪の件は、かたが付いていないためだ。

さすがに、あの女の言葉をそのまま伝えるわけにはいかないし、あの女の言葉が真実とは限らない。最悪の場合、間の世界に囚われてしまった可能性も否定できない。

現状では、僕の告白のせいで気不味くなり失踪、事件に巻き込ま

れた説が同級生の中で主流だ。同級生や教師の反感や疑惑は避けられない。

予想通りの結果待っていた。

昨日までの失恋に対する憐れみの眼とは違う。明らかに軽蔑の眼だ。

下駄箱でクラスメイトに声をかけても無視された。そして、僕が教室に入ると、皆の会話が止まった。誰も僕に話しかけない。だれど、噂だけはしている。同級生の視線と態度は、怪物よりも、僕の心を傷つけた。

僕の心は折れた。

僕は、たまらず学校の屋上へと逃げた。

小野寺瞳は、温かい日差しが射し込む部屋で目覚めた。

目をこすりながら周囲を見ると、家具、間取り、天井、全てが変わっている。

ホテルにいたはずなのに、ここは？

ベットから外を見ても、青い空と雲、そして庭の植物しか見えず、隣の家の屋根すらも見えない。寝ている間に移動したようだ。

東京にはいないのだろうか？

今の自分には、どうでも良いことだ。

「ここは、自分と妹の2人の家。素敵だろ」
立ち上がって、窓際に行き、外を見える。

湖が見える。ここは、湖畔の別荘なのだろうか。風景から推測すると、北海道か、長野だろうか。だけど、何か現実離れしている。絵画のような美しさだ。

「素敵な庭ね」と庭へ出る。

バラが咲き乱れる良くて入れされたイングリッシュガーデン。

湖の畔のテーブルには、少女ひとり座っていた。

ツースイドアップで腰まで伸びた長髪、白いワンピースの似合う優雅な顔立ちの美少女。おそらく、原田優の妹の優奈だろう。

近づいて、声をかける。

透き通るような白い肌の少女。どこか、綺麗だが、どこか現実離れした感じを受ける。

「小野寺 瞳さん？ 兄がお世話になります」

しばし、雑談をした後、原田が来る。

「何の話をしていたんだ」

「優君の話。優君は女たらしだから、気をつけなさいって」

「それを今、ここで言うか。それに彼女で最後だよ」

部屋に戻る途中、小野寺は、原田に話しかけた。

「彼女．．．普通じゃないわね」

「やっぱり、君には判っちゃうんだね。そう、彼女は現実ではない。君は特別だ。前の女たちとは違う。君の力が必要なんだ」

「私の力？」

「君と僕は似ている。君は兄を失い。僕は妹を失った。望みは同じ。僕と君が協力し合えば願いがかなう」

第11話 屋上

小野寺 瞳。

彼女のことを好きになったのは、いつごろからだろう。

正直言つて、入学式で彼女を見ていてから、好きになっていたのかもしれない。

でも、ただ思っているだけで、何も出来なかった。ただ、1年2年とクラスだけは同じで、時より一緒に活動したけど、何もかもが違い、深く知り合う機会がなかった。ただ、遠くで見ているだけで時間が過ぎて行つた。

「．．．そんなこと、突然、言われても困ります。」

彼女が、そう言つたことだけは判つた。

その言葉を聞いた瞬間、文字通り目の前が真っ暗になり、世界はガラガラと音を立てて崩れ落ちた。

近藤信也、16歳、高校二年生の恋の告白は終わった。

その時、その言葉を彼女が、どんな顔で言つたのか、判らなかつた。

怖くて、彼女の方を見れなかつたためだ。

つくづく、だらしなくて、惨めな男だと思つた。

彼女に振られて、当然だ。

「ご、ごめんなさい」と言つと、僕は振り返ることなく、急いで、その場を立ち去つた。

惨めだ。

こうなることは、判つていたはずだ。

それは、今からほんの二日前の昼休みの時間の出来事。

夢だつたら良いなと思つていても、それは厳然たる事実で、逃れ

ることはできない。

初めての告白は、惨めに終わった。

中学時代にも可愛いなと思う女の子はいた。しかし、それは遠くで見ているだけで終わってしまった。勇気を出して、人生初めての告白。そして、瞬殺。

初恋は、上手く行かないと友達は、言っていたが、まさにその通りだ。

ひと眠りした後、学校の屋上で、寝そべって、空を見上げていた。どうでも、良いや。

もっと、遠く行っても良かったのだが、なぜか遠くに行く気にはなれなかった。

白い雲が浮かぶ青い空。

6月の生命力に溢れた緑。穏やかで暖かい太陽の日差し。

空を自由に飛ぶ鳥。公園で、声をあげて遊ぶ子供たち。

いっぽう、自分は、どんよりと沈み、全てが、今の自分には眩しすぎた。

今すぐ、世の中から消えてしまいたい。

失踪、自殺も考えたが、それは家族に迷惑すぎるだろう。何よりも、彼女に対して、あてつけみたいで悪い。いっそう、誰かに殺された方が良いと思ったが、そう都合良く殺人者が現れるわけもない。

身を起こし学校の隣の公園を見下ろした。犬を連れて散歩している老人。一休みしているサラリーマン。公園での幼児を連れだ母親たちの井戸端会議。

皆、幸せそうに見える。そして、自分が酷く汚く感じられた。

再び、寝そべり、空を見上げる。

カーン…ゴーン…カーン…ゴーン………どこか、遠くで教会の鐘がなっていた。

身を起して携帯の時計を見る。1時、23分。時報ではない。携帯のアンテナもゼロ本。昨日と同じ状態だ。

自分の目を疑った。

空中で鳥が止まっている。

動いていない。全てが止まっていた。

始めは目の錯覚かと思った。

身を起こし、立ち上がり、急いで周囲を見渡す。

犬を散歩させている老人も親子も全てが止まっていた。人間ばかりではなく、空を飛ぶ鳥も、自動車も止まっていた。

いや、止まっているだけじゃない。

あたりが暗くなり始めているのに、気が付いた。雲が太陽を遮ったのではなかった。

日蝕。

空を見上げると、日蝕が起きていた。

子供の頃、一度見たことがあったが、それとは明らかに異なったものだった。

月ではない何かに、ただ一方的に、太陽が侵食されているのだ。

そして、太陽が侵食されるにつれ、周辺にも変化が現れ始めた。

そればかりではない。屋上の鉄製の柵は、錆びて、朽ち始めた。木々も枯れ始め、校舎は廃墟のように薄汚れ朽ち始めていた。

それは、まるで世界が死に始めているようだった。

第11話 屋上（後書き）

またまた、苦手なアクション編。

第12話 日蝕

古代アステカ人は、日蝕は太陽の死を表し、日蝕の間に恐ろしい星の魔物ツイツイミメが大地に降り立ち、人間を食い尽くしてしまふと信じていたらしい。

自分も信じたくなつた。

目の前の光景は、昨日のものとは違う。世界の死そのものだった。

公園を見下ろすと、先ほどまでの子供の歓声は消え、いつの間にか、誰も居なくなっていた。しかし、異変は、それだけではなかった。

学校の隣の公園は、昔、戦闘機の工場があつたと聞いたことがある。

戦争末期、空襲にあつて、工員さんや近所の人たちが、数多く死んだらしい。

そのときの死体は、どうしたのだろう。

全て、ちゃんと丁寧に埋葬したのだろうか？

どうも、そうではないらしい。

公園のあちらこちらで地面が盛り上がり始めたと思ったら、何か、地面の中から這い上がってきた。

薄暗い中、凝視する。

それは、いまだ燃えている人間に近い形をした何かだ。

あるものは、腕がなく、また、あるものは下半身がなく上半身だけで這うように。

それは、ゆっくりとだが、着実に、校舎の方へ向ってきていた。

その光景は、まるで現実感がなく、ハリウッドが作るCGバリバリの安物B級ホラー映画のようだった。

これはリングだ。僕を逃がさないための。

昨日の清水葵の話进行出した。

自分は、カードの所有者ではないが、カードの契約者ではない。

カードの契約者となるべく、試練があると。カードの契約者にならないものは、カードの悪魔に魂を食われる。選択肢は二つしかない。

素敵なゲームだ。

危険を覚悟して、とりあえず、屋上から四階へと向かった。

本来なら、教師の声なり、生徒の声が聞こえるはずの学校は、死んだように静まり返っていた。綺麗だったコンクリートの廊下も壁も、朽ちて鉄筋はむき出しになっているところが多い。そして、黒光りする無数の蟲どもがぞろぞろと床を這い回る。まるで何十年も放置されている廃墟のようだ。

やはり、この学校には自分以外居ないのだろうか。

「誰か、たすけて」

突如、助けを求める少女の悲鳴。昨日と同じようにこの世界に紛れ込んでしまった少女だろうか？

しかも、どこか、ものすごく聞き覚えのある声だ。

急いで駆けつけると、少女は、既に、捕まって押し倒されていた。襲っているのは、この学校の制服を着た生徒だ。顔は良く見えな
いが、誰だろうか？

襲われている少女は・・・小野寺 瞳。僕が探し求めていた女性だ。

僕は、その瞬間、あるうことか、この場に、小野寺 瞳が居ること
に感謝していた。

「いやあゝ、止めて」

大声を上げるが、すぐに男に少女の口にタオルを詰め込み、彼女の口を塞いだ。

そして、彼女の衣服を力づくで剥ぎ取った。抵抗したところで、少女の力などたかが知れている。彼女の下着姿の肢体があらわになる。

もはや、痴漢という状態ではない。

相手は、同じ高校生、しかも、女を襲うような奴だ。大したことないはずだ。

死ぬ気でやれば、勝てるだろう。そして、何よりも、ここで頑張れば、小野寺さんも、自分のことを見直してくれるのではないかという下心が働いていた。

「やめろ」

勇気を搾り出して、叫んだ。

声に反応して、顔を上げた男の顔は・・・醜かった。

恐ろしいぐらい欲望に塗れたおぞましい自分の顔だった。

第13話 試練

何で僕が、小野寺さんを襲っているんだ……ここにいる僕は何なんだ。

僕の邪な彼女への欲望が実体化したのだろうか。

男は、まるで僕の心見透かしたみたいに、ニタニタと笑うと、再び彼女を襲い始めた。

「止める」

その男に向って飛び掛った。先手必勝。相手の顔面を蹴った。そして、押した倒し、馬乗りになった。

男は抵抗はなく、再び、ニタニタと笑う。

まるで、やれるものならやってみるといった顔だ。力の限り、顔面を殴りつけた。

自分で自分を殴る奇怪な感覚。

男の顔は、鼻や歯は折れ、すぐに血まみれになった。

じきに男の体から力が抜けた。

気絶したのだろうか、それとも、死んだのだろうか。そんなことはどうで良かった。

自分は勝つたのだ。小野寺さんを襲っていた奴を倒したのだ。

しかし、小野寺さんは、見直してくれるだろうか？

無理だろう。

なんととっても、襲っていたのは自分なのだから。

『！』

脇が痛い。厚い。

振り返ると……小野寺さんが居る。小野寺さんが僕をさしたんだ。

「小野寺さん？」

返事がない。いや、むしろ笑っている。

とりあえず、蹴りを入れて離れる。

腰を触ると血で滑つとする。さらに足腰に力が入らない。

油断した。

まだだ。

まだ戦える。

しかし、この小野寺さんは本物だろうか？

操られた本物なら手荒な扱いはできない。

”偽物だ。妹ではない”

頭に直接、聞こえてくる。誰の声だ。

その声がした瞬間、小野寺さんの顔は、人間の顔とは思えなかった程、歪み捻じ曲り始めた。偽物だと判ったが・・・おい、変身はズルイだろ。

体が徐々に膨らんでいく。

いや、正確に筋骨隆々のプロレスラーのような体格になり、天井に着きそうなその巨体は、軽く二メートル後半はあるだろう。

それだけではない、僕の脇を刺したナイフは、僕の身長ほどに巨大化した。

横を見ると男は消えている。

あっちが偽物で、こっちが本体ということか。

ついさっきまで小野寺さんだった巨人は、変身を終わると、大剣を振り回し、襲いかかってきた。

まずい。とりあえず逃げよう。

勝算こそなかったが、近藤に策がないわけでもなかった。

巨人の体も、大剣も学校の通路には大きすぎる。小さいスペースに逃げるのが、重要だ。

予想通り、巨人の振り回す大剣は柱に引っかかった。

だが、それからの予想は違った。巨人の大剣は柱を切断した。天井が崩落する。

巨人は、大剣を振り回し、学校を破壊しながら迫ってくる。たまらず、近藤は教室へと逃げ込む。しかし、これは大きなミスだった。逃げ道がない。

外を見ると、外は別の怪物どもで溢れていた。

巨人は、壁ごとぶち壊し、教室に入ってくる。

近藤は、そのすきを逃さなかった。

椅子、机と踏み台にして、巨人の顔に膝蹴りを入れると、素早く背後に逃げる。

が、瓦礫につまづき転倒してしまう。

巨人は、怒りにまかせて大剣を振り上げる。

大剣は天井に引つかかるが、天井を切り裂き、近藤目がけて振り下ろされた。

大剣が体の側を通る。

天井を割くことにより若干減速されていたため、近藤は辛うじて避けることができた。

大剣は床を切り裂き、床に食い込む。

” 今だ。行け”

また声が聞こえる。

「判っているよ」

最後の力を振り絞り、巨人に向かっていく。

床にめりこんでいる大剣を踏み台にして、ジャンプ。

跳び箱のように相手の頭を押さえ、顔面に膝蹴りを入れる。

続いて、背後に回ると、全身を使って裸絞はだかじめをかけた。

たまらず、巨人は剣から手を離し、手で近藤を引き離す。

裸絞が効いたのか、相手もふらついている。

” 大剣を使え”

こんなもん使えるのか？

しかし、迷っている暇はない。

大剣を持つと．．．動いた。

行けるかもしれない。

信じられないことに、大剣を持つことができた。

最後の力を使い、その剣を巨人に振り下ろす。

勝ったのか？

振り下ろした瞬間に意識が飛んだようだ。

出血もひどい。寒い。

徐々に、意識が遠のいていく。

薄れ行く意識の中、光に包まれた男が近づいてくる。

(天使だろうか)

「大丈夫だ。死なせはしない」

その声は聞き覚えがある。頭に直接聞こえる声の主だ。

男が脇に手を触れると痛みが引いていく。

「あんだ誰なんだ」

「小野寺 歩。はじめまして、小野寺瞳の兄です」

なんで、小野寺さんの兄さんが僕を助けるんだ。

「生きていけば。糸さえ切れなければ、君は、俺の弟になったかもしれない人なんだ。助けて当然だ。妹は、自分のせいで暗い闇の中にいる。だけど、今の自分には妹を助けることはできない。妹を頼む。妹を助けてくれ」

第14話 入口

目が覚めると、屋上で寝ていた。夢だろうか。体を起こすと脇腹が痛い。

服をまくり、脇を見るとミミズ腫れになっている。

やはり、単純な夢ではない。『あいの世界』に居たようだ。

「いったい、何時間寝ていたんだ」

もう、既に4時近くになっていた。

そして、メールが入っている。知らないアドレスからだ。

題は「昨日助けた人間より」とある。たぶん、清水さんだろう。開くと、吉祥寺のマックで5時に会いたいとある。

学校を出ると、約束していたマ Donaldで清水葵と会った。

そして、今日あったことについて話した。

「それは、たぶん契約のための試練ね。問題は、契約が成功しているかどうかだけ。今から簡単なテストをするわ」

清水はいつも持っているスポーツバックからライオンの又イグルミを取り出した。

「なんに見える」

近藤は又イグルミを手に取り、顔を押ししたり、伸ばしたりする。

「うーん。古臭い不細工なライオンの又イグルミ」

「誰が古臭い不細工だ。アンティークと言え、アンティーク」と又イグルミが突然しゃべり出した。

「うわあ、喋った」

思わず手にした。又イグルミを落とす。

「馬鹿もん。落とす奴がおるか。鼻がつぶれたぞ」

「話が聞こえるってことは、それなりに力があるってことね」

「なんなんですか、これは」

「これとは失礼な。我こそは伝説の生物『キマイラ』であるぞ」

「なんか話し方が偉そうで、おっさんくさいな」

「おっさんくさいとはなんだ。我は、お前よりも遥かに年上なんだぞ」

「そうよ。こう見えても、400歳以上なんだから」

「うーん。」

この奇怪なヌイグルミは、ギリシア神話に出てくる伝説の怪物『キマイラ』をモチーフに作られたゴーレムの一種らしい。

カードの監視者の1人らしいのだが・・・どうみてもそんな風には見えない。

なんでも、力がないと、現実世界では声は聞こえないらしい。

会話が聞かれないのは、良いのだが、一歩間違えると、1人でぶつぶつ話す変人だ。

「私、昨日、あなたを助けたわよね。ちょっと手伝ってほしいことがあるの。上手くいけば、あなたの問題も解決するかもしれないわよ」

「・・・犯罪行為は、手伝いませんよ」

「私がそんなことするように見える?」

「銃を持っているから・・・少し」

「私がついている銃は、モデルガンよ。細工をすれば、あの世界では本物の銃より役に立つんだから。それより、私の手伝いしてくれるの」

「手伝います。手伝います。」

「あなたが、小野寺さんを追っているように、私もある事件を追っているの。昨日言ったわよね。今日はそのアジトに乗り込むの」

『御休憩。2時間2000円。』『一泊。8000円。』
時間は夜の11時40分。清水は、そんな煌びやかな看板が立ち並ぶ、場所に近藤を連れてきた。

「本当にこんなんですか・・・」

近藤は、ラブホテル、もといレジャーホテルの入口の前で立ち止まった。

「1人じゃ入り辛くてね」

「・・・」

近藤は、清水を無言で見る。

「おまえ、何か勘違いしていないか。調査だ調査。恥ずかしがるな」
清水の顔がみるみる赤くなっただけで行く。

「お前が恥ずかしがると、私まで恥ずかしくなるだろ」

そんなやり取りをしている脇を、さまざまな年代のカップルが通り過ぎていく。

「なんか、この場でじっとしているほうが、恥ずかしいわね。とりあえず、携帯で予約入れておいたから、入りましょう」

予約して入った部屋は、鏡張りの部屋。

「うわ、テレビで見たことあるけど。漫画みたいだな」

合わせ鏡になっているため、近藤や清水の姿が部屋中に無数に存在している。

「いったい、こんな部屋のどこが楽しいのだろ」

「世の中には、いろんな人が居て、こういうのを好きな人もいるのよ。こんなのまだましな方よ」

「詳しいんですね」

その直後、清水のリアルロケットパンチが飛んできた。

「本当に、ここ何ですか」

「たぶんね」

清水が両手に持つ、ダウジング用L字型棒が開く。そして、離れると閉じる。

合わせ鏡。子供の時、学校の合わせ鏡で、異世界に行く映画を見たけど．．．まさか、ラブホテルの合わせ鏡で行くとはな。

「で、どうやって行くんですか」

「特に方法はないわ。12時に、力を発動させるだけ。もうすぐ12時よ。ついてきてね」

言い終わると、彼女は鏡の方に歩み。そして、溶けるように鏡の中に入っていた。

「えっ!!! 待って下さい」

近藤も後を追うが、鏡にぶつかる。

「何やっているのよ」と鏡の中から清水が現れ、近藤の手を掴み、鏡の中に引きづり込む。

ここで近藤の意識はなくなってしまった。

第15話 兄妹

「起きろ！ボケ！」

近藤信也は、頭を襲う強い衝撃で目が覚めた。

目の前には、アップの清水の顔。明らかに怒っている。

「気絶するなんて、あなた、ホントに契約したの？」

「たぶん」

夜だったのはずなのに、今、自分は夕焼けの日差しが射し込む部屋の中に居る。

目をこすりながら周囲を見ると、家具、間取り、天井、全てが変わっている。 ホテルにいたはずなのに。

「それより、ここはどこですか」

「知らないわよ。 たぶん、間の世界」

間の世界・・・怪物の居る世界か。

「でも、ちよつと今までとは感じが違うわね。 外を見てみなさい。」

立ち上がって、窓際に行き、外を見える。

夕焼けの赤い空。

大きな夕日に照らされたヨーロッパのスイスのような美しい森と山々と湖の風景。

そして、窓の外の庭は、バラが咲き乱れる良くて入れされた英国式庭園。

「素敵な庭だな」

近藤は、庭へ出た。

風景と相まって、まるで絵画の中にいるようだ。

屋敷から少し離れた湖の畔のテーブルには、少女ひとり座っている

る。

透き通るような白い肌の少女だ。

どこか、綺麗だが、どこか現実離れた感じを受ける。

清水から聞いた、原田優の妹の優奈だろう。

近づいて、声をかけてみた。

「こんにちは」

「こんにちは」

少女は笑顔で返事をする。

「素敵な風景ね」

「ありがとう。でも、もうじき終わってしまっわ」

「なぜ？」

「夕暮だから」

「きつと、星空の下で見ても素敵だし、明日だって素敵だよ」と近藤。

「そうかもね。男の人って・・・女よりもロマンチストよね。優もそう・・・」

「優さんは、いらっしやいますか？」

「優に用事？ごめんなさい。今、優はここに居ないの。ここから見えるでしょ。湖の小島の教会。あそこに女の人と一緒に居るわ」

少女の指差す方を見ると、鐘塔がある小さな教会が見える。

「その女性って、この人ですか？」

近藤は携帯の写真を見せる。

「そう。この人。可愛い人よね」と屈託のない笑顔で答える。

「2人とも、急がなくても、良いの？ もうすぐ、終わりが始まるのよ」

近藤と清水は、少女と別れると湖畔に止めてあるボートを借り、

小島の教会へと向かった。

ラブホテルに行く前に一か所、行ったところがある。

閑静な住宅街にあるなかなか大きな一軒家。そこは原田優と原田優奈の家だ。

原田優と原田優奈は、二卵性の双子の兄妹。両親を事故で失い、兄弟二人で暮らしていた。

遺産はそんなに多くなかったが、敬虔なクリスチャンである二人が美大に行き、質素な生活をおくるには十分だった。

原田優は彫刻、優奈は油絵を専攻しており、なかなかの腕だったらしい。

二人だけの穏やかで、幸せな生活。

そんな生活が終わったのは、2か月前。優奈の自殺で突然幕を降ろした。

一命を取り留めたが、瀕死の重傷。自殺の原因は不明。

問題は、それからだ。自殺者を教会で埋葬することはできない。

天国へも行けない。

神父が言った言葉は、原田優を狂わせた。その後、優奈が病院から消えた。

病院から消えたのが一カ月前だから、病院の設備なしで、生きていることは考えづらい。

近藤と清水が、原田の家で見たもの、それは、数多くのオカルト系の書籍、魔法陣、そして、優奈に似せて作られた実物大の精巧な粘土像。

さらに、数枚の小野寺の写真。

「これで、彼女が原田に連れられたのは確実ね。そして、彼女は『恋人』の所有者」

「なぜ、そんなことが判るんですか」

「原田がやりたい儀式を考えれば判るわ。『運命の輪』はハサミ女だから、彼は『悪魔』の所有者ね」

小島の教会の礼拝堂には、3人の人間が居た。

小野寺、原田優、そして、女が一人。

女は司祭の格好をし、小野寺は純白ローブ、原田は漆黒のローブをまとっている。

目の前にあるのは、6個の棺。床には六芒星を基にした魔法陣が描かれ、頂点に棺が置かれている。そして、棺の中には、白衣を着た6人の少女が死んだように横たわっている。

「死んでいるの？」と小野寺が心配げに尋ねる。

「死んじやないよ。眠っているだけ。儀式はこれからなんだから、死んでたら役に立たないじゃないか」

第16話 儀式

「必要なものは、満月の魔力。『恋人』『悪魔』『運命の輪』のカード。そして、6人の少女の命」

三人の頭上に、『恋人』『悪魔』『運命の輪』のカードが出現する。

「さあ儀式を始めよう」

司祭の女は、祭壇に立ち呪文を唱え始める。

原田は、棺の少女に近づくと儀式用のナイフ手首を切る。手首から鮮血が流れ、床の魔法陣に落ちる。その血は、意思を持っているかのように、魔法陣をなぞるように流れる。

次々と少女たちの手首を切る原田。

全ての少女の手首を切ると、六芒星の中央に立つ原田と小野寺。

そして、原田は自分のローブを脱ぐ。一糸まとわぬ姿になる原田。続いて小野寺のローブを脱がす。原田と同様に、一糸まとわぬ姿になる小野寺。

見つめあう2人。

「ちょっと、待った」と近藤の礼拝堂に声が響く。

礼拝堂の入口には、息を切らした近藤が立っていた。

「邪魔しないで!!」と小野寺が叫ぶ。

その言葉に、凍りつき、落ち込む近藤。原田と小野寺、2人だけを見ると、どう見ても、邪魔者は近藤だ。

しかし、落ち込んでいる暇はない。儀式を妨害すべく、魔法陣へ突進する。

(あのバカ、出るのが早い)

天井に潜んで、狙撃するつもりだった清水が心の中でつぶやく。

「邪魔するな!!」

原田の背後に、巨大な『悪魔』のカードの図柄が浮かびあがる。
「気をつけて。悪魔を召喚したわよ」

天井に潜んでいた清水が声を荒げる。

立ち止まる近藤。

直後、悪魔のカードから火炎が放たれる。間一髪のところで避ける近藤。床に火が付かないところを見ると、魔法の炎のようだ。つまり、相手に手加減はない。

「たかが、剣の分際で、『悪魔』にたてつくつもりか。身の程を知れ、雑魚が」

召喚した『悪魔』を近藤に向ける。

その悪魔の姿は、カードの図柄と同じで、山羊の顔に蝙蝠の翼、女性の上半身に、男の下半身を持つ両性具有の悪魔バフオメットに酷似している。大きさの近藤の倍はあるだろう。

再び火炎。そして、それを避けると、悪魔は鋭い爪で、近藤を襲う。

その時、天井から伸びてきた茨が悪魔の体を縛る。茨の先には、清水の姿があった。

「弱い者いじめは止めなさい。相手をするのは私よ」

対戦車ライフルデグチャレPTRD1941を構えた清水が砲撃する。爆音とともに反動でよろめく清水。

威力は強力で、悪魔の肩の肉を一撃で吹き飛ばす。

「くっ」

繋がっている悪魔のダメージは、契約者のダメージにもなる。苦痛で顔を歪める原田。

「あの女はお前に任せた。おれは、この糞ガキを始末する。儀式はそれからだ」

悪魔は、茨を引き裂くと、清水の方へ向っていく。ステンドガラスを破り、外に逃げる清水。外に誘導し、外で戦うつもり。悪魔は清水を追い、壁を壊し外へと向かう。

「原田さん。一対一だね」

「だれがそんなことを決めた」と原田が言うと、礼拝堂の奥、祭壇脇の扉が開き、首なしの怪物どもが20体程、出てくる。

一方、近藤は動じない。

『剣よ！！』

近藤が叫ぶと、近藤の影の中から大剣の柄が現れ、影の中から背丈ほどの大剣を引き上げる。

そして、迫ってくる怪物どもを次々と始末する。

ある時は、頭からの一刀両断。ある時は、一振りですべての怪物を上下バラバラにする。

まはや、どちらが怪物か、判らない。

またたくまに、原田の放った怪物は全滅した。

ふたたび、原田が苦痛に顔を歪める。どうやら、清水が与えているダメージも、相当なものになっているようだ。

「原田さん。もう止めるんだ。これ以上は無駄だ」

近藤が原田に迫る。

小野寺が、原田と近藤の間に入る。

「邪魔しないで。彼のが成功すれば、次は私なの。私の願いが叶うの」

「そのために、何人を犠牲にするつもりなんだ。そんなの小野寺さんらしくない」

「バカ。バカ。バカ。私のこと何も知れないくせに。それとも、あなたが、私の願いをかなえてくれるの」

「何にも知らないし、君の願いをかなえることはできない。でも、助けてくれて言われたんだ」

「誰によ。私はあんたなんか頼んでないわよ」

「君の兄さんにだよ」

「嘘よ。嘘よ。兄さんは死んだのよ。あんたになんか頼むわけないじゃない」

「信じるか、信じないかは君の自由だ。でも、お兄さんとの約束は守らせてもらおう」

そう言うと、近藤は小野寺を通りすぎて、原田へと歩む。

「原田さん。もう終わりだ」

「そうみたいだな」

原田は床のロープを拾い、身にまとおう。

「刀を持っていない相手は襲えないか。司祭！ナイフをよこせ」

そう言われると、司祭の女は、儀式用のナイフを、原田に投げ渡した。床に刀が転がる。

一対一で、やるつもりだろうか。

近藤は大剣を身構える。

「君は、ずいぶん、甘いな．．．最後に良いことを教えてあげよう。あの女を信用するな。所詮、俺と同じ人間だ」

「どういうことだ」

原田は床にある儀式用のナイフを拾うと．．．ナイフで自らの胸に刺した。

第17話 残ったこと

原田は、自らの胸を刺し、床に倒れる。

原田の体から大量の血が流れ、魔法陣が血を吸収し、光り始める。さらに、頭上に、光の魔法陣が浮かび上がる。

まずい、術が発動している。このままだと女子の命が危ない。どうすれば、良いんだ？

とりあえず、魔法陣を壊そう。剣で、魔法陣を切るが止まらない。何が起きているんだ。どうすれば、良いんだ？

その直後、頭上の光の魔法陣が消え、床の魔法陣の光も消えた。どうやら、術は完了したようだ。

女の子たちは、どうなっているんだ。棺のひとつに近づき、恐る恐る女子の生死を確かめる。

生きている。

では、いったい、何の呪文が発動したのだろうか？

気のせいか、ロープで全身を包んだ原田の体が、小さくなっているような気がする。

近づいて、ロープを取ると・・・そこには女性が居た。

見覚えがある。

原田優奈だ。

どういことなんだ。

「この世界は、もうじき崩壊するわ。女の子たちを連れて逃げるわよ」

清水の声で我に戻る。

この『あいの世界』は、原田が作成した可能性が高い。ならば、原田の死とともに崩壊してもおかしくない。

「小野寺さん．．．逃げ．．．ます．．．よ」

小野寺さんの方を見ると、一糸まとわぬ姿。スレンダーだと思っ
ていたけど、意外と胸がある。緊急事態に、意識してはいけないの
だろうが、自分でも顔が赤くなつていくのが判る。

小野寺さんも、僕の表情で察してか、慌てて両手で隠す。が、既
に遅い、完全に目に焼き付けてしまった。

「エッチー!!」と平手で近藤をたたく。

とは言っても、騒いでいる時間はない。急いで少女たちを起こす
し、原田優奈を抱えると、この場から逃げ出した。

清水の言うとおり、夜の訪れ共に、この世界は崩壊した。

授業中、窓の外の青空を見ながら考える。

結局、どういうことだったのだろうか？

判らない。

少女たちは、家に帰って行った。しかし、原田に囚われていた
う記憶はなく、その事実すらない。

ある人は、友達の家に泊まり続け。ある人は男の家に入り浸り。

ある人は、年を偽り、部屋を借り1人暮らしをしていた。

契約者であるはずの小野寺さんも、記憶はなく。親との喧嘩で家
出ということになった。

喧嘩の原因は、兄の部屋の扱い。いつまでも、同じように保存す
ることを求める小野寺さんに対して、父はケジメをつけるための整
理を主張した。それが原因で大ゲンカに発展し、家出したらしい。

家出の間、どこに居たかというと、カラオケ店で寝泊まりしてい

ることになっていた。僕がカラオケ店を回って、写真を見せたことから、家出が発覚し、警察に通報されたらしい。

そして、何よりも不思議なのは、死んだのは原田優であり、原田優奈が別の病院で生きていることだ。

つまり、原田兄は、病院から妹を無断で連れ出し、別の病院で、より高額な自由診療を受けさせていたらしい。早い話が、ブラックジャックのような腕が良いが高額な無資格な医者に、無認可の手術をさせ、一命を取り留めたそうだ。

そして、その高額な治療費は、死んだ原田優の保険から降りた。

原田優は病院に見舞いに行っている道の途中で、ひき逃げ事故にあい死亡したことになる。犯人はいまだに捕まっていないし、捕まらないような気がする。

結局、全ては夢だったのだろうか？

清水さんのやり取りを思い出した。

「言ったでしょ。間の世界の出来事は、真実であり偽り。全ては私たちの妄想だつて。少女が原田に囚われていたのは私たちの妄想なのよ。現実世界では」

「じゃあ、僕たちが何もしなくても、彼女たちは戻ってきたのかな」

「どうかしら、別の現実になっていたのかもね。結局、私たちには判らないことだから」

結局、残った現実には、僕が小野寺さんに振られたこと。再び、教室で、小野寺さんの背中を見れるようになったこと。そして、清水葵という年上の女性と出会えたことだろうか。

それだけではない、小野寺さんの全裸の姿・・・思い出して、思わずニタニタしてしまう。駄目な奴だ。

コッソリ。

額に何か当たる。机を見ると、紙を丸めたものが転がっている。誰が投げたのだろうか？

顔を上げると、小野寺さんが、僕の方を見ている．．．そして、「あっかんべー」をすると、再び何事もなかったように前を向いた。なんなんだろう。

紙を開くと、何か書いてる。

「バカ！ でも、ありがとう」

この『バカ』は、どういう意味なんだろう。

そして、『ありがとう』は何を指しているのだろうか。彼女は本当に記憶がないのだろうか。それとも、彼女を探しまわり、探し出したことを言っているのだろうか。

僕には判らない。

でも、今日、一日は、のんびりと青い空と、彼女を見ていたいと思っただ。

エピソード

学校の帰り、あと十数メートルで家に着くところで、渡辺清子は、突然、背後から声をかけられた。

「動かないで。振り向くと撃つわよ」

この声の主には聞き覚えがある。

「声を出しても無駄よ。ここは、既に『あいの世界だから』」

「要件は何なの」と長い髪をかき上げ、ダルそうに答えた。

「恋人たちを別れさせていたのは、あなたでしょ。仲を元通りにできないの」

「残念だけど、無理。一度切った赤い糸は、私には元に戻せないわ」

近藤とかいう男の絶望した表情は、最高だった。

この女は、どんなり表情をするのかしら、顔を直接見れないのが、残念だわ。

「そう。残念だわ……」

その声は、冷静で醒めたものだった。

そして、そう言い放った女から黒く冷たい殺気が感じられた。

この女、私を殺す気だ。

「待つて。確かに、悪いことはやったけど。人を殺してはいないわ。だから、命だけは助けて」

「ごめんね。私は正義の味方じゃないの」と言うと、誰も居ない街に、銃声が鳴り響いた。

部室に行くと、何か、僕に対する皆の様子が変だ。

「おまえ、もう、乗り換えたのか」

鈴木が話を切り出す。

「ええ？」

「誤魔化すなよ。夜、別の女性と一緒に居ただろ」

何なんだ。この妙な情報の速さは？

「確かに、別の女に変えるといったけどさ。おまえは、振られても、小野寺さん、一筋だと思っていたんだけどな」

「なんですか、この勘違いは。近藤は否定するが、周りの人は信じない。」

「抵抗しても無駄です。物的証拠があるんですよ」

そう言っつて、山村は携帯の写真を見せた。

写真を見ると、清水さんとマツクで話しているときを取ったものだ。科学技術の発展を恐ろしく感じる一方で、ラブホテルへ入るところじゃなくて安堵した。あれが取られていたら、弁解の余地がなく、致命的だった。

「誰が取ったんだ」

「ニュースソースは言えません」

「小野寺さんが以外の人を好きになるのは、別に、悪いことではない。否定する必要なんてないじゃないか。正直になれ」と鈴木。

「そうですね。好きな人が変わることは、悪いことはありません。運命なのです」

「一か月ごとに、好きな人が変わる山村に言われても、説得力無いぞ。」

「皆さんの勘違いです。僕は、まだ小野寺さんが好きなんです」

「ここまで、はっきり言えば、皆、信じてくれるのではないだろう

か。

近藤は淡い期待を持った。

「二股？」

田中がボソリと言う。

「・・・違います。彼女とはそういう関係ではありません」

「じゃあ、どういう関係なんだよ」

今まで考えたこともなかった。助けてくれた人。恩人。どれも、少し違う気がした。

「それは・・・・・・戦友です」

この言葉に、当然、皆が納得することはなかった。

かくして、僕は、彼女一人居ないのに、二股の近藤と言われるようになってしまった。

エピローグ（後書き）

最後まで、読んでいただき、ありがとうございます。アクセス数や最後まで読んで下さる方の存在が各励みになり、ここまで到達できました。

『赤い糸編』は、だいたい終わりです。かなり中途半端ですが、残った点に關しましては続編や加筆でカバーしたいと思っています。

基本的にいろんな作品の影響を受けています。全然表現できていませんが。ベースは『カードキャプチャーさくら』、アクションは『ジヨジヨの奇妙な冒険』、『ワンダと巨像』、あいの世界は『サイレントヒル』などなどです。

おまけ 1・X ハサミ女のつぶやき

5月×5日

変な夢を見る。まるで地獄を歩いているような変な夢だ。

5月×7日

赤い糸が見えるようになる。彼とカナが繋がっていた。悔しい。悔しい。殺してやりたい。なんとか、糸を切れないものだろうか？

5月×8日

うちの両親は、赤い糸でつながっていない。どういうことだ。

5月×9日

多くの夫婦は、赤い糸で繋がっているが、高校で付き合っている奴の大半は繋がっていない。恋愛と赤い糸はあまり関係ないということらしい。

繋がっている夫婦と繋がっていない夫婦の違いはなんだろうか？ それにしても、変な夢を毎晩のように見る。

5月×1日

手で触れなかった赤い糸が、ハサミで切れるとは。これは大きな発見だ。なぜ、こんな単純なことに気がつかなかったのだろう。

偶然とはいえ、切れてしまった佐藤と山田は不運としか言いようがない。だけど、今まで楽しんだのだから、良いだろう。

さて、次は誰のを切るべきか。
当然、カナだ。

あいつの赤い糸を切つてやる。

5月×2日

朝起きると、手足に、変な傷があつた。寝る前はなかつたのに。

佐藤と山田が別れた。切つた日の夕方だ。発端は些細なことだつたらしいが、それこそ、すごい修羅場だつたらしい。かわいさ余つて憎さ100倍だろうか。

2人とも、どこか情緒不安定なところがある。

そりゃそうだろう。何といつても運命の糸を切つたんだから。彼らは、今後どんな運命を歩むのだろうか、楽しみだ。

5月×3日

カナの赤い糸を切つてやった。

5月×4日

山田が今日別の男と歩いているを見た。山田の赤い糸は、再生していない。赤い糸を切つても、どうやら、恋愛する機能は失われないようだ。あとをつけてみたら、速攻でホテルに入つて行った。愛というよりも、肉欲というべきか。せいぜい偽りの愛を楽しみな。

5月×8日

うちの両親が繋がっていない理由が分かつた。ふたりとも浮気をしているんだ。いや、浮気先と繋がっているのだから、そっちが本命ということだ。私の両親は仮面夫婦。そして、私は仮面夫婦の間の子供ということだ。

笑える。

5月×9日

授業中。細田注意された。あいつの糸もきつてやった。

それにしても、眠い。一日中眠い。近頃、気が付かないうちに眠りに入っていることが多い。

6月×1日

切るのは、楽しい。奴らの人生は、私しだい。まるで神にでもなつたようだ。

6月×2日

全身黒づくめ男に声をかけられた。中性的な二枚目の良い男だ。どうもこの男には、私がやっていることが判るようだ。

男は言った。ポケットを探ってみると。ポケットの中には、一枚のタロットカードがあった。図柄は「運命の車輪」。私の奇怪な能力は、魔法のカードに選ばれたためらしい。

要件は、ある男女の赤い糸を切ってほしいとの依頼だ。

なぜ、この男が、この男女の赤い糸を切ってほしいのか、そんなことはどうでもいい。

私にとって重要なのは、私の趣味がじゃまされないことだ。

6月×4日

あの黒髪の女、私のやっていることに気が付いているのではないだろうか。あの男と違い敵だと感じる。少し、派手に動きすぎたか。

6月×7日

男の依頼通り、赤い糸を切ってやった。

どんなことが起きるのか楽しみだ。しばらく観察することにしよう。それにしても、あの黒髪の女が気になる。

6月×8日

あの黒い男が、小野寺とかいう女と歩いているのを見た。結局、この女と付き合いたかっただけか。くだらない。

6月×9日

近藤とかいう男が街をうろついているのを見た。どうやら、女をさがしているようだ。今頃、女は山田みたいに、ホテルに入り浸っているかもしれないのに、哀れな男だ。少しからかってみた。話した瞬間、見る見る顔が青くなっ行って行くのが判った。予想以上の反応だ。楽しい!!!

6月×0日

再び、黒服の男に声をかけられた。力を貸してほしいとのこと。手伝ってやることにした。

男の目的は、妹を転生させること。転生のためには、「運命の車輪」の転の力と「恋人」の生の力が必要らしい。

ただし、男のやりたいことは、ただの転生ではなく、肉体への転生。その肉体を作るために、8人の少女を生贄にするらしい。この男は狂っている。

6月×1日

近藤と女のせいで儀式は失敗した。最後に、あの男は、自らの命と体を引き換えに、妹を自分の体に転生させた。

なぜ、そんなことができたのか。あの男が狂っているからだ。あの男は、死んだ妹の体を、髪の毛残らず食べたらしい。

まあ、いい。それより、問題は私の行動を妨害するあの女だ。早く始末しないと。

おまけ 1・X ハサミ女のつぶやき(後書き)

一度掲載して、流れを悪くするので、没にしたのを、補足として復活させました。

閑話 近藤と小野寺さんの微妙な関係

「ねえ、瞳。『s.k』の奴が、他の学校の女子とデートしたって話聞いた？」

「s.k」は近藤信也のイニシャルだが、意味はそれだけではない。

小野寺を探した際に使った写真の出所が近藤の盗撮だったことから「盗撮魔」「ストーカー」と言われ、定着したあだ名が『s.k』。

「朝、ヨッシーから聞いた」

「なんだ知ってたのか」

「それにしても、『s.k』の奴、告白した直後に別の女と浮気しているなんて、最低だな」と小野寺の隣に居る女生徒。

「浮気って．．．まだ、付き合ってもいないのに、浮気はないですよ。それに、その人が彼女かどうかもはっきりしないし。私を探すためにその人と相談していたのかもしれないし」

「写真あるけど、見てみる」

どんな女性と一緒に居るんだろう。なぜか、気になる。

「あいつと一緒に居る女性なんて、どうせブスだろ」

「それが結構、美人なんだな」

「マジかよ。見せるよ」

「結構、美人じゃん」

「本当だ」

皆が口ぐちに美人という。美人なんだ。

「私にも、見せて」

小野寺は、写真の人物に見覚えがあった。

この人、弓道の関東大会で2年連続で優勝した清水葵さんではないだろうか。弓道をやってる小野寺にとって、清水葵は憧れの人。

その憧れの人と、近藤が知り合いだというのは意外だった。

それにしても、清水さんには、弓道場以外にも会った気がするの
だが・・・思い出せない。

「瞳的には、どうなのよ」

「何が？」

「腹立つの？」

「そりゃ。少しは」

「それって、少しは『s・k』を好きってこと？さっきの言葉なん
て、『s・k』をかばってるみたいだよ」

「・・・そうなのかな？」

「え？」

「しょうがないじゃない。私にも私の気持ちが判らないんだから」

「何よそれ？」

「前もって言うておくけど、私は好きとも嫌いとも言っていないの。
ただ、あいつかが勝手に告白して、勝手に自爆しただけなんだから」

閑話 千助の多事雑言

「キ助さん。聞きたいことがあるんだけど」

近藤は、キマイラのキ助に質問をした。

「何かね。少年」

相変わらず、キマイラの態度はでかい。

「なんで、原田は僕と小野寺さんの『赤い糸』を切らせたんですか」
「そんなことか。知ってるけど。そんなこと、作者に聞くのが早い
だろ」

「えー！そんなこと言ってるいいんですか？」

「良いんだよ。どうせ、閑話だろ。それに作者だって、ストーリー
の中で書けなかった説明・設定を書くために、閑話を作ったんだか
ら」

「普通、そういうのって、上手く、物語の中で、語るんじゃないん
ですか」

「しょうがないだろ。作者の腕がまいちなんだから。本当はワイ
に語らせるつもりだったけど、ワイの出番が少なくてな」

「口調も変わってますね」

「関西弁のケルベロスと被らないように、時代劇口調のキマイラに
したのは良いけど、時代劇口調が書けなくてな。エセ関西弁にした
みたいだ。それも徹底できなくて、いろんな訛りが混じっている。

まあ、ワイは外人だから良いんだけど・・・」

「・・・とりあえず、本題に戻りましょう」

「それを理解するためには、『魔法』の設定を知らないといかん。
」

「まず、タロットカードの『恋人』と『悪魔』の図柄を見てみよう。

『恋人』は、真中少し上に天使、その下に男女が並んでいる。

それに対して、『悪魔』は、真中少し上に悪魔、その下に鎖に繋

がれた男女が並んでいる。

まず、構図的に、『恋人』と『悪魔』は似てるじやろ。

そして、悪魔に捕まっている男女は、『恋人』たちと同一人物なんじゃ。

そこから、強引に、『悪魔』は『恋人』を支配できるという設定を作ったんだな。」

「はあ……。」

「『恋人』をコントロールするうえで一番の障害は、

『運命の赤い糸』で繋がった、近藤、お前だ。

『恋人』は恋人といるとき、最大の力を発揮する。

お前の影響で『恋人』をコントロールできなくなることを恐れたんだな。

だから、原田はハサミ女に、『赤い糸』を切らせたわけだ。」

「作者も、いきあたりばつたりじゃなくて、それなりに考えていたんですね。原田兄が、原田妹になったのは、どうなんですか？あれも、説明なしだったじゃないですか」

「痛いところ付くな。ハサミ女のつばやきの最後に、原田が妹の体を髪の毛残らず食べたとあるじやろ。死体が見つからないのも伏線だな」

「そんなの誰も気が付きませんし、伏線だと思いませんよ」

「食べることにより、原田は妹一体化。わざわざ生の転生先を用意する必要がなくなっただ。6人の女性が必要だったのは、別の体を作るうとしたからじゃ」

「生である必要があるんですか？」

「この場合は、鮮度良いというべきかな。ゾンビみたいに朽ちたのは不味いだろ」

「原田は、そもそも何をしようとしていたんですか？」

「単純に、別の体を作り、そこに転生させようとしたんだな。転生の転は『運命の輪』、生は『恋人』が対応している」

「何で、『恋人』が生なんですか」

「『恋人』の図柄と意味を思い出せ。『恋人』はS Xの象徴なんだ。S Xといえば、子作りだろ。新しい生命の誕生だ。だから生」
「きの気のせいかな、小野寺さんと原田は、S Xしようとしていたように見えたんですが」

「その通り、S Xしようとしていたんだよ。」

お前の登場が10秒遅かったら、18禁になるところじゃったぞ」
「それは．．．いろんな意味で困ります」

「赤ん坊として、別の個体で生まれ変わらせるのであれば、生贄は必要なく、小野寺と原田のS Xだけで良い。」

そうすれば、優奈は原田と小野寺の子として転生した。

しかし、それだけでは原田は納得せず、成人としての肉体に転生させようとしたんだな。

そのために用意したのが、6人の生贄。

ただし、かなり無茶な転生なので、強力な触媒である生の優奈の体が必要。つまり、死体を食べる必要ですな。

整理すると。

原田の体に転生させるには、カードの力と、優奈の体を食べるだけでOK．

小野寺の子として転生させるには、カードの力と、小野寺とのS XだけでOK．

成人の個体として転生させるには、カードの力と食べることで、小野寺とのS X、肉体用の生贄が必要」

「うん？小野寺さんのお兄さんは、どうやって生き返らせるつもりだったんですか。体は灰になっていると思うのですが。その場合は、遺灰を食べれば良いんですか」

「そんなの簡単じゃよ。原田兄は、小野寺兄を生き返らせる気なんてなかったんじゃないよ」

閑話 幸助の多事雑言（後書き）

第2章再編により、閑話を分離しました。
いろいろとすいません。

プロローグ

「マクベスをやります」

演劇部部長の三上は、高らかに宣言する。

「やっぱり、演劇と言えばシェイクスピアだよな」

「でも、難しくくない？」

「確かに難しいかもしれないが・・・一番時間が短い作品だし、出来ないことはないと思う」

珍しく、三上部長が皆を鼓舞する。

他の部員も盛り上がる。

だが、近藤には、なぜ皆が騒いでいるかが判らない。

「近藤。マクベスって、知ってる？」

「・・・マクロスなら知っていますが・・・」

「近藤。マクロスが演劇なわけないだろ」

変な回答をして、三上先輩の気分を害したようだ。

「ロボットアニメは、演劇にならないんだよ。」

そこ？

「古くは、ベルばら、聖闘士星矢、セーラームーンと数多くの漫画、アニメが舞台化されても、ロボットアニメが舞台化された例はない」

なぜか、そこで思案する三上先輩。

「もしかして、私たちがやれば、日本初か？」

「先輩！」と山村が手を上げる。

「なんだ。山村。発言して良いぞ」

「今度、蒼穹のファフナーが舞台化されます」

「なんだと。先を越されたか。やはり、みんな考えることは同じなんだな」

巨大ロボットをいっただいどう表現するのだろうか？

微妙に気になるが．．．いまさら、蒼穹のファフナーですか。

SMAPがミュージカルで、聖闘士星矢をやる世界だから、なんでもありの世界なんだろう。

肝心のマクベスは、何かと言うと、なんでも、シエクスピアという有名なおじさんが書いた四大悲劇の一つらしい。

『国王になれる』と運命操る魔女たちにそそのかされた、マクベスというオジサンが、権力欲に溺れ、国王を殺し、最後殺されるという物語。

あらずじだけ聞くと、何とも、他人事とは思えない話だ。

もつとも、男なんてものは、女と言う魔女に、振り回されるので、結局変わらないのかもしれないが。

プロローグ（後書き）

章構成の変更により、内容を大幅に改版しました。
失礼いたしました。

第1話 病室

『会ってほしい人が居るの』

まるで、娘が父親に結婚相手を紹介するような言葉。

そう言って、清水は、僕を病院に連れてきた。

個室に入る前、入口にある入院者の名前を見ると、見覚えがある名前があった。

原田優奈。

「私は、お兄さんの知り合いということになっているから、話を合わすように」

「事件は終わったのに、なぜ、今さら彼女に会う必要があるんですか？」

兄、原田優は、自殺した妹を生き返らせるために罪を犯した。そして、近藤はその事件に巻き込まれて、失恋など、ひどい目に会った。正直、あまり会いたい相手ではない。

「それは、彼女が、被害者だからよ。記憶を失っているから、ハッキリは判らないけど。彼女が自殺は、おそらく『あいの世界』で襲われたか、殺された可能性があるのよ。そして、その結果、原田の事件が起きた」

そんなこと考えもしなかった。

しかし、そんなことを言っていたら、原因不明の自殺の多くが、「あいの世界」に関係しているのではないだろうか。

だとしたら、いったいどれだけの事件が起きているのだろうか。まともに考えると、背筋が寒くなる。

それにしても、この清水さんと言うのは、どんな人なんだろう。

つい最近まで、普通の女子高生だったと言っていたが、この落ち着きは信じられない。何が彼女を変えたのだろうか。

「ところで、清水さん。原田のことについて、彼女に話したんですか？」

「なぜ、話す必要があるの。あいの世界での出来事は、私たちの幻想。現実とは違うわ。嘘を彼女に行つて、どうするの」

確かに、自分した経験は、現実ではない。言ったところで、僕たちの妄想でしかない。

それに、あまり気分のいい話ではない。

兄を失って悲しんでいる彼女に、話しても確かに、意味がないよ
うな気がした。

病室に入ると、ベットで横になっている少女と彼女に沿うように
車椅子の青年が居た。

少女は、ツーサイドアップで腰まで伸びた長髪、白いワンピース
の似合うような優雅な顔立ちの美少女。男だったら、一度会っただ
けで忘れないだろう。

少女は原田優の妹、原田優奈だけど・・・男は誰？。

「結城。あんた、何やっているの」

「何つて、優奈ちゃんとお話してたんだけど」

結城隼人。話は聞いていたが、近藤は会うのは始めてだった。

軽い茶髪に染め、一見、優男風だが、端正な顔つきに、引き締ま
った体。車椅子を使っているが、以前は爽やかなスポーツマンだっ
たことが判る。

車椅子のため、身長は判らないが、自分と同じくらいだろうか。

何が始まるのかと思つたら、さつきから世間話。

しかし、優奈の兄、原田優との思い出話を話している。おまえら、

原田兄との思い出話なんてないだろ。こいつら、嘘つきだ。しかも、かなりの嘘つきだ。

自分には、真似できない。

しかし、そんな嘘の話でも、優奈さんが笑顔で喜んでくれているのなら、良いのかもしれないとも思った。

それにしても、清水は何のために、人を集めたんだろうか。

「おまえさん、葵から全然話を聞いてないみたいだな」

清水の持っているスポーツバッグから声が聞こえる。どうやら中で「キマイラ」のキ助が喋っているようだ。

「我が説明してやろう」

今回のミッションは、原田優奈を暴行した契約者を処罰すること。そして、犯人に至るための重要なヒントは彼女の頭の中にある。話をしても、彼女は記憶喪失で犯人のことは覚えていない。

しかし、今は落ち着いているが、彼女は毎日、悪夢を見て、うなされている。

彼女の悪夢の中に入り、犯人の情報を得る。そして、出来れば夢の中で、犯人を倒し、彼女を悪夢から解放する。

それが、今回の集まった理由だけど、そんなことができるのだろうか？

キ助の話によると、清水の力を媒介に使うと出来るらしい。

清水は直接相手と接触すれば、相手の心の中を見ることが出来るらしい。

恐ろしい能力だ。

詳細は判らないのだが、清水の力を媒介にして、近藤、結城、原田の夢を共有化、近藤と結城を原田の夢の世界に送り込むという話らしい。

そもそも、魔法自身が、夢と現実の間の世界の力なので、可能だ

と
い
う
の
だ
が
・
・
・
や
る
の
は
初
め
て
ら
し
い
。
大
丈
夫
な
の
か
？

第2話 優奈さんの悪夢

眠りに入る原田さん。

始めは穏やか似ているのだが・・・途中から、何やら苦しそうな表情をし始めた。

悪夢を見始めているのだろうか？

近藤と結城は、若い人たちで賑う場所に出た。

本当に夢の中なのか？

隣の結城を見ると、普通に足で立っている。

やはり、夢の中のようなようだ。

しかし、ここは、どこだろうか？

若者が多く、緑豊かで、4階建て程度のコンクリートの建物が数多くある場所。

おそらく、原田兄弟が通っていた美大のキャンパスだろう。

ここが悪夢の舞台と言うことは、学校内で襲われたと言うことだろうか。

まずは、原田優奈さんを見つけないといけない。

苦しそうな表情をしていることを考えると、もう襲われているはずなのだが・・・

早くしないと間に合わない。

やはり、この世界は良い。

結城はキャンパスを駆け抜けながら、そう感じていた。

現実の世界では、歩くことができず、鬱積がたまるが、この世界では以前と同じように。いや、以前以上に俊敏に体を動かすことができる。

そんなときに聞こえる悲鳴。

恐らく、原田のものだろう。

声の方へ行くと、彼女がキャンパスの中を追いかけられている。だが、周りの人たちは、誰も助けない。

無視しているというよりも、気が付いていない。

これは実際に起きたことの再現ではない。

悲鳴をいくら上げても誰も気が付かないし、来てくれない。彼女が実際に襲われていた時の恐怖を象徴した再現だろう。

彼女の中では、このような悪夢が何度も再現されていたのだろう。だが、今回は違う。

正義の剣士、結城隼人が、あなたを守ります。

結城は、原田を追いかける怪物の前に立ち塞がる。

怪物は、ジエ ソンで有名なアイスホッケーのマスクを付けて、

さらにその下にストッキングらしきものをかぶっている見るからに変態だ。

結城は、腰のフェンシング用の剣、エペを抜くと、またたく間に怪物を切り刻み、肉塊に変える。

『この人、強い』と近藤は思った。明らかに自分よりも強い。

これが、小アルカナのカードである近藤と大アルカナである結城の『戦車』との違いなのだろうか。

それにしても、この怪物、以前、どこかで見たことがあった。思い出せない。

近藤は、頭を拾いマスクとストッキングを剥がす。

その下の顔は・・・目しかない。

つまり、原田優奈は顔一切見ていない。犯人への手がかりは、失われた。

しかし・・・この目、どこかで見たことがある。どこだろう、思い出せない。

一方、結城隼人はもっぱら、原田の相手をしていた。

「お姫様。大丈夫ですか？ 安心してください。怪物は、私、結城隼人がただいま退治いたしました」

しかし、彼女の恐怖の表情と震えがおさまらない。むしろ、悪化している。

自分のあまりにもの強さに恐怖しているのだろうか？

自分を指さす彼女。いや、違う自分の後ろを指さしているんだ。

振り向くと、異様な光景があった。

切り刻まれ、飛び散った手、足などの肉塊が芋虫のように道路を這い、血がアメーバのように蠢いて、一点に集まっている。

そして、切り刻まれた肉体が集まって来て、再び人型になろうとしていた。

しかも、質量保存則を無視して、以前より一回り大きくなっている。

「俺は不死身だ。男どもは、皆殺しにしてやる。そして、女。お前は死ぬまで、楽しんでやるからな」といつの間にか口がきた生首が笑う。

「なめるな」

怪物を再び、切り刻むが、同じように、一点に集まってくる。

まずい、この怪物は自分と相性が悪い。

自分の剣は、あらゆるものを貫き、あらゆるものを切り裂くが、この怪物は、突いても切り裂いても意味がない。

近藤なら、なんとかなるだろうか？

いや、あいつの能力も、俺と同じ切り裂くタイプだ。意味がない。役立たずだ。

ここは・・・かつこ悪いが、怪物が人型になる前に、逃げて、策を練り直すしかない。

結城は、原田の手を取ると、逃げだした。

第3話 敗北

近藤たちは、人をかき分け逃げ続ける。

「お前その生首持って逃げるつもりか。捨てるよ」

「じゃまですけど、少なくとも化物の足が遅くなります。どうしますか？」

「火か、なんかで、焼くしかないだろうな」

「判りました。やってみます。結城さんたちは離れていてください。そう言つと、近藤は怪物の前に立ちはだかった。

剣を大きくすると、振り回し、道路を切りつけた。

水道管を切つたらしく、水が噴き出してくる。

何をやっているんだ。当初、結城には近藤の行動を理解できなかった。

じよじよに、玉ねぎの腐敗したような「ガス臭い」ニオイがしてきた。

都市ガスのニオイだ。

結城は近藤の意図を理解すると、原田を伏せさせ、原田覆つように道路に伏せる。

近藤は石を拾い道路に投げつけ、道路に伏せる。

石と道路の摩擦で火花が飛び散り、ガスに引火。

大爆発。

周囲の人々を巻き込み、炎に包まれる。

「あのバカ野郎」

結城が顔を上げると、火は周辺に引火し、あちらこちらから火の手が上がっていた。

そして、近藤は、伏せたまま動かない。気を失っているのだろう

か。

肝心の怪物は．．．炎で焼かれたのだろうか。

甘かった。

炎で焼かれても、焼かれる速度以上に再生する肉片。

飛び散った目、耳、肉が芋虫のように道路を這い、血がアメーバのように蠢いて、一点に集まっている。

そして、切り刻まれた肉体が集まって来て、再び人型になろうと
していた。

結城は、近藤の側によると駆け寄ると、近藤を方で担いで、その
場を離れようとするが．．．重い。

その時、原田が駆け寄り、近藤を手伝う。

炎でも倒せない。

正直、ここまで、不死身の怪物には会ったことがない．．．

「すみません。原田さん、役に立たなくて」

「そんなことはありません。私、助けに来てくれただけでもうれしい
です」

素敵な女性だ。この女性を悪夢から救えないなんて、俺は何て無力
なんだ．．．

．．．俺は、勘違いしていた。

この怪物の強さは、この怪物の本来の強さではない。

ここは彼女の悪夢。彼女が、この男を抵抗できない勝てない男と
考えてしまっているためだ。

でも、どうすれば．．．

怪物は、自分の頭と近藤の大剣を拾うと、三人に迫ってきた。

どうする？

その時、原田が、近藤を背負うのを辞めた。

そして、怪物の前に両手を広げ、立ちはだかった。

「私が狙いなんですよ」

彼女は、身を投げ出して、自分たちを逃がすつもりだ。

怪物は、近藤の大剣を振り上げ、原田に振り下ろす。

恐怖のあまり、思わず目を閉じる原田。その時、自分を突き飛ばす人がいた。

目を開けた原田が見たものは、自分の代わりになり、腹を貫かれている結城の姿だった。

第4話 覚醒

俺はこのまま、死ぬのだろうか？
自分が死ぬのは良い。

それより、心残りなのは、原田さんを救えなかったこと。そして、自分と一緒に、近藤も死ぬということ。

俺は結局、また、誰も守れないのか・・・
怪物は剣を振り、俺を振り払う。そして、とどめを刺そうと大剣を振り上げる。

その時、光り輝く槍が怪物を貫いた。

その槍の持ち主は、原田優奈。

原田に貫かれた怪物は、もがき苦しみ、そして消えていった。

目覚めると、原田優奈は涙を流していた。

『悪魔』のカードの力を得ると同時に、全てを思い出したのだ。

兄の犯した罪を、兄の苦しみを。

自分がどれだけの苦しみを周囲与えたのか。

優奈が記憶喪失になったのは、優奈が忘れたかったためではない。兄である優が、最後の最後に、優奈が苦しまないために、記憶を奪ったんだ。

例えば、最初にあったとき、彼女は、どこか感情がなく、幸せそうではなかった。

自分が兄を苦しめる罪と、自分のために兄が起こす罪の間で板挟みになっていたのだろう。

「優奈。間の世界での出来事は、全て幻。幻覚に惑わされてはダメ。現実だけを見なさい」

「それで皆さんは良いんですか。それで兄や私は許されるのですか」「現実世界では何も罪は犯していないのよ。あなたの兄は、良いお兄さんだった。それだけで良いのよ」と言って清水は、泣きやむまで、優しく彼女を抱きしめた。

「皆さん。ありがとうございます」と涙を拭った後、ニコツと笑う。「やっぱり、優奈ちゃんには笑顔が一番だよ。俺のためにも、笑顔でいてくれ」

「判りました。頑張ります」とさらに、ニコツと笑う。

大きな瞳が細くなる可愛らしい笑顔。

その笑顔に、結城はメロメロだ。結城だけじゃない普通の男だったら、その男にメロメロだろう。

別に恨みがあるわけではないのだが、近藤の気持ちはモヤモヤして晴れない。

その感情が、表情に出たのだろうか。

優奈が僕を見る視線は、少し硬い。

怒っていない気持ちは表すために、笑顔で返そうとするが・・・どうみても、堅い作り笑顔。駄目だなこりゃ。

「さてと、そろそろ未来のことでも考えましょうか」と清水が話を切り出す。

あーだ、かーだと議論をして、

結局、原田優奈も、僕らのメンバーの1人になった。

病院から帰る途中、やはり、近藤の気持ちは晴れなかった。
原田優奈のことではない。

怪物を倒したのは良いが．．．負けた。

何よりも感じたのは、大アルカナと小アルカナの力の違い。

清水は『女司祭』、結城は『戦車』、原田は『悪魔』と全て、大アルカナのカード。それに対して、自分は小アルカナの『剣のエース』

このままでは、殺されるか、足手まといになることは、避けられない。

「近藤。何か心配ごとでもあるのか？恋愛とお金以外は、相談に乗るぞ」と清水さんが声をかけてくれた。

僕は、どうもこの人には、嘘が付けそうにない。

素直に自分の気持ちを白状することにした。

近くの公園に行き、全てを告白した。

清水さんは、ブランコに座りながら、何やら思案を始めた。キ助も腕を抱えて考えている。

何か解決方法があるのだろうか。

「本当に強くなりたいの」

「なりたいです」

「危険がともなうわよ」

「かまいません」

「そう．．．なら、修行でもする？」

第5話 部活

「先輩。6月全国総体都予選、8月の都個人選手権大会には出るんですよね。」

「4月関東大会都予選会。出なくて、みんな怒ってますよ。」

弓道部2年の後輩が、教室に居た清水を捕まえ詰め寄る。

以前は、日曜以外、ほぼ毎日のようにやっていたが、4月関東大会都予選会をドタキャンして以降、きまづくなって、ほとんどやっていない。

1年生はあまり知らないし、いまだに、部員として扱われているのが、不思議なくらいだ。

「ごめん。わるい。正直・・・出れない。」

「先輩。近頃、弓道部に全然来ないし、弓道部続ける気あるんですか？」

弓道をやり続けたいか、辞めたいかと言われたら、やりたい。でも、現状で、以前のように部活に力を入れるのは無理だ。

自分の態度がいい加減で、周りに迷惑をかけていることは、自分でも判っている。

清水の出る出ないは、単純に学校のチーム編成だけの問題ではない。

清水を目標としている選手、打倒清水を目指している選手も多い。そのため、清水が居ない個人戦など、ちゃばんみたいなものを感じられる。

「勝負しましょう。」

「清水先輩の腕が落ちていいるなら、皆納得できます。」

それは、私が見捨てられる、愛想をつかされるといふことだろうか。

それが良いかもしれない。一番後腐れない。

放課後は、近藤の修行に付き合うことになっていたが、十分間に合うだろう。

放課後、勝負することになった。

久しぶりの部活、久しぶりの弓道場。

ここ一ヶ月間は、弓も矢も持っていない。当然、腕が落ちていると、清水自身思っていた。

だが、実際矢を持ってみると、違和感はない。体が覚えているのだろうか。

むしろ、以前よりも、心は落ち着き、自分が何をすれば良いかが判る。迷いはない。

矢を放つと、矢は、的の中心の白円、正鵠を射ぬいた。

周りから歓声が聞こえる。

明らかに自分の腕が上がっている。

どうするべきか。外すべきか。

二射目。

今度は、的の端。

「やっぱり、駄目ね」

後輩の1人が清水のもとに寄ると、バチンと平手で、顔を叩いた。

「まじめにやってください」

涙ながらに訴える。

「私には、もう、弓道をやる資格がないのよ」「
「かまいません。先輩の全力を見せてください」

彼女たちを満足させるには、全力でやるしかない。

清水は凜とした態度で向かう。

矢を放つと、再び、正鵠を射ぬいた。

驚嘆の声が上がる。

もはや、勝負の必要性はない。

そのレベルは、高校生のトップレベルを超え、社会人のトップレベルであることは誰の目にも明白だった。

「ごめん」

「いいんです。でも、できれば、一日15分でも、見に来て下さい。試合や練習は・・・戻れるときが来れば、また戻ってきてください」
「判った。ありがとう」

弓道は心技体のスポーツ。特に心が乱れていては、良い弓は放てない。

矢を見れば、その人の心理状態が判る。

彼女たちが一番恐れたのは、憧れの清水の墮落。

試合に出ていないことをいいことに、他校の生徒から清水がバカにされるのが嫌だった。

清水の凜とした態度は、墮落とはほど遠い。

むしろ今まで以上に輝いて見えた。

清水が弓道を離れなければ、いけない理由。それは判らない。

しかし、目標である先輩が、輝きを放っていることに、彼女たち

は満足した。

修行のために、待ち合わせ場所は、武蔵野市にある、その名もズバリ、武蔵野市中央病院病院。

メールには、門のところで立っている。
私ができるまで絶対、建物の中に入るなど書いてある。

修行の内容は、事前に聞いていた。

ここは、珍しい境界線を越えただけで、間の世界に入れる場所。
そして、出る方法は、404号室に行くこと。

そのため、訓練用としては最適だそうだ。
地下に行かなければ、十分、近藤でも対処できるはずだと言われた。

(ならなんで、『絶対、建物の中に入るな』なんて、書くんだろう)

気になるが、とりあえず着いたことを知らせるメールを打ち、病院の入り口で大人しく待っていることにした。

病院というのは、人の出入りが激しい。

そして、その多くは年配の方だ。

中には、入院患者のために、重い荷物を持ってくる老人のかたも居る。

近藤信也という人間は、人に頼られるタイプではないが、草食系のおとなしい顔つきなので、頼まれごとだけは多い。

そして、頼まれるとよほどのことがないと断れない上に、さらに、

勝手に親切心を働かせる。

か弱い老人に、ちよつと荷物を運ぶのを手伝ってくれなんて、言われようものなら、部屋まで持って行きかねない。そんな男だ。

さらに、運命は近藤に意地悪だ。

目の前で、タクシーから降りた重い荷物を持った老人が段差に躓き、転倒しそうになった。

無視してもいいのだが、思わず駆け寄り、手助けをする。

そして、無意識に建物の中に入ってしまふ。

第6話 修行

建物の中に入っても、何も変わらなかった。何も起きない。ほっとした。

近藤は、老人の荷物を、病室まで運んであげることにした。病室は、415号室。

近藤が、エレベーターに乗って、数秒後、もう少しで四階というところで、エレベーターが激しく揺れ始めた。

始めは小さい揺れだったが、だんだん立っていられないほど大きくなる。

大きい。

震度7か8はあるだろうか、人生の中で体験したことがないような大きさだ。

エレベーターは、緊急停止ではなく・・・落下を始めた。

地面に強くたたきつけられる。

近藤は気を失ってしまった。

清水が病院に着いた時、近藤の姿はなかった。

メールを見る限り、遅刻はない。

とすると、中に勝手に入ったのだろうか。

「あのバカ、勝手なことしやがって」

勝手に、中に入ったからと言って、すぐに死ぬわけではない。地下に行かなければ、十分、近藤でも対処できるはずだ。

(でも、あいつ、運が悪いからな・・・)

近藤と付き合い始めて、近藤のくじ運の悪さ、間の悪さは、相当なものだと理解した。

クラスに一人か二人はいる。おみくじでは微妙な末吉、テストの山は確実に外すタイプだ。

だから、絶対、中に入るなとメールしたのに。

人の言うことを聞かない奴だ。

すぐに助けに行つてやるか、思った瞬間、地面が揺れた。

震度2程度のわずかな地震だ。

(あいつ、運ないな・・・)

いったいどのくらい時間が経過したのだろうか。

判らない。

なぜか、おばあさんも居ない。

とりあえず、事前に準備した懐中電灯をカバンから取り出し、周囲を見る。

そこは、血と錆の『あいの世界』。

清水のメールには、門のところで立っている。

私が出るまで絶対、建物の中に入るなと書いてあった。

人の忠告は、守るべきだと、近藤は思った。

階数表示を見ても判らない。

地面に強いたたきつけられたことを考えると地下に来てしまった

のだろうか。

清水さんには、「地下に行かなければ、十分、近藤でも対処できるはずだ」と事前に言われていた。

地下に行くなど言われた理由は、2つ。

第1に地下には霊安室から冷氣漏れおり大変寒いらしい。

もうひとつは自分には手に負えない可能性がある怪物が居るためだ。

病院の地下には遺体を収容する霊安室があるなど、死や悲しみの気が地上に比べると多く強い。

地上は生きた患者の世界だが、地下は死んだ患者の世界。そのため、より強い怪物が出る可能性がある。

事前に教えてもらった怪物は、「ペイシヤント」「フェイスレス・ナース」「ドクター」。

「フェイスレス・ナース」は、血まみれの看護婦の格好をしているが、顔に目、鼻、口が一切ない。

患者のために作り笑いをする看護婦の意識が具現化したもの。

捕まると部屋に閉じ込められ、死ぬまで看護されるらしい。

「ペイシヤント」は、患者の健康になりたいという意味が具現化したもの。

捕まると病んでいる部分の臓器を取られるらしい。

これは、まだましで、最悪なのが、「ドクター」。

「ドクター」に捕まると、手術室に連れ込まれ、生きたまま手術されるらしい。

しかし、これは地上の話。地下は聞いていない。

「はあ．．．」

大きいため息をつく。

入るなど言われていたのに、建物に結局入ってしまい。

地下へ行くなと言われていたのに、結局地下に来てしまった。もはや、運命が意地悪しているとしか、考えられない。

怪我をしていないことが、不幸中の幸いだろうか。自分は運が良いのだろうか？

本当に運が良ければ、そもそも落ちないだろう。やっぱり、不幸中の幸いなのだろう。

幸中の不幸とどっちが良いのだろうか。

やっぱり、幸中の不幸の方が良いよな。

いろいろと、くだらないことを考えても、しょうがない。懐中電灯を頼りに先へ進むことにした。

第7話 地下二階

扉は慎重に開けなくてはならない。

開けた瞬間。怪物とご対面という事態は、何としても避けたいといけない。

それにして寒い。1月の夜ぐらいの寒さだろうか。さすがに半そでではなかったが、薄着をしていたため、寒さがこたえる。

恐らく霊安室から漏れた冷気が下の階へと流れているのだろう。地下二階で、この寒さだと、地下一階は、凍っていてもおかしくない。

慎重、扉をこじ開けると真っ暗だ。

1階が、窓や中庭のおかげで、薄明かりだったのに対して、暗闇

慎重に懐中電灯で、照らすと病室が見える。

なぜ、地下に病室があるのだろうか？

普通、日が当たらない地下には病室なんてない。

そもそも、地下2階なんて、はなからないわけだからいい加減な作りだ。

しかし、こんな地下の病室に、入院する患者なんて・・・当然まともではない。

そのことは、すぐに判ることになった。

奥の病室の扉が開き、人型の何かが3体程、出てくる。

既に腐敗し死んだ患者。骨がむき出しになっているものも多い。ピンク色の寝巻の子供の患者までいる。

地上は、生きている患者の意思が具現化したものだったが、ここ

に生きた患者はない。

そこにあるのは、生者への嫉妬。生への思い。

他の病室も騒がしい。

こんなのが、何体も出てこられては、たまらない。

ライトを照らし、階段を探すと、幸運なことに、非常口のマークがあった。

しかし、一番奥だ。

これが、「幸中の不幸」だろうか。

とりあえず、30メートルほどの廊下を突き抜け。

怪物を倒し、上の階へと行くしかない。

覚悟を決めると、近藤は廊下を駆け抜けた。

怪物どもを切ると、肉汁が飛び散り、酷いにおいがする。そればかりではなく、その腐敗した肉汁に触れると、洋服や皮膚・肉が硫酸でもかけられたかのように、焼け始める。

ぐっ。

苦しいが我慢するしかない。

ようやく、扉に到着すると、扉を急いで開け、閉める。

怪物どもが、間に手・足を入れてくるが、押しつぶす。

肉尻が飛び散り、顔や手を焼くが、怯んではられない。ようやく、扉が閉まる。

だが、安堵している暇はない。カギを閉められないので、開かないように、ドアの取っ手を捻じ曲げる。

これすらも、数分しかもたないだろう。先を急ぐしかない。

急いで、上の階へと昇る。

地下一階へ上がることができたが、地下一階から、地上へは、防火扉が降りていて、閉ざされていた。

開かない。

剣で、切りつけるが破壊できない。

剣は、怪物だろうが、鉄板だろうが、建物だろうが、破壊できるのに、ガラス一枚割れないときがある。

キ助に言わせると、壊れないものは、時間が止まっているみたいなものなので、破壊不可能だと言っていた。

あいの世界で、100%襲ってこない、唯一のものだから安心していいと言われたが、じゃまだ。

しょうがないので、地下一階を通るしかないのだが、地下一階への非常口への扉が凍りついている。

どうやら、中は極寒の地獄のようだ。

凍りついているドアを地下づくでこじ開ける。

予想通り寒い。

中を照らすと、どうやら、この階は、地図通り作られているようだ。だとすると、霊安室の前を通らないと、もう一つの階段へは行けない。

今までのパターンを考えると、霊安室に何かいないはずがない。ガシャン。

地下二階のドアが壊れた音だ。足が遅いとはいえ、十数秒後には奴らが来る。

もう、行くしない。

第8話 地下一階

凍りついた床に壁。

周りを見ると、この部屋に入った3体程怪物が凍りついている。

息を口から吸うと肺が痛くなる。

そして、奥の霊安室から流れてくる空気が冷たい。

この寒さは、以前体験したところがある。

3年前、冬の北海道に行った時の寒さに似ている。

マイナス20度ぐらいだっただろうか。

本州の寒さとはまるで異質。空気中の水分は凍りついてしまっていて、空気は乾燥している。

ここまで寒くなると、瞬間的に感覚がマヒしてしまいそんなに寒くない。

むしろ毛穴が閉じ、体は生きるために、必死に熱を作るため、意外と大丈夫じゃないか、という感じなる。

しかし、5分ほど経つと、どうしようもなく寒くなり、その後、寒さ、痛さを通り越して、何も感じなくなる。

体も動かなくなる。そうなったらお終いだ。素早く抜けるしかない。

一番、怪物が出る可能性が高い霊安室の前を慎重に通り過ぎる。

．．．何も出てこない。

ゲームなら確実にモンスターを仕掛ける場所なのだが、これはゲームではないということだ。考えすぎた。

霊安室を通り抜け、階段へ向かう。

．．．通路に防火扉が降りていて、階段への道が閉ざされていた。バカな。

これがゲームではないことを痛感する。
どうすれば、良いんだ。

壁に掛けられてある地図を凝視する。

部屋の中を通れば、防火扉の反対側に行けるのではないだろうか。
その部屋の名前は、「霊安室」に「解剖室」。霊安室を通り抜け、
解剖室に行き、反対側に行くしかない。

霊安室に入ると、一段と寒くなる。

霊安室は思ったよりスッキリしていた。祭壇もなく、あるのはただ、大小複数の鉄の扉だけ。

どうやら、遺体の冷蔵保管庫のようだ。大きいのは棺ごと入れるのだろう。

壁には「死にたくない」という血文字。
そして、予想通り解剖室への扉がある。

突然、鉄の扉の内側で、ドタバタと音がし始め、扉がゆっくりと開く。

「冗談じゃない。」

急いで隣の解剖室へと向かう。

解剖室は、霊安室と違い。部屋の真ん中に、巨大な照明と解体台が置かれ、血を流すための洗面所や洗浄機などがある。

そして、解体台の上には、遺体が。

『！』

一瞬、めまいがした。

そして、どこからか、声とドリル音が聞こえてくる。

目の前では、医師や看護師たちが遺体を解剖しようとしていた。

「やめる。止めてくれ」

医師は、遺体の頭蓋骨をドリルとノコギリで切り開き脳をむき出しにする。

だが、男性の悲鳴は止まらない。

「俺は生きているんだ。気が付いてくれ」

続いて、医師は、男性の胸を開き、肺・心臓を取り出す。

男性は、まだ死んでいない。

死ぬことができない。永遠の苦痛を与えられるのだ。

「止めるー!!」

思わず、声を出してしまった。その瞬間、医師と看護婦たちの表情が変わる。表情だけじゃない、姿も「フェイスレス・ナース」や「ドクター」に変わっていく。

清水さんの話によると「フェイスレス・ナース」や「ドクター」は、僕的能力でも十分対処できるはずだ。

行ける。

剣を振るう。

が、剣が重い。体の動きが鈍い。

寒さのために、運動能力が落ちているんだ。

清水さんの言葉を思い出した、「地下に行かなければ、十分、近藤でも対処できるはずだ」。

単純に怪物が強くなると思っていた。寒さで自分が弱くなることを考えていなかった。

地下は寒いと事前に注意を受けていたはずなのに。

気落ちするわけにはいかない。ドクターのドリルや手術用メスを避けて、攻撃する。

ドクターをどうにか、倒すことができたが、背後に回られたナースに、注射を刺される

(まずい)

気を強く持ったが、抵抗できない。
意識がもつろうつとしてきた。

気が付くとそこは、入院患者とその連れが居る病院の一室。
ここは、どこだろうか．．．確か、ナースに注射を刺されて、意
識を失ったはずだ。

死んだのだろうか。

ベットには、管だらけの痛々しい少女が寝ている。

「碧。碧」

そのベットの脇で、女性が嗚咽しながら、名前を叫んでいた。
その女性は、見覚えがある。

清水さんだ。

とすると、ベットで寝ている少女は、清水さんの妹だろうか。
彼女に妹さんが居るとは知らなかった。

これは彼女の記憶だろうか。

これは彼女が過去に体験したことなのだろうか。

今の僕には、確認する方法がない。

第9話 風船

「お兄さん。ありがとうね」

おばあさんの呼び掛ける声に、我に返る。

場所は、415号室の前。

どうやら、「あいの世界」から戻ったようだ。しかも、死なないで。

「どうなっているのだろうか？」

突然、背後からの蹴り。

思わず、床に倒れる。

さらに、踏みつける足。

こんなことをする人間は、1人しかいない。

「私が助けたのよ」

振り返ると、清水さんが鬼の形相で、仁王立ちで立っていた。

「あんたね。1人で入るなって言ったでしょ。地下に行くなって言っただでしょ。どうして守れないの」

清水の激しい剣幕で詰め寄る。

「私が行かなかったら、あなた、どうなっていたかと思っているの……」

清水は言葉を詰まらせると、鬼の形相が緩んでいく。

次の瞬間、清水の目から一筋の涙が流れた。

(ええええつ……)

周囲を見ると、周囲の人の僕を見る視線は、美女を泣かす悪い男を見る視線だ。

そして、涙を流したことに、本人も驚いているようだ。

涙を拭くと、その手で．．．僕を殴った。

場所を変え、公園の庭で、話を聞く。

どうやら、清水さんがギリギリのところまで助けてくれたようだ。

また借りが増えてしまった。

借りを返そうと持って、いろいろと頑張ってきたのに、また借りが増えてしまった。

まさに借金地獄のようだ。

「ところで、清水さんには、碧みどりさんって、妹さんいるんですか」
清水さんの表情が険しくなる。

キ助を見ると、×のサイン。その後、僕を指さし、首を切る仕草をする。

どうやら、聞いてはいけないことのようにだ。

無理やり話題を変える。

「それにしても、清水さんが僕のために泣いてくれたのは、意外だった。」

「近藤。忘れるよ。忘れるよ。絶対忘れるよ」

なぜか、照れくさそうに清水さんがむきになる。

どうやら、話題を変えるのには成功したようだ。

それにしても、意外だな。清水さんにも、こんな表情があるんだ。いや、むしろこっちの方が、本来の清水さんなのかもしれない。

「判りました。忘れます」

まあ、口でそうはいつても、現実には、忘れられないけどね。社交辞令みたいなもんだ。

「いや、その程度じゃ駄目だ。記憶を消す!!!全部消す」

催眠術で、記憶を封印するに、清水さんの能力を使えば、記憶を封印できるそうだ。

原田さんにやったものの応用らしい。

清水さんが、頬に触れる。

「痛い！」

「我慢しろ」

怪物と戦った怪我と清水さんに殴る・蹴るされた怪我で満身創痍だ。

手から伸びた茨が、頭の中へ入っていく。

記憶・思い出が、映像が付いた風船のように宙に浮かぶ空間。

その中に、清水も浮かんでいた。肩にはキ助が居る。

ひとときわ大きい風船。そこには小野寺さんが映っている。それは、近藤が告白した時の思い出。

隣を見ると、授業中、小野寺さんばかり見ている映像。

「こいつ、本当に、小野寺さんしか見てないな・・・」

「葵。近藤にもプライベートがあるんだから、あまり関係ないのは、覗くなよ」

「判ってるよ。この辺、小野寺さんのばかりなんだから、しょうがないだろ」

他の空間にも行っている。

いろいろな思いである。

家族との思い出、友人との思い出。

「やっぱり、四人兄妹だと賑やかだな」

近藤信也は長男だ。しかし、上に姉二人。下に妹と女性ばかりで、賑やかで振り回されている日常。

妹が入院している清水にとって、羨ましすぎる思い出だ。

ここは違うなと思っていると、下の方に、ひときわ大きな風船を見つける。

映像はなく、どんな思い出か判らない。

映像がないということは、本人が思い出せない思い出だ。

周りを見ると、この空間は映像がない風船だらけだ。

そのなかでも、この風船はとくに大きく。ここまで大きいのは珍しい。

「なんだろう」

清水は覗いてみたくなった。

「ちょっと、道草していきませんか」

キ助も覗いてみたくなった。

好奇心、いや野次馬根性と言う方が正確かもしれない。その前は、プライベートなんて崇高なものは、どこかへ行ってしまう。

清水が風船に触ると、手が風船の中に入る。

清水は思い出の風船の中に入っていた。

第10話 心の亀裂

思い出は、近藤が小学校3年生程度の時の思い出だった。

近藤の家族は、姉二人に、妹一人。名前は、真桜^{まお}、美桜^{みお}、里桜^{りお}。

近所には、もう一人の姉とも言える人物、野々村桜が居た。

まるで、冗談みたいな良くできた話。

野々村桜は、2人の姉より年上で、近藤姉妹にとって、まるで長女のように優しく頼りがいがある人物だった。

野々村桜はひとりっ子であり、近藤家の姉妹は、まるで妹たちのように可愛い存在だった。

近藤信也は、そんな野々村桜が大好きだった。

姉たちに苛められると、野々村桜のところへ行行って甘えた。

楽しいことがあると、野々村桜のところへ行行って話し。

悲しいことがあると、野々村桜のところへ行行って泣いた。

ある日の日曜日。

近藤が昼寝から目を覚ますと、家族が誰も居なかった。

どうやら、近藤を残して、近所の西友に買い物に行ったようだ。

近藤は、一人ではさびしいので、近所の野々村のところ遊びに行った。

ドアが開いていた。

読んでも、ブザーを押しても返事がない。

足を音をたてないように、内緒で家の中へ行く。

居間から変な声が聞こえてくる。

扉がわずかに開いており、その隙間から、今の中をのぞくと、野々村桜が居た。

アイスホッケーのマスクを付けた男と一緒に。

マスク男は、服を破られた野々村桜に覆いかぶさっていた。

子供の近藤には、マスクの男が何をしているか、判らなかつた。しかし、野々村桜の服装や部屋を見て、マスクの男が悪人だということだけは判った。

近藤は、マスクの男に立ち向かう。

殴られ、蹴られる。しかし、近藤も必死に相手に噛みつく。

が、小学校低学年の近藤が勝てるはずがない。そのうち、一方的に、殴られるようになる。

「止めてお願い止めて。何でも言うこと聞くから」

その言葉を聞くと、マスクの男は手を止めた。

近藤は手足を縛られ、首を固定され、目を閉じないようにテープを張られた。

そして、そのマスクの男は、近藤に見せつけるように、野々村桜を蹂躪した。

次の日、野々村桜は自殺した。

原因は不明。

清水とキ助は、なぜ、地下一階で近藤が暴走したかを理解した。

清水は、地下一階の怪物から近藤を助けたのではない。

近藤の体を乗っ取った悪魔から近藤を助けたのだ。

ナースが近藤に注射を打ち、近藤は意識を失いかけた。

しかし、意識を失う直前に、悪魔を召喚した。

悪魔は、ナースたち怪物を葬ったが、同時に近藤の体を乗っ取った。

清水が地下一階の霊安室に行った時、近藤は悪魔に乗っ取られていた。

通常、契約者であれば、悪魔に体を乗っ取られることはない。

カードによる悪魔との契約は、通常の魔術師が行う紙と血判による契約とは大きく異なる。

心の亀裂に、魔が流れ込む、魂の契約。

通常の契約よりも、遥かに強力だが、心の亀裂がないと、悪魔と契約できない。

この経験が、近藤に心の亀裂を作ったのだろう。

しかし、記憶を封じたことにより、契約が中途半端な状態になったのだろう。

近藤は、記憶を取り戻せば、恐らくより、より上手にカードの力を使うことができる。

マスクの男は、原田を襲ったのと同じ人物に思える。そして、恐らく相手も、契約者。

近藤自身戦うために、より強い力を望むだろう。

しかし、そのことが、近藤にとって幸せなのだろうか？

自分と同じ道を歩かせることになるのではないだろうか？

「どうする、葵」

「結局、魔法では人は幸せになれないのよ」

目が覚めると、近藤は野々村桜に関する全ての記憶を取り戻した。怒りや悲しみなど感情を露わにするかと思っただが、はたから見ると思いのほか冷静だった。

今は、何が起きたのかを理解できる。

「あの男だ．．．原田さんを襲ったのと同じ男だ」

全ては「あいの世界」で起こったこと。そして、マスクの男は能力者で、今も女性を襲っている。

子供の時は、無力だった。何もできなかった。でも、今は違う。

近藤の心にあるのは、悲しみや怒りよりも、冷酷な殺意と冷たい復讐心。

そんな近藤に対して、清水とキ助は静かに見守るしかなかった。

閑話 千助の多事雑言

「キ助さん。聞きたいことがあるんだけど」

近藤は、キマイラのキ助に質問をした。

「何かね。少年」

相変わらず、キマイラの態度はでかい。

「気のせいかな、プロローグの内容の位置が変わるなど、大規模な改編があったような気がするのですが」

「少年も意地悪だな。判つて言うんだから。その通り、変わりました。これも全ては作者の計画性のなさのせいです。」

「それは判ります」

「そもそもの間違いは、原田優奈を復活させたことに始まる。当初は、死んで終わりだったのに、土壇場で生き返らせてしまったから。そして、赤マント編に直ぐに、入る予定だったのに、原田の悪夢退治とか入れて、プロローグと本編が異常に間延びしてしまった。繋がりを良くするために、修正する必要が出てきてしまった。つくづく週刊誌の漫画家さんは、天才だと思っわ」

「もしかして、結城さんも原田さんも、仲間になる予定ではなかったんですか」

「結城が仲間になることは、設定どおりだったけど、こんな話ではなかった。原田は完全に予定外。これでますます、小野寺の出番がなくなつたな」

「それは、困ります」

「ともかく、予定外だらけ。当初の予定では、少年も、大アルカナのカードを手に入れる予定だったのだが、結局入手できず。当分の間、小アルカナの『剣のエース』で頑張ってくれ。死なないようにな」

「既に、1回敗北しているのですが．．．主人公なので死にませぬよね」

「……………」

「ところで、僕は召喚した悪魔に取りつかれ助かったんですけど、清水さんとかも、悪魔を召喚しているんですか？」

「してる時もあるけど、してない時もある。悪魔の召喚は精神力を使うから、あまり連発はしたくない。基本的に、悪魔の使い方は三つ。ひとつ目は、悪魔の魔力・魔法だけを使う魔法タイプ。ふたつ目は、召喚して使役する召喚獣タイプ。みっつ目は、召喚して体に憑依させて使役する憑依タイプ。三つ目の憑依タイプだと、身体能力がアップする。清水が使っているのは、魔法タイプと憑依タイプ。だから、茨という一部しか見えない。」

「僕はどれなんでしょうか？」

「今のところは、憑依タイプだけかな。ちなみに、結城は、召喚獣タイプと憑依タイプ」

「何で使い分けするんでしょうか？」

「能力次第だけど、ケースバイケース。二つ目の召喚獣タイプは、遠隔操作ができるメリットがあるし、身体の制約がないから動きが早いんだ。失敗例としては、原田兄が一番わかりやすいかな。憑依させないから、本体がガラ空きになったやろ」

「たしかに」

「そして、お前ごときに負けてしもった」

【赤マント編】 プロローグ

かつて日本中の子供達を恐怖のどん底に叩き落とした都市伝説がある。

それが「赤マント」の話だ。

都市伝説の赤マントには、大きく分けて2種類の伝説がある。

ひとつは、「赤・青・白、どのマントが欲しいかい？」と聞いてくるもの。

これには絶対に答えてはいけない。

何故なら、赤と答えたら子供を刺し全身真っ赤にし、青と答えたと全身の血を抜き、白と答えたら水に沈められ殺されるからだ。

つまりどれを選んででも殺される。

加えて逃げる方法も苦手な物も不明のこの怪人の話を聞いて、恐怖に陥った子供が当時あまりにも多いため、異例の集団下校を行う学校が後を絶たなかった。

もう一つの話は、赤いマントをつけた怪人物が、少女のみを誘拐し、暴行し、殺すというもの。

風貌は、鮮やかな赤マントを羽織り、まるで死神のような大きな鎌を持ち、顔が醜く焼けただれているのを隠すために不気味な仮面をかぶっている。

おそろしい怪人物で、昭和の初期に帝都 東京に出現し、警察まで出動したという噂もある。

『平成の赤マント、中島秀雄に証拠不十分で無罪判決』

『少女連続誘拐殺人魔、中島秀雄、釈放へ』
当時、新聞や週刊誌の表紙を飾ったこと言葉だ。

半年ほど前、少女連続誘拐殺人鬼にして、強姦・放火魔の犯罪者、中島英雄に、無罪判決が言い渡され、釈放された。

市民の感情は、二つ。

中島英雄が無罪だとしたら、誰が犯人なのか。
そして、もう一つは、犯罪者が野に放たれたという感情だ。

ひとつ、ハッキリしていることは、中島英雄が無実にしる何にしろ、犯人が野放しだという事実だ。

それ以来、街は漠然とした不安に包まれた。

マスコミや多くの市民は、警察や国、裁判所を非難した。
しかし、何も変わらなかった。

目に見えない不安のはけ口として、人々は、さまざま噂・都市伝説を生み出した。

- 「夜一人で歩くと、中島に襲われる」
- 「ニンニクを食べないと吸血鬼に襲われる」
- 「学校で寝ると夢の中で怪物に襲われる」
- 「ラブホテルの合わせ鏡から楽園に行ける」
- 「12時に飛び降りると天国へ行ける」
- 「井の頭公園の池には赤い糸を切る赤いレインコートを着た女が現れる」
- 「夜、牛の頭をした怪物が街を徘徊する」
- 「赤マントが出て子供をさらう」
- 「赤マントが出て子供をさらう」

学校の七つの怪談でも、小学生の間の噂でもない。

トイレの花子さんや口裂け女と同じレベルだが、近頃、女性の間、特に女子高生の間でささやかれている噂だ。

最初は『あいの世界』で生き残るのが精いっぱいだった。しかし、このごろは、僕は清水さんの手伝いをしている。判り易く言うと、『カード刈り』。

カードを悪用する人間や、今回のように、ハグレカードの怪物を退治している。

ハグレカードとは契約者が居ないカードのこと。ハグレカードを野放しにしていると、怪奇現象を起こしたり、カードを悪用する悪人と契約する危険性がある。

そのため、できる限り、早めに退治するのが、良いとのこと。始めは、清水さんに借りがあるので、しぶしぶやっていたが、やり始めると、意外とやりがいがある。

世の中の役に立っているという充実感、自分しかできないという使命感、命懸けでミッションを行う達成感がある。

今回の獲物は、マンション街を練り歩く、頭は牛、体は人のミノタウロスのような巨大な怪物。

この怪物の全長は優にマンションの五階に到達しているだろうか。その手には、巨大な棍棒を持ち、まともに一撃受けたら、それで終わりだろう。近づくのは容易ではない。

本来なら、清水さんの対戦車ライフルデグチャレPTRD1941による遠距離射撃が最適なのだが、今日は肝心な清水さんが居ない。

これは、住んでいるところが違うので、しょうがない。別の機会をうかがうことを考えたが、常にこのカードに会えると

は限らない。その間に、事件や契約をしてしまう可能性がある。
今日は、自分ひとりでもやるしかない。

幸運なことに、怪物は足元が十分見えていない。マンションの
階に隠れて、息を潜め機会を窺う。

『剣よ!!』

近藤が叫ぶと、近藤の影の中から大剣の柄が現れ、影の中から背
丈ほどの大剣を引き上げる。

怪物の巨大な脚が、徐々に近づいてくる。

怪物が通り過ぎるのを待ち、飛び出す。

大剣を振り回し、背後からミノタウロスの左足のかかとの腱を切
る。さらに、切り返して、右の腱。

怪物は怒号を上げながら倒れこむ。

近藤は怪物が倒れこむと素早く、別のマンションの中に逃げる。
大剣を普通の大きさの剣にすると、階段を駆け上がり、屋上に出
る。

そして、腱を切られ、ふらつき、まともに立てないミノタウロス
の頭、目がけて飛び降りる。

落ちないように、ミノタウロスの毛を掴み、必死にしがみつく。

そして、剣を怪物の首筋に突き立てる。

首筋から怪物の血が噴き出す。その血で血まみれになる近藤。

悲鳴を上げるミノタウロス。暴れて、滑り落ちる近藤。辛うじて、
腰の毛にしがみつく。

必死に、這いあがり、再度、剣を怪物の首筋に突き立てる。

うめき声を上げ、倒れこむ怪物。

剣を大剣にして、怪物にとどめをさす。

すると、怪物は、解けるように消えて行った。

自分で言うのもなんだけど、ずいぶんと強くなった気がする。

ポケットの中から一枚のカードを取り出すと、カードの絵柄を見た。

「杖の8か・・・」

第1話 赤と青。どっちが良い？

マンションの五階に到達するだろうミノタウロスのような巨人。こつこつ、マトが大きい奴と戦う場合は、遠距離攻撃か、超近距離攻撃が良い。

清水は、オフィスビルの屋上に陣取り、対戦車ライフルデグチャレPTRD1941による遠距離射撃の準備していると・・・あり得ないほうから人と魔の気配がする。

その方向を見ると、赤いマントをまとった少女と青いマントをまとった少女が、宙に浮いている。

もともと、マントが、全身を覆っているため、赤い方は、赤ずきんちゃんのようなようだ。

(この感覚は・・・やばい)

清水は素早く腰から、『ベレッタM92』を抜き、撃つ。

同時に、赤いマントの少女もナイフを投げ、空中でぶつかる。

が、相手のナイフの方が、威力があり、ナイフが足元の床に刺さる。

少女はニッコリ笑うと両手にナイフを持ち、連続で、ナイフを投げる。

今度は、清水が両手撃ちで、ナイフを撃ち落とす。

少女は、手に持つナイフの本数を1本から3本に増やす。

両手合計で6本。

清水は、ナイフに弾をぶつけると、再びボウリングのように、弾いたナイフと弾かれた弾で、他のナイフの方向を逸らす。

さすがに、少女たちも驚いたようだ。

「これはどうかな」

続いて、両手合計で8本。

どうやら、少しづつ数を増やしていくつもりらしい。

彼女たちは遊んでいるのだ。

付き合うつもりはない。清水は先に青マントに向かって銃を撃つ。赤マントの少女がナイフを投げ、清水の銃弾の軌道を変える。

残りのナイフは、見当違いの方向へ飛ぶはずなのだが・・・方向を変え、清水の両腕や両足を刺す。

(油断した)

どうやら、ある程度誘導できるようだ。

「騙された。騙された」と少女たちははしゃぐ。

誘導ナイフは威力があまりなく、傷が浅いのは幸運だったが、以前のような精密射撃は不可能になった。

この距離で、銃を撃ったところでどうしたものか・・・

「おばちゃん。赤いマントと青いマント。どっちが良い？」と青いマントの少女が尋ねる。

「おっ、おばちゃん。」

まさか、18歳で、おばちゃんと言われるとは思わなかった。

「あんたらね。10代の少女を、おばちゃん扱いした罪は重いわよ」「おばちゃん。赤いマントと青いマントどっちが良い」と青いマントの少女が尋ねる。

人の話聞いてないな、こいつら。

「赤の方が、まだましね」

清水は、顔をひきつらせながら答えた。

「じゃあ、赤いマントをどうぞ」

そう言うと、少女は、ナイフの束を持つと無作為に次から次へと空に向かって投げ始める。

一瞬何をしているのか、理解できなかったが、すぐに理解した。空から膨大な数のナイフが降ってきたのだ。

もはや、銃で相手のナイフを全部撃ち落とすのは、不可能だ。

銃を撃ちながら、少女から逃げる清水。

そして、ビルの屋上から飛び降りる。

ビルに遮られ、少女たちの視界から消える清水。

「おばちゃん。逃がさないよ」

青いマントの少女が、後を追う。

が、そこには、清水が待ち構えていた。

茨を使い、ビルの壁に張りついていたのだ。

清水が銃を撃つ。

額と心臓を撃ちぬき、青いマントの少女は、悲鳴もなく墜落する。

「よくも青マントを！！ ババア殺す。ババア、速攻でぶつ殺す」

少女らしからぬ怒声があたりに響く。

その瞬間、砲撃音とともに、少女の胸に巨大な穴が開いた。そし

て、悲鳴もなく墜落する。

清水が茨の蔓を伸ばし対戦車ライフルを操作したのだ。

「世の中、若けりや良いってもんじゃないのよ」

1 投稿日： 20xx-06-x2 00:07
帰宅途中の15歳女子高生刺され死亡

6月 1日 午後10時15頃、西東京市中央町の路地にて、帰宅途中の x 高校学生 赤坂百合さん（15）が歩道にうつぶせに倒れ、背中から血を流しているのを、男性会社員が見つけた。110番通報した。

警視庁中野署員がかけつけると、赤坂さんは背中を20カ所以上刃物で刺されており、発見時既に死亡していた。警視庁捜査1課は殺人事件と断定し、中野署に特捜本部を設置した。

赤坂さんは 1日 午後9時45頃、西武新宿線田無駅の防犯カメラに1人で映っていた。現場は自宅まで約500メートルの住宅地で、手提げバッグや財布は残されており、着衣に乱れはなかった。午後10時過ぎ、近くの住民が女性の悲鳴を聞いており、特捜本部はこの時間ごろに襲われたとみている。

赤坂さんには背中を中心に約20カ所の刺し傷と、後頭部のほか、左手上腕部に骨まで達する切り傷があった。刃物を使った事件では、被害者が身を守るうとしたり抵抗したりする際、手や腕に防御創と呼ばれる傷が残ることが多いが、捜査関係者の話では、こうした傷は見つからなかったという。

赤坂さんは両親と妹の4人暮らし。現在、放課後、高田の馬場の予備校に通っており、1は午後9時ごろ、授業を終え、帰宅途中、何者かに襲われたとみられる。

2 投稿日： 20xx-06-x2 00:07
2ゲット

3 投稿日： 20xx-06-x2 00:13
<1

くだらねえ、スレたてるな

4 投稿日： 20xx-06-x2 00:16
背中を20カ所。背中血だらけだよな。これって、赤マントぼくね

5 投稿日： 20xx-06-x2 00:16
赤マント。赤マント。赤マント。赤マント。赤マント。赤マント。
赤マント。赤マント。赤マント。

6 投稿日： 20xx-06-x2 00:18
青マントきぼんぬ

7 投稿日： 20xx-06-x2 00:19
白マントきぼんぬ

第2話 捜査本部

その部屋の入り口には、西東京通り魔殺人事件捜査本部の看板を掛けられていた。

女子高生、赤坂百合が西東京市中央町の路地で、背中をナイフでめった刺しにされ、殺されていた事件の捜査本部だ。

多村は、腕を組み周囲を見る。

残忍な手口から、世間の注目を集める事件だ。捜査陣の意気込みも尋常ではない。

担当の者からさまざま情報が提供される。

犯人らしき人物の毛髪や、凶器が回収できているため、早期解決も不可能ではない。

しかし、気になったのは、被害者のポケットの中に、タロットカードが一枚だけ入っていた点だ。

占い好きの女性が、タロットカードを持っていても不思議ではない。

しかし、持っていたの一枚だけというのは、奇妙だった。しかも、小アルカナのカードを一枚。

何らかの「お守り」「まじない」として持っていたとしても、普通は大アルカナだろう。

これは、犯人が残したサインではないだろうか。

「38度2分」

居間のソファで寝そべっている兄の近藤から、体温計を取り、妹の里桜りおが読み上げる。

家に帰ってから、ひどく体がだるいので、熱を測ってみたら熱が出ているようだ。

近頃、連戦で、体力が低下したためだろうか。

「お兄ちゃん。近頃、夜遊びばかりしているからだよ
しつかり者の妹が兄を叱る。」

別に夜遊びをしているつもりはないのだが・・・

「夜遊びでなる病気が・・・性病じゃねえか」

次女の美桜が、ビールを片手に、小6の里桜の前でとんでもないことを言う。

「・・・」

「童貞が性病になるわけじゃないの」

同じように酒を飲んだ長女の真桜が、さらにとんでもないことを言う。

「・・・」

「とりあえず、当分の間、夜遊び禁止」

さらっと、流す里桜。さすが妹、慣れている。

「お粥とアイスン持って行ってあげるから静かにベッドで寝てなさい」

まるで保護者のようだ。

（静かに寝ているか・・・まあ、あいの世界に引き込まれたら、それどころじゃないんだけどな）

このところ、疲れているため寝つきは良いが、ゆっくり寝たという感覚はない。

それに、今日は、いろんなことがあり特に疲れた。

ベットに入ると、すぐに近藤は死んだように寝むった。

夜中だというのに、捜査本部は慌ただしかった。帰宅した捜査員も、緊急招集された。

犯人の残した、指紋と毛髪が、「少女連続誘拐殺人事件容疑者、中島秀雄」と一致したためだ。

さっそく、逮捕令状を裁判所に請求する一方、中島の身柄確保に向かった警察だが、居場所が判らない。

殺人犯が野放しになる。

中島が釈放された時、一部の人たちが懸念していたことが現実になった。

世論、マスコミからの批判は避けられないだろう。

早期解決を目指すべく、中島がらみと言うことで、捜査員がさらに拡大される。

そして、人手不足対応ということで、本庁からの数名のキャリアが派遣された。

キャリアはしよせん管理職、現場に出ない。

人手不足言っではいるが、実際は現場を信用していないだけ。

しかし、人手不足、経験不足というのは事実だ。

東京には、第1から第10までの方面本部があるが、400万人いる多摩地区を管轄しているのは、第9と第10の二つだけ。あまり犯罪がないため、機能しているが、重大犯罪では、人手・人材不足が、たびたび露呈していた。

どうせ、派遣してくれるなら、管理職のキャリアじゃなくて、現場で使えるやつを派遣してくれよ。

多村の考えは、現場で働く警察官なら誰もが抱く考えだ。

しかし、厳重な「階級社会」である警察組織に置いて、下が意見を言っても意味がない。

捜査本部の席を立とうとすると、若い一枚のキャリアが声をかけてきた。

名前は確か．．．大田とか言う奴だ。

なぜ、俺に。

「なぜ、キャリアのあんたが、現場の俺なんかにかけるんですか」

「いえ．．．その御意見が面白いと思ひまして」

キャリアなのに、一応年上の俺に気を使っている。

「意見？」

とくに意見を言った記憶はないのだが。

「失礼ながら、喫煙室で意見を立ち聞きいたしまして。タロットが気になるとか」

「確かに言ったが。タロットカードの意味が判らないと．．．」

「タロットカードに何か意味があると思われているのですか」

「判らない。判らないから困っているんだ」

第3話 白い雨ガッパ

原田優奈は、午後の授業の前に野川公園で絵を書いていた。

野川公園は、三鷹市と小金井市と府中市と調布市の境にありICの脇にある緑豊かな公園。

野川と言う清流がゆったりと流れ、水辺で鳥や子供たちが遊ぶ、のんびりした公園。

井の頭公園もいいのだが人が多いし、学校から遠い。

ゆったりとした小川の画を書きたいときは、野川公園を利用してた。

カーン…ゴーン…カーン…ゴーン……………

鐘の音が聞こえてくる。

『あいの世界』へと人々を誘う始まりの鐘だ。

日食が始まり、公園を見渡すと、先ほどまでの子供の歓声は消え、いつの間にか、誰も居なくなっていた。

いや、川の側に女の子が居る。

白いワンピースに長髪の女の子。

雨が降っているわけでもないのに、白い雨ガッパを着ている。

小学校高学年くらいの子だろう。川の方をじっと見ている。

いや、首から下げている十字架を手に持ち、祈っているのだ。

しかし、今は午前中。小学生が公園に居る時間帯ではない。

怪物の罾だろうか。

しかし、彼女の姿は、どこか儚げで、とつても、怪物とは思えなかった。

近くに寄り、声をかけてみる。

いつとき、顔向けるのだが、すぐに、視線を川の方に戻した。どうにもリアクションが良くない。

「おねえちゃんこそ何しているの」

彼女から声をかけてきた。

「画を書いていたの。見てみる？」

「見ない」

「なんで、雨ガツパを着ているの？」

「あのときは、雨だったから・・・」

この子は、幽霊だ。

数週間前、大雨で川が増水した日、死んだ女子がいると聞いたことがある。

「私もおねえさんに質問して良い？」

「いいわよ」

「おねえさんは、人を傷つけてしまったことある？」

「あるわ。いろんな人を傷つけた」

「どうしたの？」

「謝った。でも・・・それだけじゃ駄目なのよね・・・おねえさんも、どうしたら良いか判らなくて、今も悩んでる」

「私・・・友達を傷つけてしまったの。『気持ち悪いって』。彼女泣いちゃった。一番大切で、一番好きな友達だったのに・・・謝っても遅かった」

そう言うと彼女は、消えてしまった。

近藤が、目を覚ますと、もう昼ごろだった。

居間に行くと、テーブルの上には、紙が1枚と封筒。

『学校に連絡しておきました。ご飯は冷蔵庫に入っています。ちやんと、病院に行くんだぞ！』と紙に書いてある。

封筒の中には、病院用のお金。

ガサツな姉たちや母さんは、こんなに気を回してはくれない。

つくづく、気が付く妹だ。

行きつけの病院に行くと、単なる風邪らしい。

安静にしておけば治るということで、今日は1日、テレビを見ながら、ゴロゴロすることにした。

「笑つていとも」と「ごきげんよ」。「昼ロードショー」や10チャンネルの推理物の再放送とテレビを見続ける。

ワイドショーにチャンネルを変えると、西東京で起きた殺人事件に関する報道。

女子高生が惨殺され、話題にならないはずがない。

それにしても、この事件解決するのだろうか。

東京都内と言っても、23区と違って、北多摩では滅多に殺人事件なんて起きない。

そして、殺人事件が起きた場合、悲しいかな、まず、解決されない。

逮捕されるのは、犯人が誰の目から見ても、明白な場合だけだ。

気になるので、ネットで調べてみると気になる文字が。

「赤マント」

都市伝説に出てくる赤マントと関連付けた話が、ネットに乗っている。

さらに、一部では、「赤マント」の異名を持った「少女連続誘拐

殺人事件容疑者、中島秀雄」とも関連付けている。

つい最近、これとは、別に「赤マント」という言葉を聞いたような気がする。

そうだ。

清水さんが近頃戦った相手だ。

気になるので、清水さんや結城さんにメールを出して聞いてみることにした。

原田優奈は、午前中公園で会った女の子のことが気になり、学校の図書館で調べてみることにした。

学校の図書館では、新聞がデータベースに記録されており、キーワードを設定するだけで、関連する記事を容易に見ることが出来た。

少女の名前は、白鳥美穂。事故当時小学校6年生。

大雨で増水した野川に、落ちた水難事故とあるが、なぜ彼女が大雨の日に川に行ったかは書かれていない。

彼女は『友人を傷つけた』と言っていた。そして、謝っても遅かったと言っていた。

彼女は、大雨の日、友人に謝りに行ったのではないのだろうか？そして、行きか帰りに、事故になってしまった。

彼女は、このままでは、ずっとあの場所に留まり続けるだろう。

そして、そのうち、悪霊になる可能性も否定できない。

それより前に彼女を成仏させないと。

そのためには、お節介かもしれないけど、彼女が喧嘩をした相手に会う必要があるかもしれない。

清水さんから、ようやくメールが返ってきた。

清水さんとの取り決めで、「あいの世界」やそれに関する言葉が出るようなメールは、携帯ではなく、WEBメールを使うようにしている。そのため、どうにも返答が遅い。

送った被害者の写真を見ると、戦った相手の赤マントを着た少女に似ているらしい。

そう考えると、青マントも、別の殺された人かもしれない。

清水さんの話によると、赤マントを着た少女を倒した直後、カードを入手できたそうだ。

キ助の話によると、亡霊が死後カードを入手することはないらしい。

被害者が死ぬ前に『あいの世界』でカードを入手しておく、カードを持った亡霊が出来るとのことだ。

しかし、「あいの世界」で殺された場合、現実の世界では殺人には見えない。

そのため、殺人事件はは明確に現実世界で起きたことらしい。

とは言っても、「あいの世界」で殺人の味を覚え人間が、現実世界で殺人を始めた可能性もある。

中島との関連も不明だ。

やはり、調べる必要はありそうだ。

第4話 特番

その日の夜のテレビ番組は、テレビ東京以外大変つまらないものとなった。

警察は、西東京の赤坂百合殺人事件の現場や凶器から、中島秀雄の頭髪や指紋が発見されたことを公表した。

そして、現在、中島秀雄の所在が行方不明であり、全国に対して指名手配をしていることを明らかにした。

そのため、テレビ東京のアニメ以外は、全てニュース特番に切り替えられた。

特番を見ると、マスコミが警察を非難していた。

なぜ、監視を付けなかった。

なぜ、殺人鬼を野放しにした。

つい最近まで、冤罪事件だと言って、警察を非難していたのに、今度は手のひらを返したように、釈放を非難する。

『無罪判決を受けた者を監視することはできない』と主張する人もいたが、感情論を垂れ流すマスコミの前では、法の建前は無力だった。

何よりも、マスコミが強調したのは、第2、第3の殺人事件が起きる可能性。

そして、恐怖を煽るだけ煽って、対策は1人で夜歩くのは止めましょう程度。

しかも、何時間やっても、他の局を見ても、特に新しい情報はない。

同じ内容を何度も何度も繰り返す。

新しい情報は、次の日の朝、最悪の内容で報道された。
新しい猟奇殺人が起きたのだ。

1 投稿日： 20xx-06-x5 05:07

小金井公園のトイレで、全身から血を抜かれて死亡した少女が見
つかる。

6月 5日 午前7時15頃、小金井公園の公衆トイレにて、
× 高校学生 青島 桜（15）がうつぶせになって倒れているのを、
女性会社員が見つけた。110番通報した。

小金井警察署員がかけつけると、青島さんは、発見時既に死亡し
ていた。警視庁捜査1課は殺人事件と断定し、小金井警察署に特捜
本部を設置した。

青島さんは 4日 午後9時50頃、西武新宿線花小金井の防犯
カメラに1人で映っていた。現場は自宅まで約300メートルの住
宅地で、手提げバッグや財布は残されており、着衣に乱れはなかつ
た。

青島さんには、首筋に小さな傷があることから、首筋から血液を
抜かれ、出血多量で死亡したと思われる。猟奇的な殺人であること
から、捜査本部は、現在、西東京市で起きた女子高生刺殺事件との
関連性について調査している。

青島さんは両親と弟との4人暮らし。当日、青島さんは渋谷にコ

ンサートを聴きに行き、帰宅途中、何者かに襲われたとみられる。

2 投稿日： 20xx-06-x5 05:07
2ゲット

3 投稿日： 20xx-06-x5 05:13
<1

くだらねえ、スレたてるな

4 投稿日： 20xx-06-x5 05:16
血抜かれて、死亡か。これって、青マントぱくね

5 投稿日： 20xx-06-x5 05:16
青島だから青マント。明らかに見立てだよな。

6 投稿日： 20xx-06-x5 05:18
白マントきぼんぬ

7 投稿日： 20xx-06-x5 09:20
怖くて、西武 宿線夜乗れません。

8 投稿日： 20xx-06-x5 09:21
そう言えば、赤マントは、赤坂百合だったな。名前に色がある奴
が殺されるんだ。

8 投稿日： 20xx-06-x5 09:21
白マントは、白鳥、白井？

青島桜の遺品からも、タロットカードが見つかった。

遺品の中に、タロットカードがあったことは、捜査上の秘密であり、マスコミに公表されていない。

犯人と捜査関係者しか知りえない事実であり、模倣犯の可能性は低い。

そのため、西東京で起きた事件と小金井公園で起きた事件は、同一犯による連続事件と推測され、合同捜査本部が設立された。

つまり、中島秀雄による連続殺人事件だ。さらなるマスコミの非難は、避けられそうもない。

「多村警部補」

大田警視が声をかけてきた。

「多村警部補が睨んだ通り、『タロットカード』は、何らかの犯人のメッセージである可能性が大きくなりましたね」

「かもしれないな。しかし、そうじゃないかもしれない」

「どういう意味ですか」

「メッセージだとして、中島にとって何の意味がある。誰に対してだ。我々警察に対してか？」

「確かに、そうですね、警部補は他の理由があるとお考えですか」

多村は頭をかく。言うべきか言わざるべきか、悩んでいるようだ。

「笑わないでくれよ」

「笑いません」

「ネット見ているか？」

「見えますが」

「じゃあ、赤マントの噂は知っているよな」

「知っています。今回の事件を、都市伝説の赤マントに見立てた事件と書かれていました」

「俺もそう思うんだ。今回の事件は、儀式か、呪術じゃないかと思

うんだ。そして、『タロットカード』は儀式のための印だと思っ
た」

第5話 友達

昨日の夜に続き、いや、昨日の夜以上に、朝から連続殺人のニュースがテレビでは流れていた。

「里桜、今日は学校行くの止めた方が良いんじゃない？」

「何言っているのよ、お兄ちゃん。心配しすぎ。お兄ちゃんこそ、病み上がりなんだから、注意しなきゃだめだよ」

中島秀雄が無罪判決を受けた事件は、少女連続誘拐殺人事件。

被害者は、小学校高学年から中学生だった。

今回の事件の被害者は、2人とも高校生とはいえ、高校一年生の割には比較的背が小さく、中学生と言っても通用しそうなタイプだった。再び小学校高学年から中学生を襲わない保証はない。

学校に行っても、当然、話題は殺人事件の話。

殺された二人が共に高校生であるため、親に学校に行くことを止められた女の子すらいる。

部活に行くと、いつもの騒がしい山村美紀の声がしない。

なんでも、親に学校に行くのを止められたらしい。

自由奔放、夜遊びしまくりの山村が、止められるのはちょっと意外だったが、親の気持ちも判らなくもない。

確かに、山村美紀は、被害者たちと同じ高校一年生だし、比較的背も小さく、髪型もロングのツーサイドアップ、全般的に小動物系で幼い感じがするタイプだ。

ロリコンには、ど真ん中ストライクかもしれない。

しかし、なぜ、鈴木が居ないんだ。男なんだから関係ないだろう

に．．．

鈴木と同じクラスの田中に聞いてみる。

「彼女を家まで、送って行くんだってさ」

「あれ？ 鈴木 of 彼女って、清瀬の方じゃなかったけ？」

「わざわざ、むかえにいくんだってさ」

「大変だな」

「そうよ。彼女を持つていうのは、大変なのよ。まめじゃなきゃ駄目なんだから」

「しかしな．．．どう考えても、あいつが一番危ないだろ」と三上部長。

確かに。どう考えても、送り狼だろう。

「今日は、人数は少ないけど頑張りましょう」と三上部長が話を閉め、マクベスの第二幕第一場の練習を始める。

山村と鈴木が居ないと部活って、こんなにさっくり進むんだなと思っただ。

いかに日ごろ無駄話ばかりしているかを痛感する。

現在、結城隼人は、放課後、リハビリを兼ねて、バンド活動をやっている。

場所は、知り合いの農家の蔵。古いし、汚いが、音が外に漏れず、遅くまで練習できるの良。そして、何よりも、ただなのが素晴らしい。

バンド活動は、もともとやらっていたのではなく、病院で、リハビリを兼ねてやりはじめたら、ハマったと言うべきだろうか。

足が不自由になり、フェンシングが出来なくなったため、気を紛らわせるためにも、熱中するための何かが必要だったのは間違いな

い。

やり始めると、手先の器用さと動きの速さとリズム感の良さで、またたく間に腕が上がった。

フエンシングをやっていたことによる手首の強さが、ドラムに合っていたようだ。

ドラムは、楽器が高いうえに場所を取り練習場所が限られるため、ギターやベースに比べるとやっている人間が少ない。

そのため、体が不自由なうえ、技能的に多少未熟であっても、引く手あまたであった。

そして、幸運なことに、短期間で多くの、友人を作ることができた。

現在の目標は、吉祥寺のライブハウス『フォルテ』主催の高校生大会に出場し、あわよくば優勝すること。

そのために、皆と遅くまで練習している。

しかし、問題がないわけではない。

コピーは良いのだが、オリジナル曲が出来ていないのだ。

原田優奈は、清水に手伝ってもらい、この間会った白い雨合羽の女の子、白鳥美穂の友人を探すことにした。

原田は人当たりは良いのだが、嘘が下手なため、情報を引き出すのが、あまり上手ではない。

また、魔法も発現しにくいものばかりだ。

魔法には発現しやすさにレベルがある。

レベル1は本人が現実世界で出来ること。

レベル2は他人が現実世界で出来ること。

レベル3は現在で出来る人間はいないが現実世界で可能なこと。

レベル4は現実世界では不可能なこと。

原田兄が自分のあいの世界を作り出したように、清水もある程度なら自分のあいの世界を作り出すことができる。

そして、その世界で能力を使うことができる。

原田と異なり、清水は嘘や演技も上手く、また能力も調査向きだ。人と接触すればある程度感情や考えが判るし、コンピュータ内の情報検索もできる。

これらの能力はレベル2程度の発現しやすさだ。

清水は、茨をコンピュータに絡めると、警察のコンピュータから事件の調書を、学校のコンピュータからはクラスの名簿や写真を手に入れた。

調書を見れば、事件当時、白鳥美穂が誰のところに行ったか判るし、学校のクラスの名簿や写真を見れば、その友人の顔が判る。

白鳥美穂が会いに行った少女の名前は、佐々木明日香。

なかなかの長身で、腰までの長い髪が似合う利発そうな女の子だ。仲良しなのだろう。

遠足などイベントの写真では、いつも白鳥は佐々木と一緒に写っていて、白鳥美穂と同じような白いワンピースを着ている。

「そんな話信じろっていうの？おねえさんたち、頭おかしいんじゃないの」

家の近所で遊んでいた佐々木に会い。

原田優奈が白鳥と会ったことを話した。

死んだ白鳥に会って話した。そんな話をまっとうな小学校六年生

が信じるわけがない。

「そうよね。いきなり信じろっていうのは無理よね。私は、あなたと彼女の間に何があったかも知らない。だけど、彼女は、あなたを傷つけてしまったことを後悔していたわ。白鳥さんにとって、あなたが一番大切で、一番好きな友達だったことだけは信じて」

「一番大切で、一番好きな友達か・・・」

佐々木の顔は、どこか悲しそうだった。

「おねえさんの話を信じるとして、私は何をしたら良いの」「手紙を書いて、今度彼女に会ったときに渡すから」

夢を見るのは嫌い。

人が死ぬ瞬間が見えるから。

あの時の夢を見るから。

夢なんか見たくない。

場所は美穂ちゃんが死んだ野川公園。

仮面を付けた赤マントが、美穂ちゃんを襲っていた。

美穂ちゃんを助けないと。

私はなぜか、手に握っている鎌で赤マントを止めようとした。

でも・・・でも・・・赤マントを止められなかった。

赤マントは、美穂ちゃんを鎌で貫き、釣り上げると、そのまま美穂ちゃんを川に捨てた。

私は美穂ちゃんの元へ急いで駆け寄った。
私は、川に入ると、水面に浮いている美穂ちゃんを抱き上げた。
美穂ちゃんの白いワンピースが徐々に赤い色に染まっていく。

もう、私には、美穂ちゃんを助ける方法が判らない。

「明日香ちゃん・・・?」

「そうよ。明日香だよ。美穂ちゃん」

「明日香ちゃん・・・もう・・・私助からないわ・・・お願いがあるの・・・」

「何?」

「・・・明日香ちゃん・・・私を殺して」

「えっ?」

「・・・殺して・・・悪魔に殺されたら天国へいけないの・・・殺して・・・」

「美穂ちゃん!美穂ちゃん!」

美穂の返事はない。

このままでは美穂ちゃんは、天国へいけない。

明日香は、鎌で美穂の胸を刺した。

美穂の体が、徐々に薄くなっ行って行く。

天国へ行つたのだろうか?

でも、私は美穂ちゃんを殺してしまった。

美穂ちゃんを殺してしまった。

また、嫌な夢を見てしまった。

昼間のおねえちゃんたちは、何者なんだろう？

原田のおねえちゃんの言っていることが、正しいとしたら、美穂ちゃんは、天国に行っていないことになる。

どうしたら、美穂ちゃんを天国に連れて行ってあげられるんだろう。

おねえちゃんは、手紙を渡すと言っていた。

あのおねえちゃんたちが、嘘を言っているとは思えない。

あのおねえちゃんたちなら、なんとかできるのかな？

判らない。どうしたら良いんだろう。

第6話 だんらん

「もう少し目が大きい感じかな」

場所は、マクドナルド。

清水は原田に青マンントの似顔画を書いてもらっている。

「こんな、感じでどうですか」

「そうそう、こんな感じ。さすが原田さんね」

「じゃあ、これ皆にメールで送りますね」

さっそく、結城隼人からメールが返ってきた。

受験ノイローゼで自殺した中学校3年生の少女に似ているとの話だ。

当初、イジメによる自殺じゃないかと地元で有名になった事件らしい。

「少女は自殺じゃなくて、『あいの世界』で、殺された可能性が高いな」

「そうですね。誰かが、『あいの世界』でも『現実世界』でも人を殺しているってことですよね」

原田が悲しそうな顔をする。

「赤マンントの真似をしているのは、何か意味があるんでしょうか？キ助さんとして、どうお考えですか？」

原田は羨望のまなざしでキ助を見ながら質問する。

キ助が自慢げに答える。

「ワイもその点が引っかかっていたんだけどな。赤マンントは『あい

の世界』で具現化してもおかしくない程、人々の思い入れのある都市伝説だ。特に近頃は、中島のせいで、皆が意識し、恐怖しているからな。現われないほうがおかしいくらいだ」

『あいの世界』では人々の思いが具現化する。ひとびとが恐怖する怪物が、怪物として具現化したとしても何ら不思議ではない。

「しかし．．．現実の殺人となぜ、結び付くかが判らない」

「キ助さんでも、『あいの世界』に関して判らないことあるんですか？」

「ワイだって、神様じゃない。判らないことは沢山あるがな」

判っていることは、「あいの世界」を知っている人物が、現実世界・あいの世界で殺人を犯しているということ。

「話は変わりますが、清水さん。さつき会った、佐々木明日香ちゃん、どう思います」

「なんか隠している感じね。彼女、白鳥美穂ちゃんの事故に関して、なんか知っている感じなんだよね」

「清水さんも、そう思われますか．．．彼女も『あいの世界』に行つたことがあるのでしょうか」

「あるかもしれないわね。『あいの世界』は、多くの人にとって単なる夢の世界。多くの人は、悪い夢で済むんだけど」

その後、深刻な話を10分ほどした後は、ガールズトークに花が開いた。

「ところで、原田さん。今日の晩御飯は、どうするの？」

「うーん。今のところ1人だから、昨日の残りです」

来月になると、友人が2人程、今借りてるアパートから、原田さんの家に引っ越してくるので、賑やかになるそうだけど、居間は広

い家に一人だけ。口にこそ出さないけど、寂しいはずだ。

「じゃあ、今日は、私の家に食べに来ませんか？」

「良いんですか？」

「今日はお母さんが食事当番の日なんですけど、うちのお母さんって、どうにも、多く作りすぎるんだよね。食べ切れなくてさ」

「清水さんのお母さんの手料理ですか。ありがとうございます」

「うん。招待しておいてなんだけど、あまり期待しないでね。」

「ネギは、野菜室の奥。ドレッシングは、ドアの方ね」

台所に不慣れな母に対して、清水葵がいろいろと教える。

直接手伝えば、楽なのだが、何を作るかは、内緒と言って、台所の中に入れてくれない。

今日は、日ごろ働いている母親が料理当番の日。

私や父が家に居て、出来るのだから、私や父に任せればいいのに、と思うんだけど、母としては母らしいことをしたいらしい。

私と原田と父が、居間で、母の料理が出来るのを世間話をしながら待っている。

父は美大生で美人の原田に興味があり、原田も父の仕事に興味があるので、話は尽きない。

私の父、清水幸太郎は、弁護士をやっている。

弁護士をやっていると、収入がたっぷりありそんな気がするが、

父は全然、金とは縁遠い人間だ。

お金にならない国選弁護人を数多くやっているし、何より人が良い。騙されても人を信じる。

人を助けるために、弁護士になると言って、今も初心を貫いている。

ある意味、とんでもない頑固者か、根性がある人ともいえる。手弁当で弁護をし、お金のない人からお金をもらわないのだから、当然、お金には縁遠い。

一方、お母さんは、医者をやっていて、バリバリに稼いでいる。そのため、総合的には、清水家はそれなりに裕福な家庭ということになっている。

明るく仲の良い絵に書いたような幸せの家族だった。

妹が植物人間になり、入院しても、明るさは失われていない。落ち込まないように、無理している面もあるけど、父と母の良さだと思つた。

私は父も母も尊敬している。

将来は、私が弁護士、妹は医者と話していた。

「さあ、出来たわよ」と母は熱々の湯豆腐を持ってきた。

お母様、今、6月なんですけど・・・まあ、夏じゃないからまだましか。

つくづく、母はすごいと思つた。

結局、この日の夜、原田さんは家に泊まることになった。

本当は未成年でいけないんだけど、原田さんは、ワインやビールを飲み、結構出来上がってしまったのだ。

飲ませる、父や母もいけないんだけど・・・困った両親ですホント。

お風呂に入り、私の部屋に布団を引いて、寝ることになった。もっとも、部屋の電気を消すが、直ぐには眠れない。

「今日は、楽しい夕食でした。ひさびさに食べすぎちゃいました」
確かに、原田さん、良く食べたよ。その細いウエストのどこに入った聞きたいくらいだ。

「また、今度、着てください。父も母も喜びます」
「では、甘えさせていただきます。それにしても、良いご両親ね。羨ましい」

布団に入りながら、原田さんが声をかけてくる。

「そうでしょ。でも、本当の両親じゃないの」

「・・・」

原田さんが言葉に詰まる。

「今だからこそ、聞いてほしいの。それに、私は原田さんのことも知っているから、原田さんにも、私のことを知ってほしいの」

「私の本当の父は、中島秀雄なの」

第7話 血

現在の私と妹の父、清水幸太郎は血のつながった父ではない。

中島秀雄が逮捕された後、養女として子供がいない清水夫妻にも
らわれたのだ。

父の中島秀雄が、殺人事件の容疑者として逮捕される前、私は幸
せだった。

やさしい父親に母親、かわいい妹、ペットのポチ。

何よりも、仲のいい友達。

毎日が幸せだった。

私は、両親を愛していたし、両親も自分を愛してくれていると信
じていた。

しかし、父の中島秀雄が、殺人事件の容疑者として逮捕されて以
降、私たち家族はあつという間に崩壊した。

私たち姉妹の人生は最悪になった。

学校に行っても、「人殺しの娘」とイジメられた。

机や下駄箱は、落書きだらけ、中にはゴミが入っていた。

背中には、「死ね」「殺人鬼」と張り紙や落書きをされ、トイレ
では水をかけられた。

教科書・本・ノート・体操着・靴は、落書きされ、盗まれ、そし
て、燃やされた。

そして、暴力。

小学生だったからよかったが、中学生ならレイプされていただろ
う。

何よりも辛かったのは、無視。

遠くで私たちを見つめ、仲が良かった友達も、誰も私たちに近寄らなくなったことだ。

先生たちも、見て見ぬふりをした。

私たちが学校に行かなくなると、厄介払いが出来たと喜んだらしい。

家でも、地獄だった。

マスコミが家を囲み、外に出るとマスコミのインタビューと野次馬の罵声。

毎日のように、家の壁には落書きされ、ゴミを捨てられた。警察に訴えても、犯人は捕まらない。

あんなに周囲にマスコミが居て、目撃者がいないわけなのに。

二日目、ペットのポチが、腹を裂かれ殺されていた。

死体は庭に捨てられて、壁には、ポチの血で『人殺し 死ね』と書かれていた。

もう、涙も出なくなっていた。

三日目、母は、私たちを残していなくなった。

「ママ。ママは葵のこと好き？」

「好きなわけじゃないじゃん。あの男の娘なんて。私の人生めちゃくちゃ、どうしてくれるのよ」

それが、私と母の最後の会話だった。

私には、父親も、母親も、友達もいない。

親戚も私たちを引き受けたがらない。

居るのは、妹だけ。

私と同じ血が流れ、血の罪を共有する妹だけ。

誰も守ってくれない。そう思っていた。

そんなときに、現われたのが、現在の父の清水幸太郎。

父親の弁護士だったが、私たちの身の上に同情して、養女にしてくれた。

始めから上手くいっていたわけではない。

いつか、飽きたら捨てられると思っていた。

正直言って、本当の家族と言うのが、どういうものか判らない。でも、父と母は、私と妹を愛してくれた。大切にしてくれた。今は、私と妹も、父と母を愛しているし、大切だと思ってる。

夢を見るのは嫌い。

人が死ぬ瞬間が見えるから。

あの時の夢を見るから。

夢なんか見たくない。

場所は美穂ちゃんが死んだ。

野川公園。

「美穂ちゃん、私のこと好き」

「うん、好きだよ」と美穂ちゃんは、水と戯れながら、ニコツと笑う。

私は、美穂ちゃんのことを好きだ。

子供の頃は単純に、友達だから好きなんだと思っていた。でも、今は違う。

友達として好き以上の感情を持っている。

美穂ちゃんは、同じクラスの山田のことを好きだと言う。

そして、私に誰が好きかを聞く。

私には、好きな男子はいない。

好きなのは、美穂ちゃん。

「私も美穂ちゃんのが好き」

そう言っただけは、美穂ちゃんのことを背後から抱き締めた。

「・・・駄目」

そう言った直後、美穂ちゃんは、ものすごい勢いで、私のことを払った。

「・・・気持ち悪い」

そう言っただけは、彼女は、私の元から駆けて行った。

12時頃、佐々木明日香ちゃんから、電話番号を教えていた携帯電話がかかってきた。

こんな夜中に何だろう。

「おねえちゃんは・・・本当に美穂ちゃんに会ったんだよね」

「そうよ」

「嘘じゃないよね」

「嘘じゃないわ」

「おねえちゃん。相談があるの」

声の感じから、恐る恐る声に出していることが判る。

「私、近頃、変な夢や幻覚を見るの。いろんな人が死んじゃう夢。その中に、怪物に襲われて死んじゃう人がいるの」

本当に夢なのだろうか？

死と狂気に溢れた『あいの世界』の出来事を夢だと思っているのではないだろうか。

しかし、あの世界での出来事を、小学生が見るとは。

気が狂っていると本人が感じて、しょうがないだろう。

「どんな怪物？」

「赤マント。赤マントを着て、死神みたいな大きな鎌を持って、不気味な仮面を付けているの。おねえちゃん信じてくれる」

「信じるわ」

「また、夢を見たの。今度は、女の人が襲われる夢」

大急ぎで、近藤たちに連絡して現地に集合する。

場所は、湾岸沿いの冷凍倉庫の前。

「本当にここで良いの？」と近藤が清水に尋ねる。

「彼女は恐らく、『死神』の契約者だ。死の臭いに関しては、清水よりも何倍も鼻が効く」とキ助が説明する。

佐々木明日香の話の聞く限り、このあたりで間違いないと清水は思っている。

しかし、いままで、犯行場所は多摩地域だったのに、23区内と場所が大幅に変わっているの、不安がないわけではない。

また、連絡を受けてから、到着するまで2時間近く時間が過ぎてしまった。

仮に場所が合っていたとしても、手遅れの可能性は高い。

「つべこべ言っていないで、中に入って確かめるしかないでしょ」
清水は堀を乗り越えて、不法侵入する気まんまんだ。

カーン…ゴーン…カーン…ゴーン……………

鐘の音が聞こえてくる。

「いつもは嫌だけど、こういう時は、ありがたいわね」

第8話 劫火

地図で見る限り、東京ドーム一個分はある。なかなか大きい倉庫街だ。

「広いわね。二手に分かれて探しましょう。近藤は、南側ね」と地図を指さす。

明らかに、この場所から遠いエリアだ。

「えっ、1人なの？」

「何？不満。」

「清水さんは前回、赤マントと青マントの2人組と対戦しているんですよ。今回も、複数の敵を一度に相手にしないといけないかもしれないじゃないですか」

「そうよ。でも、集まるところで敵の総数は変わらないでしょ」

「清水さん、ランカスター戦略とか、知らないんですか？銀 英雄伝説とか、読んだことないんですか？」

「何よそれ」

「要するに、戦力を分散させると、各個撃破されるって話ですよ」

「そんなの判っているわよ。でも、今は早く探すことも重要なんですよ。要するに負けなきゃ良いのよ。私は2対1でも勝ったわ。それとも、原田さん一人にするつもり。それでも男」

「いやあ、清水さん一人という選択肢も・・・」

「何！か弱い女子を1人にするつもり」と腕を組んで仁王立ちしている。

本気で言っているのか清水さんは？

隣で原田さんが、苦笑いしている。

「どこが、」か弱い女子なんだ」と言う言葉が喉まで出かけたが、我慢した。

「・・・判りました」

結局、清水・原田組と近藤一人で探すことにした。

近藤は、冷房用のエアコンの機械音だけが響き渡る無人の倉庫街を駆け抜ける。

突然上空が明るくなる。

空中で何かが燃えている。

中心には、何やらマントを付けた少女が存在し、その全身から炎が噴き出していた。

たとはは良くないが、中学校時代のキャンプファイヤーを数倍にした劫火だ。

彼女も、被害者の1人なのだろうか？

それにしても、洋服は燃え落ちたようで、着ておらず、男としては目視しづらい。

にもかかわらず、マントを付けているところを見ると、一応、赤マントなのだろうか？

ここら辺の魔術的コダワリが良く判らない。

空中を浮いて、動き回っているのがたちが悪い。

もつとも、空中を浮遊する相手の話は、事前に話を聞いていたので、対策はしている。

(備えあれば、憂いなしだ)

清水から借りた銃を撃つ。

が、相手に命中しているのだが、まるで普通のBB弾が当たっているように効果がない。

(だめじゃん．．．)

相手が強いというよりも、こちらの攻撃力が弱い。

清水が撃った場合に比べると、全然威力が小さい。

首なしの『ヘッドレス』を倒すことはできるが、このクラスでは相手にならない。

(まずい．．．早々策が尽きた)

少女は手を動かすと．．．上空から火の玉を投げつけてきた。

正直コントロールは良くない。

火球が地面に落ちると、その場で燃え続ける。

少女は、次々と火球を投げつけてくる。

避け続けるが、徐々に動く場所がなくなっていく。

(このままでは、逃げ場がなくなる)

ゲームで良くあるように、剣で火の玉を相手に打ち返した。

1球、2球。球が遅いため、意外と撃ち返せるもんだ。

撃ち返した球の一つが、相手を直撃するが．．．が無傷。炎ではダメージを与えられないようだ。

ダメージを与えられないが、相手の機嫌は、十分損ねたようだ。

少女は上空に上り始める。

少女は両手を掲げると、巨大な火球を作り始めた。

あんな巨大なものを落とされたら、あたり一面火の海だ。

どう逃げる。

北側の倉庫の中を探していると、扉が開いている冷凍庫があった。露骨に誘っているのが判る。

畏が仕掛けられていないか、注意しながら先に進む。

マグロなどの冷凍魚類を置いてある倉庫だろうか、異常に寒い。室温計を見ると、マイナス20度とある。何十分も入れる場所ではない。

奥に進んでいくと、少し開けた場所に出た。

そこで、清水たちが見つけたのは、壁に縛れ、冷氣のため全身に白い霜が付いた少女。

駆け寄って調べると、原田が調べると、虫の息だが、まだ息がある。

「まだ、間に合います」

「無駄！無駄！無駄！　あなたが来るのが遅い。遅い！遅い！遅い！　いい！彼女はもう助からない。全ては終わってしまったんだよ」
死神みたいな大きな鎌を持ち、全身を赤マントで覆った不気味な仮面を付けている怪物と青いマントを身に付けた少女が現われた。
仮面を付けた赤マント。こいつが元凶、ボスキャラなのだろう。
周辺を見回しても、契約者の姿はない。遠隔タイプか、ハグレカードだ。

「こいつらは、私が相手をする。女子はお願い」

「判りました」

原田は、槍を召喚すると、女子に突き刺し、抜く。すると、少女の傷が、どんどん塞がっていく。

「くっ」

直後、原田が、苦痛に顔を歪めしゃがみこむ。

「大丈夫？」

「大丈夫です。」

「自己犠牲を伴う回復能力？珍しいわね。それでも、結果は変わらない。あなたたちを殺した後、彼女を殺すだけ」

「何でこんなことを」

「それは、僕が現実世界で活躍するためさ。既にパートナーは見つけたい〜」

「中島ね」

「中島？はあ？全然判ってないね。駄目駄目」

「どういうことよ」

「彼はしょせん、哀れな偶像。利用されてポイ。まあ、死ぬんだから、話しても無駄でしょ。逃がさないよ」

仮面の赤マントは、マントをなびかせると、大きな鎌を構えた。

「死ね！」

少女は、両手で掲げている巨大な火球を、近藤目指して落とす。

（まずい。）

近藤は、足元に大剣を地面に突き刺さすと、大剣を抜き、その背後に身を隠す。

火球が地面に激突。

炸裂し、巨大な炎の津波と爆風が、地面を這うように拡散し、近藤を襲う。

炎の津波が近藤を襲う直前、地面から水が噴き出し、水の壁が出来る。

だが、炎の津波は、容赦なく水の壁を押し流す。

あたり一面、倉庫街は、文字通り火の海と化した。

第9話 相性

あたり一面、倉庫街は、文字通り火の海と化した。炎の津波が消えても、延焼は広がり続けていた。

しかしながら、一角だけ、燃えていない場所があった。

水道の水が噴き出し続け、水の壁があるところだ。

そこに近藤は倒れていた。

水の壁の効果や事前にぬれたこともあり、どうにか、近藤は、丸焦げは免れたが、ダメージまでは避けられなかった。

骨折や失明などはなかったが、服はいたるところが焦げ、全身がヒリヒリする。

もはや、剣を杖にして、立ち上がるのが、やっとの虫の息だ。

見上げると、少女を覆う火力も最初と比べると半分くらいになっているだろうか。

だいぶ力を使ったようだ。

しかし、即死を免れ、時間稼ぎが出来ただけで、攻め手がないのは変わりがない。

少女は再び手を動かし、炎の槍のようなものを作ると、上空から投げつける。

見当違いの方向へ投げつける。

槍は地面に突き刺さると、巨大な火柱になった。

それとともに、目の前の水の壁が徐々に小さくなって行き、なくなつた。

どうやら、地下の水道を破壊したようだ。

続いて、少し細い炎の槍を次々に作ると、投げ続ける。

近藤を直接狙わない。

近藤を中心にして、周囲に火柱を作り、炎の檻を作るつもりだ。この炎の槍は厄介だ。

魔法の炎なのだろう。切ってもすぐに再生する。

逃げ道を先にふさぐ気だ。

(まいったな．．)

そして、とどめの一撃の火球を投げた。

刹那。火球が真つ二つに割れる。

そして、近藤の周りの火柱が、次々に切断される。

炎に照らされ、現われた人物は、『戦車』のカードの契約者、結城隼人。

「遅いぞ。結城」

「ヒーローはいつでも最後に現れるものなんだよ。あと、タクシー代4000円。頼んだぞ」

「せめて、割り勘にしてくれ」

少女は結城に向かい火球を放つが、結城の削り出す剣圧に、火球は切り裂かれる。

「お嬢さん。僕には通用しませんよ。降伏しなさい」

結城は少女に呼びかける。

が、少女は結城を無視し、再び両手を掲げ、巨大な火球を作り始める。

「無視かよ。近藤。まだ、倒れるなよ。倒れるなら、最後の一撃を

放つてからにしろよ」

「判ってますよ」

結城が近藤の剣身に乘ると、近藤は最後の力を振り絞り、大剣を振り、結城を少女に向かい放り投げる。

少女のところまで、届いた結城は、「アディオス」と一言言った後、一瞬にして、少女の体をバラバラにした。

青マントの少女が、吸血鬼のように牙と爪を伸ばし、襲いかかってきた。

清水は、すかさず両手に銃を構え、撃つ。

銃弾は、青マントの少女を負傷させることなく、まるで普通のBに帰ったかのように床に落ちる。

銃が効かないのか？

青マントは、素早い動きで、爪を繰り出す。清水は、相手の行動、爪の軌道を素早く解析・予測すると巧みなフットワークで避ける。

逃げるが、近距離で銃を撃つがやはり効果がない。

いったん引いて間合いを広げる。

「なかなか、すごいね。でも、完全じゃなかったね」

清水の頬に、一筋の赤い線が浮き出てきた。

顔だけではない、手足も何力所か切りつけられた。

完全には、予測しきれなかったようだ。

かすかに爪に当たってしまった。

しかし、この程度なら問題ないはずだ。
たとえ、爪に毒性があつとしても、出血により、毒が体内に入る
ことはない。

それに、今の動きを見たことで、次からの予測精度は上がる。
もう、掠^{かす}ることもない。

「清水さん」

原田が心配そうに声をかける。

「大丈夫」

清水は、茨を鞭のように使い、青マントの少女に茨を絡みつけ、
拘束する。

しかし、茨の鞭は、少女に触れると、直ぐに萎^{しお}れボロボロになり
朽ちる。

「魔力を吸い込むタイプだ」とそれを見た、キ助が叫ぶ。

怪物に対しては銃弾以上に効く魔力で強化したBB弾も、魔力を
失ったたら、ただのBB弾だ。

「対策を練るのは、君たちだけじゃないんだよ」

悲しいかな清水の能力は、結城の『戦車』のように攻撃的な能力
ではない。

茨をアンテナのようにして、情報を収集・解析するのが本来の能
力だ。

そのため、銃器が無力化されると、攻撃力が大幅に低下する。
槍を持つ原田以下になりかねない。

「ここからが、青マントの本領発揮さ」

そう言つと、青マンツの目が青く光つた。

その直後、傷口がムズムズし始めた。

傷口から血が吸い上げられ、青マンツの方に吸い寄せられていく。どうやら、何らかの呪いの効果があるようだ。

「どうする？どうする？」

仮面の赤マンツは、はやし立てるように野次を飛ばす。

「大丈夫です」

背後から原田の声が聞こえる。

背中がチクリと痛むと、傷が治っていく。どうやら、原田が直したようだ。

いや、正確には、対象が原田に移っただけだ。

「交代です。清水さん。彼女は私向きです。」

「でも。」

「やらせてください。」と原田が前に出る。

「じゃあ、僕は引き続き、清水さんに相手をしてもらおうかな。ここだと2人の邪魔になるからこっちだよ」と言つて、荷物が積んでる方に移動する。

「原田さん、任せたわよ」と清水は仮面の赤マンツを追つた。

第10話 覚悟

「見てくれ赤マント1号、青マント1号。やっと君たちの仇討が出来るよ」

仮面の赤マントは、必要以上にオーバーに嘆いて見せる。

そして、仮面の赤マントは、マントをなびかせると、大きな鎌を構えた。

「お前が殺しておいてよく言う」

清水が怒りをあらわにする。

「お前だって、『あいの世界』で人を殺しているじゃないか。同じじゃないか」

「黙れ!!」

清水は両手に銃を構え、撃つ。

銃弾は、赤マントの体を突き抜け、壁にめりこむ。

青マントと同じように、魔力が効かないのか？

いや違う。

弾丸の威力は失われていない。なにか、別の術だ。

それだけではない。

赤マントの体も壁の化に溶けていく。

「さあ、楽しい鬼ごっこの時間だよ。もっとも、僕が鬼だけどね」

深く深呼吸をする原田。

(槍は得じゃないけど、頑張るしかない)

原田は自分の武器がやりだと判って以降、地道に長刀などの本を読み練習していた。

実践でどこまで通じるか判らないけど、やるしかない。

青マントの少女が、原田に襲いかかってきた。

清水さんとの戦いは、ちゃんと見ていた。

相手は接近スピードタイプ。

自分には清水さんのような相手の動きを避ける機敏さや読みもない。

重要なのは、相手を近づけさせないこと。

自分の間合いに相手を置くこと。

そのためには、攻める攻める攻める。守りに回ってはダメ。

原田は、懐に入らせないように、槍で相手を必死に突く。

青マントの少女は軽やかなステップで避ける。

相手は、原田をバカにするように、左右前後上下へと移動する。

ドーン

外から爆発音が聞こえてくる。どうやら、近藤も大変ことになっているようだ。

「2号は、どうやら終わらせたみたいだね。じゃあ、こっちもそろそろ終わらせますか」

「終わってません。近藤さんが負けるわけありません」

「馬鹿じゃないの」というと、青マントは、原田に向かってきた。

攻撃重視に転じたことで、今までに比べて、動きが直線的になった。

そして、槍の一突きが、相手を刺した。

（やった。）

喜んだのも束の間、

次の瞬間、槍を抜こうとしたが、抜けない。

いや、貫通した状態で、相手が間合いを詰めてきているのだ。

青マントの鋭い爪と牙が迫る。

（覚悟！！）

原田は、槍を離すと、素早く相手の胸元に入り、青マントを投げ倒した。

そして、素早くナイフを取り出すと、少女の首を切りつけた。

頸動脈から血が噴き出し、少女の血で、血まみれになる原田。

だが、原田はたじろがない。

すぐさま槍を拾い、立ち上がると、清水の方へ向かった。

第11話 罨

赤マントの鎌は、触れるものは荷物だろうと、床や壁のコンクリートだろうと、豆腐のようになめらかに切断する。

が、移動速度は、それほど速くないので、間合いを保てれば、それほど怖い相手ではない。

やっかいなことに、相手は通り抜け能力を持っているようだ。

壁を通り抜け、突然現れると、鎌を振り回し、周囲の物を切断する。

(さてどうしたものか?)

物を切断できるということは、その間は実体化しているということだ。

攻撃してきた瞬間を狙うカウンターしかない。

ドーン

外から爆発音が聞こえてくる。どうやら、近藤も大変ことになっているようだ。

「さあ、お仕置きの間だ」

赤マントは、棚を突き抜け、突然、清水の背後に出現すると鎌を振り上げ、清水に襲いかかってくる。

が、清水は冷静に背後に振り向くと仮面を打ちぬく。

ガラン と鎌が床に落ちる。

「常に背後からって、ワンパターンなのよね。逆に動きが読めるのよ」

清水が床に落ちたマントを足でける。

「胴体がなくて、手と頭だけのデザインか。これが銃弾がマントを突き抜けた理由ね。まあ、昔からよくあるネタよね。さあ、帰りましょうか」

「清水、後ろ！」

キ助が叫ぶ。

振り向くと、既に背後で、赤マントが鎌を振り上げていた。

しまった！

清水は避けきれず、左腕を付け根から失った。
傷口からの出血が酷い。

「俺は不死身なのさ」

「そんなアホな。不死身なんてありえへん」
キ助が呆然としながら呟く。

「1人は出血死亡確定。残りは、女が1人だけ。楽勝だね。さあ死にな」

赤マントは、振り上げた鎌を降ろそうとするが・・・降りない。

「保険はかけておくものね。茨は私のイメージ次第で、いくらでも細くなるのよ。蜘蛛の糸よりもね」

清水は逃げながらも、茨を蜘蛛の糸よりも細くして、倉庫中に張

った。

これにより出現位置を正確に早く知ることが出来た。また、相手が物質を通り抜けることはできても、魔法を通り抜けれないことが判った。

そこで、魔法の糸を絡め相手の動きを止めたのだ。

「あなたの本体は、どうやら、その鎌ね」

「黙れ、このアマ」と声を荒げる。

「どうやら、凶星だったみたいね。」

素早く銃を撃つと、銃弾が鎌を破壊する。

しばらく待つが何の反応もない。

どうやら本当に倒したようだ。

足音で原田が近づいて来ているのが判る。

どうやら、原田さんの方も終わったようだ。

「原田さん。ちょっと助けて」

腕を切られて出血の多い清水は原田に助けを求めた。

「清水さん。大丈夫で．．．!!」

「!?!」

原田は清水の腕がないことにびっくりし、一方、清水は原田が血まみれのことにはびっくりした。

「大丈夫．．．じゃないですね」

「今回は、危なかったわね」

清水は側に落ちている左腕を拾うと、傷口と傷口を合わせ、茨で抱合し、体にくっつけた。

「便利ですね」

「でも、ちよっと、刺してもらえると嬉しいかな」

鐘が鳴り、現実の世界に戻る。

原田さんが警察に通報する一方、女性を救出すべく、近藤と清水は倉庫の中に無断で侵入した。

警報が鳴る。でも、構わない。

警備員が追ってくれば、それはそれでしめたものだ。

いっぽう、清水や近藤たちの動きとは逆の方に進む、倉庫から逃げようとする不審者の影。

恐らく現実世界でのパートナー、つまり殺人鬼だ。

「任せた。わたしは、倉庫に行く」

「えっ」

確かに、監禁場所は清水さんの方が詳しい。

しょうがない、近藤が急いで不審者を追いかける。

近藤に追いかけられ、不審者は壁の側にいた原田さんを人質に取るうとするが・・・原田さんが、不審者をブン投げた。

啞然とする近藤。

「わたし、合気道習ってたんです」

清水たちの通報により、現実の世界でも女性には保護され、男は不法侵入でとられえず逮捕された。

第12話 また会う日まで（前書き）

第5話の後半に追記しました。

これを読まないで、話が繋がらないかも・・・すみません。

第12話 また会う日まで

夜が怖い。寝るのが怖い。

夢を見るのは嫌い。

人が死ぬ瞬間が見えるから。

あの時の夢を見るから。

夢なんか見たくない。

場所は美穂ちゃんが死んだ野川公園。

「美穂ちゃん、私のこと好き」

「うん、好きだよ」と美穂ちゃんは、水と戯れながら、ニコツと笑う。

私は、美穂ちゃんのことを好きだ。

聖歌隊で歌う、美穂ちゃんの歌声を聞いて、天使が歌っていると
思った。

子供の頃は単純に、友達だから好きなんだと思っていた。

でも、今は違う。

友達として好き以上の感情を持っている。

美穂ちゃんは、同じクラスの山田のことを好きだと言う。

そして、私に誰が好きかを聞く。

私には、好きな男子はいない。

好きなのは、美穂ちゃん。

「私も美穂ちゃんのことを好き」

そう言って私は、美穂ちゃんのことを背後から抱き締めた。

「・・・駄目」

そう言った直後、美穂ちゃんは、ものすごい勢いで、私のことを
払った。

「・・・気持ち悪い」

そう言って、彼女は、私の元から駆けて行った。

「美穂ちゃんはあたしのことが嫌いなんだ」

悪夢で、また目が覚めてしまった。

原田のおねえちゃんからメールが来ていた。

女性を救出し、赤マントを倒したそうだ。

美穂ちゃんの敵は取れた。かたき

でも、それで、私の悪夢は終わるのだろうか。

美穂ちゃんは、本当に天国へいけるのだろうか。

私のやったことは無駄なんだ。

告白なんかしなきゃ良かった。

そうすれば、美穂ちゃんに嫌われずに済んだ。

あの日、私の家に向かわなければ、美穂ちゃんは死なずに済んだ
んだ。

美穂ちゃんが死んだのも、私せいなんだ。

私に会わなければ、美穂ちゃんが死なずに済んだんだ。

今も幸せに、お母さんやお父さん、皆と一緒に幸せ生きていけた
んだ。

私に会わなければ・・・

「そんなことないよ。明日香ちゃん」

懐かしい呼び声。

声の方へ顔を向けると、白いワンピースを着た長髪の女の子が笑顔で立っていた。

美穂ちゃんだ。

「美穂ちゃん」

「お手紙ありがとう。明日香ちゃんが手紙を出してくれたから、ここで会えたんだよ」

「ここはどこだろう。周囲を見ると、まるで雲の上、天国ようなところだ。」

「ここはどこなの？」

「ここは天国と地上の間の『あいの世界』だよ」

いつも見る悪夢とは違う、暖かい光に包まれた世界だ。

「明日香ちゃん、ごめんね。私のせいで、明日香ちゃんのこと苦しめて」

「そんなことないよ」

「私、美穂ちゃんのおかげで、天国に行けるの。ありがとう」

天からの迎え光が、白鳥美穂を照らす。

「もうお迎えが来ちゃった。空気読まないわよね」

「もう行っちゃおう」

「大丈夫だよ。天国で必ず会えるから。天国に先に行くことになっちゃったけど。明日香ちゃんは、早く来ちゃ駄目だぞ」

「美穂ちゃん、美穂ちゃん」

明日香の涙は止まらない。

「ねえ、明日香ちゃん。あの日、したかったことしていい？」

「良いよ」

白鳥美穂は、佐々木明日香に顔を近づけると、キスをした。

「大好きだよ。明日香ちゃん。待ってるからね。幸せになっただね」
そう言っただ、明日香は空に昇ると、光の中へ消えて行った。

第13話 エピローグ

女性が救出され、連続殺人の容疑者が捕まったニュースは、瞬く間に警察そしてマスコミへと広まった。

容疑者の名前は、上島英雄。

「模倣犯じゃないのか？」と多村。

「それが、そうじゃないみたいですね」

その一方、女性を救出し、犯人を捕まえた人物たちは、その場で居なくなってしまう。

皆目見当がつかなかった。

「防犯カメラに写っていないのか」

「それが、上島英雄が細工したようでして、残っていませんでした」

「行ってきます」

清水の元気な声が玄関から家中に響く。

「いつてらっしゃい」

父親のたるそうな返事が聞こえる。

いつものことだ。

清水が朝、家を出て20メートルほど進むと、黒服の男が2人近づいてきた。

気配で判る。刑事かヤクザだ。

「清水葵さんだね」と男たちは警察手帳を見せた。

名前の欄には、多村と大田と書いてある。

「何でしょうか。忙しいので手短にお願いします」

「君のお父さん、中島英雄のことでお話があるんだ」と多村。

「私は清水です。私の父は清水幸太郎だけです」

「手短に用件だけ話そう。連続殺人犯が今日の深夜捕まった。名前は上島英雄、22歳。君のお父さんは無実だ。犯人じゃない」

「私には関係ないんですが・・・」

「もう少し聞いてくれ・・・中島が行方不明だったのは君もニュースで知っているだろう」

「知ってます。居場所が判ったから、会いに行けとでも言うんですか。ごめんです」

「死体が見つかった」と大田。

「意味が割りませんが」

「上島英雄が殺して、中島の犯行に偽装したことを自白した」

「そうですか。それで、遺体か遺灰を引き取れとでも」

「いや、それは、中島の母親にやってもらおう」

「じゃあ、特に用事はないですね。では、学校がありますので行かせてもらいます」と頭を下げると、清水は駅へと向かった。

「顔色一つ変えませんでしたね。血のつながった親が死んだのに」と大田警視。

「その血が厄介なんだろ。そのせいで、いろいろと辛い目に会ってきているからな」

当初自供した上島英雄の犯行動機は、無能な警察に代わっての『社会のゴミの排除』だった。

警察や裁判所が、殺人鬼を裁かず、野に放つから自分が変わりに

天誅を与えたのだと主張した。

では、なぜ、少女たちを殺したのか？

上島は、少女たちにも天誅を与えたのだと主張した。

最初の少女、赤坂百合は援助交際。

二番目の少女、青島桜は薬中毒の上に金を得るため援助交際。

三番目の少女、白石花音は自殺願望者。

どいつも、社会のゴミだから自分が排除したと主張した。

しかし、捜査を進めて行くうちに、別のことが判ってきた。

つえしまひでお

なかしまひでお

上島英雄は中島秀雄と名前が似ていたため、小学校中学校とイジメを受け、引きこもりになっていた。そのため、中島秀雄が犯人であるなし関係なしに中島秀雄のことを相当恨んでいたらしい。

また、少女を殺した理由も、天誅ではなく、バカにされたためや怖がられたためらしい。

理由はともあれ、上島は、中島秀雄を殺したことで英雄気取りになっっていた。

しかし、自分の行いを誰も誉めてくれないし、自慢もできない。

ネットに書き込めば、神扱いされると思ったが、実際はバカ・変人扱いされた。

そこで、援助交際で知り合った赤坂に、切断した中島秀雄の頭や手を見せた。

ところが、褒められ、称賛を受けるところか、怖がられたため、口封じに殺したらしい。

青島や白鳥も同じ理由だ。

タロットカードに関して入れた記憶はないと言っていた。

近頃噂の『死の鐘』に対するお守りだろうということ、話がついた。

上島英雄が逮捕されてから数日後の夜。

消灯し、誰も歩いていないはずの拘置所に、足音が響く。

「起きなさい。上島英雄」

目の前に居るのは、明らかにこの時間、この場所に居るのはおかし
しい17、18歳くらいの女。

「誰だお前は？」

「赤マントを殺した女と言えば、判るかしら」

上島英雄の表情が変わり、血の気が引いていく。

「俺は悪くない。そそのかされたんだ。おい！誰か居ないのか」と
叫び、助けを求める。

「ここはもう『あいの世界』よ」

「『あいの世界』で死んだ人がどうなるか。知らないわけじゃない
でしょ。あなたは契約者じゃないから、必ずしも死ぬとは限らない
わね。でも、心配しないで、死ぬまで来てあげるから」

「多村警部補」

大田警視が声をかけてきた。

「上島英雄が拘置所で死亡した。」

「なんでだ」

拘置所は厳重な監視下にあり、自殺もまず出来ない。

「死因は神経原性ショック死。病死ですね」

「ちくしょう」

多村は、壁を強くこぶしで叩いた。

「どうしたんですか？警部補。死んで逃げられたみたいな。悔しい

気持ち判りますが・・・」

「いや、なんでもない」

自分の知っている限り、渡辺清子と同様の突然死。

それが、自分の身近で起きた。

確証はないが、自分の知らない力が働いている。

それが無性に苛立たしかった。

閑話 千助の多事雑言

「キ助さん。聞きたいことがあるんだけど」

近藤は、キマイラのキ助に質問をした。

「何かね。少年」

相変わらず、キマイラの態度はでかい。

「相変わらず説明不足なんですけど。結局、赤マントってなんだっ
たんですか」

「単純に、都市伝説が『あいの世界』で具体化したものだな。もっ
とも、カードと一体化したことで、かなり力を持ったけど」

「なぜ、現実世界で、人を殺す必要があっただんですか」

「そこが本編で完全に抜けているところだな。ポイントは本当の犯
人は中島じゃないのに、世間は中島と思いこんだ点だな。そして、
死んでいる人間を生きていると思えば恐怖した。偽りが現実になり、
現実が偽りになったわけだ。赤マントとしては、偽りの存在である
自分を現実化させたかったんじゃない。事実、事件以降、人々の認識に
は中島の赤マントが居たわけじゃが」

「認識したから、現実になるわけじゃありませんよね。現実には認識
とは関係なく存在しているんじゃないんですか？」

「少年。認識と起きた現実には、密接に関連しているんだよ。『シユ
レディングアの猫』って知っているかな」

「『V A N E P R O J E C T』が販売している奴ですか？」

「それは、『シユレディングア 猫耳少女』だろ。オタクな会話を
すると、女性が逃げるぞ。特に体育会系の小野寺みたいな女性はな。
『シユレディングアの猫』だ」

「知っていますよ。早い話が．．．『箱の中の猫が死んでいるか、生きているか箱を開けて確かめた瞬間に決まる』って話ですよね。たしか『パラレルワールド・平行世界』と関係していたような」

「まあ、そんなところだな。『確かめた瞬間』というのがポイントだ。別の言い方をすると、『箱を開けて、確かめなければ、猫は生きていくか、死んでいるか決まっていけない』とも取れる。箱の中の世界は、『パラレルワールド』。極端な話、なんでもありじゃ。赤マントは儀式によって、現実世界に巨大な箱を作ろうとしたんじゃない」

「なんでもありの世界ですか？」

「もつと限定して、実際に赤マントが存在している世界だな。儀式が失敗したから、人間の殺人鬼になったけど。儀式が成功していたら、現実世界で赤マントと対決して、殺される可能性があったんだ」

「うーん、危なかったんですね」

「近藤たちは魔法が使えるわけじゃないから、100%死亡だね」

「ところで、話は変わりますが、佐々木明日香は、その後、どうなつたんですか。」

「とりあえずは、清水が記憶を封じて能力を押さえている。さすがに小さい子が毎日自殺や殺人の光景を見るのはまずいからね。もちろん白鳥さんに関する良い思い出は残しているよ」

「それは良かったですね。そういえば、なんで、白鳥美穂は急に佐々木明日香に対する態度を変えたんですか」

「作者がヘボだから、急に変わったようになっちゃったけど、白鳥美穂はキリスト教徒なんだよ。佐々木明日香を拒絶したのも、教えだね。保守派は同性愛に敵しいからね。でも、最終的には教えより、心情を取っちゃったんだけど。悪魔に殺されることを恐れたのも、

悪魔に殺された魂は地獄へ行くと誰かから聞いたんだろっね。」

「しかし、誰もキリスト教徒だなんて、判りませんよ」

「ほとんど書いてないからね。第3話のところに、十字架という言葉がちらつと出てくるだけだから、しかも、追記。もっと、ちゃんと書かないと誰にも伝わらないよ。」

「出来る限り毎日書くって言ってたのに、止まりましたしね」

「アクションシーンを書くのが苦手なうえに、また才子を変えちゃったから。当初の予定だと、同性愛者の佐々木明日香が拒絶された際に白鳥美穂を誤って殺してしまうという話だったんだけど、さすがに救いがないので、作者も止めたみたい。結果、落とし所が不明のまま続くことになった」

「そんな話ばかりですね。」

「まったくだね。たぶん、迷走状態は最後まで続くんじゃないの。」

読んで下さっている皆様に、頭が上がりません」

閑話 その1 鉢合わせ

「しまった。今日傘持ってこなかった」

近藤が部活を終えて、外に出ると雨が降っていた。

「折りたたみは？」と鈴木。

「自転車通学だから折りたたみなんて使わない」

「梅雨の時期なんだから、傘は標準だろ」と田中。

「大丈夫、置き傘がある」

「う。置き傘がない。この間使っちゃったんだ」

「ドジだね」

「あたしの置き傘貸そうか」

田中が珍しく、優しい言葉をかけてくれる。

「この程度の雨だ。速攻で帰れば、なんとかなる」

近藤と鈴木は、駐輪場に行き自転車を取ってくると、門から出た。

その時見た光景は、近藤にとり衝撃的なものだった。

小野寺さんが、村上翼と相合傘で歩いていたのだ。

村上翼は、小野寺さんと同じ部活の男で、ルックスも良く、身長も高い。成績は僕より悪いが、人望もお金もあるし、運動神経も良い。

「あゝあゝ」

隣の鈴木も気が付き、声を出す。

近藤は声を出す気にもなれなかった。

近頃、吉祥寺の側という立地の良さと、喫茶店に入る金のなさから、週に一回の皆の集場所になりつつある原田の家。

とりあえず、広い居間で、情報交換会、勉強会、反省会らしきものをやるが、直ぐに原田さんが入れてくれる紅茶を飲みながらの雑談会になる。

「世の中にはさ。幸せになる運命の人っているんだよな」と近藤がボソツと呟く。

「どうしたんだよ。唐突に」と清水。

「世の中には、多少の不幸があっても、王子様が現われて、ハッピーエンドのエンディングになるように準備されている人が居るんだな」と思っ

「小野寺さんのことが」

近藤が小野寺さんに惚れて、振られたのは、このメンバーの中では良く知られたことだった。

そして、近藤が憂鬱になることといったら、8割がた小野寺さん関係のことだった。

「彼女に王子様でも現れたか」と結城。

「凶星だ。」

「・・・そういうこと」

「近藤さんが、王子様になればいいのに」と原田。

「なれたら苦労しないよ。」

「そうですか？」

「僕はせいぜい、農民だよ」

「努力が足りないんじゃないですか」と原田の率直な突っ込み。

「確かに、努力が足りないな、近藤は。王子様は王子様でいるために、努力してるんだよ。俺みたいにな」

結城は王子様というか、ナイトというか、そんな感じが良く似合う。

ファッションのとか振る舞いとかも、力を入れている。毎朝、30分は鏡を見るタイプだろう。

それくらべ、自分の力の入れようは標準以下。身支度も5分で終わるし、最低レベルかもしれない。

「そうだろうけど。簡単に言わないでよ。相手はルックスも良いし、身長も高いし、金持ってるし。人望あるし。運動神経も良い。勝てる要素がない」

近藤はネガティブモードまっしぐらだ。

「愛情はどうですか」

「僕の愛情なんて、何の価値もない」

「判った。明日土曜日だから俺がお前のファッションを何とかしてやる。髪も洋服もチェンジだ」

「私も手伝います」

「お金ないんですけど・・・」

近頃は、アルバイトも減らしてしまった。その一方で出費は増えている。小遣いだけでのやりくりが辛い。

「おまえ、小野寺さんに好かれたいんだろ。ケチるな。それにファッションは金額じゃない。センスだ」

今日は、昨日の雨とは、うって変って、ひと足早い夏のような雲ひとつない晴天と日差し。

結城、清水とともに吉祥寺の駅前で原田さんを待っていたら、偶然、小野寺さんに会った。

服装はかなりのミニスカート。眩しすぎます。

そして、隣には村上翼。

男と2人に、女2人。もしかして、ダブルデート（死語）ってやつでしょうか。

よりによって、こんなときに会うとは運が悪い。

「どの子が小野寺さん」

察しの良い結城は、僕の態度から状況を理解したようだ。

「真中の子」

「うわあ〜。めちゃくちゃ可愛いじゃん」

「そうだろ」

「あれは、競争率高いよ。諦めな」

「・・・そうだよな。判っているんだけど・・・出来ないんだよね」

「報われないな」と清水。

「お待たせ」

遅刻ではないが、皆より遅れてきた原田さんが、元気よく皆に声をかける。

だが、皆が別方向を見ていて、リアクションがいつもと違う。

「どうしたの皆？」

「たった今、近藤の戦いが終戦しました」と清水。

「えっ!?!」

戦わずして、そうそう敗北宣言ですか。

「今日、どうする？」と結城。

「どうやら、結城もあきらめたらしい。」

「何が起きたか判りませんが、近藤さんの買い物はお流れですか？
じゃあ、デートしましょう。まずはカラオケですね」

「え？」

なぜ、唐突に。

「だって、私たち、よく会いますけど、基本『あいの世界』絡みなんですよね。でも、チームワークを高めるためには、それ以外の親睦も必要だと思っんです」

「いま、近藤、居たよな」と村上翼が小野寺に尋ねる。

「居た」と素っ気ない返事をする小野寺。

「一緒に居たのかなり美人だったよな」ともう一人の男

「近藤と一緒に居たの三鷹の清水に似てなかったか」

村上翼が尋ねる。

「そうみたいね」

小野寺が以前見たことがある清水さんの服装は、制服か羽織袴だった。

羽織袴姿の清水さんも凛々しかったが、ジーンズ姿の私服の清水さんもやっぱり格好いい。

「どついう関係なんだろうな」

近藤と清水さんが知り合いなのは知っている。

しかし、演劇部の近藤。弓道の清水さん。車椅子の男性。最後の女性。

ファッションの系統もバラバラで見た目だけでは、つながりが判

らない。

デートだとしてら、人数がおかしい。

振り向くと、別の女性が合流したみたいだ。

しかも、かなり可愛い美人な人。

ツーサイドアップのロングに白いワンピースの清楚な美人だ。

可愛らしさを演出するわけではなく、自然に可愛らしさが出る。

これで、男性2人に女性2人。デートの可能性も出てきた。

「さあ？近藤のことなんか知らないわ」

なんでだろう。無性に腹が立つ。

閑話 その2 井之頭の池

休みの日、日中からいきなり昼カラですか。
まあ、夜に比べると安いから良いけど。

最初に原田が歌う。

選曲は、「夢をあきらめない」。
名曲だけど、古いな。
しかも、結構うまい。

「原田さん。歌うまいんですね」

「大学の混成合唱団入ってますから。あと、原田さんっていうの止めてください。露骨に年上っぽくて嫌です。優奈って言うて下さい。私も、信也君って言います」

「判りました。優奈さん」

「優奈さん。こんど、バンドのボーカルやってよ」と結城。

「えっ。それは恥ずかしいです」

「大丈夫。大丈夫。優奈さんなら受けること間違いなしです」

続いて、清水が歌う。

選曲は、竹内ママア。

悪くはないけど・・・OLですか？

なぜか、結構可愛らしく歌う。

「本当に上手いですよ。清水さん」

「ありがとう。優奈さん。知り合いにカラオケ好きがいて付きあわされているから、それなりにね」

「清水さんも、意外と歌うまいんですね。しかも、可愛い」と

近藤。

「意外って、どういうことよ」

「てつきり、ジャイアン系か『天城越え』を歌うと思っていました」
「なによそれ。あなたの頭の中で、私ってどんな人間なの」

そんなでもって、結城は、「BANP F CHICKEN」ですか。

バンドをやっているだけあって、上手い。

結局みんな、歌好き、音楽好きなのね。

うん。あまり上手くないのは、僕だけか・・・

井の頭公園のボートですか？

「私前から乗ってみたかったんですけど、1人や女性どうしだと乗りにくくて」

「確かにそうですが・・・」

次の場所も、原田の鶴の一声で決まった。

井の頭公園のボートと言えば、「カップルでボートに乗ると別れる」って場所じゃないの？

別れる原因の一つは、池のほとりにある女性神様、弁天様が嫉妬して、別れさせるという話。

現実的な原因としては、男がボートを上手くこげず、女性が男性に失望するというパターンだ。

まあ、カップルじゃないから良いのか。

「やっぱり、結城さんは器用ですね」

「そうですね」

横を見ると、結城のところは、なめらかにボートをこいている。それに対して、自分は・・・駄目ですね。それなりに進むけど、右や左に蛇行している。そんな僕のボートに対して、原田さんは不機嫌顔にならず、柔やかに乗っている

「原田さん。僕のボートで良かったんですか？」

「原田さんじゃなくて、優奈と呼んでください」

「優奈さん。僕のボートで良かったんですか？」

「結城さんと一緒に乗りたかったんですか？」

「・・・そうじゃなくて・・・」

「葵さんと一緒に乗ったら、信也君、今頃、ボードから叩き落とされていきますよ」

確かに、清水さん短気なところあるからな。

それに、面白半分で、落とされる可能性もある。

「・・・確かにね」

「そもそも、信也君が上手にボートを漕ぐなんて期待していませんから」

カップルが別れる原因は、女性が男性に失望するためだが・・・始めから期待していなければ失望することもないか。

「きついな優奈さんは」

「他の人には、こんなこと言いませんよ。なんていうか信也君ってイジメたくなるんですよね」とほほ笑む。

あゝ、Mの趣味はないんですけど。

「それに、ボートってのんびりするものでしょ。とりあえず、真中

「まで来たんだから良いじゃないですか」
「そうですね」

でも、どう戻ろうか？
向きを逆にしないと戻れないよね。
とりあえず、一生懸命向きを変えよう。

それにしても、今の僕と原さんを周りの人が見たら、どう思うんだろう。

カップルに見えるのかな？

まあ、無理だろうな。不釣り合いすぎるし。

「私たちって、周りの人が見たら、カップルに見えるんですかね」

このタイミングをそれを聞くか。
まるで自分の心が見透かされているようだ。

「どうでしょうね。ただ単なる友達じゃないですか」
「そうですね？」と首を少し傾げる。
「そうですね」

「カップルと言えば、私の知り合いで、ボートに乗った後、3人別れた人がいます。ジंकウスってあるんですね」

「そうですね・・・」
「でも、回避方法もあるんですよ。知っていますか？事前に弁天様にお参りすると大丈夫らしいですよ」とニッコリ笑う。

「そうですね。それは知りませんでした。彼女と乗る時がきたら試してみます」

「3人のうち2人は、事前にお参りしたけど、別れましたから・・・
効果は、どうなんでしょう」

「なんというかマイペースだな、原田さんは。」

「原田さんは」

「優奈！」

「優奈さんは、彼氏とか居ないんですか」

「居たら、土曜日に信也君と一緒にボートに乗っていないでしょ」

「そうですね。優奈さんは、もてそうな気がするんですけどね。ナンパとか、されないんですか」

「うーん。私はしないかな。友達好みの男には積極的にアピールするけど、私は恥ずかしくてできない」

「そっちの『される』『じゃなくて、受身のされるです。男の人に声をかけられるという意味です」

原田さんは帰国子女のせいか、時より日本語が微妙になる。

もつとも、それだけでは、ないような気がするが。

「良くされるかな。でも、ナンパしてくるような男性は嫌いだし。

付きあっても、結局、長く続かないの。私、わがままだし、マイペースだから男の人とペースが合わないのよね」

「そこは、何となく判りますね」

「ひどいな。まあ、結局、お兄ちゃんより、優しくて、カッコよくて、私を理解してくれる人なんていなかったからかな」

原田さんが少し悲しそうな顔をする。

しまった。余計なことを思い出させたか。

お兄さんが亡くなって、もう一カ月近くか。

兄の代わりになるのは無理として、誰か支えてあげる人は居ないのだろうか。

それにしても、兄がシスコンで、妹がブラコンか。

「いま、ブラコンだと思ったでしょ」

「えっ？いや、まあ、その」

やっぱり、自分の心が見透かされているようだ。

「友達からも良く言われるし、私自身もそう思うのよね」

結局この日は、カラオケ、ボート、ゲームセンター、ボーリングと遊びまくった。

これで、チームワークが良くなったのだろうか？

単に、楽しい遊びだったような気がするのだが・・・

閑話 その3 きっかけ

閑話 その3 きっかけ

「近藤君」と自分を呼ぶ可愛らしい声。
えっ？

珍しく小野寺さんから声をかけてきた。何の用事だろう。
ものすごくドキドキする。

「ねえ、この間、清水さんと近藤君が吉祥寺で一緒に居るの見たんだけど。清水さんと知り合いなの？」

「こっちも、あなたが村上翼と一緒に居るの見ました。」

「そうだけど」

「どんな知り合いなの？」

「どんなと言われても・・・」

戦友と言って評判悪かったからな。

「ネット友達かな。M X Iのコミュニティで知り合いになったんだ」

「どのコミュニティ。私にも紹介して？私、清水さんと是非、知り合いになりたいの。お願い」

「そう来たか。」

後先考えないで、嘘をつくところくなことがない。

小野寺さんにおねがいされてしまった以上、断るのはまずいのだが・・・なぜ、清水さんと知り合いになりたいんだ。

「その・・・すごいマイナーなコミュニティで、ちょっと人には言えないような・・・というか入れないと言っか」

「どんなコミュニティだよ。」

「嘘下手だな。」

「自分も清水さんも人格疑われるだろ。」

それに、小野寺さんの表情も良くない。機嫌を損ねる危険性大だな。

まずい。何て言えば良いんだ。

「でも、紹介だけなら何とか」

というか、清水さん、M X Iやっているのか？

いまどきの女子高生がやってないはずがない。そう信じよう。

「本当？」

目を輝かせて、嬉しそうだ。

「それにしても、何で清水さんのこと、知っているの？」

「何でって・・・清水さんが弓道やってること知ってるでしょ」

「知ってるけど・・・清水さんって、有名人かなんかなの？」

「知らないの？清水さんは高校女子弓道界では有名なよ。私にと

って、清水さんは憧れの人の」

「つまり、ファンってこと？」

「そう」

「うーん、幻滅しないようにね」

さっそく携帯で連絡する。

「M X I？やってないわよ」

しまった。

「やるきないですか」

「ない。とりあえず事情を話さない、事情を」

近藤は清水に隠さず事情を話した。

「私自身、小野寺さんのことは気になっていたしな・・・親しくなるのは良いけど・・・ファンはやだな。友達なら良いけど・・・」

「じゃあ、一緒に遊ぶとかなら良いんですかね」

「そうだね」

「判りました。そう言います」

「その．．．マイミクは駄目ですが、友達なら良いそうです。でも、ファンみたいな関係は駄目だそうです。つまり、遊び友達ならOKということですよ。それで良いですか」

正直言つて、緊張で脳が働かない。

酷い説明口調で、小野寺さんに話した。

それでも、小野寺さんは滅茶苦茶喜んだ。

近藤君ありがとうと、キスはしてくれなかったが、少なくとも笑顔は見せてくれた。

僕自身、小野寺さんとの距離が、少し縮んだような感じがして、嬉しかった。

つくづく、自分は単純な人間だと思った。

「ところで、近藤君」

「なんででしょうか？」

「一緒にボートに乗っていた綺麗な女性は誰なの？」

夜、原田がお風呂に入っていると、近藤から電話があった。

原田は湯船に入りながら、近藤と話をした。

「原田さんと一緒にいるところを小野寺さんに見られてしまいました」

「それが問題なの？」

「なんとというか、遊び人と思われてしまっているような．．．」

「大丈夫。私の思っていたとおりよ」

「原田さん、小野寺さんが池の側に居ること知ってたんですか」

「まあね。信也君の問題点は、小野寺さんを追いかけてすぎているのよ。追いかけてすぎるから相手が逃げるのよ」

「はあ」

「それにね。隣の芝は良く見えるって言って、彼女が居ない男より居る男の方が良く見えるの。少しは小野寺さんに焼きもちさせなきゃ」

「本当に焼きもちなんてするんですか」

「するわよ。だって、向こうから話しかけてきたうえに、私のこと聞いてきたんでしょ。大丈夫よ」と原田は話を終えた。

近藤としては、原田さんを信用するしかなかった。

原田優奈にとって、小野寺と近藤の関係は特別だった。

自分のせいで、小野寺と近藤の関係が壊れてしまった負い目もある。

だから、小野寺と近藤の関係を良好にして、近藤には小野寺さんと幸せになってほしいという気持ちがある。

最悪、近藤に彼女が出来ない場合、自分が彼女として、近藤を幸せにしようと考えたこともあった。

その一方で、別の気持ちもある。

原田兄と小野寺との関係だ。

小野寺は、『あいの世界』、半分夢の中の世界とはいえ、原田の兄と関係を持った。

ブラコンを自称する原田優奈に取り、小野寺は兄を取った女だ。

また、近藤の思いを知らながら、他の男に走った女。

このことは、誰にも話していないし、誰にも話せない。

小野寺本人も忘れていた原田だけが知っていること。

「結局、私は、小野寺さんに焼いているのね。私が手に入れられない物を容易く手に入れるから」

プロローグ

今リストカットが、一部の人の間でブームらしい。いわゆる「ファッションリスカ」。

ある芸能人が「リスカ」を告白してから、次々と他の芸能人が、リストカットを告白するようになった。

それに触発されて、一部の中学生や高校生が、流行としてリストカットを始めたのだ。

他にも、仮面うつ病なんていうのもあるらしい。

悩んでいる自分、考えている自分をアピールしたいのだろうか？

たぶん、そんな簡単なものではないだろうが、

私には、さっぱり判らない。

もっとも、私としては、「ファッションリスカ」よりも、別の噂の方が気になる。

噂によると、帰宅時など街中で貧血で突然倒れ、保護される女子が増えてきているらしい。

その子たちの腕には大抵リストカットの跡があるらしいのだけど、彼女たちは覚えてないという。

では誰が彼女たちの手首を切っているのか？

吸血鬼との噂だ。

その吸血鬼は、首筋から血を吸うのではなく、手首から吸うらしい。

リストカットをしている少女は、自分でリストカットしているのではなく、吸血鬼に血を吸われているとの話だ。

何とも、現代的な吸血鬼だ。

放課後の演劇部の部室で、近藤信也が休んでいると、「せんぱい」と後輩の山村の声が背後から聞こえる。

振り向くと山村は居ない。

唐突に反対側の首筋に山村が噛みつく。

「・・・何をしていますか」

「きゅうけつきです」と噛みつきながら答える。

何やっているかな〜こいつは・・・

「先輩の首筋は美味しくないですね。おっさん味がします」

「・・・美味しい首筋って何ですか？」

「三上先輩や、田中先輩は、良い味がしました。先輩は、おっさん味です」

16歳にして、おっさん味か。妙にショックだ。

第一、お前は、おっさんの首筋の味を知っているのか？

「似合っていますか、先輩」とくるつと回って見せる。

吸血鬼用のコスプレ・グッズだろうか。鋭く長い牙と黒いマントを羽織っている。

「似合っているも何も、なんで吸血鬼のカッコなんかしているの」

話しづらいのだろうか、牙を取る。

取っても八重歯だ。

「先輩、吸血鬼の噂知らないんですか？今流行っているんですよ」
「流行っているんだ・・・」

吸血鬼の噂が流行っているからと言って、そのコスプレをやる必要はないだろに。

そこが、面白い後輩でもあるが・・・
吸血鬼の噂。『あいの世界』が関係しているようで、妙に気になる。

ちょっと調べてみるか。

「今日がとても楽しいと明日もきつと楽しく そんな日々が続いてく そう想っていたあの頃・・・」

昔の歌だけど、良い歌だと思う。

好きな歌だ。

でも、どんだけ馬鹿なんだ。

そんな楽しい日々が続くはずが無い。

私は今、人生の絶頂期に居る。もうすぐ下り坂。

後、数年経てば、明るく楽しい人生は終わり。

そして、10年も経てば、私たちも、おばさんだ。

大人になれば別の楽しみが見つかりと大人は言う。

S X?

もう、やってるし。

結婚?

子育て?

そんなの楽しいの。

公園では楽しそうだけど、家には暗い顔している人を私は知っている。

仕事?

駅ですれ違うOLやサラリーマン、おっさんたちは、本当に生きて
いるの。

皆死んだような目をしている。

あいつらは、生きた死体だ。

そんな人生嫌。嫌だ。嫌だ。嫌だ。

私は、彼に出会ったとき運命を感じた。

世の中には普通の人は違う特別な存在が存在する。

ただ単に、普通の人間を基準として、頭が良いとか、お金がある
か、そういうのではない。

明らかに、神の基準による特別な存在。

それが彼だ。

私は選ばれた人間ではない。特別な人間ではない。

選ばれた人間、特別な人間に憧れる普通の人間だ。

そんな私であっても、運命の転換期、運命を変える瞬間と言っ
は判る。

私は彼に声をかけた。その瞬間、私の運命は変わるだろう。

第1話 澤田 あやめ

私の名前は、澤田あやめ。

都心にあるミッシヨン系の名門女子校に通っている高校2年生。

なぜ、そんな学校に通っているかと言うと、単に母親がそこ出身で強く勧められたから。

そして、そこに通うだけの財力があつたから。

お嬢様という程ではないが、そこそこ裕福な家庭であり、学校は俗に言うお嬢様学校として社会的には認識されている。

学校は歴史がある名門だけあつて、庭も広く、校舎も歴史ある洋館風のものだ。

都の歴史的建造物に指定されている。

もともと、建物だけではなく、人の頭も古い。

校内の美しい聖堂で行われる教頭の長い朝礼。

鮮やかなステンドグラスを通して、聖堂内を照らす美しい七色の幻想的な朝の陽ざし。

七色の光の中で話すシスターでもある教頭の姿は美しいが、話は長くて退屈。

「現在、若い人の中で、リストカットなるものが流行っています。

非常に愚かな行為です。わが校の生徒の中にも、既に数名・・・」

長い話が続く。

リストカットに関して、注意するのは正しいと思うのだが、話が要領を得ない。

「島田のリストバンド。まさか、リストカット隠しているんじゃないよね」と隣の島田にちょっかいをかける。

「そんなわけないでしょ。リストウエイトよ。昔からしているじゃない。前見ていないと後で怒られるよ」

「いったい何人が、この話を聞いているのだろうか。暇で暇でしようがない。」

「体調不良により、学校で倒れる生徒、休む生徒が増えています。ダイエットや夜更かしなど生活の乱れが原因です」

倒れる生徒を減らしたいなら、長い朝礼を短くしてほしい。あんなの長い話のせいで、倒れ子が毎回、居るんだから。

教頭は、生活の乱れが原因だと言っけど、別の噂がある。

吸血鬼が現れて、女の子を襲うという噂だ。

事実、貧血で倒れる少女や学校を休む少女が多い。

リストカットする子は、当然貧血だけだ。

また、休んでいるという話の子は行方不明と言っ説もある。

学校が嘘について、体調不良と言っているのだ。

この噂を荒唐無稽と言うのは、簡単だ。

しかし、この学校には、昔から吸血鬼の伝説がある。それが妙に噂に信憑性を与える。

歴史が古く、ミッション系、洋館の校舎、女子校など、非常に西洋的な雰囲気、ドラキュラが合うのだろう。

逆に、普通の学校でドラキュラ伝説を作ったとしても、雰囲気が合わず白けるだけだろう。

吸血鬼が日本に居るとしたら、この学校以上に相応しいところはないではないだろうか？

もちろん、それだけではない。

この学校は、ミッション系、つまり宗教系の学校であり、生徒も

先生も、平均的な日本人よりも信仰心が厚い人が多い。

神や天使の存在、キリストの奇跡を信じている人が多いのだ。

神が存在して、天使が存在し、キリストの奇跡があるとすれば、当然、悪魔も存在してもおかしくない。

とうぜん、吸血鬼が存在していてもおかしくない。

物理的に証明しているわけではないのに、皮肉なことに、信心深い結果、吸血鬼の存在を信じてしまっている人も多い。

それが、独特な空気を作り出している。

もつとも、吸血鬼の伝説と言っても単純な話。

私は友人たちとの過去の会話を思い出した。

「この学校には、吸血鬼の伝説があるのよ」

噂好きな少女、小村かおりは、近頃知った面白い(?)話を澤田に話そうと待ち構えていた。

「ミッシヨン系で、学校内に教会があるのに、何でそんな邪悪なものがあるの」

仏教でもそうだが、教義では、お寺、教会、墓地は聖なる場所であり、悪霊とかがもつとも苦手な場所であるはずだ。

しかし、頭では判っているが、夜の教会、寺は怖いし、墓地は幽霊が出そうで怖い。

それは死と関連して居る場所だからだろう。

そして、夜の学校も怖い。生徒たちで賑やかな日中とは違って変わって夜の無人の学校はかなり怖い。

その二つが合体した、この学校の夜が怖くないはずがない。

「吸血鬼の伝説は、外国から来た魅力的な神父が来ることから始まるの」

この神父、実は悪魔に魂を売っていて、夜になると、学校内で生徒を生贄にした黒ミサをやっていたらしい。

「でも、結局は学校にばれて、退治されて、この学校のどこかに封印されているらしいけど・・・」

「学校に封印されているの？この学校に吸血鬼がいるってこと」

澤田は俄然興味が出てきた。

「そういうこと」

「今度探してみようか」

「辞めましょうよ。怖いですし・・・」と早乙女愛。

「早乙女は怖がりだな。もっとも、封印されている場所は誰にも判らないらしいけど」

恐らく、過去にも何人もの生徒が、この噂を確かめようとしたんだろうな。

「そういう噂って、元になる事件があるじゃない。火のないところに煙は立たないっていうやつ」

「なんというか・・・学校の知られたくない暗部、黒歴史ってやつね。だいたい予想がつくな」

島田まなは、自分の考えた予想を言った。

「色男の若い神父が来て、女の子の魅力に負けて、女の子に手を出しまくったわけだ。学校は父兄にばれて、大問題になる前に、突然帰国を命じたわけだけど。要するに、外国人が女子生徒を魅了するが、吸血鬼が悪の道に誘うになったんだろうな。悪魔の儀式や生贄は・・・あの儀式が変化したものだな」

まあ、聖職者が性欲者になってしまふパターンだな。この学校に若い男性の教師が居ないのは、そのためだろう。

「そうですね。あれも立派な儀式ですものね」と早乙女愛。

「神と結婚して、H出来ないシスターから見れば、悪の道への誘い

か．．．楽しいのに」

すでに済ませてしまった、小森かおりの余裕の発言だな。

こうして、この学校の吸血伝説も、他の学校の伝説と同様、先輩から後輩へ、憶測混じりで伝わっていくのだろう。

第2話 掃除当番

今週は聖堂の掃除当番だ。

この学校は、広く緑も多く良い環境の学校。

設立された100年前は、ただの農村だったんだろっけど、今都内でこれだけの土地を持つのは不可能だろう。

この点は、さすが伝統校だ。

その点は良いのだが、結果、難点も多い。

まず、冬が寒い。

そして、なにより日々の清掃が大変なのだ。

広いうえに、緑は大量の落ち葉になる。

しかも、聖堂などは、美術品のように細工をしているものが多く、雑にはできない。

時間と手間がかかる。

放課後、掃除のために、小村かおり、早乙女愛と一緒に、両手に清掃道具をいっぱい持ち、聖堂に向かっていた。

聖堂に汚いものは置けないということで、わざわざ別の建物から持って来ないといけないのだ。

突然、少女が聖堂から飛び出してきた。

ほとんど、前方を見ておらず、背後ばかり気にしており、私と小村かおりにぶつかった。

掃除道具は飛び散り、少女は手にしていた本を落とし、床に尻もちをつく。

どこかで見たとある子だな。

そうだ、たぶん放送部の子だ。

朝礼とかで、マイクの準備をしていたりするから覚えているのだ

ろっ。

「すみません」

謝罪も中途半端のまま、少女は急いで本を拾う。

そして、やはり背後ばかり気にしている。

(何をそんなに焦っているのだろうか?)

落ちた本を見ると、「吸血鬼ドラキュラ」「吸血鬼の辞典」「吸血鬼伝説の系譜」「黒魔術大辞典」「スラブの伝承」など全て魔術や吸血鬼関連の本。

吸血鬼にでも、追われているのか?などと考えてしまう。

少女は、急いで本を拾うと、また駆けて行った。

「何をあんなに焦っているんでしょうね」と早乙女愛。

「知らないわよ。あたしたちの手伝いをしないなんて、失礼な奴だな。」

小村が床に散らばった石鹸やバケツなどの清掃道具を拾いながら、文句を言う。

聖堂の中を見ても、誰も居ないし、特におかしい点もなかった。

数日後、学校に来ると彼女の話題で持ちきりだった。

「あやめ、知っている? 一年生の子が、吸血鬼に襲われたって、

入院したって話」

「知ってる。昨日、夜メールで聞いた」

「なんだ、つまらない」

彼女が体調を壊し長期の休みを取ったとの話を聞いた。

体調を壊し長期の休み。本当だろうか。行方不明とのうわさがある。

失そうと吸血鬼は関係があるのだろうか。

彼女が、聖堂から慌てて飛び出してきたのと何か関係あるのだろうか？

西村京子が吸血鬼について調べているとしたら、それは放送部の部活の活動として調べている可能性が高い。

そして、調べた結果を発表するつもりだったのではないだろうか。

放課後、とりあえず、放送部に西村のことを聞き、その後、図書館で吸血鬼について調べてみることにした。

放課後、放送部へ行ってみた。

西村京子が吸血鬼について調べているとしたら、それは放送部の部活の活動として調べている可能性が高い。

そして、調べた結果を発表するつもりだったのではないだろうか。予想は半分当たっていた。

ただし、放送部として部全体で調べていたのではなく、西村が一人で調べていたようだ。

そのため、西村がどこまで調べたのかは、判らないとのこと。

「吸血鬼ネタって、放送部で過去何回か、調べたことがあるんだけ

ど、いつも中途半端に終わってしまうのよね」

放送部部長の与田直美が口惜しそうに言う。

確かに、判ればニュースのネタとしては面白いだろう。

「なぜなんですか」

「理由は沢山あるのよ。そもそも発端の話が古すぎて資料も少ないし。あと教師に目を付けられるのよね」

「学校からの圧力ですか？」

「そうね。まあ、過去の不祥事と関係しているみたいだから、探られたくないんですよ」

「その時の資料とか、見せてもらえますか」

「ないんじゃないから。この間、西村さんが全部家に持って帰ったんじゃないかな」

何か判ったら、放送部に教えると約束して放送部を後にした。

第3話 図書

放課後の図書室には、8人ほどの生徒が居た。

1人が図書委員で、残りは一般の生徒。合同で宿題をする勉強部屋として使っている生徒も何人かいる。

図書室は歴史があるだけあって、蔵書数も他の高校とは比較にならないほど多い。

ジャンルはさすがに漫画こそないが、多彩だ。

さらに100年以上前の本すらも置いてある。

さて、西村京子は、どんな本を読んでいたのか？

「吸血鬼ドラキュラ」は有名なので覚えているが、他のものは良く覚えていない。

「スラブ」とか「黒魔術」とか、そんな感じだったと思う。

図書委員がいなければ、黙って貸し出しリストを見ることが出来るのだが、今は無理だ。

図書室に居る図書委員に聞いてみることにした。

図書委員の女の子は、眼鏡に三つ編みと見るからに、まじめ図書委員という感じの倉田真須美まゆみさん3年生。

「すいません。西村京子さんが、借りていた本って、判りますか」

「図書館の規則で、他人がどんな本を借りていたかを教えることはできませんよ」

「そうですか。そうですよね。プライバシーですものね。ありがとうございます。」

「なぜ、そんなことを聞くんですか？」

「偶然、彼女と最後に会った時、彼女、吸血鬼関係の本を持っていたからです」

「だから、吸血鬼に襲われたと思ったの？」

「さすがにそこまでは・・・」

「吸血鬼に関して、調べるだけで襲われたら大変よ。近頃、噂のおかげで吸血鬼関係の本を見ている人多いんだから」

「そうなんですか」

確かに、これだけ噂になっているのだから調べている女生徒も多いだろう。

「吸血鬼に関する棚は、あそこの神話や伝承のところですよ。この学校は吸血鬼の伝説があるだけあって、興味を持つ生徒も多く。書籍も充実していますよ」

棚に來ると、確かに充実している。吸血鬼と言っただけでも10冊はあるだろうか。

借りられている本もあるから実際はもっとあるのだろう。

私が本を立ち読みしていると、図書委員の倉田先輩の方から声をかけてきた。

「吸血鬼って、他の怪物と違ってロマンがありますよね」

確かに、吸血鬼にはロマンを感じる。

吸血鬼は美女を好むと言うが、女性も美形の吸血鬼が好きだ。

古くは、漫画の「ポー族」「ときめきトウナイト」など、吸血鬼を恋愛の対象としてみる傾向がある。

海外でも「トワイライト」という小説がある。

女性向けの吸血鬼は、美形でセクシーと映画でも漫画でも決まっている。

「ヴァンヘルシン」の吸血鬼は美形ではなくなりました。

「倉田先輩は、吸血鬼のこと好きなんですか？」

「好きよ。だって、美形で素敵じゃない。それに、お姫様選ばれれば、永遠の若さと美しさが手に入るのよ」

他の怪物みたいに単純に命を奪うのではなく、血を吸うというのがポイントだろう。

他の怪物と違い、末長いお付き合いが可能だ。

長い間生きているので、知性もあり、大人の魅力もあるし、金もある。美形なら言うことなし。

さらに、吸血鬼に選ばれ、眷属になれば、永遠の若さ、美しさが与えられる。

「その代わり人間じゃなくなっちゃうんですよ」

「いいじゃない。人間じゃなくても」

この場所では、読み切れないので、何冊か本を借りて家で読むことにした。

「吸血鬼がいるとして、どうするの？　あなたが、退治するわけ」

「．．．」

そこまで深く考えていなかった。

単純に、気になっただけ。

どうしよう。自分自身が吸血鬼を倒すのか。無理です。

誰かに助けを求めることになるだろうけど．．．妖怪ポストがあるわけもなく、一体、誰に助けを求めたら良いだろう。

「警察に話しても無駄。霊能力者に話しても無駄よ。誰も助けてはくれないわ」

「なんで、無駄だって判るんですか？　やってみないと判らないじゃないですか」

「無駄なのよ。実際やってみた子が居るんですから」

「誰ですか？」

「名前は言えないわ。警察は吸血鬼なんて話は、相手にしてくれないし。霊能力者は話を聞いてもらえはするけど、そもそも吸血鬼に会えない。会えなきゃ倒せないでしょ」

「その子は結局、どうなったんですか？」

「知らないわ。今頃、吸血鬼の手下にでもなっているかもしれないわね」

夏も近づき、日没も遅くなっているのだが、あたりは、もうすっかり暗くなってしまった。

早く帰らないと。

ロッカーを見ると、何やら手紙のようなものが挟まっている。

宛先を見ると、自分の名前が書いてある。

気になり、すぐさま封を破く。

『これ以上調べるな』

とだけ書いてある。

たった一日調べただけで、脅迫文だ。

俄然、やる気が出てきた。

第4話 ノート

家に帰り、本を読んでいると、一冊の本から小さな紙が出てきた。そこには次のように書いてあった。

「永遠の若さと美しさが欲しければ、我に血をささげよ」

永遠の若さと美しさ。これは吸血鬼かその眷属になれば、手に入る事が出来る。

血をささげるとは、噂のことを考えると、リストカットをしるという事なのだろう。

つまり、仲間になりたければ、リストカットをしるということなのだろう。

「冗談じゃない。そんなことをしてたまりますか。」

近頃学校でリストカットが流行っている原因は、これなのだろうか？

単純に、吸血鬼に襲われているのではなく、永遠の若さと美しさを得るために、積極的に吸血鬼に血をささげているのだろうか。

夜、ベットに入りながら、今日一日のことを振り返った。

そして、ある疑問が生じた。

私は吸血鬼が事件を起こしていると信じているのだろうか？

信じていない。

だが．．．どこかで、何かが引つかかる。
周りの人の影響だろうか。

神が存在して、天使が存在し、キリストの奇跡があるとすれば、
当然、悪魔も存在しているもおかしくない。

もしかりに、万が一、本当に吸血鬼が居るとしたら．．．私はど
うしたら良いのだろうか。

昼間の倉田さんの質問を思い出す。

「吸血鬼がいるとして、どうするの？　あなたが、退治するわけ」
やはり、誰かに頼むしかない。
とりあえず、ネットを検索してみた。

ネットで吸血などの都市伝説・噂を調べていると面白い噂を見つ
けた。

怪物を倒す人たちの噂。

これは、『死の鐘』の変形版だ。

『死の鐘』とは、その鐘の音を聞いてしまうと、異界に連れてい
かれて、怪物に殺されると言う話だ。

その後、回避方法が追加された。

ポケットの中にタロットカードがあつて、『カードの名前』を叫
ぶと、魔法が使えるようになるというものだ。

さらに、この部分だけが、取りだされた変化した。

カードの魔法を使い異形の怪物や魔道師を退治する闇の狩人の噂。

こんな人たちが実際するのだろうか。

判らない。

でも、万が一、吸血鬼が実在するとしたら、万が一にも、こんな
人たちが居てもおかしくない。

万が一のことが起きたら、この人たちに頼もう。

そう思うと気が楽になって、安心して寝ることが出来た。

次の日、澤田は、放送部員だと嘘を言って、西村の家からノートを入手を入手した。

ノートは複数あり、放送部が過去に何回か、調査したことが判るもつとも、古いノートは40年前のものだ。

その中には、数多くのインタビューや憶測や推理が書かれていた。

過去の在校生、先生へのインタビューなどは、かなり力が入ったものとなっている。

親子三世代、四世代と通っている家族も多いため、身近な人からインタビューしただけでも、相当当時の状況が判ったのではないだろうか。

この学校の吸血鬼伝説の元になった事件、それは、今から50年程前の話。

イタリアから1人の神父が派遣されてきた。

名前は、マルコ・ジュリアーニ。26歳。

日本語が堪能なことから派遣された二枚目の青年だ。

当然、若く二枚目の神父の赴任に、女生徒たちは色めきだつた。

しかし、若くても神父だ。女生徒たちがどんなにアプローチをしても一線を越えることはなかった。

赴任して、3年目、そんな神父も、ある少女と恋に落ちた。

2人は、他の生徒や先生にばれないように、静かに愛をばぐくんだ。

連絡は手紙。会うのは、日が暮れた夜になってから。

赴任して、4年目、事件が起きた。

密告により、2人の恋は学校に知られることとなった。

生徒は卒業前ということと退学を免れたが、マルコは除名されイタリアに帰国することとなった。

これだけでも、伝説の元には十分だろう。

しかし、話には続きがある。

帰国したはずのマルコが、実は帰国していなかったのだ。

これは先生方も知らない事実であり、一部の上層部のみが知っている事実だった。

当初、学校側も、マルコが帰国の準備をし、部屋を払っていたことから帰国したものだと思っていた。

イタリア側からの連絡があり始めて判ったのだ。

イタリア側からの要請もあり、入国に問い合わせたところ、出国の記録はない。

女生徒への連絡もない。

マルコは自殺したかのではないか？

という噂が広まった。

キリスト教の世界では、一般的に自殺者は天国に行けないと言われている。

そのことがマルコが吸血鬼になったという話になり、マルコが行く不明という事実が、吸血鬼が学校に封印されているという話を生むことになったのではないかと書かれている。

そして、現在でも、マルコの話は判っていない。

第5話 開かずの間

放送部のノートを見ることにより、西村京子に多少は近づけたのではないだろうか。

西村京子と言えば、なぜ彼女は、私たちが清掃しに行った日、あんなに慌てて聖堂から飛び出してきたのか？

彼女が出た数秒後、聖堂に入ったが誰も居なかった。その数秒の間に外に出たのだろうか。

それとも、彼女は妙に後ろ気にしていたので、何かに追いかける幻想でも見ていたのだろうか。

これはもう、今となっては判らない。

もう一つ判らないが、マルコ神父の消息だ。

生きていたとしても、76歳。爺さんだな。

当時を知っている人は、もうだいぶ年を取っているか、死んでしまっているだろう。

やはり、古いノートを手掛かりにして、考えるのが一番だ。

インタビューを受けたのは、当時すでに退職していた学校の先生。学校による内部調査のことが大まかだが書いてある。

マルコ神父は帰国する日、最後の挨拶をするために、昼に学校に
来た。

帰国する内容が内容なだけに、単純なあいさつ程度だった。

親しい先生方と簡単な別れの挨拶をした後、職員室を後にした。

これ以降、彼の目撃談がない。

マルコ神父は生徒たちにも人気があり、別れを惜しむ生徒も多い。

しかも、白人の男性。

学校の外に出ようとすれば、守衛さんなり、誰かが気づくはずだ。

正門以外を使って出たのだろうか？

入る時に正門から入ってきているので、帰るときに裏門を使うとは考えられない。

第一、昔から警備のため、裏門は閉められており、さすがにそれをわざわざ乗り越えたとは考えづらい。

そう考えると、学校内から出ていないではないか、という考えが出てくる。

ここまで、学校から出ておらず、消息が判らなくなると、マルコ神父は、学校内で自殺したか、殺されたのではないだろうか、という考えに現実味が出てくる。

白人の男性が自殺して、死体がここまで見つからないのはおかしい。

誰かが、隠したと考えるべきだろう。

では、誰が隠したのか？

やはり、学校関係者とみるべきだろう。

自殺の死体を隠すにしろ、殺人を犯すにしろ、人間関係がなければ、そんなことはしない。

では、学校内のどこで死んだのか？

もっとも、放送部の人たちがもっとも怪しんだが、聖堂の天井にある現在開かずの間になっている部屋と同じく聖堂の地下にある納骨堂。

もともとは、どちらも大昔から力ギをなくしたという理由で、開かずの間になっている。

文化財指定になっっているため、無理やり開けるの避けてきたというが、本当のところは判らない。

やっぱり、あそこを調べてみるべきだ。

それにしても、こんな推論が出ると、さすがに公表するのは困難だろうな。

下手に公表すれば、放送部が廃部になるのが目に見えている。

それだけではなく、大学進学も危なくなる。

先輩たちが、調査を止める気持ちも判る。

放課後になるのを待ち、まず、始めに天井にある開かずの間に行ってみた。

木製の扉に、古い大きな南京錠が、かかっている。木製の扉は古く蹴れば壊すのも可能ではないだろうか。

南京錠をよく見ると、錆が削れている。

近頃、誰かが触った後だ。

特に鍵穴の周りの錆が取れている。恐らく誰かが、開けようとしたのだろう。

思い当たるのは、西村京子だ。

予想通り、南京錠はカギがかかっている風になっているだけで、実際の鍵はかかっていない。

再び鍵を閉めるのは、面倒だったのだろう。

鍵を開け中を覗くと．．．蜘蛛の巣だらけの倉庫。

何十年も使われていないせいか、清掃道具は朽ち果て、バケツは錆だらけ。

私たちが、わざわざ別の建物から、清掃道具を持って来ないといけないのは、聖堂に汚いものを置かないためではなく、単に鍵をなくしたから。

時間が経つうちに、本来の理由は忘れられ、別の理由が発明されたのだろう。バカらしい。

地下室の開かずの間は、昔、納骨堂として設計されたものらしい。行ってみると、比較的真新しい南京錠が、しっかりかけられていて、中には入れない。

鍵の穴の周りは、引っ掻き傷があり西村がピッキングを試みたのだろうか。

開けっぱなしになっていないことを考えると、開けられなかったのだろうか。

中で何かを見たのが、以前聖堂から飛び出してきた原因だと思ったのだが……

しょせん、現実はそのままでドラマチックではないということだ。

澤田が、納骨堂を出て、聖堂の裏にある庭を歩いていると木陰にたたずむ青年に出会った。

中性的で、端正な顔立ちの美形な色白の青年。

ここは女子校だ。

男子禁制とはまでいかないが、校内で男性が居ることはまずない。変質者が進入することはあるが、そんな感じはない。

声をかけてみた。

「何をされているんですか？」

「絵を書いていたんです。ここの庭はよく整備されていますからね。見ていて、心がなごみます」

そう言って、スケッチブックを見せる。

「そうですね。教頭の趣味で、なんでも何十年も手入れしてるとか」

「あなたは何をしているんですか？」

「私は．．．探し物をしています」

「探し物は、見つかりそうですか」

「．．．無理かもしれませんが」

「そうなんですか。探し物は遠くにあると思ってても、意外と側にあるものですよ」

青年はほほ笑みながら答えた。

その姿は、あまりにも美しく。

澤田は、その瞬間、恋に落ちそうになった。

第6話 島田まな

特に進展がないまま、数日が過ぎて行った。

そんなある日、澤田の友人、島田まなが、体育の授業中突然倒れた。

「大丈夫です」

「駄目だ」と体育教員で島田が所属しているテニス部顧問の柳田みゆき。

「澤田さん。早乙女さん。島田を保健室に連れて行って」
付き添いとして、保健室についていく。

「澤田さん、早乙女さん。もう良いわ。ありがとう」と言って、保険の先生の高橋恵は、私たちを授業に返す。

いや、追い出したということだろうか。

「島田さん。リストバンドを外して」

腕を見るとリストカットの跡。

「何か悩み事でもあるの」

「それが、リストカットをした記憶がないんです。朝起きると手首が切れて血が出ていたり、学校に居る時に突然血が出てきたり。訳が判らないんです」と涙ながらに語る。

「判ったは、そのことは後で、ゆっくりと話しあいましょう。とりあえず、今はベットで休みましょう」

世の中には恍惚感を得るために、リストカットする人もいるが、リストカットは背後に精神病が関係している場合がある。

その場合、本人は何も考えない、感じない状態で切ってしまうって

いることがある。

そのため、本人が無意識に切ってしまったている可能性や、切ったことを忘れている可能性は十分にある。

そんなときに、下手に相手を非難することは危険だ。

自分は専門医ではないので、治療はできないが、話を聞くぐらいはできる。

それにしても、テニス部で毎日遅くまで練習している、島田さんまで、リストカットをするは意外だった。

いったり、どれだけ広がっているだろうか？

保健室の外で、澤田と早乙女は聞き耳を立てていた。

本来は、このようなことはすべきではないのだが、妙に気になったのだ。

月のもので、貧血になるなら判るが、まさかリストカットとは。

島田はファッションでリストカットをするような人間ではない。

深刻な悩みも思い出せない。

私たちに言えない深刻な悩みがあったのだろうか。

それとも、吸血鬼なのだろうか・・・

昼休み、保健室に、早乙女と共に見舞いに行った。

「澤田も早乙女も、外で聞いてたんでしょ」

「ごめん」

「いいのよ。もう、隠すことじゃないわね」

「私、近頃、毎晩、変な夢を見るの。」

最初はどんな夢がよく判らなかつたけど。近頃は少し覚えているわ。

夜、気が付くと学校の聖堂で開かれている吸血鬼と信者たちの宴

に参加しているのよ。

信者たちはたがいに血を吸いあうけど、私は、吸血鬼に捧げられる生贄の1人。

男を知らぬ純白の処女の生き血と肉体こそが、吸血鬼に捧げられる最高の供物。

そこで私たちは、手首を切り、吸血鬼たちに血をささげるの。

手首を切っても痛みはなくて、吸血鬼が傷口から血をすすると・

気持ち良いのよ。

今まで感じたことがない快樂、恍惚感を感じるの。

そして、夢から覚めると、手首に傷があるの」

島田は、リストバンドを外し、手首の傷を見せた。

「何が恐ろしいって・・・最初は怖かったけど。近頃は、徐々に楽しみに変わっているのよ。

早乙女は、以前悪夢を見た時、男の人に助けてもらったって言うたわよね」

「ええ。顔は覚えていないけど、男の人に助けてもらったわ」

「でも、私の夢には、そんな人は出てこないのよ」

島田は自分でリストカットするような人間ではない。

自分は、遊び半分で、ものすごく恐ろしいことに手を出してしまったのではないだろうか。

私は、どこか他人事に物事を考えていたのではないだろうか。

自分は西村さんのようにはならないと、思っていたのではないだ

ろつか。

今日、島田の告白を聞いて、吸血鬼の脅威が、直ぐ、そこまで来ていたことを知った。

その途端、無性に怖くなった。

図書館で言われた言葉が頭をよぎる。

「警察に話しても無駄。霊能力者に話しても無駄よ。誰も助けはくれないわ」

助けを求めた子は、結局救われなかった。

島田も言っていた。

誰も救いに来ない。

第7話 懺悔

私は聖堂で、祭壇の前に膝まづき、神に祈った。

今まで、私は何回、この場所で神様に祈っただろうか。それこそ、何百回と祈った。

しかし、私は神様の存在を信じていなかった。ただ、周りに合わせて、ただ単に祈っていただけだ。

私は、ズルイ女だ。

いままで、神様の存在を信じていなかったのに、都合のいい時だけ、神様にお願いしている。

こんな私に神様が力を貸してくれるのだろうか。

ある本には、「信仰心を持たない者が十字架を持っても無駄」とあった。

私が十字架を持っても無駄なのではないだろうか。

私は目の前の十字架に架けられたキリスト像を見上げた。

神様もキリスト様も何も答えてくれない。

私は神様に見捨てられているのだろうか。

気が付くと、体育教師の柳田がシスターのカッコをして側に立っていた。

「私が来たのに、気が付かないなんて、よっぽど真剣にお祈りしていたのね。」

何を神様に祈っているのかしら」

「.....」

「私は、神父様じゃないので、懺悔を聞くことは出来ないけど、先生だから生徒の悩みを聞くことぐらいは出来てるわよ。」

「柳田先生」

澤田は柳田に泣きつき、事と次第を全て柳田先生に話した。

「吸血鬼・・・」

「先生は私の話を信じてくれるんですか」

「当然、信じるわ。教頭とか、他の先生は信じてないけど、私は信じるわ。」

神様が居るんですもの、悪魔が居ても、吸血鬼が居てもおかしくないものね。

教頭たちは日頃は神を信じろだの、信仰だの言っているくせに、悪魔や吸血鬼を信じないなんて、変な話よね。

ちゃんと聖書に乗っているのに・・・」

「私どうすれば、いいのでしょうか」

「澤田さん。今まで神様にちゃんと毎日祈っていた？」

「祈っていませんでした」

「駄目ねえ。」

吸血鬼が十字架を恐れるのは、十字架を持つ者が信仰心をもっている場合だけ。

真の信仰心を持たない者が十字架を持っても無駄。

この日本に、本当の信仰心を持つ人が何人いるかしら」

「柳田先生は、駄目なんですか？」

「私は駄目よ。信仰心が足りないから。」

私が毎日祈っても、神様の声は聞こえなかった。

神様の存在を信じ切れなかったのね。

私は神の存在を信じ、神の奇跡を信じていたつもりだったのよ。

イエス様の救済を信じているつもりだった。
それじゃ、駄目だったのよね」

なぜ、柳田先生は、過去形で物事を語っているのだろうか。

「でも、今は神様の存在を信じているんですよね」

「ええ、信じているわ。でも、信じている理由はあなたと同じ。

吸血鬼の存在を信じているから、神様の存在を信じられるのよ」

柳田先生の手首を見た。

島田まなと同じようにリストバンドをしている。

「そんな、柳田先生。嘘でしょ」

「気が付いた。でも、私は、まなの様な生贄ではないわ。

あなたも、どう？

私たちの仲間にならない。この世では味わえない。素晴らしい快
楽が得られるわよ」

と柳田は手を差し伸べてきた。

澤口あやめは、柳田の手を振り払うと、外へと駆けだした。

学校の人間は、誰も信用できない。

私は、ネットに助けを求めた。

狩人を呼ぶためには、ネットに書き込めば良いとの話だけど・・・

私は、さまざまなサイトに、皆の名前や学校名を伏せて、書いて
みた。

反応はあるが、ほとんどは私を病人扱いしたもののか、『闇の狩人』の偽物だろう。

見てもらえるのだろうか？

第8話 宴

なぜ、自分は、夜、学校の教室に居るのだろうか？

島田が言っていた夢の内容を思い出した。

これが、その悪夢なのだろうか。

外の方が明るい。

窓からのぞくと、松明を持ち、全身を黒いローブで覆った人たちが、聖堂へ集り、中へと入っていく。

おそらく、彼らが信者だろう。

仮面舞踏会で使うような目などの顔の上半分のみを覆うヴェネツィアマスク（ドミノマスク）を付けているため、どんな人物たちかは判らない。

しかし、身長や髪型から若い女性であることが判る。

何人いるのだろうか、次々と聖堂に集まってくるので、正確な人数は判らない。

中には、数名白いローブを被った人も居る。

その人たちは、手をローブで縛られ、黒いローブの人に連れられて来ているようだった。

彼女たちはマスクを付けていないため、松明の明かりに照らされて、顔が判る。

おそらく、女子高生だろう。

皆、うつろな表情をしている。

そして、その中の1人に、見覚えのある顔があった。

松明の明かりに照らされて、見えた顔は・・・島田まなだ。

夢の通りであれば、彼女は、これから吸血鬼に捧げられるのだらう。

怖い！！

私は、走って、逃げ出した。

私は、友達を見捨てた。

島田まなが生贄にされるのを知っていながら、逃げた。でも、しょうがないじゃない。

吸血鬼相手に、私が何が出来るの。

少しでも学校から遠くへ。

私は必死に走った。

しかし、そんなに甘くなかった。

学校の外に出ると、外には、早乙女が夢に出てきたと言っていた首なしの怪物や手足のない怪物が徘徊していた。

逃げられない！！

私の心中を絶望の闇が覆った。

見つけたらどうしよう。

島田のように生贄にされ、血を吸い取られるのだらうか。それとも、殺されるのだらうか。

そんなことを考えていると、突如、背後から獣の呻き声が聞こえ

た。
振り向くと、そこには馬のように巨大なオオカミと、赤い目の女の姿あった。

首にかけてある十字架を見せるが、効果はない。

「そんな偽りの信仰心で効くわけないでしょ」

襲いかかってくるオオカミと女。

私は、念のために持っていた聖水が入っている瓶を女に投げつけた。

女に当たり、瓶が割れ、聖水が女にかかる。

「ギャー」と悲鳴を上げる女。

水にぬれた胸から煙が上がる。聖水は効いているようだ。

だが、それは女を凶暴にさせただけだった。

私は抵抗も空しく、彼女に捕まってしまった。

全ての信者たちが、聖堂に入り、宴が始まった。

蝋燭と松明の炎で照らされる、それは、まさに狂気の宴。

聖なる祭壇の前には吸血鬼たちが居て、生贄の少女たちの血をすすり、体をむさぼり合っていた。

その周囲では、信者たちも、裸になり、お互いの体に傷を付け、血を吸いあい、体をむさぼり合っていた。

そして、7人の少女が生きながらにして、聖堂の壁に架けられた十字架に磔にされ、血を抜かれていた。

その中には、西村の姿があつた。
西村さんだけではなく、学校を長期に休んでいる生徒たちの姿もあつた。

血は十字架を伝い滴り落ち、床には、血を受けるための杯が置かれていた。

そして、その杯は、いつぱいになると祭壇の前に居る吸血鬼へと捧げられた。

私は、祭壇のキリスト像の代わりに十字架に縛られ、一部始終を見させられていた。

「どうだい。宴は。楽しんでるか」

唯一の男の吸血鬼が魅惑的な声で私に語りかける。
線が細い中性的な魅力の青年。透き通るような白い肌と対照的な赤い瞳。

ボデイラインこそ細いが、引き締まった筋肉質の体。
この男の吸血鬼が、始祖なのだろうか。

「君は、私について調べていたんだよね。
会えて嬉しいかい。」

君には、いくつかの選択肢があつたんだ。信者になるもよし。
君の友達の島田さんのように生贄になり快樂を楽しむ選択肢もあった。

でも、君は最悪の選択をした。私に齒向かつた。
君には生贄としての価値すらない」

そう言うつては、男は私の首筋に噛みついた。
私は気を失ってしまった。

第9話 明るい未来

目が覚めると、私は、ベットの上に居た。
眩しい朝の日差しが顔を照らす。

全ては、神経質になった私の幻想が生んだ夢だった。
吸血鬼なんているはずがない。

私は元気に学校へ行った。
学校も聖堂も、いつもと変わらない。

全てが私が作り出した妄想なのではないだろうか。

「まな。お願いがあるの」

「何？」

「リストバンド外して見せて」

「なによ突然」

「いいからお願い」

「判ったわよ。後でジュースでも奢ってよ」と言っ
て島田まなは、リストバンドを外す。

そこには、傷一つなかった。

「私がリストカットなんてするわけないじゃない。
変なあやめ。ちやんと奢ってね」

全てが私が作り出した妄想だったのだ。

いったい、どこまでが現実で、どこからが夢だったの
だろうか。それは判らない。

夢に入る瞬間なんて、判らないし、覚えていない。

いつものような普通な日々。

そして、いつものように退屈な授業。

でも、それで良いんだ。

現実が一番良い。普通が一番良い。

退屈な授業だが、少し勉強する気になった。

授業を受けていると、突然、手足に激痛が走った。

急いで手を見ると、両方の掌には穴が開き、血が出てきている。

靴からも血が滲み出てきていた。

目が覚めると私は終わらない悪夢の中に居た。

場所は儀式が行われていた聖堂。

目の前では、西村さんが、聖堂の壁に架けられた十字架に磔にされている。

私は、今彼女と同じ状態だ。

十字架に貼り付けられ、手足、胸には釘が打ちつけられている。

そして、流れ出る血は、杯で集められ、夜、吸血鬼たちへの供物とされるのだろう。

私は、以前見た彼女たちと同じ、生きた血液工場、生きた生贄だ。

手足の痛みは、もはや感覚がマヒして痛みも何も感じない。

痛いのは何時間か一回、今のように傷口が癒着して血の出が悪くなった時に、血を出やすくするために、怪物どもがわざわざ傷口を開く時だ。

なぜ、自分は生きているのだろうか。

いつそ、死んだ方が楽なのだが、死ぬことすらできない。

自殺をしたくても、拘束具をつけられ舌を噛み切ることすらできない。

ただ、血を作るためだけに生きている。

死ねないのであれば、いつそ気が狂ってしまいたい。

何も感じたくない。屍になりたい。

いつまで続くのだろうか？

この悪夢に終わりがあるのだろうか。

次の日、倉田真須美は、澤田あやめが体調を壊し長期の休みを取ったとの話を聞いた。

入院しているとの噂もある。

吸血鬼のことを調べていて、知りすぎたため、吸血鬼に消されたとの噂もある。

だから忠告したのに。

『これ以上調べるな』って。

助けを求めても無駄だった。

ニーチェの言葉にもあるでしょ、『深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ』って。

あなたが魔に近づくほど、魔もあなたに近づいているのよ。

図書委員の先輩の米倉良子も、放送部の西村京子も、みんな調べた人間は、学校から居なくなってしまった。

助けを求めても、無駄だった。

吸血鬼の厄介なところは、血を吸って仲間を増やすだけじゃない。人間をたらし込んで、信者を作る点だ。

もはや、誰が味方で誰が敵だか判らない。

この学校は、既に吸血鬼に支配されているのかもしれない。

私はこれ以上、知る気もないし、調べる気もない。

お願い。神様助けてください。

第10話 渴き

ポルフィリン症。僕が、そう認定されたのはわずか3歳の時だった。

ポルフィリン症になると、症状によっては、肌が日光に過敏に反応するようになり、日光を避けて生活しなくてはならなくなる。

また、重度の患者は、顔が青白くなり時には歯茎まで痩せ細り、歯が牙の様に異様に長く見える場合もある。

まるで、吸血鬼のように。

吸血鬼の日光に弱いという設定や容姿は、ポルフィリン症患者の患者がモデルではないかという説すらある。

だが、似ているのはそこまで。

吸血鬼は、日光に弱いだけで、不老不死だが、僕は違う。病弱で学校にすらまともに行けない。他の子供のように日中、日の下で遊ぶことが出来ない。

僕は日中部屋に籠っていて、外に出られるのは夜か、天気の良い日だけ。

当然、そんな僕に友達が出来ない。

僕の楽しみと生活の中心は、本とネットと夜の散歩。

こんな生活が10年以上続いている。

幸運なことに、親が資産家のため、死ぬまで働かなくても生きていける。

17歳でニート決定か。

そんな生活が永遠に続くかと思っていた時、僕は、突然恋に落ちた。

夜の散歩をしている時、公園で犬の散歩をしている彼女と出会った。

偶然、話をしてみて、面白いように話が進んだ。

僕の生活は一変した。

会うことが出来るのは夜だけだったが、外の世界がこんなに輝いているとは知らなかった。

だが、そんな生活は長くは続かなかった。

彼女は僕を残して死んでしまった。

病気ではない。

自殺だ。

なぜ、彼女は、自殺してしまったのか。

なぜ、僕を残して、何も言わずに自殺したのか。

彼女にとっても、僕はその程度の人間だったのだろうか？

僕は、それ以降、心の隙間を埋めようと、街に出て女をあさった。自分から声をかける時もあつたし、多くの場合は女の方から声をかけてきた。

自慢じゃないが、僕は外国人の血が少し混じっているためか、見た目だけは抜群に良い。

そのため、たびたび女性から声をかけられた。

そして、肉体だけの関係を持った。

だが、いつも、自分の会話の詰まらなさからか直ぐに飽きられた。

僕自身も、すぐに飽きた。

結局、彼女みたいな女性には会えなかった。

ある日、こんな僕に、女性が声をかけてきた。

最初は、いつもと同じような女と思つたが、彼女は違った。

彼女は僕を特別な存在だと言つた。

彼女は僕を吸血鬼だと言う。

もし本当に、吸血鬼であれば、どれだけよかつただろうか
不老不死の吸血鬼。

日の光に弱いという共通点こそあるが、僕は病弱なだけだ。不老不
死には程遠い。

彼女は、僕が血を飲んでいないからだと言った。

そして、彼女は、僕に彼女の血を飲めという。

それにより、偽りの自分を捨て、本当の自分になることができる
と言った。

だが、そんなことが出来るわけがない。

僕は、その場から急いで逃げだした。

「血が欲しい」

この欲求を感じる様になったのはつい先日、彼女に会ってからだ。
そして、異常に喉が渴いた。

いくら水を飲んでも、喉の渴きは癒されることはなかった。

その日以来、僕の心も体も、この欲求に支配された。

そして、女性の首筋に食らいつき、首筋から血を飲む光景が、頭
から離れることはなかった。

僕はその妄想に強い興奮を感じ、同時に強い性的興奮も感じてい
た。

しかし、身近に、僕のために血を差し出してくれる女性などいる

はずもない。

彼女の電話番号を聞かなかったこと、彼女の提案を断り、彼女の血を吸わなかったことを深く後悔した。

僕は、しばらくの間、この欲求と格闘しなければならなかった。昼も夜も、血を吸う幻想に悩まされた。

血を得るために、人を殺すことすら考えた。

しかし、そんなことをしたら人生の破滅だ。

僕は自給自足することにした。

「リストカット」だ。

リストカットは目立たないようにしなくてはいけない。

その結果、リストカットによって得られる血の量は、思いのほかに少ない。

しかし、その僅かな血が、僕の平静を保ってくれている。

自分の手首を傷つけ、その手首から流れ出る血をスッテいる今の自分を、他人が見たらどう思うだろうか。

哀れむだろうか。侮蔑するだろうか。あるいは、恐怖を感じるだろうか。

僕は、僕自身が怖い。

自分の血という粗悪な代替品で、いつまで、自分が我慢できるかが判らない。

いつまで、正気を保てられるか、判ったものではない。

早く、彼女の血が吸いたい。

その日以来、僕は彼女を求めて夜の街を彷徨さまようようになった

今日、血を吐いた。

どうやら、ポルフィリン症以外にも、別の病気を持っているらしい。

しかも、不治の病。

余命は長くても、3ヶ月らしい。

生きたい。もっと、生きたい。こんな風に死にたくない。

夜の街で彼女と会うことが出来た。

彼女の血を飲んだとき・・・僕の中で新しい力が生まれるのを感じた。

だが、喉の渇きは癒えなかった。

もっと、血が欲しい。もっと。

彼女は、『乙女の血』は吸血鬼にとって麻薬と同じだと言った。

確かにその通りだ。

その味を覚えてしまったら、僕は、血の誘惑に逆らうことが出来なくなっていた。

第11話 進入

女子校の門の前に立つ4人の女性。ふたりは、清水と原田。ひとり、車椅子の女性だ。

原田は、高校生時代の制服を引っ張り出し着ていた。

「本当に、この学校で良いの？」

「ネットの情報を見る限りは、たぶん、ここね」

「しかし．．．中に入る必要あるの？」と車椅子の女性。

「2人だけで良いんじゃないの」

「何よ。最初は女子校に入れるって喜んでいたじゃない」

「それは．．．普通の男としてだよ。こんなカッコじゃない」

「大丈夫、ばれないって」と清水。

「そうですね。お二人とも、似合っていますよ」

近藤と結城は女子校に入るということで、女装させられていた。

結城はもともと線が細く見た目が良かったためか、モデルのような美女になった。

近藤は、近藤の姉たちに似ていた。

近藤は、前夜のやり取りを思い出した。

「洋服を貸してほしい？ 信也ついに、そっちの趣味に目覚めたかと次女の美桜^{みお}。

「．．．お兄ちゃん。里桜は、どんなことがあってもお兄ちゃんの味方です」

「違います。演劇部で使うんです」

「演劇部で使うなら、部員の女性から借りれば良いだろ」

「．．．まあ、170センチの男の僕が、着るわけですから、普通の女性のサイズは入りません」

近藤家の女性は、母親が長身のせいか、女性は妹の里桜じゅおうですら長身だ。

長女、次女は、170センチを超え、三女で小6の里桜ですら、既に160センチ後半だ。

「そういえば、子供の頃は、着替えがなくなると、良くあたしたちの服着せられていたよな」と長女の真桜まお。

「そうだったんだ。見てみたかったな。かわいかったの？」と妹の里桜。

「それが結構に似合ってたんだよね」

まさか、この年で再び、着るようなめに合うとは思わなかった。

「いいかげん、覚悟決めなさい。この間みたいに、深夜タクシーで5000円とか使いたくないでしょ。一回、現場に来て印を付ければ、縁が出来て『あいの世界』に引き込まれやすくなるんだから．．．」

引き込まれやすくなるか．．．良いんだか、悪いんだか。

『あいの世界』には、誰でも彼でも引き込まれるわけではない。

何の縁もなければ、引き込まれない。

しかし、逆に少しでも縁があると、引き込まれる可能性が出てくる。

そして、呪符や印を場所や人間につければ、縁が強くなり意図的に『あいの世界』に引き込んだり、引き込まれ易くすることができる。

今回の場合は、聖堂で宴が行われているという情報があるので、

聖堂に印なり呪符の残すことが出来れば、引き込まれる可能性が高くなる。

名門と言っただけあって、校内は広く緑が多い。

目的の聖堂は、高い鐘堂があるため、容易に見つけることが出来た。

「本当にばれていないのかな。みんな結構見ているんだけど」

「大丈夫。服装が違って目立っているだけだから」

「本当にそうなのかな」

服装はバラバラ。1人は大きなスポーツバックを持ち、1人は長身、1人は車椅子、1人は誰もが目を引く美少女。

ここまでバラバラだと否応がなしに、目立つ。

「そうよ。ビクビクしていると逆に怪しまれるわよ」

清水さんは肝が据わっていると、つくづく思う。

「あつ、そうだ。渡すものがあつたんです」と原田さんが何かを突然思い出した

「葵さんに頼まれていた聖水と十字架です。近所の教会から頂いてきました」と皆に手渡す。

「効くのか?」と結城。

「判らない。気休めだ」

放課後、聖堂の掃除のために、早乙女愛は小村かおりと一緒に、両手に清掃道具をいっぱい持ち、聖堂に向かっていた。

いつもは三人だが、澤口あやめが入院してしまい。ふたりで清掃

することとなった。

澤口にメールを出しても、返事がない。病院は、携帯電話が使用禁止だから仕方がないけど。

お見舞いをしようと思ひ、家に電話をしたが、丁重に断られてしまい、お見舞いもできない。

入院の原因は何だろうか。

吸血鬼のことを調べていて、知りすぎたため、吸血鬼に消されたなんていい加減な噂もある。

リストカットだろうか。

リストカットなんて、自分とは遠いことだと思っていた。

でも、現に島田まなちゃんがやっていたので、遠いどころか、自分に関係がある話だった。

まなちゃんは、現在、学校の保険医さんの勧めもあり、精神病院に通っている。

ついこの間まで、明るく楽しく友達たちと話していた現実が、まるで夢のようだ。

小村は、暗い空気に負けないよう、いつも以上に騒がしい。

小村なりの気の使い方だ。私も落ち込んでられない。

そんなことを考えながら、歩いていると、聖堂に着いた。

祭壇の前に、見知らぬ女生徒の2人組が居た。

1人は綺麗な女性。もう1人は車椅子を使っている。

この学校の聖堂は、文化財に指定されている。

そのため、他校の生徒が見に来ないわけではないが、制服は他学校のもので、2人ともバラバラ。

いったいどんな人たちの集まりなのだろうか。

「聖堂の見学をさせていただいています。清掃の邪魔をすいません」と向こうから声をかけてきた。女性でも魅了される綺麗な女性だ。

「私たちは、こちらの方を掃除していますので、気にしないで見学しててください」と早乙女が丁寧に大きな声で答えた。

「御丁寧に、ありがとうございます」とその女性は、頭を下げた。

「迷惑ついでに質問して良いですか？」

「何でしょうか。私が答えられる範囲でしたら」

「この学校って、吸血鬼ですか？」と笑顔でとんでもないことをその女性は尋ねてきた。

第12話 納骨堂

その頃、近藤と清水は、地下の納骨堂を調べていた。

納骨堂は、開かずの間と言われていた割には、新しい南京錠が付いていた。

誰かが以前、ピッキングを試みたのだろうか、鍵穴の周りに傷が付いている。

清水はスポーツバッグからピッキングの道具を取りだし、鍵の解錠に取り組み始めた。

「そんな道具どこで入手したんですか？」

「普通にネットに売っているわよ」と数秒で、南京錠の鍵を開けた。普通に売っていますか．．．日本の治安は大丈夫なのだろうかそれにしても、清水さんのバッグにいろいろと普通の女子高生らしくない物が入っているな。

期待に反して、中にはこれといったものがない。

納骨堂ということで、棺ぐらいあることを期待していたのだが．．．学校で葬式を上げるわけでもなく、火葬の現代の日本では遺体を置くわけにもいかない、しょせん設計上ということだろう。

納骨堂の中は、蜘蛛の巣もなく、床には埃も積っていないかった。棚には埃が溜まっているのを考えると、地下だから埃がないという訳ではない。

誰かが、清掃したのだろうか。

床を調べると・・・長い髪が落ちていた。
そんなに古いものとは思えない。
やはり、誰かが利用しているようだ。
シスターか、学生かは髪だけでは判断できない。

一方、清水は、スポーツバッグからルミノール液を取りだすと、
周囲に散布し始めた。
そして、部屋を暗くする。

「見てみる。近藤」
床の一部と壁の一部が広範囲に光っている。
大量の血液が流れた跡だろう。
これだけ大量の血だと、ここで殺人が起きたか、死体を解体した
かのどちらかだろう。

ガチャン
背後の扉が、突然閉められた。調査に夢中になりすぎた。
まずい。閉じ込められる。
大急ぎで、扉に向かったが、遅かった。
閉じ込められてしまった。

「この学校って、吸血鬼ですか？」と原田さんが笑顔で掃除に
来
ていた長髪の女学生に尋ねた。
「あなたたち何なんですか。興味本位でそんなこと聞くんですか」
と女の子が、声を荒げる。
「私たち？ 私たちは・・・なんでしたっけ？」
原田さんが、結城に聞いてきた。
確かにグループ名はなかったな。

それにしても、原田さんは話が下手だな。

「俺たちは、闇の狩人。吸血鬼たちに、宣戦布告に来たんだ」

「何を言っているんですか？それにその声、あなた男ですか？女装までして何やっているんですか」

「そつ、それはだな」

返答に困る結城。

「宣戦布告。宣戦布告ですつて」と、もう一人の少しギャル風の女の子の様子が一変する。

「人間の分際で、敵うとでも思っているのか」

「小村さん。どうしたの。おかしいよ」

少女は、聖堂の入り口の大扉に向かって駆け出した。

「畏にかかったのは、お前たちの方だ」

バタンっと、聖堂の入り口の大扉が自動的に閉まる。

いや、大扉の背後に居た羽をはやした小柄の怪物グレムリンが閉めたのだ。

どうやら、「あいの世界」に取り込まれてしまったようだ。

気が付くと、既に外が暗くなっていて、窓を通して赤い月が見える。

そして、徐々に、聖堂内の光景が変わっていく。

キリスト像が破壊さされた祭壇。血に塗れた天井と床。

そして、ないよりも、壁に架けられた十字架に磔にされ、血まみれになりながら血を流している少女たちが現われた。

目も当たれないような凄惨な光景だ。

「キヤ〜」

あまりの光景に、残った長髪の少女は気を失ってしまふ。

扉を閉めた怪物たちが襲ってくる。

「チャリオット」

結城が車椅子から立ち上がると、カードの悪魔を召喚し、少女を助けに向かわせる。

結城が召喚した悪魔の姿は、鈍く銀色に光る甲冑をまとい、銀色に煌く剣を操る「騎士」そのもの。

騎士は、間合いを詰め、剣を振ると、瞬く間に、2体の怪物を八つ裂きにする。

「この程度の雑魚じゃ相手にならないな」

「さすが結城。やるわね。あと、早く彼女たちを助けないと」

「待て。優奈」

突如、ステンドグラスが割れ、蝙蝠コウモリの群れが入ってくる。

聖堂の天井を周回するコウモリの群れ。

蝙蝠たちの群れは、最大の前に急降下すると、ひと塊りになった。そして、現われたのは、黒マントの吸血鬼。

線が細い中性的な魅力の美しい青年。透き通るような白い肌と対照的な赤い瞳が印象的だ。

「蝙蝠になって、現われるなんて、べたな演出だな」

「気を付けてね。結城」

「判っているよ。先手必勝」

結城は、騎士を吸血鬼に向かわせると、連続刺突を行う。

「凄い攻撃だね。あまりの速さで避けられないよ」
吸血鬼は穴だらけになるが、平然と笑顔で立っている。

吸血鬼の胸で瓶が割れ、中の水で濡れたところが煙が立ち上る。
原田が投げつけた聖水の瓶だ。
「お前たちも、聖水を持っているのか」

この隙に、結城は再び攻撃を試みるが、吸血鬼は、体を無数の蝙蝠に別れ、結城の攻撃を回避すると、原田の側で再び人型になる。

「瓶を投げつけるなんて危ないな。君みたいな美人は、お淑やかな方がいい」

「馬鹿にしないで」

原田は、槍で攻撃する。

原田の槍が吸血鬼の肩を掠めると、傷口から煙が出る。
明らかに、結城の時とは反応が違う。
明らかに効いている。

某ゲームでは、回復系の魔法がアンデット系の相手に対してダメージを与えるが、同じ効果だろうか。

吸血鬼は、再び体を無数の蝙蝠に別け、天井を旋回する。
そして、吸血鬼の群れは、一斉に結城と原田に向かって急降下する。

「蝙蝠なんて、何匹いようと一瞬で切るだけさ」
騎士の剣に、蝙蝠は切り裂かれて、次々と床に落ちると灰になって消えていく。

原田も、槍で蝙蝠を次々に払い落とす。

イタ。

足を見ると、床に落とした蝙蝠の一匹が、原田は足に噛みついて
いる。

とどめが、中途半端だったのか、原田は急いで、とどめを刺す。

無数にいたコウモリたちを全てたたき落とした。

「大したことなかったな」

「そうですね。でも、蝙蝠に首筋を少し噛まれてしまいました。結
城さん見ていただけますか」

原田は結城に首筋を見せる。

が、結城には、特に噛み傷は見えない。

「特に、傷はないようだけど・・・うっ」

結城は腹に違和感を感じた。

原田が結城の腹にナイフを刺したのだ。

第13話 魅了

結城は、原田から急いで離れる。

「なぜだ．．．優奈．．．」

結城は、傷口を押さえながら、原田を見る。

原田の目は、どこか虚ろだ。

突風が吹くと、原田の側に灰が人型に集まり、吸血鬼の青年になる。

始祖級の吸血鬼が出来る芸当だ。

「そんなの決まっているじゃないか。僕の魅力に、彼女は虜になったのさ」と言つて、原田の髪の毛を触る。

「お前の魅力に虜になった？ 俺の方が魅力的だ」

「言うね。君もなかなか、魅力的な男だけど．．．僕ほどではないね」

「俺は健康美で売っているんだ。魔法を使わないと落とせない病人みたいなお前と一緒にしてほしくないね」

吸血鬼は、人々を魅了し、操る力を持つと言われている。

特に、異性には効果的ということなのだろう。

悔しいが、原田は吸血鬼に魅入っている。

吸血鬼を見つめる姿は、さながら恋する女子だ。

吸血鬼は、結城に見せつけるように原田を抱きしめるとキスをした。

「ふざけやがって！！」

「お楽しみは、邪魔者を倒した後だよ」

吸血鬼は、原田に優しく語りかける。

「さあ、優奈。僕のためにあいつを殺すんだ」
原田は、吸血鬼の呼び掛けに可愛らしく頷く。

そして、原田は、結城に向かい槍を構えと、結城に向かってきた。

(しょうがない。優奈さんに手荒なマネはしたくないが)

騎士に原田の槍を抑えさせ、結城本人は、原田の体を直接抑えよ
うとする。

しかし、合気道を習っていた原田は、結城を容赦なくブン投げる。

(いまだ)

騎士の鎧が外れると、原田の体を覆い始めた。
身動きが取れなくなる原田。

「ごめんね。優奈ちゃん。しばらくそのまま置いてね。さてと、次
はお前だ」

結城は立ち上がると、剣先を吸血鬼に向けて宣言した。

「勇ましいね。鎧を脱いで良いのか。無防備だぞ」

吸血鬼の手には、黒い炎が燃え上がっている。

「舐めるなよ。お前の攻撃なんて、当たらないんだよ」

吸血鬼が、黒炎を結城に投げつけるが、騎士の剣圧が空中で黒炎
を切断する。

そして、飛び散った黒炎が周囲の柱や床、机に引火していく。
あたりが火に包まれ始めた。

このままだと、生贄になっている少女たちが焼死してしまう。

吸血鬼は、次々と黒炎を結城に飛ばしてくる。
どうやら、吸血鬼にとり、生贄の命はどうでもいいようだ。

「こつちの番だ」

結城は、騎士を吸血鬼に向かわせると、連続刺突を行う。

「ギャ〜」

先程と違い悲鳴を上げる吸血鬼。全身に開いた穴から煙が上がる。
「馬鹿な、なぜ剣でダメージが」
「何でだろうな」

「止めてくれ。なぜ、俺の邪魔をするんだ。俺はこの世界でしか自由になれないんだ。車椅子のお前なら判るだろ。この世界の素晴らしさが」

「判る．．．だが、女性を傷つける理由にはならないな。アディオス」

再び、吸血鬼を切り刻む。

切り刻まれた吸血鬼の体が灰になると、聖水をかけ、消滅させる。

「さっきの答えだけど。剣を聖水で濡らしたただけだよ」

結城は信者とおぼしきギャル風の女の子を見る。

「さてと、君には、後で、ゆっくりとお話を聞かないとね」

「すみませんでした。結城さんがお役に立てなくて．．．あと、お恥ずかしいところをお見せしました。皆には内緒にしてくださいね」
吸血鬼の魅力から解放された、原田優奈は正気に戻ったようだ。

「判った。敵を倒したことだし、さっそく、彼女たちを助けよう」

結城と原田は、十字架に架けられた少女たちを助けると、応急処置をした。

「大丈夫？」

原田が長髪の少女に話しかけた。

「どうしたんですか、私。今のは？」

「大丈夫。全て夢よ」

一方、結城は、もう一人のギャル風の少女を睨みつける。

「さてと、もう一人の子には、ゆっくりとお話を聞かないな。それと外に居る人たちにも」

扉の外から駆け足で逃げる足音がする。

第14話 追求

「どうということなの？」

結城たちが、少女を問い詰める前に、早乙女愛が小村かおりを問い詰めた。

「見ての通りよ。この学校は、吸血鬼に支配されているのよ」

「かおり。澤田が学校に来なくなったのも、島田がリストカットしたのも、あなたが関係している？」

「違うわ！！私は無関係よ。私は、ただの信者よ。やったのは・・・」

小村は口をつぐんだ。

「吸血鬼の親玉は、一体誰なんだい」

「・・・」

「怖がる必要はない。俺たちは、吸血鬼を倒せるんだから」

「・・・」

「話せないのよ。たぶん、催眠術みたいなものでしょうね」

背後に現れた清水が言った。

「催眠術ですか。解除できそうですか」

「やってみるわ。場所をもっと狭い場所に移してね。あとテレビがあるといいわね」

「では、聖堂にある放送室はどうですか。テレビもあるはずですよ」

放送室に行くと、清水がカードの力を用いて、自らの「あいの世界」を作り出す。

清水の腕から茨が伸び、小村の頭の中に入っていく。

頭の中のイメージを皆に見えるように、テレビに写す。

テレビの中では、暗い空間の中で、清水が浮いていた。
周囲には風船が浮かんでいる。思い出が詰まった風船だ。

清水がポニーテイルの髪をなびかせ空間を泳いでいると、風船と風船の間に無数の糸が張られている空間に出た。

まるで巨大な蜘蛛クモの巣だ。

これらの風船に吸血鬼に関する記憶が入っているのだろう。

そして、記憶を思い出すのを妨げているのが、この巣を作った怪物。

おそらく巨大な蜘蛛だろう。

清水は神経を研ぎ澄まし、蜘蛛を見つげ出す。

蜘蛛も清水の存在に気が付くと、糸を吐いてきた。

しかし、その糸は清水に届かない。清水に届く前に、何かにぶつかっているようだ。

「糸を出せるのは、あなただけじゃないのよ」

清水は、茨を糸のようにして、周囲に結界を築いていた。

「さすが・・・吸血鬼だけあって、強力な術ね・・・でも、私の相手じゃないわね」

清水は、対戦車ライフルを構えると、一撃で蜘蛛を葬り去った。

清水が風船の中に入ると、凄惨な吸血鬼たちのサバトの光景が広がった。

信者たちが享楽に耽り、お互いの血を吸っている。

祭壇の前では、3人の吸血鬼が生贄に捧げられた島田や他の少女の血を啜っていた。

1人は、結城が倒した男。

残りの二人は、妖艶な女の吸血鬼だ。

「誰だか、判りますか？」

原田が早乙女に尋ねる。

「放送部長の与田直美です。もう一人は、たぶん生徒会会計の谷繁久美子です」

「たぶん？」

「普段は、もつと地味な目立たない人なんです。それが・・・」

「こんななじけた姿は見たことないか」

「今の時間だったら、どこに居そう」

「たぶん、まだ、放送室と生徒会室だと思います」

「案内してもらえるかしら」

清水たちは、早乙女に案内してもらい、放送室と生徒会室に向かった。

聖堂を出て、緑の蔦で覆われたレンガ造りの西洋風校舎に入った。歴史ある校舎は、東京であることを忘れさせ、ヨーロッパの学校に迷いこんだような錯覚を起こさせる。

生徒会室に入ると、2人の女性が手首から血を流して倒れていた。顔に見覚えがある。与田直美と谷繁久美子だ。

清水たちは、早乙女に救急を呼んでもらうとその場を後にした。

第15話 サバトの女王

私が自傷するようになったのは、幼稚園の頃からだ。

怪我をした傷口の血を舐めたのをきっかけに、私は血の魅力に取り付かれた。

怪我をした子がいれば、「舐めれば治るよ」と言っただけでその血を舐めた。

男の子よりも、女の子の方が美味しかった。

なかでも、一番かわいかった伊東ちゃんの血が一番おいしかった。しかし、幼児とはいえ、毎日、怪我をする子が出るわけではない。私は、直ぐに自分で傷を作り、自分の血を舐めるようになった。

しかし、一か月もしないうちに、親にばれて、精神病院に連れて行かれた。

私は、頭がおかしい人間らしい。

医者はストレスが原因だと言い、両親の関係や、子供への接し方に問題があると言った。

私は、ただ好きだから吸っているだけなのに。

仲の良かった両親は、私のことを巡り、喧嘩が絶えなくなった。

優しくなった両親も、私を怪物のように見るようになり、私に冷たく当たるようになった。

医者は、薬やらカウンセリングをしたが、私としては、好きなものを止める気にはならなかった。

しかし、そのままだと、いつまでも怪物扱いだ。

親や医者にはれないように、手首ではなく、足を針で刺して吸った。

我ながら器用だと思う。

大人たちを騙すのは簡単だ。

人間は、見たいものしか見ない。

彼らの願望に合わせて行動すれば、容易にだますことが出来た。

医者も両親も、病気が治ったことにしたかった。

私が治ったふりをすれば、容易に飛び付いた。

幼稚園の子供が知恵を回し、自分たちを騙すために演技するとは思わなかったのだろうか。

それ以来、私は治った自分を演じ続けている。

少しでも、疑われないように、血を連想させることは極力避けた。トマトケチャップすら少なめにし、絵具の赤はできるだけ使わないで絵を描いた。

そして、大人たちの期待に答え、勉強し、そこそこの成績を取り、静かにしてさえいれば、問題がない大人しい良い子となった。

心のうちに、どんなに闇を抱えていても、大人たちには気づかれなかった。

そうして、私は、表向きは普通の人間として過ごし、中学生になった。

中学校になると、学校内でリストカットをする同級生を見つけた。

彼女と私では、自傷する理由は違うが、同じカット仲間として意気投合した。

彼女が、リストカットするようになったのは、義父の性的暴力が原因だ。

母親のことを思うと誰にも相談できない。

心は死んで行くのに、体は生き続けている。

捻じれに苦しむ彼女は自傷行為で、自分を保っていた。

私は、直ぐに彼女の血を飲むようになった。
そして、彼女も私の血を飲むようになった。

私と付き合ううちに彼女の心の傷は癒え、彼女がリストカットをする目的は、私への奉仕へと変わった。

私と彼女、2人だけの宴、誰にも汚されない2人だけの世界。

このまま、時が止まってほしい。現実の世界には戻りたくない。

だけど、時間は流れていく。現実の世界で、偽りの私が生き続ける。

そして、私は、成長していく。

内なる心に、狂気を秘めながら。

菊池正行と出会えたのは、幸運だった。

彼は自分は、ただの病人だと言う。

それは違う。

彼は選ばれた人間。

いや、選ばれし者というべきだろうか。

彼が病弱なのは、彼が人間として生きようとするからだ。

人間という小さな殻に閉じこもるからいけないのだ。

人間の殻を破り、孵化すべきなのだ。

私は、それを手伝っただけ。

彼と出会い、彼に血を上げて以降、私の生活・・・いや、人生が変わった。

そして、彼の人生も変わったことだろう。

彼は、最初にあつた頃の彼とは違つ。
自信に溢れ、逞しく、魅力的だ。

私たちは、週に、2、3回、開かずの間の扉を開け、サバトを開いた。

ミサが開かれる聖堂の下で、サバトが開かれるとは、なんとも愉快だ。

サバトへの参加者は、菊池正行と私、友人の3人だったが、今やシスターを含めて、6人になった。

シスターも人の子だ。口では、神だなんだのいつても、しょせん女だ。

放送部員の西村京子が、学校の吸血鬼について調べている。

私自身、ノートを読んだことがあるが、なかなか面白い内容だ。

どこまで、調べるか楽しみだ。

西村が、調べた内容を報告してきた。

西村京子は、私たちに秘密を知ってしまった。何とかしなくては。

第16話 エピローグ

教頭が、教頭室で仕事をしていると、ノックもせず、1人の少女が入ってきた。

「ノックもしないで入ってくるなんて、失礼な子ね。あなた、誰？この学校の生徒じゃないわね」

「ええ。単刀直入に聞きます。50年前のマルコさんのことについて話に来ました」

その言葉を聞いた瞬間、教頭の顔色が変わった。

「何を言っているの、何も知らないわよ」

「あなたは、50年前、この学校の生徒でしたね。そして、それ以来、この学校に居続けた。偶然ですか。それとも、死体が見つかるのが怖かったんですか。それとも・・・彼と離れたくなかったのですか」

教頭は何も答えない。

しかし、表情は、知っていることを認めていた。

「話す必要はありません。直接脳に聞きます」

少女の手から茨の蔓が伸び出すと、教頭の頭の中に入って行った。

事件が終わり、原田の家に集まって事件の総括を行った。

最初、開かずの間は、与田直美と谷繁久美子が人知れず、お互いの血を舐めあう場所だった。

菊池正行と出会って以降は、3人で会う場所になった。

血を舐めあうだけではなく、お互い愚痴を言い、お酒を飲んだり、煙草を吸ったり、S Xをしたり、日頃を出来ない悪いことをして、日ごろの鬱憤うつぶんを晴らす場所だった。

ある時から魔女たちの夜会、サバトと言うようになった。

彼女たちは、血の飲み合うにつれて、自分たちを吸血鬼だと考えるようになっていった。

特に、菊池正行は、自分が吸血鬼と呼ばれることを大変気に入っていた。

病弱な菊池正行にとって、不老不死の存在である吸血鬼は憧れの存在だった。

そして、菊池正行にとって、自分が吸血鬼として振る舞えるサバトだけが、自分の死の病を忘れられる唯一の機会だった。

途中で、シスターに見つかり、存続が危ぶまれたが、シスターの取り込みに成功したことにより、規模がどんどん大きくなって行った。

サバトは彼らにとっても日ごろの鬱憤うつぶんを晴らす場所になった。

大きな転機は、菊池正行がサバトの途中で体調を壊したことだ。

学校の外に運び出し、救急車を呼んだが、二日間の昏睡の後、菊池正行は死亡した。

与田直美と谷繁久美子たちは、菊池正行の死の責任を感じる一方で、罪の意識から逃れるために、菊池正行を本物の吸血鬼として考えるようになった。

菊池正行は、死なない。

いや、菊池正行は死ぬことにより、本物の吸血鬼として生き返るのだ。

現実逃避や吸血鬼の伝説が、カードの力と結び付いた時、菊池正行は吸血鬼として甦った。

そして、彼女たちは、それを喜んで受け入れた。
吸血鬼が彼女たちの血を飲んで、奴隷にしたのではない。
彼女たちが血を捧げて、吸血鬼を生み出したのだ。

「せっかく、50年前の事件を解決したのにな」

結城が口惜しそうに言う。

「起きたのは約50年前。もう時効ですね。仮に告発しても、新聞ネタになるだけです」

原田が紅茶を飲みながら答えた。

「ガンに侵されていて、余命1年あるかどうかだからな・・・」

事件を暴き立てたとしても、無用な騒動を起こすだけだろう。

それに、あいの世界が関係する問題でなければ、これ以上関わる必要はない。

「それにしても、殺したとはいえ、50年間毎日、花を飾るなんて・・・マルコさんのことを好きだったんですね」

「そうだな。愛ゆえの狂気と言ってしまうのは、簡単だが・・・そうそう出来るものではないな」

女性陣は、妙に感慨深げだ。

「なんかスッキリしない終わり方だな。せっかく倒したのに、吸血鬼の伝説は続くわけだから」

「そうですね。相手は吸血鬼だから。また、いつか復活するかもしれませんね」

「もつとも、その時も、俺が、今回みたいに、さつさと片付けてやるけどな」

「その時は、頼りにしてるぞ。結城。もつとも、『大アルカナ』の

カードは、そんなにないからな。そうそう簡単には起きないと思うんだけど……」

「今回のカードは何だったんですか」

「隠れた敵・幻想・欺瞞・失敗を意味する『月』よ。酷い幻想を見せられたわね」

「それにしても、これから、あの子たちは大丈夫なんでしょうか」

事件後、十字架に磔になっていた澤田たちは、直ぐに学校に復帰できるようになった。

しかし、彼女たちの友情はどうなるのだろうか。

ある程度は、自分たちのことも含めて、清水が記憶をある程度封印したが完全ではない。

心の傷がなくなるわけではないので、多少のわだかまりは、残るはずだ。

「彼女たちの友情を信じるしかないわね。なるようにしかならないのよ。悲しいけど」

放課後、聖堂の掃除のために、早乙女愛は、澤田あやめ、小村かおりと一緒に、両手に清掃道具をいっぱい持ち、聖堂に向かっていった。

「ねえねえ、知ってる。教頭、学校辞めるんだってさ」

「良い年だからね」

「口、五月蠅かったけど……いなくなるのは、ちょっと寂しいかな」

「確かに、かおりさん。一番お世話になったていましたらかね」

「キツイな。早乙女。そんなことよりも、さあ。あやめ。あなたが

休んでいる間。かおりと2人で、掃除大変だったんだからね」

「はいはい、判りました。頑張ります」

「あやめ。病み上がりなんだから、まだ無理しなくていいよ」

「その『まだ』って、言葉が気になるな」

「当然、元気になったら、頑張ってもらいます」

「そつだ。澤田の快気祝いを兼ねて、七夕祭りは皆で平塚に行こう」

「良いね」

「じゃあ、日曜日、浴衣買いに行こう。やっぱり、祭りは浴衣じゃないと」

澤田も元気になったし、島田のリストカットも治った。

いろいろあったけど、今は良い方向に行っているような気がする。

閑話 千助の多事雑言

「千助さん。聞きたいことがあるんだけど」

近藤は、キマイラの千助に質問をした。

「何かね。少年」

相変わらず、キマイラの態度はでかい。

「結局、澤口さんたちの仲って、どうなるんですか」

「まあ、わだかまりはあるけど、友情の方が強いと好意的に解釈しましょう」

「そんな簡単に上手く行くんですか」

「信者になっちゃった小村の扱いが問題だけど。比較的多くを知ってしまった早乙女が黙っていればなんとかなる。それに、澤田も島田も嫌な経験なので思い出さたくないからね。無理に思い出して関係を壊そうとは思わない。それに、友達関係は、仲よし仲よしだけじゃないからね」

「そう言うもんですかね。」

「そういうことにしてくれ」

「マルコの話はもっと前面に出るかと思っただんですが、あまり活用しませんでしたね。」

「そうだね。やっぱり、マルコが始祖というのにしたかったけど、作者の技能がなかった。菊池正行がマルコの子孫って設定もあつただけど、出し損ねたしね」

「最後の教頭の話も唐突ですね。」

「唐突なのはいつものことですよ」

「開き直ってますね。それにしても、今回は、なんか、最初の方、全然出番がないんですけど」

「作者が、吸血鬼と言うことでホラー要素を強くしたかったからね。主人公たちが出てくると、対抗手段があるから、恐怖感はないですよ」

「それは作者の腕次第じゃないですか？　そもそも、恐怖を感じた読者さん、いたんですか？」

「……それは脇に置いて。これから、今後はこういうパターンは増えるよ」

「そうなんですか」

「一通り、キャラ紹介終わったからね。事件が起きて、解決するパターンが増える……予定。この作者の言うことなんて政治家以上にあてにならないけどな」

「結城さんのキャラ紹介は、終わってないような……」

「痛いところ突くな。そこは流せ、少年」

「ということは、僕たちの出番は減るんですね」

「そういうことだね。ワイの出番はもつと少ないんだ。我慢しろ」

清水と原田が、原田の家でお菓子を食べながら世間話をしている。

「吸血鬼って、他の怪物に比べるとなんか魅力的ですよ。女の子にも人気があるし、吸血鬼と恋に落ちる話も多いですし」

「そうね。日本に限らず、『トワイライト』とか、海外もそうね。」

「なんでですかね」

「元々の東欧の吸血鬼は、ゾンビや狼男みたいな感じだったんだけど、やっぱりブラム・ストーカーのドラキュラからかな。敵にだまされ自殺した恋人が天国に行けないことで神様を呪い、天国に行けない彼女を求め続けるなんて、ロマンチックじゃない」

「ドラキュラって、そんな話なんですか？」

「たしかね。ただ単に、血を吸う化物から出世したのは間違いないわ。一時期は、血を吸う化物扱いの時代もあったけど、1970年

ぐらいからかな。『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』の原作の『夜明けのヴァンパイア』とか、ステイブンキングの『呪われた町』とかで、再評価されて、その後はロマンチック・スタイリッシュ路線へ。今は、怖いドラキュラなんて少数派ね」

閑話 その1 無駄話

車

「実は、私免許を取ったんです」と原田が満面の笑顔で皆に、免許を見せる。

「・・・」

なぜか、皆の反応が良くない。

「どうしたんですか、皆さん」

「なんといいいますか・・・自動車の運転が上手い原田さんを想像できなくて・・・ねえ」

近藤が結城に同意を求める。

「俺は、近藤ほど心配していかないけど・・・」
裏切ったな結城。

「心配ご無用です。車庫入れも、クランクも一発OKです。上手いと教官に褒められました。よそ見をするのとスピードの出しすぎ以外は問題ありません」

「・・・」

一番肝心な点じゃないですか。

「ところで、運転するのは、どんな車なんですか？ 車庫を見ても車はなかったような気がするんですが」

「近所に住んでいる伯父様の車を借りています。伯父様はいろいろな車を持っていらっしやるので、空いている車を使わせてもらっています。近頃は、黒のベンツとかですね」

「・・・黒のベンツですか・・・」

伯父さん、ヤクザですか。

それにしても、黒のベンツに若葉マーク付けてるなんて・・・

「大きくて、運転難しくないですか？」

「そんなことないですよ。皆さん、親切に道を譲ってくださいますから」

野球

「近藤さんって、横浜ファンだったんですか。なぜ、そんな弱い球団を。Mですか？」

確かに、Mじゃなきゃ、横浜ファンはやってられないけど．．．
「いや、別にMだから横浜ファンなわけではないです。そもそもMじゃないですし。それにしても、野球のことを知っている女性は珍しいですね。原田さんは、どこのファンなんですか？」

「当然、阪神です」

「当然．．．なぜ、当然なの？」

「祖父が大阪人だからです」

なんか妙に説得力あるな。でも、クォーター（4分の1）で阪神ファンか。

道理で阪神ファンが増えるわけだ。

「そうですか．．．もしかして、球場行くと、ユニフォーム着て、メガホン持って、六甲おろし歌っているんですか」

「当然です」

原田は言い切った。

それにしても、原田さん、阪神のことになると感じが変わるな。大阪人の血が騒ぐのか？

クォーターでそれだけ騒ぐなら、そりゃ純度100%は大変だろう。

道頓堀に飛び込むわけだ。

「隼人は好きなチームとかあるの」

「俺はヤクルト」

「また、マイナーな球団を」

「横浜ほどじゃないぞ」

確かに。

「ヤクルトのどこが好きなんだ」

「好きであることに明確な理由が必要か。信也はMであること以外に、横浜ファンであり続ける理由を説明できるのか？」

うーん、そう言われると辛い。好きになる理由は意外と些細なものというか、くだらないものだからだ。

「清水さんは？」

「私は当然、巨人だ」

「当然ですか？」

「東京に住んでいるんだから、当然だろ。せめて、ヤクルトだな。なぜ、横浜ファンなんだ？」

「スーパーマリオが好きでさ。横浜に昔、カルロス・ポンセっていう選手がいたことを知って、それ以来ファンなんだ」

「.....」

「まあ、ファンになる理由って、ひとそれぞれだな」

閑話 その1 無駄話（後書き）

キャラクター作りのために、試しに書いたものです。あまりにも、脈略がないので、本編には入れられず。

現在、次の話を書くのに大変苦労しております、更新が遅れいます。

その1 彼女未満

黒い太陽と、血と錆の世界。

ほんの10分前は、眩しい太陽の下、井之頭公園の池で、恋人の狭山玲奈をボートに乗せ漕いでいたのに……

鐘の音が聞こえたと思ったら、世界の光景は一変した。

空は血のように赤くなり、黒い太陽が大地を照らす。

そして、大地は、血と錆で汚れている世界。

池の水は血になり、異臭を放っていた。

ボートを降りた自分たちを待っていたのは、黒いマントに身を包んだ異形の者どもと、それらを従える仮面の男。

俺は、自分を身代わりにして、狭山玲奈を逃がした。

命をかけ、怪物どもと戦うが、普通の人間である自分には、異形のものたち相手に、大したことは出来なかった。

フェンシングの大会でいくら勝とうとも、それはルールのある試合での強さでしかなかった。

押さえつけられると、抵抗しないように両足の骨を折られた。

なぜ殺さないのか。

理由はすぐに判った。

殺したら人質にならないからだ。

仮面の男の狙いは、俺ではなく、狭山玲奈だった。

仮面の男たちは、俺を人質にして、玲奈に服従を迫った。

俺は、狭山玲奈の足を引っ張る人質になってしまった。

仮面の男は、狭山に召喚の仕方を教え、魔法陣を画くと無理やり悪魔を召喚させた。

そして、自らの悪魔を召喚すると、無抵抗の狭山の悪魔を倒し、カードを奪った。

目の前には、狭山玲奈の骸だけが残った。

「玲奈。玲奈。れいなあ〜〜!!」

脚の骨を折られた俺は地べたを這いずり、狭山の元に近寄った。

そして、玲奈の骸を抱きかかえ、名前を泣き叫ぶしかできなかった。

「また、あの時の夢だ」

目が覚めた時、結城は思わず呟いた。

「ようやく起きたか結城。授業中に寝るなどと言わない。だけど、静かに寝てくれ。」

教室の生徒たちが一斉に笑う。

どうやら、授業中に寝てしまうだけではなく、悪夢にうなされていたようだ。

あの日、『あいの世界』から現実の世界に戻ると、足の骨が折れ、足は動かなくなっていた。

一方、狭山玲奈は命こそ別状はなかったが、その日以降、酷い自傷行為をするようになり、精神病院に隔離されるようになった。

薬で落ち着いているときに、面会に行くと、狭山玲奈から別れを切り出された。

その日以降、俺は荒れた。

フエンシングも出来ず、恋人も守らず、恋人にも振られ、そして、復讐すらできない。

そんな俺を救ってくれたのが、清水との出会いであり、『あいの世界』での戦いだ。

今は、音楽も始め、リハビリに励み、意外と充実した生活を送っている。

そして、恋人らしき人も出来た。青山沙希だ。

特に用事がない場合は、放課後、現恋人の青山沙希とリハビリセンターに行き、歩行の練習をしている。

トレーナーが言うには、あと1カ月もすれば、杖で歩けるようになるとの話だ。

目標が見えてくるとトレーニングに力が入る。

「今日、授業中にうなされてたんだってね。ちゃんと夜寝てないから授業中に寝るんだぞ」

「そうだな。少し、夜の女遊びを控えるかな」

「.....」

青山沙希との会話は長く続かない。

狭山玲奈だったら、ここで皮肉や嫌味でも言うだろう。

だが、青山沙希は何も言わない。

青山沙希を一言で言うと、失礼だが、ただ従順なだけの女。

見た目も、眼鏡をかけ、髪は肩までのショートカット。学級委員か図書委員が、似合いそうな地味さと真面目さ。

対外的には彼女となっているが、彼女と俺の間に愛情関係・信頼関係はない。

俺に対して、嫌われるのが怖く、皮肉を言うこともできない。

狭山玲奈と別れを切り出されてから、何人かの女と付き合い合った。そして、直ぐに別れた。

すさんだ俺の心と態度が、容赦なく彼女たちを傷つけたからだ。自分で言うのも、何だが、見た目の良さから、車椅子になっても、女性にはもてた。

そして、今は、同じ学校で中学からの知り合いの青山沙希と付き合い合っている。

なぜ、付き合い合っているのかと言うと理由はない。強いてあげるとしたら、付き合い合わない理由がないためだ。

青山沙希は、俺が何を言っても、何をしても、ただ俺について来て、俺を手伝ってくれる。

俺は彼女を、恋人人としてではなく、ただ便利な人間として扱っている。

俺は彼女を、こんな風に扱っているのだろうか？

良いわけないのだが、彼女に対して愛情はない。

しかし、彼女はそれでも良いと言う。

いったい何が嬉しいのだろうか。

なぜ、俺のことを好きなのだろうか。

俺には判らない。

その2 七夕祭り

清水たちは、あいも変わらず原田の家で、集まっていた。

原田は今月の頭から、原田は相手いる部屋に大学の友人たちに貸しているが、清水がたちが集まる時は、家を空けるようにしてもらっている。

もっとも、家を空けておらう必要があるような深刻な話はごく稀で、多くの時間は世間話に費やされている。

「平塚の七夕祭り行きませんか？」

原田は皆に提案した。

確かに、数日後には、7月7日。七夕の日だ。

もうそんな季節なんだな。

「良いね。行こう！」

「期末試験前で、遊べるのも今週末までだからな」

結城はもちろんのこと、清水も乗り気のようにだ。

確かに、もうすぐ期末試験だ。

期末試験前の最後の息抜きに良いかもしれない。

そして、平塚の七夕祭りと言えば、日本三大七夕祭りのひとつで、仙台の七夕祭りに勝るとも劣らない大きな祭りだ。

日本一といわれる竹飾りの豪華さに特色があり、期間中は200万人もの人が来るらしい。

そして、平塚は、神奈川県湘南にある海に面したそこそこ大きな街。

新宿から湘南新宿ラインを使えば、電車一本で1時間ほど行くことが出来る。

日程を調整し、土曜日に皆で行くことになった。もっとも、湘南は観光名所だが、平塚自身に、これと言った観光スポットはない。

祭りは昼間よりも、夜の方がムードがあるので、鎌倉で時間を潰し、夕方になってから、平塚に行くことにした。

天気は気持ちいぐらいの晴天。

暑くもなく寒くもなく絶好の行楽日和だ。

近藤たちは新宿駅で待ち合わせをして、日中の目的地である鎌倉に向かった。

鎌倉というと、鎌倉幕府や鎌倉の大仏、鶴岡八幡宮など、歴史や神社仏閣が頭に浮かぶ。

一方、鎌倉は単純に観光地という側面以外にも、高級住宅地という側面があり、食べ物やスイーツ、小物などが充実している。そのため、近隣の東京などからの訪問者が多い。

清水や原田たちは、観光で何回か来ているので、もっぱらそっち狙いだ。

天気が良いだけあって、鎌倉は混んでいた。近藤たちと同じように、日中を鎌倉で過ごし、夕方、平塚の七夕祭りに行こうと思っっている人も多いのだろう。

近藤たちは、取りあえず鶴岡八幡宮を参拝すると、早々に切り上げ、街中へ向かった。

参道である小町通りとその裏道は、多くの人で賑っており、数多

くの有名店が存在する。

お店に向かうため小町通りを歩いていると清水が突然立ち止った。そして、振り返る。

「どうしたんですか。清水さん」

「3人組がいるでしょ。」

清水の視線の先には、先程すれ違った3人の女子高生らしき女の子たちが歩いていった。

「右端のあの子・・・蛇に取りつかれているわ」

長身でショートカットの少しボーイッシュな爽やかな感じの女子だ。

「どうしますか」

「ほおっておくわけにはいかないでしょ」

清水が女の子たちに向かおうとするのを、近藤が止める。

「なんて声をかける気ですか。『あなたは蛇に呪われています』なんか言っても、怪しい宗教の勧誘と思われるのが落ちですよ」

「・・・特に考えてなかったな。近藤、良いアイデアがあるのか？」

「・・・ありません。結城。数少ないお前の出番だ」

「無理だな。お前たちと居るところを見られている。それに彼氏が居る女性はナンパするのが判るのだろうか。結城の超能力だ」

なぜ、彼女が居ることが判るのだろうか。結城の超能力だ。

原田にも特にないようだ。

悩んでいる間に、女の子たちは、どんどん遠くへ行ってしまう。

「考えてもしょうがない。当たって砕けるだ」

清水が女の子たちに向かうと声をかけた。

「君に話があるんだけど」

男だな清水さん。

当然ながら、女の子たちは怪訝な顔をする。

そりゃそつだだろう。いきなり声をかけるなんて、怪しい勧誘ぐらいだ。

清水は女の子に顔を近づけると、女の子の耳元に何かをつぶやいた。

見る見るうちに女の子の顔が変わっていった。

その3 蛇の呪い

彼女の友人たちに別れを告げると、話をするために喫茶店「ドルチエ ファール ニエンテ」に入った。

イタリアレストランを兼ねたなかなか雰囲気の良いカフェだ。

結構な有名店なので、グルメという旅の目標は放棄しないらしい。

エスプレッソが美味しいらしいので、とりあえず全員エスプレッソを注文する。

いきなり本題には入らず、簡単な自己紹介をする。
当然、うちの言っていることは半分嘘だが。

彼女の名前は、北条真紀。

非常に鎌倉に縁がある名字だ。

「北条って．．．もしかして、北条氏の一族ですか？」

「正直判りませんが．．．父や祖父はそう言っていますね。多分冗談でしょうけど」

まあ、名字的に言くと、近藤家すら、藤原氏関係がある訳で、鎌倉に住んでいて北条なら多少の縁があってもおかしくない。

少し彼女の警戒感が取れたところで、本題に入る。

「胸元を少し見せてもらえませすか」

「結城たちは見ちゃ駄目よ」

原田が結城たちに釘を刺す。

彼女は、ボタンを外し服の胸元を少し広げて見せた。
「鱗．．．」

彼女の胸元から腹にかけての皮膚は、表面が硬くなって、蛇や魚

のうろこのようにひび割れていた。

まさに蛇の呪いだ。

「後天性の魚鱗癬ぎょりんせんです」

彼女は諦めたように言った。

「顔に出ないから、今はまだ、水着が着れないくらいで済むんですけどね。」

日に日に大きくなっていくんです。

医者に行っても、原因も治療法も良く判っていません。

『蛇の呪い』って言われてやっぱりなって、納得してしました。呪いを解くことって出来るんですか」

「現実じゃないけど、出来る範囲でやってみるわ。そのためには出来る限りのことが知りたいの。」

「言いつらいだろうけど、誰かに恨まれそんな心当たりはあるの」

「．．．正直、あります。三角関係の纏もつれちゃつてです。」

友人が好きな人が、私のことを好きになっちゃって．．．

それ以来、口もきいてくれないし」

「彼との関係は」

「今、つき合っています」

それは恨み買うよな。と近藤でも思ったが、さすがに口には出せない。

「やっぱり、その友人が呪いをかけたんでしょっか」

「きっかけは、そうかもしれないけど、恨んで呪いがかかるなら、

世の中、呪いだらけよ。

運悪く、別の力とちようどううまく組み合わさった感じかな」

「別の力って、何ですか」

「鎌倉って、蛇と縁がある土地なのよ。銭洗いの弁天様とか、稲荷とか、蛇苦止明神じゃくしめいじんとか」

「？」

「弁天様は、水の蛇、稲荷は地の蛇と関係あるのよ。蛇苦止明神は、そのものずばり蛇の呪い。」

「こういう土地では、蛇の呪いなんか、具現化しやすいでしょうね」

弁天様はお金の御利益で有名ですが、お使いの動物は蛇です（特に白蛇）。

弁天信仰は蛇信仰や龍神信仰とかさなっている点が多く、鎌倉・湘南は弁天様関係の施設が特に多い地域だったりします。

「どこから始めますか」

「やっぱり、北条と蛇繋がりで、蛇苦止明神の蛇苦止堂あるかな」

「なんですか。蛇苦止明神って」

「なんだっけ？キ助説明して」

清水は、カバンからキ助を取りだす。

キ助の声は、普通の人には聞こえないので、北条は、又イグルミと話す清水たちに怪訝な顔をする。

「昔、鎌倉で比企の乱ってというのがあってな。比企一族が北条氏によって滅ぼされたんだ。」

その際、二代將軍源頼家の側室であった比企能員の娘、若狭局が、家宝を抱えて井戸に飛び込み自害してな。

その時は問題なかったんだが。

その後、北条政村の娘が、若狭局に祟られ、蛇のような狂態を見せるようになったちゆう事件が起きたんだ。

坊さんが払ったんだけど、祟り治めるためにな、若狭局の霊をまつる蛇苦止明神を作ったんだ。

現在、蛇苦止明神は、病気平癒、病を治すのが御利益で、人を呪う場所ではないんやけど。

祭ったからといって、本質が変わるわけではないからな・・・」

その4 蛇苦止堂

蛇苦止堂は、鎌倉駅から南西に歩いて15分ほどのところにある日蓮宗の本山（靈蹟寺院）の妙本寺みよつほんじの境内の一角にある。

そして、同じように境内の一角に、若狭局が身を投げたと言われる蛇苦止ノ井がある。

有名ではあるが、観光名所ではないので、清水たち以外の人気は少ない。

清水はカバンからL字型の棒を取り出すと、ダウジングを始める。そして、やはり、蛇苦止ノ井の周りで、ダウジングの棒が開く。

「たぶん、この中ね」と清水は近藤の顔を見つめる。

原田も、見つめる。

皆が見つめる。

結城は車椅子。残りは、お洒落した女性。行くとしたら、近藤しかない。

人が身投げした井戸なんて、入りたくないが、近藤に拒否権はない。

「判りました。僕が井戸に入ればいいんですね。道具は？」

「あるから心配しないで」

清水は、カバンの中から、ロープと懐中電灯を取り出す。

それにしても、何でも入っているな清水さんのかばんは。

見つからないように、覚悟を決め、素早く井戸の中に入る近藤。

両手が塞がっているため、上から照らしてもらっているが、井戸の中は暗く、狭く、壁はツルツルしていて滑る。

かなり薄気味悪い。

苦戦しながらも、なんとか、井戸の底に着いた。

井戸は空井戸ではなく、今でも水が湧いているため、近藤のびしよ濡れになりながらも、井戸の底を探る。

井戸の底で見つけたのは、ありきたりな藁人形。とりあえず、藁人形を先に上へとあげる。

その結果、近藤は井戸の底で忘れ去られるが……いつものことだ。

水でふやけているがなかなか良くできています。

「自作でしょうか」

「いまだき、藁人形はネット通販で買えるからね」

藁人形の中を開くと、紙が出てきた。

紙には、北条真紀と名前が書かれている。

蛇苦止明神に呪いの願をかけたのは、これで明白になった。

後は呪いを解くだけ。

「北条さん。容疑者の友人を電話で呼び出せるかしら」

北条は、守口弘子に電話をかけた。

当然、守口は自分のやったことを認めないし、電話をかけた北条を頭がおかしいとなじる。

「代わってもらえる」

清水が代わりに説得、いや恐喝する。

「あなた、人を呪わば、穴二つって言葉知ってる。人を呪っているあなた自身変調が起きているはずだし。呪い返しをすれば、全てあ

あなたの身に降りかかるのよ

延々と清水の脅しは続く。

清水の脅しの言葉が効いたのか、直ぐにこの場に来ることとなつた。

.....

この内容はもちろんフィクションです。

実際の蛇苦止明神の御利益は、病を治すことですので、間違つても、呪わないようお願いします。

その5 鎧武者

1時間後に現われた守口弘子は、真面目そうで、小柄で色白、大きな瞳が魅力的な女の子だった。

服装は長いスカートのワンピース。

もっとも、無理やり呼び出したので、表情は懨然としているが。

こんな子が、蛇の呪いをかけていたなんて。

いや、真面目そうな子だからこそだろうか。

「それにしても、本当に呪いが効くなんてね。苦勞して、やったか
いがあったわね」

しばしのやり取りの後、彼女は、自分がやったことを認めた。

「あなたのその長いスカートと靴下、霊障を隠すためでしょ」

返答はしないが、表情は当たっていることを示している。

「なぜ、そんな目にあっても、呪い続けるのよ」

「恨みがあるからに決まっているでしょ。呪わなきゃやっていけないのよ。」

真紀は気づいてなかったけど。私と彼、付き合っていたのよ」

「何で教えてくれなかったの」

「言えないでしょ。体だけの関係だなんて。」

私．．．彼の子供が出来ていたのよ。

彼に報告したら、降ろせて。彼の言うとおり、すぐに降ろしたわ。

それなのに．．．彼が冷たくなってね。でも、私は彼を許したわ。でも、あなたが彼の彼女になるのは許せなかった。

私は子供まで降ろしたのに」

心の準備もなく、いきなり深刻な告白を聞いてしまった。

それにしても、悪いのは北条さんじゃなくて、その彼氏ではないだろうか。

彼氏ではなく、北条さんに向かうところが、恋心ゆえの歪みなのだろうか。

近藤には判らなかった。

「どうするの？ 非難したいなら、非難しなさいよ。笑いたきゃ、笑いなさいよ」

「私たちは、あなたに呪いを返すつもりはないわ。ただ、呪いを倒すだけ」

どこからともなく、鐘の音が聞こえる。

それとともに、北条さんや守口さんに取りついている蛇の姿が、近藤にも見えるようになった。

自らにからみつく蛇の姿を見て、北条さんは悲鳴を上げると気絶して、倒れてしまう。

ここは鎌倉。

魑魅魍魎、怨霊には、事欠かない。

どこからともなく、鎧武者の怨霊たちが現われた。その数、約20体。

その姿は、刀を持ち、錆ついた鎧を身にまとった歩く骸骨。

ガチャガチャと鎧がぶつかり合う音と舌も喉もないのに呻き声だけは聞こえてくる。

相手は格闘の専門家である侍の怨霊。

さらに、刀を持ち、鎧を着ているのだから、その強さは、今までの「首なし」の怪物を上回る。

しかし、こちらにも、4人に居る。

清水は銃弾を撃ち、侍たちを八千の巢にする一方、近藤は大剣で剣もろとも侍たちを一刀両断にする。

原田が踊るように槍で侍たちを翻弄すると、結城のエペが侍たちを鎧もろとも切り刻む。

清水と近藤。結城と原田のコンビで次々と怨霊を倒していく。

残ったのは、守口だけ。

「もう、お終いよ。観念しなさい」

「まだよ！」

守口は、自身や北条に取りついていた蛇をけしかける。

蛇たちは、北条たちから離れると、10メートルを超える大蛇に巨大化する。

が、清水たちの相手ではない。

清水に銃弾を何十発と撃たれた上に、近藤の大剣や原田の槍、結城のエペに頭部や体を切り刻まれる。

「もう、夕方ですね。あんまり、鎌倉楽しめませんでしたね」

「良いじゃないの。時間つぶしにはなったわけだし」

「そうですね。じゃあ、『こ寿々（こすず）』でわらび餅を食べてから、平塚に行きましょう」

「うわあ、マイペースだな原田さんは。」

昭和初期の木造で優雅な店構えの蕎麦屋『こ寿々（こすず）』で、

休憩を取る。

近藤と結城は、お腹がすいたので、蕎麦とわらび餅を、清水と原田は、わらび餅を注文する。

「近藤。若狭局は、家宝を抱えて井戸に飛び込み自害したらしいけど．．．家宝って何だと思う」

「さあ？」

「私はね。子供だと思っただ。若狭局は子供を宿していた。

それなのに、自害しなくてはいけなかった。子供を産めなかった私の憶測だが．．．守谷とは違う女の悲哀を感じてしまうな。

だから、守谷に力を貸したんじゃないかな．．．」

「清水さんらしからぬ。感傷的な意見ですね．．．妊娠でもしたんですか？」

「なんでそうなるかな。するわけないだろ。私はまだ．．．」

「私はまだ？」

結城が素早く反応する。

「今の言葉忘れる！全部忘れる！」

清水は近藤と結城の頭を掴むと、無理やり記憶を消去する。

数分の記憶を乱暴に消し、酩酊状態になり机に伏せる近藤と結城。

「お客様。大丈夫でしょうか」

わらび餅を持ってきた若いウエイトレスさんが、2人の異常な状態を見て、心配し声をかける。

「大丈夫です。疲れているだけです。お騒がせしてすみません。」

「お二人とも本当に大丈夫なんですか？」

「良いの。そのうち正気になるわ。それより、わらび餅を食べましょう」

その6 星に願いを

鎌倉を出てから平塚駅までは、30分ほどで到着した。予想通りの人の多さだ。

会場は、駅から少し離れているので、歩いて行く。

初夏だが、夏祭りらしく浴衣を着た人も多い。

「やっぱり、浴衣の人が多いですね。浴衣着てきた方が良かったかな」と原田。

「しょうがないよ。今回は電車なんだから」

「じゃあ、次回の花火大会の時に」

「どうやら、原田の中では、花火大会に行くことが。既に提案事項としてあるようだ。」

「そうね」

「清水も、素直に合意する。」

鎌倉を出た時は夕暮れ空だった空も、すっかり日も暮れて、あたりは暗くなっていた。

祭りの提灯の明かりやライトアップされた色とりどりの竹飾りが、夜の暗さの中で一段と映える。

「綺麗ですね」

原田が清水に話しかける。

「ああ」

「来て良かったですね」

「そうだね」

「来年も来ましようね」

「気が早いな。優奈は。まだ来たばかりじゃないか」

「そうでしたね」

七夕飾りは、商店街の中にあるため、商店街に沿って竹飾りを見ていく。

そして、通りに出ている出店で、お菓子やら食べ物などを食べるのに難しいのについつい買ってしまう。

願い事を書いた短冊を笹の葉にぶら下げると願いがかなう。と言われているので、縁起を担いで、参加料100円で短冊を書いて、飾ってもらうことにした。

「みなさん、どんなお願いをしているんでしょうね」

「所帯持ちなら、家族の健康。受験生なら受験。それ以外は男女の中だろうな」

「信也さんは、ロマンがないですね。信也さんは、何て書いたんですか」

「内緒です」と近藤が答えた。

「秘密にするようなこと書いたんですか」

「どうせ、それ以外の近藤は、小野寺さん関係だろ」

結城が当てる。

「・・・そう言う。優奈さんは？」

「みんなが幸せになれますようにって書きました」

「偉いな。私は個人的なことを書いてしまった」と清水。

「そんなことないですよ。私は、みんなが居るから今幸せなんです・・・」と笑顔で答える。

短冊に願い事を書いた帰り、商店街を歩いていると・・・どこか
で見た顔が。

クラスメートではない。

吸血鬼の事件の時にあった女子高生たちだ。

4人で来ているところを見ると・・・事件の影響は少なく関係は
良好なようだ。

近藤たちのことは覚えていないはずだが・・・100%ではない。

近藤たちは、緊張するが・・・彼女たちは、そのまま通り過ぎて
いく。

良かった気づかずに通り過ぎた。

彼女たちの1人が、突然、足を止めると振り返った。

確か、早乙女愛だったような気がする。

そして、不思議そうな表情で近藤のことを見つめる。
しまった。

目と目が合ってしまった。

そして、近藤に近づいてくる。

「すみません。以前、どこかでお会いしたことありませんでしたか
?」

「私は初めてですが・・・特に特徴のないありふれた顔ですので、
勘違いされたのでしょうか」

「そうですか。失礼しました」と頭を下げる。

その姿は、どこか残念そうだ。

彼女は友達たちと合流すると、また頭を下げて、再び近藤たちと
は別方向に歩いて行く。

「愛。ナンパ?あんなのがタイプなの」

「違うよ。知り合いだと思ったんだ」

「本当」

彼女たちは、お喋りをしながら遠ざかって行った。

「あの子は、思い出すかもしれないな」と結城。

「完全ではないからな」

「でも、皆さん、幸せそうでしたですね」

「そうだな。それが一番だな」

その7 お土産

ホームルーム前の学校の教室。

いつもよりも遙かに早く来たので、居るのは自分一人だ。

早く来たのは、鎌倉で買ってきたお土産を小野寺さんに渡したかったから。

正直言つて、まだ小野寺さんと僕の間は、プレゼントを渡せる間柄には程遠い。

しかし、「チャンスはゼロではない。万が一の機会のために買っておけ」と清水さんや原田さんに勧められ、お土産を買った。

でも、どうやって渡そうか、考えていると・・・

背後から「近藤君」と自分を呼ぶ可愛らしい声。

えっ？

小野寺さんだ。全然入ってくるのに気が付かなかった。

驚きとあまりの嬉しさに相変わらず、心臓がものすごくドキドキする。

小野寺さんは、いつもこんなに早く来ているのだろうか。

それとも、運命だろうか。

それにしても、向こうから声をかけてくれるとは、好都合だ。何の用事だろうか。

「近藤君。この間、清水さんと鎌倉に行ったんだってね。」

いったい、どこからそんな話を聞いたのだろうか。

「そうだけど。誰から聞いたの？」

清水さんが小野寺さんにいちいち報告するとは考えられない。

また、どこかで目撃されたのだろうか。

「清水さんから、聞いたの。近頃、メールのやり取りをしてね」
小野寺さんが嬉しそうに話す。

「毎日の出来事を送ったり、弓道のフォームの写メを見てもらったりしているの」

自分が知らないところ、いろいろとやり取りをしていたようだ。

今日は、おそらく清水さんが渡しやすいように、気を利かせてくれたのだろう。

ナイスアシストだ清水さん。さすが清水さん。

いつも、乱暴な人だと思っていました。すいませんでした。

「鎌倉のお土産なんだけど。その受け取ってもらえますか」

「何？」

小野寺さんに、小さな紙袋を渡した。

「鎌倉ひこ四葩のあぶらとり紙です。清水さんのお勧めですよ」

清水さんの権威を利用させてもらった。

「ありがとう。近藤君。大切に使用してもらおうわ」

小野寺さんは、ニッコリ笑ってくれた。

ありがとう、清水さん。僕はもう一生感謝します。

結城は、放課後、時間が開いたので、現恋人の青山沙希とリハビリセンターに行き、歩行の練習をする。

「昨日、鎌倉行ってきたんでしょ。楽しかった？」

「ああ。楽しかった」

「良かったわね」

ここで会話が止まってしまふ。

「沙希。カバンの中から紙袋を取って来てくれないか」

「判った」

青山沙希は、素直にカバンの中から小さな紙袋を取ってきた。

「鎌倉で買ってきたお土産だ」

「ありがとう」

青山は、凄く嬉しそうな顔をする。

中身も見えていないのに・・・プレゼントという気持ちだけでも嬉しいようだ。

「開けてみる」

青山は、袋を丁寧に開く。

「あつ。あぶらとり紙だ」

子供のように、満面な笑顔で喜ぶ。

清水さんや原田さんが買ったついでに買ってみた。まさか、こんなに喜ぶとは思わなかった。

こいつも、こんな笑顔が出来るんだな・・・何カ月も一緒にいて、始めて気が付いた。

自分は、彼女について、良く知らないのではないかと反省する気持になった。

「あいつら、上手くやったかな」

清水が原田に話しかける。

「上手く行っていると良いですね」

原田は、紅茶の準備をしながら答える。

「結城さんは、ああ見えても、純情ですからね。プレゼントを渡した結城さんの方が、ときめているじゃないですか」

「かもな。2人とも純情で不器用だからな。近藤なんて、メールしてわざわざ舞台を用意したんだから。これで渡せなかったから・・・どうしようか」

「・・・信也さんは恋に関しては・・・ヘタレですからね。でも、

なんとか渡すんじゃないですか。その辺は、小野寺さんの方が気を
使ってくださいよ」「

「それにしても、うちの男どもは・・・手間がかかる」

「しょうがないですよ。男性は、体が大きくなっただけで、いつま
で経っても、どこか子供ですから」

閑話 その1 一学期の期末試験

自分で言うのも、何だが、勉強に関してはかなり計画的だ。
一夜漬けはしない。

無理して起きて、一夜漬けの勉強をする人がいるけど、そんなことをすれば、本番眠いだけだ。

力を発揮するためにも、寝る。
下手な勉強よりも寝る。

近藤は、風呂に入ると、11時にはベットに入った。

明日は、試験最終日。長かった試験期間も、明日で終わる。
終わったら、何をしようか？
そんなことを考えながら眠りに着いた。

目が覚めると、僕は棺の中にいた。

正確に言うならば、目が覚めたのではなく、そういう夢を見ているのだ。

久々に見る棺桶の夢。

カードの力に目覚めてから見る回数は、減っていたのだが・・・
目が覚めたならば、早急に棺から抜け出し、逃げる必要性がある。
この世界には、怪物が存在していて、グズグズしていると襲われるからだ。

棺の蓋を押し、身を起こし辺りを見渡した

今回の場所は・・・街中・・・立川駅北口のペDESTリアンデッキの上だ。

人が多いところは、怪物も多い。
今までの中では、吉祥寺に次いで最悪の場所だ。

だが、なぜか、怪物が一匹も居ない。

不思議に思っていると駅の方から、何かの気配が。

剣を召喚し、身構えていると、駅の方から女性が歩いてきた。

「20歳前後の女性だろうか。

青いベレー帽に、青いフリルのついたブラウスに、青いスカート。
全身青づくし。

長身ではないが、スラリと手足が長く、髪は、茶髪で少し長めで
髪を膨らませた感じのショートヘア。

色白で大きな瞳。

可愛らしいが、年齢の割に少し幼い感じがし、その表情は、どこ
か人形のような冷たさを感じさせる。

何者だろうか。

女は、近藤のところへ、まっすぐに近づいてくると、「こんにちは、
近藤信也さん」と挨拶をしてきた。

「そんなに警戒しなくても、大丈夫ですよ。あなたとお話ししたく
て来ただけですから」

そんなことを言われても、警戒を解くはずもない。

さすがに、先制攻撃まではしないが、警戒は緩めない。

「まあ、はじめって会って、警戒するなって方が無理だけど。でも、
私のこと、話には聞いているでしょ」

「何のことを言っているんだ」

「もしかして、私のこと、聞いてないの？」

「聞いてない」

「そんな」

少女は愕きの声を上げた。

「なら、私から話すわけには、いかないかな。」

少女は、急にしよげた態度をする。

「戻ってからキマイラに聞いてね」

キマイラ。キ助のことか。

この少女とキ助は知り合いということか。

「うん。じゃあ、別の話をしよう」

少女は、口元に手を当て、何かを考えているようだ。

「この2ヶ月間。楽しかった？」

『あいの世界』に関わったこの2ヶ月間のことを言っているのだろっか。

「そんな怖い顔しないでよ。確かに怖い思いをしたともうけど。人生の中で一番充実していたんじゃないの」

それは否定できない事実だ。

「あなたは、人よりも勇気や忍耐があるわけでもないし、知恵も冷静さもない。

正直、あなたがここまで生き残るのは予想外だったかな。もっと早く死ぬかと思った」

こいつは、人の命を何だと持っているんだ。

「気を悪くした？ 怒らないでね」と近藤に対して無邪気に微笑む。まるで、近所のわがままな小さな女の子と話しているような感じだ。

「あなたは私を知らないかもしれないけど、私はあなたたちのことをずっと見ていたのよ」

こいつは、自分や清水たちの行動をずっと監視していたということだろうか。

能力は、千里眼なのだろうか。

「なぜ、あなたが、ここまで生き残れたのか。あなたには判る？」
「判らないな．．．仲間に恵まれたからかな」

「それもあるけど．．．あなたは、戦いを楽しむことができるの。あなたは人が傷つくのが嫌いよ。」

でもね。自分が傷つくのには意外と寛容なのよね。Mだから」

勇気はないけど、マゾか。

酷い分析だな。

「でも、本質ではないわね。」

あなたは、生と死の間で生きがいを感じることが出来るの。

それがたまらなく快感なのよね。

あなたは弱い者イジメなんてしない。なぜなら、そんなの面白くないから。

一方、負けると判っている戦いもしない。

勝つか負けるか、ギリギリのところを楽しみたいのよ。

そんな時、あなたの魂が一番輝くの」

そんな時に魂が一番輝くなんて．．．幸せになれそうもない魂だ

な。

気のせいか、話を聞いているうちに、どんどん眠くなってきた。眠る魔法でもかけられるのだろうか。

だんだん、まぶたが重くなっ行って行く。逆らえない。

「どうやら、お目覚めの時間見たいね。私が一方的に話したただけだけど、お話できて楽しかったわ。

今後も楽しみにしているわよ。あなたの活躍を。じゃあね。」

僕は夢の中で寝てしまった。

3時限目の英語が終わった。

これで、やっと、一学期の期末試験の全教科が終わった。

隣の佐藤を見ると別の意味で終わってしまったような感じだったが、良い点数が取れたかどうかは、別にしてテストが終わったのは間違いない。

赤点さえ取っていなければ、補修もない。

このまま気分は夏休みだ。

この1週間の禁欲生活は辛かった。

時より、気分転換に、小説読んで、漫画を見て、ゲームセンターに行っって、TVゲームをやってレベルを10から25に上げたが、多少、禁欲したのは間違いない。

他の生徒たちも解放感で、いっぱいだ。

野球部など気合が入りまくりのところは、午後から部活だが、文

化系などは明日から部活だ。

という訳で、周囲の人たちの大半は、午前中からどこで、どう遊ぶかを話し合っている。

デートに、カラオケ、ショッピング、ゲームセンターなどなど、我慢していてことをやるつもりだ。

今日は、久々に遊ぶぞ！と思っていたら、携帯にメールが入っている。

当然デートのお誘いではない。

清水さんからのメール。

何やら事件らしい。

どうやら、遊びはキャンセルになりそうだ。

月下の美少女

「よお、博」

俺、川口 博ひろが、予備校で昼飯を食べていると、細い眼鏡をかけた全身緑色の男が声をかけてきた。

予備校で仲が良くなった数少ない人間である野口英雄だ。

現役生ではなく、自分と同じ浪人生。

そして、自分と同じように、野口も美大を目指している。

もっとも、こいつは、現代アートなので、どこか服装も性格も飛んでいるのに対して、自分は居たってノーマルだ。

「何、しけた顔して、飯食べてんだよ」

「いろいろ、上手く行かなくてな」

正直言っつて、煮詰まっていた。提出作品が、上手く作れないのだ。自分が入りたいのは、小金井にある美術系の大学。

受かるためには、勉強だけではなく、提出物つまり芸術作品を作成しないとイケない。

去年は提出物の評価が良くなり、落ちた。

田舎だと美術の勉強に限界がある。

そのために、わざわざ田舎から上京して1人暮らしをし、受験に備えていた。

正直自分でも、いま一だと思っていた。技巧的には悪くないのだが、心に伝わるものがない。

いや、自分の心から出ていないと言っべきだろうか。

気持ちが入っていない。

単純に絵を描くのが好きだから。

人に上手いと言われたから。

特技がそれしかないから、美大を目指したのだが、人に評価され
るとなると、怖くて筆が進まなくなる。

落ちたことで、ますますその傾向が強くなった。

「創作っていうのは、勉強と違って、時間をかければ良いってもん
じゃないだ。メリハリが重要なんだ。気分転換した方が良いぞ」

「判っているんだけどな。」

「女だ。他にも体を動かすのは良いぞ。俺はもっぱら、これだけだ
けどな」

そう言つと、腰を振る。好きな奴だ。

「・・・彼女も居ないのに良く言うよ」

「まあ、お前はどう見てもスポーツをするタイプじゃないな。散歩
とかどうだ」

確かに車の免許を取り、スクーターを乗り始めてから、自転車に
も乗らず、運動らしきものはしていない。

「あと・・・薬もあるぞ」

「・・・薬？合法ドラックって奴か」

良く芸術家や芸能人には、大麻などを吸い、ハイになった状態で
創作する人がいると聞いたことがある。

そのため、真似して、薬をやる奴は多い。

「馬鹿。渋谷とかで売っているやつは、まずいぞ。マジで。アロマ
だよ、アロマ。彼女からもらった奴があるんだ。やるよ」

今日も、創作活動が進まない。

予備校から家に戻り、キャンパスの前に座つても、イメージが何
も出てこなかった。

無理をして、筆を取っても、書こうとしても・・・何もイメージがないのだから書きようがない。

野口から貰ったフレグランス・キャンドルを使ってみた。

フレグランス・キャンドルとは、複数の薬草や花から抽出したものを混ぜて作ったロウソク。

早い話が、西洋版お香だ。

そのままでも良いニオイがするが、火を点けるとさらに良い香が部屋中に広がった。

確かに気分がリラックスし、良い気分になる。

俺は、そのまま寝てしまった。

気が付いたら、夜の9時。晩御飯も取らずに寝続けてしまった。

確かに気分がリラックスし、良い気分になるが・・・それだけだ。何か、インスピレーションを受けるわけではない。

野口のアドバイスを参考にして、散歩することにした。

そして、俺は彼女に出会った。

彼女と出会ったのは、満月の日の夜の11時。誰も居るはずのない川沿いの公園だった。

熱帯夜だったけど、外の空気は気持ちよく、気分転換には、ちょうど良かった。

川から吹く風はとても心地く、俺は軽い運動も兼ねて多摩川沿いの土手を歩いた。

そして、公園で俺は彼女に出会った。

彼女は、ベンチに座り、月を眺め、月の光を全身に浴びていた。

彼女を一言で言うと、白人の美少女。16歳くらいだろうか。

腰まで届く流れるようなプラチナブロンドの長髪は、月の光に白く輝いていた。

そして、透き通るような白い肌に大きなかわいい青い瞳。

たたずむその姿は、ただ美しかった。

美しい沈黙した彼女は、月の光を浴び、その姿は、まるで彫刻のようだった。

しかし、彼女の表情は、どこか悲しげだ。

まるで、異国に連れ来られ、塔に囚われたお姫様のようだ。

俺は、しばらくの間、時を忘れ彼女を眺めていた。

そして、家に帰り、筆を取った。

俺は、寝食を忘れ、夢中で彼女を書いた。

今までの中で、一番の作品だ。

だけど、何か足りない。

ひと眠りすると、俺は再び、夜の公園に行った。

彼女に会える保証はない。

毎夜毎夜、来るかも判らない。

けれど、俺は、公園に行った。

そして、彼女は居た。

昨日と同じように、ベンチに座り、月を眺め、その光を全身に浴

びていた。

次の日も、その次の日も、彼女はベンチに座り、空を眺めていた。そして、家に帰ると俺は、筆を取りキャンパスに向かって、絵を書き始めた。

サマー・ナイツ

「おまえ、彼女でも出来たのか」

予備校で昼飯を食べていると、全身緑色の男が声をかけてきた。遠くからでもよく判る男。野口英雄だ。

「なんで、そう思うんだ」

「だって、お前、目の下のくま、凄いぞ。勉強で出来るはずないから。出来るとしたら、女関係だろ」

自分と彼女の関係は、いったいなんだろうか。

自分はただ単に、夜に公園に行き、彼女を眺めているだけだ。

彼女も自分に気が付いているはずなのだが、関係は一方通行だ。

「正解ではないけど、半分当たりだな」

「片思いか」

「そんなところだ」

「落ちるぞ。マジで」

野口は珍しく神妙な顔つきをした。

「彼女を取るか、勉強を取るか、どちらかを選ばないと、落ちるぞ」

野口は服装と行動こそ、派手だが根はまじめな男だ。

「それに、女だけ受かって、男が落ちるのは、さらに悲惨だ」

野口は同じ高校の同級生だった女性と付き合っていた。

そして、2人は同じ学校を目指していた。

しかし、彼女は大学に受かり、野口は、落ちた。

それだけではなく、彼女は学校で新しい彼氏を作り、大学生活を楽しんでいる。

一方、野口は見事にお払い箱になり、予備校に通っている。

それ以来、野口は、勉強一筋。ではなく、新しい彼女を作るのに、奔走している。

前以上に、勉強に身が入っていないのではないだろうか、他人事ながら心配してしまう。

早い話が、現状において、野口は勉強よりも女を取っているわけだ。

そして、勉強に身が入っていないのを自嘲気味に言っているのだろつ。

「それはお前の話だろ。そんなの判らないだろ。本人の努力次第だ」世の中には、両方成し遂げる人間も居れば、どっちか一方を選んだのに、両方を失う人間も居る。

確かに、昼と夜、生活が逆転し始めた。

昼間眠くて活動するのが辛い。

しかし、彼女の存在は、自分の創作活動のプラスになっている。

俺は大丈夫だ。そう自分に言い聞かせた。

俺は、また夜の公園に行った。

彼女は、いつものようにベンチに佇んでいた。

いつもなら、俺は見ているだけだが、今日は違う。

勇気を出して、彼女に声をかけてみることにした。

相手は外人。日本語が話せるのだろうか。

毎日、彼女を眺めていて、気持ち悪がれていないだろうか。

勇気を出して、彼女に近寄ると、声をかけてみた。

警戒され、嫌がられるかと思ったが、彼女は、意外とすんなり答えてくれた。

言葉はたどたどしいが、会話には十分だ。

彼女は、俺が話しかけると、俺の目を見て話してくれた。

そして、俺は彼女の瞳に自分が写っているだけで、嬉しくなった。

彼女の名前は、ティア。

なんでも、ギリシャ神話の月の女神から父親が名前を取ったそう
だ。

そして、父親の仕事の関係で、日本に来て、まだ半年ほどらしい。
母親は早くに亡くなり。

父子家庭で父親は仕事が忙しく、家を空け気味。

地元で友達がおらず、夜になると寂しいので、公園に来て空を眺
めているそうだ。

彼女は、父親が留守で、天気の良い時は、大抵ここに来るらしい。

連絡用に、携帯電話の番号とメールのアドレスを知りたかったが、
聞くことは出来なかった。

恐るべきことに、今どきの高校生なのに、携帯を持っていないの
だ。

それでも、俺は彼女の友達になることを約束し、そして、出来る
限り来ることも一方的に宣言した。

天気の良い日は、夜公園に行くことが日課になった。

天気の日だけではない。曇った日も、ティアが来ているのではな
いかと、期待して行ってしまふ。

夜公園に行くと、ティアはいつものように静かに空を眺めていた。そして、俺は、いつも、ティアと一緒に空を眺めているとか、そんなティアを見つめている。

「なあ、ティア。写真撮って良いか」

「駄目よ。絶対に駄目」

「なんでだよ。良いじゃないか写真くらい」

「駄目。絶対に駄目。あなた、鶴の恩返しって話知っている」

「確か。機織り小屋を覗いて、鶴が帰っちゃう話だろ」

「そうよ。それと同じ。魔法が解けて、あなたの前に居れなくなるのよ。それでも、良いのなら。撮って良いわよ」

子供の頃、鶴の恩返しの話を聞いた時、大人はバカだと思った。

あんなに、娘さんが強調して、見ないでって言っているのに、見て、幸せをなくしてしまった。

あんな馬鹿な大人になるまいと子供の頃、思ったものだ。

まさか、自分がその状況におかれるとは知らずに。

でも、俺は写真を取ることはない。

鶴の恩返しの恐怖、悲劇を知っているからだ。

学習したというよりも、俺は、怖くて写真を取ることが出来なかった。

写真を取ったら、本当にティアが居なくなってしまうような気がしたからだ。

「じゃあ、せめて、夜だけじゃなくて、昼間も会えないのかな」

「昼間は駄目」

「そうか・・・そうだよな」

正直、ティアとの会話はあまり弾まない。

大抵、女は、お喋りで、こっちが聞きたくないことまで話す。男は、黙ってそれを聞くだけだ。

が、ティア自身から話しかけてくることはまずない。別にそれでも良い。

俺はティアの側にいるだけで幸せなんだ。

ティアの隣にいて、この空間と時間をティアと2人で過ごせるだけで幸せだ。

月の女神

今日は、二日ぶりに良い天気になった。

この会えない二日間が、どんなに長かったことか。

会えないことで、俺は、自分の中で彼女の存在がどれだけ大きかったを実感した。

彼女に会うために、川の土手を歩いていると、見知らぬ女性に声をかけられた。

年齢は、自分よりも少し年上で、女子大生か、短大生といった感じだ。

「君。今から、あれに会いに行くんでしょ。辞めときなさい。人生を無駄にするわよ」

何なんだ、この女は。突然、人に向かって「人生を無駄にする」なんて言うなんて。

しかも、ティアのことをあれ呼ばわりとは。

普通感覚の女ではない。

「あなたは、唐突に何を言うんですか」

「私の彼氏は、あれに会ってからおかしくなったわ。それまでは、私のことを忘れずに愛していてくれたのに。中山は、あれに夢中になり、私を忘れてしまった」

「俺には関係ないし。ティアが悪いわけでもない。悪いのはあんたを捨てた彼氏とあんただろ」

「そうね。彼が見たいものしか、見ないようになったのは私のせいね」

何を言っているんだこの女は。全然、会話になっていない。

「私は忠告しただけ。判断するのは、あなた次第」
そう言って、女は去って行った。

公園行くと、珍しくティア以外の若い女性が居て、ティアと話していた。

その女は、長髪を束ね、大きなスポーツバッグを持っていた。
さつき会ったと女とは、別の意味でやばい感じの女だ。

彼女は俺の存在に気が付くと、ティアに別れを告げ、去って行った。

「珍しいな。こんな時間に人がいるなんて。知り合い？」

「ううん。初めて会った人」

しばらく、いつものように静かに空を見て居た後、俺は思い切って、気になっていたことを質問した。

「ティアには、好きな人とか居るの？」

この質問には、二つの意味があった。

彼氏が居るとかという意味と、自分のことをどう思っているのか知るためだ。

さつきの女の言葉気になるのは、もちろんだが、ティアの気持ちは単純に気になる。

ほぼ、毎晩のように会っているので、俺の中では、恋人気分なのだが、ティアは友達気分なのかもしれない。たぶん、そうだ。

友人の田中は、自分では彼氏だと思っていたのに、相手から見ると男友達の1人という、勘違い彼氏・思いこみ彼氏状態を半年続けていた。

「彼氏って意味？」

「そうかな」

「いないわ」

この言葉は、嬉しくもあり、悲しかった。

少なくとも自分は彼氏ではないことが、確定した。

「候補はいないのか」

「居なくもない」

「誰？」

「内緒」

ティアは肝心なところを話してくれない。

この間の話もそうだが、ティアには、謎めいたところが多い。

まさに、不思議ちゃんだ。

「なあ、ティア。いつか、俺の田舎に見に行かないか」

「どうして？」

恋人として両親に会ってほしいとは、さすがに今は言えない。

「街の明かりがないから、ここから見るよりも、ずっとたくさん
星が見えるんだ。その星空をティアと一緒に見たい」

「そうなんだ。じゃあ、いつか連れて行ってね」とティアは無邪気
な笑顔で答えた。

俺は、野口に完成した絵を見せ、評論を求めた。

「お前の絵。近頃、凄くなつたよな」

「そうだろ」

自分で、そう思っていた。

彼女に出会ってから、創作意欲が増し、次から次へとイメージが

湧いてくる。

「特にこの絵が良いよな」

野口が選んだのは、ティアをモデルに書いた絵だ。題名はありきたりだが、月の女神。

「はあ」

野口は絵を見ながら、大きいため息をついた。

「やっぱり、女が居ると違うような」

「当たり前だ」

「俺に会わせてくれよ。絵みたいな美少女なんだろ」

「まあな．．．でも、お前には会わせない」

「なんでだよ」

「彼女が汚れる」

今日もいつものように、夜公園に出かけ、ティアに会った。

そんな毎日のように会って、会話もなく座っているだけで、飽きないかと言われるが、飽きなんてまったくくない。

俺は、不思議なことに会ったたびに新鮮な気持ちで、ティアに会うことが出来た。

そして、いつもと同じように、ベンチで座っている。

「博さん」

ティアの方から話しかけてくるとは、珍しい。

もしかして、愛の告白だろうか。

「何だい。ティア」

「私。ここに来れなくなるかもしれない」

「なぜ、なんだ」

「私．．．引越すかもしれないの。そしたら、もうここには来れ

なくなる。あなたには会えなくなる」

「ティアは、それで良いのか」

「良いも悪いも、私には、どうしようもないわ。出会いがあれば、別れがある。それが運命よ」

「ティアは強いな」

「強い？」

ティアは、頭を下げ、俺の顔を下の方から覗き込んだ。

その顔は、無邪気で可愛らしく、愛おしかった。

俺は、たまらず・・・ティアにキスをした。

2人だけの時間、2人だけの世界。

この時間が永遠に続けば良いと思った。

その日以来、彼女と会うことができなくなった。

それでも、毎夜、公園に行つて、ベンチに座り、空を見上げる。
今、どこかで、ティアも同じように、空を見ているのだろうか。
そう考えるだけで、どこかティアと繋がっているように感じられた。

屑

彼女に会えなくなってから一週間ほどたった。
不思議と寂しさはあまりなかった。

最後にキスした時の、あの時の彼女のぬくもり。あのぬくもりを体が覚えている。

それ以外は、まるで夢のようだった。

彼女との出会いは、本当に現実だったのだろうか。

彼女は、幻の少女なのだろうか。

本当に、月の女神だったのではないだろうか。

かぐや姫のように一時だけ地上に舞い降りてきて、月に帰ってしまったのではないだろう。

そう感じられるほどの、夢のようなひと時だった。

そんなことを考えながら、日中、多摩川沿いの道路をスクーターで走っていると目を疑う光景を見た。

彼女が居たのだ。

しかも、他の男と。

正確には、彼女が居たのは、河川敷に作られた段ボールとトタンの家だ。

彼女は、身なりの汚い三十代の男と一緒に居た。
見るからに浮浪者だ。

彼女は、プラスチック製のビール瓶のケースに座り、そんな男とも、親しげに話していた。

自分の心奥底から、何かが湧きあがってきた。

ティア。なぜ、君は、そんな男と話しているんだ。
昼間、俺と会えないと言ったのに、なぜ、その男と昼間話しているんだ。

昼間、俺と会えないのは、その男と会うためなのか。

なぜ、俺とは会えないのに、その屑と会っているんだ。

俺よりも、そんな屑みたいな浮浪者が大切なのか。

俺は、ティアに駆け寄った。

ティアも俺の姿を見て驚いている。

俺は、彼女の腕を掴んで、その浮浪者から彼女を奪い去ろうとした。

「何をするんだ。エミーを返せ」

男は、激しく抵抗した。

男は俺に体当たりをし、俺を跳ね飛ばした。

俺は濡れた地面に倒された。当然、顔や手、服が汚れた。

その瞬間、俺の頭は真っ白になった。

近くにある角材を掴むと、男の頭に振り下ろした。

男が倒れ込み、動かなくなると、俺はティアを連れ、その場から去った。

俺は、スクーターの後ろにティアを乗せると、ティアを連れて逃げた。

出来るだけ遠くへ行きたかった。

ガソリンを補給すると、持ち金もなくホテルや宿に泊まる金もない。

もう、野宿するしかない。

「ひさびさに、いつしよに星でも見よう」

俺とティアは、公園でベンチを見つけると空を見上げた。

都会の明かりから離れた田舎の空は、都会とは違う文字通り満天の星空だった。

空は星の光で埋め尽くされていた。

「ティア、どこにも行くな。いつまでも、俺と一緒に居てくれ。頼む」

ティアは、頷いてくれなかった。

ただ、悲しそうに俺を見つめていた。

なぜ、そんな目で僕を見るんだ。

なぜ、いつまでも、僕と一緒に居てくれないんだ。

俺は、ティアに迫った。

しかし、ティアは答えてくれなかった。

ティアと別れたくない。ティアを誰にも渡したくない。

写真

場所は、川口博とティアが、いつも会っていた夜の公園。いつも通り、ティアはベンチに座り、月を見上げていた。

そこに現われたのは、川口博ではなく、清水葵。

「満足した？」

「ええ。あんたの言うとおりだったわね」

ティアは彼女に答えた。

「私は彼らを幸せにしてあげようとしているだけなのに．．．なぜ、上手くいかないのかしら。けっきょく、彼らの人生を壊してしまっただ」

「あなたは善意でやっているのかもしれないけど．．．あなたの力は人間には過ぎた力なのよ」

「そうね。でも、そう言うあなたは、カードを集めて、何する気なのかしら。魔法でああなたは幸せになれるの？」

清水は何も答えなかった。

「まあ、良いわ。私の負け。約束の通り、素直にあなたのものになるわ」

清水は、ポケットからカードを取り出した。

天空にひととき大きな星とその周りを囲む7つの小さな星が、地上には水と大地に壺から液体を注いでいる女性が描かれている。

『星』の大アルカナのカードだ。

正位置ならば、調和、自制、節度、献身。逆位置の意味ならば、浪費、消耗、生活の乱れ。

正位置の意味ならば、『希望』、『ひらめき』、『願いが叶う』。まさに芸術家向きのカードだ。

逆位置の意味ならば、『失望』、『無気力』、『高望み』。

目覚めると、もう昼になっており、ティアは居なくなっていた。俺が寝ている間に、出て行ったのだろう。

しかし、あんな醜態を見せたんだから、出ていかれて当然だ。

冷静になり、昨日のことを思い返すと、俺は最低のことをやった。

ティアに夢中になっていて、人を傷つけてしまった。

あの後、彼はどうなったのだろうか。

まさか、当たり所が悪くて死んだなんてことはないだろうか。

角材で殴ったのだから、死なないとは言い切れない。

俺はニュースになっていないか、コンビニに行き新聞を確認した。翌朝の新聞の地域ページを見ると、昨日、俺が殴った浮浪者に関する記事が載っていた。

浮浪者が、若者に襲われて、重症になったとの記事だ。

骨折だけで済んで、死んでいないのが、唯一の救いだ。

記事を読む限り、犯人の特徴は青年というだけで、これといった特徴は書かれていない。

捜査上に秘密にしているだろうか、それとも判らないから書いていないのだろうか。

どの道、浮浪者が俺の顔を覚えていて、似顔絵を画かれていたら、お終いだ。

ティアに嫌われた上に、犯罪者だ。

最悪だ。

どこで、どう人生を間違えたのだろうか。

後悔しても、もう後戻りはできない。

俺に出来ることは、もう家に帰ることだけだった。

日曜日、家に居ると警察が家に来た。

警察は、扉を開けると問答無用に部屋の中に押し入ってきた。

「この写真に写っているの君だよな」

そう言うと、警察は一枚の写真を見せた。

スクーターに乗っている自分。そして、その後ろに乗っているのは、一体の美しいマネキン。

ティアじゃなくて、マネキン。

俺は、いったい何をやっていったんだ。

「この写真は何なんですか」

「君が逃げるところを偶然、写真を取っていた女子高生が居たんだよ。後ろにマネキンを乗せ走っているスクーターなんて珍しいからね。良く覚えていたよ」

いったい、どういうことなんだろうか。

俺は魔法をかけられていたということなのだろうか。

それとも、鶴の恩返しのように、マネキンがティアに化けていて、写真を取られたことにより、マネキンにかけられていた魔法が解けたのだろうか。

いや、そもそも魔法なんかではなく。頭がおかしくなった俺が、ずっと夜、一人でマネキンに話しかけていたのだろうか。

そして、あの浮浪者も、俺と同じようにマネキンに魅せられた者のひとりということなのだろうか。

ハッキリしていることは、もうティアには二度と会えないということだ。

なぜか、涙が次から次へと溢れ出てきた。

「こりゃ。駄目だな。完全にラリってるよ」

目の前の青年川口博は、目が泳いでいて、自分たちの方を見ようとしていない。

写真を見せた後、波を流し始めたかと思うと、ぶつぶつ聞き取れないような小さい声で独り言を延々と呟いている。

「それにしても、何だ。この臭いは」

「キャンドルのニオイですね」

部屋の奥に居る警察官が答えた。

「合法ドラッグって奴か。ドラッグ吸って、ハイになって、創作か。拳句の果てに、マネキンをめぐって浮浪者と喧嘩か。芸術家って奴は、気がしれないな」

閑話 その1 正統所有者

近藤信也には、このところ気になることがあった。

期末試験の夜に夢の中で出会った女性のことだ（外伝1鎌倉編閑話）。

彼女は、「キマイラに聞け」と言っていた。

それくらい、キ助に聞こうと思っていたのだが、なかなか機会がなかった。

キ助が、彼女のことを僕に話していないということは、良い悪いは別として、キ助なりに考えがあってのことだろう。

そして、他のメンバーも知っていることなのか、どうなのかも気になった。

実は、知らないほうが良いことなのかもしれない。

ならば、キ助と2人だけの時に、直接聞いて判断しよう。

試験期間中は集まらなかったの、原田さんの家に集まったのは久しぶりだった。

議題は「強化合宿をどこで開くか」。

早い話が、夏休み、どこに遊びに行くかだ。

海に行くか、山に行くか。

近場に行くか、遠くに行くか。

温かいところに行くか、涼みに行くのか。

温泉は必須か、いなか。

議論は、荒れに荒れた。

議論が停滞ムードになり、皆の意識が散漫になった時、近藤は隙を見て、キ助を持ちだした。

「何すんねん。ワレ」

「ちよつと、聞きたいことがあるんだ。付き合ってくれ」

そして、トイレに行くと、洋式トイレの便座の上にキ助を置いた。

「なんや、聞きたいことつて。清水のプライバシーのことは教えられんぞ」

キ助は、何か勘違いしているようだ。

近藤は、期末試験の夜、夢の中で出会った女性について話した。

その瞬間、日頃は、自分に対して、態度が大きいキ助が、動揺したそぶりを見せた。

何やら、キ助は重要なことを、隠しているようだ。

「あいつに会ったんか・・・」

キ助は、あぐらをかき、便座に座った。

「本当は、もっと早く話すべきやったんだ」

神妙そつな顔つきをする。もっとも、人形なので、たかが知れているが。

「現在、カードの所有者は、お前以外にもたくさんおるけど。本来、正当な所有者は1人だけなんや。

そして、その正当な所有者が、お前が夢の中で会った女、木下桜だ。

カードには悪魔が封印されているのは、お前も知っているだろう」

良く覚えていないが、確かそんなことを言われた記憶がある。
とりあえず、キ助の問いに近藤はうなずいた。

「お前たちは、あまり意識しないで魔法を使っているけど、本来、カードや魔法は取り扱いが非常に危険なものなんや。

悪魔の誘惑に負ける危険性があるし、悪いことに魔法を使う可能性もある。

だから所有者は、悪魔の誘惑に負けない強さと正義の心を持たないといけない。ここまでは知っているよな」

再び、近藤は、うなずいた。

「現状、お前たちが使っているカードの力は、裏面の悪魔の力だけだ。カードにはもうひとつ、天使の力がある。

だが、これは、心が清い正統所有者じゃないと使えない」
「どうしてなんですか」

「悪魔とは罪の重さで墮天した天使のことだ。正統所有者が所有すれば罪は清められ、悪魔は本来の天使に戻る。

そして、奇跡を起こすことが出来る。お前、自分が清い心の持ち主である自信あるか？」

「無理です」

近藤は自信を持って答えた。

「そうだろ」

「正統所有者の木下桜さんって、どんな女性だったんですか」

悪魔の罪を清められる程の心が清い女性とは、いったいどんな女性なんだろうっか？

近藤には、そちらの方が気になった。

「彼女は、純粹で優しく思いやりがある少女だった。他人の幸せを自分の幸せと感ずることが出来る少女だった。

彼女は、心の底から皆の幸せを望んでいた。11歳でカードの邪悪さに負けない資質と強さがあった」

キ助の口調から強い後悔が感じられた。

「11歳なんて、なんで、そんな無茶を」

「年齢は関係ない。重要なのは資質だ。」

正統所有者が不在のまま50年。カードの意思と力を抑える封印は限界だった。

テストが開始されず、正統所有者が所有しない場合、カードは四散して、今以上の禍を巻き起こす危険性があった。

だが、全てのカードに所有者と認められる前に、事故で植物人間になってしまった。それが今から10年ほど前だ」

「彼女は今、どうなっているんですか？」

「今も病院のベットで眠り続けている」

近藤が出会った女性は、20歳前後。恐らく彼女が成長した姿なのだろう。

眠り続けている。微妙な表現だ。

精神だけ『あいの世界』に居続けているとも考えられる。

しかし、キ助の語る木下桜は、近藤が出会った木下桜とは印象が異なるが、どういうことだろうか。

その点をキ助にたずねてみた。

「詳しいことは彼女が話したからないので、判らんが。おそらく、事故が原因で、彼女の心は今二つに分かれているのだろう。」

1人は、人々が幸せに暮らせる天国を望んでいた純真な少女の彼女。もう1人は憎しみに汚された彼女。

たぶん、お前が出会ったのは彼女だ。彼女は天国を守るために、人間には地獄が必要だと考えている」

「地獄？」

「すでに経験しているだろ。木下桜が所有しているカードは『世界』
。そして、血と錆の世界は、彼女のカードが作り出した空間だ」

「ずいぶん長いトイレね」と清水。

「大だ」

身も蓋もない会話の後、暴君清水が重大な事実を告げた。
「場所。もう決めちゃったわよ」

閑話 その2 脳内メーカー には要注意

右上の挿絵を有効にご覧ください。

夏休みも、相変わらず、原田の家に集まり世間話。

「なあ、近藤。私って、お金の汚いかな」

清水さんが、珍しく僕に相談してきた。

「汚いとは思いませんが．．．儉約家ですね。なんですか、唐突に」
「脳内メーカー って知っているか」

「知ってますよ。だいぶ昔に流行ったHPですよ。」

脳内メーカー。名前を入力すると、その人の名前を入力すると脳内イメージが表示されるというHPだ。

うそこメーカー（<http://maker.usokone.t/>）さんが提供していて、なかなか面白いHPだ。

もっとも、出力結果は、しよせん遊びであって、真剣にとらえる必要はないのだが。

「当たっているのか」

「名前から適当に結果を出しているので、いい加減ですよ」

清水さんは、ETに詳しいのだが、もっぱらハッキング専門で、流行には疎い。

「そうか。そうだよな。名前を入れただけで判る訳がないよな」

「何か、悪い結果でも出たんですか」

原田が心配そうに尋ねる。

「．．．多少．．．だけど、気にするようなことじゃない」

試しに、清水葵と名前を入れてみた。

皆で、その結果を覗きこむ。

> i 1 6 0 3 7 | 2 2 2 1 <

うん。見事に、脳の中が、『金』だらけだ。そして、微妙に、『H秘愛悪』の文字が・・・

見た瞬間、思わず笑ってしまった。

清水さんは、その瞬間を見逃さなかった。

「近藤。お前の名前も入れてみる」

近藤は自分の名前を入れてみた。

> i 1 6 0 3 9 | 2 2 2 1 <

「見事に、『H』だらけですね」と原田。

「どうせ、小野寺さんのことでも考えているのだろっ」「微妙に当たっている気がする。」

原田さんの名前も入れてみよう。

結果を見て、喜ぶ原田。

> i 1 6 0 4 0 | 2 2 2 1 <

『善』だらけ。

そして、『家』と『楽』が少し。なんか、すごい良い結果出た。

バグか？

試しに、結城隼人を入れてみた。

> i 1 6 0 3 8 — 2 2 2 1 <

半分が『H』、半分が『休』、少しばかり『秘』が出た。
どうやら、バグではないようだ。

「見事に、『H』だらけですね。でも、信也さんよりは少ないですね」と原田。

「近藤は、根は結城以上のスケベということが、
なんか、墓穴を掘った気がする。」

同じページの中に、「恋愛通信簿」というのがあった。
うーん、妙に気になる。
やってみることにした。

脳内メーカー以上に、微妙な結果になった。

> i 1 6 0 4 4 — 2 2 2 1 <

「恋愛偏差値46ですか」
「思ったより良いじゃないか」
偏差値は50が標準だから、標準以下ということだ。

「『相手の気持ちを理解できる』『約束を守ることが出来る』『言葉で愛情を表現できる』が、で、『行くべき時に強引に行ける』『うまくキスが出来る』『ベットの力で力を存分に発揮できる』が×

ですか。なんか、それっぽいですね。当たってますよ。これ」「
「そうだな。凄く近藤っぽい。当たるな。これ」

近藤っぽいって、女性陣の自分に対する評価は、こんなところなんだろうか。

やっぱり、友達としては良いけど、男としては、駄目という評価だろうか。

「そんなこと言って良いんですか。次は皆さんをやりますよ」「
「とりあえず、結城を先にやれ」

> i 1 6 0 4 3 — 2 2 2 1 <

「恋愛偏差値62ですか」

「凄いなほとんど、か」

「『相手の気持ちを理解できる』が×なところが、凄く結城っぽいな」

これは、凄く当たっているのではないだろうか。

「次は原田さんをやりま〜す」

> i 1 6 0 4 5 — 2 2 2 1 <

結果が出た瞬間、原田さんの顔が赤くなった。

「恋愛偏差値55ですね」

問題は、偏差値よりも、評価が高い場所。

「『行くべき時に強引に行ける』が×だけど、『うまくキスが出来る』『ベットの上で力を存分に発揮できる』がですか・・・」

「本人的には、当たっていると思う?」
清水が原田に意地悪な質問をする。

「次行きましょう。次。次は、清水さんですよ」
原田は答えをはぐらかした。

> i 1 6 0 4 2 — 2 2 2 1 <

「偏差値 . . . 41ですね。僕より低いですよ」

「『積極的に異性と会話できる』と『約束を守ることができる』が

× . . . 女子校だからな . . . 」

清水は妙に納得して、落ち込んでしまった。

当たることが良いこととは限らない。

今度から『脳内メーカー』と『恋愛通信簿』をやる時は、気を付けようと思った。

最後に、皆に内緒で、小野寺瞳さんの「脳内メーカー」をやってみた。

結果を見て、僕は、彼女に一生敵わないような気がした。

> i 1 6 0 5 3 — 2 2 2 1 <

プロローグ

家出少女たちが、渋谷の街から消えている。

そんな噂が街に広がっていた。

消えるのは、特に可愛い子。

なんでも、暴力団が売春目的で家出少女たちを監禁しているらしい。

どうせ大人たちが作った家出させないための嘘。

多くの少女たちは、そう考えた。

大人たちは、嘘はいけないと言っておきながら、子供を操るために嘘をつく。

正しい嘘。

でも、そんな嘘は、成長したら通用しない。

しかし、同時に別の噂も広がっていた。

消えた少女たちは、魔女の儀式の生贄にされているという噂だ。

いったい、なぜ、魔女の儀式の生贄にされていると判ったのだろうか。

なんでも、儀式から命からがら、逃げ出した少女が居るらしい。

その少女の名前は？

判らない。

噂なんて、そんなもの。

誰も説教臭い話なんて聞きたくない。

面白ければ伝わるし、真実でも面白くなければ伝わらない。

夜11時、渋谷センター街。

私の住んでいる群馬とは、何もかもが違う。

街の明るさ、人のファッションや人通りの多さ。

何よりも、こんな時間なのに、店が開いていて、どの店にも人が大勢いる。

私の家で生活も今日で三日目。

だいぶ、夜の渋谷に慣れてきた。

最初の日は怖かく不安だったが、知り合いもできた。やっぱり、群馬のヤンキーとは違う。

道で休んでいたら、真面目そうな身なりのしつかりした20代後半の女性に声をかけられた。

その女は、警察手帳を取り出し、見せた。

私服警官だ。

油断した。

群馬とは、警官も違った。

女は、しきりに私の年齢と名前を聞く。

嘘の名前を言うが、女は納得しない。

ウザイ、しつこい。最悪の女だ。

私は女の間をついて逃げた。

走って逃げたら、その女も凄い勢いで追いかけてきた。

だけど、20代後半のおばさんと、10代後半では体力が違う。

どうにか、おばさんを振り切ることはできた。

その代わり、着替えの洋服とかが入ったカバンを置いて来てしまった。

最悪だ。

まあ、携帯と財布があるだけましだろう。

カバンや洋服は、稼いで買えばいいだけだ。

さて、今日の宿をどうするか。

友達の家に行くか、それとも、援助交際の相手とホテルに泊まるか。

洋服やカバンがなくなった以上、出来るだけ早く稼いで買いたい。私は携帯を取り出すと、サイトにアクセスした。

夏休み。

のんびり過ごす人もいれば、バイトをする人も居る。部活に精を出す人もいれば、遊びに精を出す人も居る。

自由度が高い分、充実した日々を過ごせるか、何もなく過ごすか、その差は大きい。

夏休み。

何が素晴らしいって、夜更かしもできるし、朝寝坊もし放題。のはずなのだが・・・

「お兄ちゃん。起きなさい!!」

毎日容赦なく、妹の里桜に叩き起こされる。

しかも、いつもよりも早く。

小6の里桜は、ラジオ体操で早く起きるのは判るけど、お兄ちゃん、関係ないでしょ。

「夏休みだからといって、怠惰な生活は許しません!!」

小6の妹が、高2の兄に言う言葉だろうか。
まあ良いけど。

午前中は、テレビを見たり、家事をしたり、勉強をしたり、妹の夏休みの宿題を見たりで、何となく終わってしまふ。
午後は、もっぱら部活と課外活動とアルバイトだ。
今日の午後は、部活だ。

夏の暑い体育館での練習は続く。
炎天下の野球部やサッカー部よりはましたが、この蒸し暑さはやっぱりヤダ。

だが、頑張らないといけない。
演劇の北多摩大会が開かれるのは、10月1日から10日。夏休みの中の作り込みがものを言う。
それに、最悪、夏休みの頭で演目が駄目だと判れば、変更や修正が効く。

現在練習しているのは、第1幕第1場、悪天候の中、荒野に三人の魔女が現われるシーンだ。
意味不明な言葉だが、マクベスは、勇猛で名高い武将マクベスが、三人の魔女の予言に惑わされ、人生を狂わせていくという物語なので、魔女が重要な役割を演じている。
照明兼音響係として、雷鳴と稲妻の照明や音響をしないとイケない数少ない忙しいシーンだ。

雷鳴と稲妻とどろく中で三人の魔女が舞台上に登場。
そして、3人の魔女が順番に話す。

「いつまた会おうか三人で。雷、稲妻、雨の中？」

「戦と嵐が収まって、勝利のやつが負けたとき」

「すなわちそれは日暮れ前」

「暗闇控えてどこで会おう」

「それならいつものあの荒野」

「会おう、会おう、会おうよマクベス。会ってみたいマクベスに」

「三人集まりや輪になって」

「人の定めを駆け巡る」

「覚えていらっしやい魔女三人。これから起こる出来事を。」

「いいは悪いで、悪いはいい。すぐに向かおう、彼の元」

三人同時でセリフを言った後、魔女たちは甲高い声で笑う。

それにしても、不思議だ。

日頃は、駄目人間たちの集まりなのに、舞台の上では、輝いて見える。

部長の三上先輩は、当然として、日頃は無口で存在感がなく毒しか吐かない吉岡先輩も舞台では一人何役もこなし、沢山のセリフを言っていたりする。

日常では、濃い鈴木も舞台の上では主演で決まっているし、男性が少ない演劇部で、長身を活かし男役もやる田中は、中性的な魅力で妙にかっこいい。

高校入学後、赤点で補修だらけ、バカまっしぐら山村美紀すら、セリフを間違えずに覚えている。

人間、何かしら得意なものがあるということか。

そんなこんなで、部活をやっていると、すぐに夕方になる。

今日は、課外活動の日だ。

議題は、渋谷で起きていると噂されている『女子高生失踪事件』。

今年の夏休みは、いつもより暑く、忙しい。

第1話 スナッフ・フィルム

近藤は珍しく昼ごろから、原田の家を訪れた。

今日は、夏休みの計画を話すためではなく、まじめに女子高生失踪事件について議論をするためだ。

ただ単に、女子高生が失踪するだけなら、自分たちの管轄ではない。

しかし、オカルトがらみの変な噂が付いているとなると、ほっておけなくなる。

近藤が原田優奈の家に行くと、先に着いていた清水葵が、優雅に紅茶を飲みながら、パソコンで動画を見ていた。

それに対して、結城は席に着いているが画面から目を背けている。

原田優奈は、動画を見ておらず、台所で何やら作っていた。

清水さんは、いったい何を、見ているのだろうか？

画面を覗くと、全身を黒いローブで包んだ仮面を付けた人物が、床の魔法陣に磔にされた少女の腹を割り、内臓を取り出していた。

凄惨な映像だ。

BGMの類は一切なく少女の悲鳴だけが、スピーカーから流れる。それに対して、清水さんは平然と目を背けず映像を凝視している。

題名を見ると、『魔女の生贄 その4』とある。

アクセス数は約2000。少なくともはないが、あまり多い方ではない。

全部で5までであるが、内容とアクセス数に大差はなさそうだ。

「何かの映画ですか」

僕は清水さんに声をかけた。

「噂だと、本物の殺人映像って話なんだけど・・・」

「本物の殺人映像ですか・・・」

「こういう映像のことを何て言うんだっけ。たしか、ムミンに出
てきそうな名前だったんだけどな」

清水がもどかしそうに近藤にたずねる。

それは、スナフキだ。

何となく音感だけは、似ているが、明確に違う。

この映像は、俗に言うスナッフフィルムだ。

『スナッフ・フィルム（ムービー）』とは、乱暴な定義をすると「
人間が殺害される時の様子を収めた映像」だ。

実際の殺人の様子じゃないかと噂される映像は、腐るほど存在し
ているのだが、実在だと確認されたものは少ない。

ルーシー・ブラックマンさんが殺害された際、殺人の映像が撮ら
れているのではないかと、週刊誌等で取り上げられたこともあった。
しかし、結局、フィルムの存在は確認されなかった。

それ以外にも、猟奇殺人事件が起こるたびに、その存在が噂され
ては消えていった。

大抵のものは、無名の映画のワンシーンか、映画マニアが趣味で
作ったものだ。

本物のわけがないんだ。

極稀に、海外では、「ウクライナ21」など本物が公開されるが、
幸運なことに日本製（？）の本物が公開されたことはない。

ただし、公開されたものがないだけで、実は日本にも本物が存在している。

しかも、ある程度の人間が実際に見ている。

そう、あの連続少女誘拐殺人犯「宮崎勤のビデオ」だ。

自分が誘拐した少女を殺害したときの映像らしいのだが、現在、どこにあるのかは判っていない。

ときより、偽物がネットにあがるが、本物は、警視庁の奥深くに厳重に保管されているのだろう。

「この映像、本物だと思う?」

「良くできていますが。まず、偽物じゃないですか。スナッフ・フィルムは、ほとんどが、昔の映画の殺人シーンを編集したものでったり、自主製作映画って話ですよ。本物の殺人映像は『ウクライナ21』くらいかな」

「本物の場合もあるんだ」

「極稀にですけどね。アップした人が誰からは判らないんですか」

「能力を使ってみただけど、ネットカフェからで判らなかつた」

「じゃあ、製作者ですね。たぶん、自主製作だと思うんだけど・・・」

ネット上の掲示板、ブログを丹念に読んでいくと、「魔女の鉄槌」という作品が候補に挙がった。

Googleの検索では、直ぐに出てこなかつた。

「どうも、一度ネットに上げたけど、過激過ぎて、削除要求が出たみたいね」

大手のサイトでは、著作権違反の作品は削除され、過激すぎるものは年齢制限を受ける。

そして、サイト運営者の警告を無視したものは、アカウント自身

を削除されてしまう。

しかし、ある海外の動画サイトで、コピーした作品を見ることが出来た。

こちらにもアクセス数が600程度のさらにマイナーな作品。

粗筋を読んでみる。

『街では、家出少女の失踪事件が増えていた。『家出少女たちが、魔女の生贄になっている』』

そんな噂が出始めたころ、ネットで、『魔女の生贄』という題名のスナッフ動画が流れ出した。

多くの人は偽物だと考えたが、地域生活課の女性警察官は1人捜査を始めた』

「近頃の噂と、似てるな」

「やっぱり、噂は、その映画を元にしたものか。映画製作者たちが、意図的に宣伝用に流した可能性も出てきたな」と結城。

確かにその通りだ。近頃、Y U T U B Eとかの動画サイトでは、宣伝目的にオフィシャルな動画が乗せられたりする。

どこかの集団が、話題作りに流したとしても、おかしくない。

しかし、噂だけが1人歩きして、大元の動画に関する情報が噂から消えて、動画はネットから削除だとしたら、はた迷惑な話だ。

「映像見えますか？ 1時間くらいだよ」

面白い映像ではないが、今日は時間はたっぷりある。

「そうね」

「この動画は、途中から見えない奴だな。1時間くらいの短編だから最初から最後まで見るしかないな」

「怖いんですよね」と原田。

「こついつの嫌いなんですか？」

「怪談とかホラーは好きなんですけど．．．スプラッタ系は嫌いで
す」

怪談やホラーは、良いんだ．．．

女性って結構、怖い好きだよな。

「この手の殺人シーンに凝っている奴は、ストーリー自身には凝らないのが多いから、残酷シーンを抜かせば、たぶん怖くないよ」

結局、ネットの映像を皆で見ることにした。

第2話 少年育成課

窓もなく締め切った薄暗い室内。

数多くの口ウソクに照らされる祭壇と床の魔法陣。

魔法陣の真ん中では、制服を着た少女が両手両足を広げた状態で寝かされていた。

少女の手足は、杭で床に打ちつけられ、身動きは取れない状態になっている。

少女は目を覚ましているのだが、抵抗を一切しない。

何か薬でも飲まされているのだろうか、それとも、さんざん抵抗した後で、諦めてしまったのだろうか。

部屋には、もう1人居た。

鉄仮面を付け全身を黒いローブで包み、何やら呪文を唱えながら、魔法陣の周りを周っている。

手の細さから女だと言うことが判る。

女は魔法陣を周りながら、儀式用のナイフを取り出すと、少女の手首、足首の動脈を切った。

少女の鮮血は、床に落ちると、まるで意識を持っているかのように、魔法陣に吸い込まれていく。

魔法陣が鮮血に染まっていく。

女は魔法陣を周るのを止めると、少女の脇に立った。

女は、少女の制服を割くと、少女の腹にナイフを刺し、陰部に降ろしていく。

激痛のあまり、我に帰り悲鳴を上げる少女。

だが、血を抜かれ、手足を縛られているため、悲鳴を上げるぐらいしかできない。

女は、さらに腹を割き、少女の腸を引っ張りだし、トレイに置い

た。

腸を全て取りだすと、肝臓や子宮などを次々と取り出す。

悲鳴を上げ続ける少女。

通常は死んでもおかしくないのに、少女は生き続けている。

女の解体は、内臓から胸、心臓へと進んでいくが、不思議なことに少女は、まだ生きています。

肺がないので、声を上げることもないが、まぎれもなく、少女は生き続けていた。

続いて、女の解体が、目や舌へと進み、そして、最終的には頭を開けて、脳を取りだした。

「酷い映像ですね」

渋谷署少年育成課の婦警、高島沙希が現在ネットにアップされ話題になっている動画を見た感想は、それしか浮かばなかった。

「まったくもって、こんな映像を好き好んで、見る奴の気がしれないな」とベテランの後藤巡查。

「それにしても、良くできていますね。ハリウッド並ですよ」

3年後輩の野田浩二が映像の出来栄を称賛する。

知らない人が見たら、本物だと思っ程出来栄は良い。

内容を見る限り、内臓を取り出しても少女が生きているなど、本物のスナッフフィルムではない。

残酷な映像がネットに乗ったとしても、それは渋谷署少年育成課の仕事に関係はない。

問題は、服が切られ性器が露出している点と現在、少女たちの間で流れている噂との関連だ。

『家出少女たちが、魔女の生贄になっている』

そんな噂が出始めたころ、ネットで、『魔女の生贄』という題名のスナッフ動画が流れ出した。

現状では4作品。

他の物を見ても内容は似たようなものだ。

なんでも、出て来る女の子が、行方不明の少女に似ていると言うのだ。

つまり、未成年の家出少女が出演していること可能性がある。

渋谷には、家出少女が多い。

家出少女が行方不明になるのは、大抵、家に戻るか、男のところ
に転がりこんで、同棲するパターンだ。

だが、実際に、犯罪に巻き込まれてしまうパターンも多い。

そのため、内容を確認したのだが、生贄の少女にも、魔女にもモ
ザイクがかけられており人物の判定は出来ない。

制服を見る限り、行方不明の少女たちの学校と同じものなのだ。
だが、どの学校にも、行方不明・家出の生徒がいる上に、制服の
売買が盛んなので、誘拐されてた生徒が出演しているとは、断定で
きない。

この映像を誰が作り流したのか。

どこかの映画研究会か、マニア、ひよっとしたら映画関係者が作
成し流したものでしょう。

いくらなんでも、この撮影のために、少女を誘拐したとは考えら
れない。

お金を出せば、済むことだ。

映画撮影をきっかけに、同棲生活になる可能性もないわけではな

い。

その結果、行方不明になったとも考えられる。

実際は、この映像が先で、噂が、この映像を見たために起きたのかもしれない。

少女の身元確認も含めて、製作者を見つけ出すことが先決だろう。

第3話 街頭補導

投稿者の身元を見つけ出すことは容易にはいかなかった。

直接犯罪行為と関係が不明なことから、動画サイトからの情報提供の遅れた。

さらに、条例がない川崎からのアップロードということもあり、投稿者の身元を見つけ出すことは出来なかった。

かなり高度な特撮、特殊メイクを行っていることから、製作者の特定は容易かと思われた。

しかし、数名の名前は上がるものの、作成者は特定できなかった。

結局、写っている情報から捜査するしかなかった。

しかし、暗いうえに、風景も映っていない。顔はモザイク。

髪形などの身体的特徴や制服をヒントにして、地道に捜査するしかなかった。

他にも、やらなければいけないことや捜査は沢山あり、毎日のように増えていく。

事件性が不明なこの件だけをやっているわけにはいかない。むしろ後回しになって行った。

そして、何の成果もなく時間だけが、過ぎて行った。

高島は、センター街で、深夜の街頭補導を行っていた。

夏休み。

のんびり過ごす子もいれば、バイトをする子も居る。部活に精を出す子もいれば、遊びに精を出す子も居る。

女の子は、夏休みを機に代わってしまいう子も多い。

出会いは、人を変えるものだが、良い出会いばかりとは限らない。

中学・高校時代、毎年、ひと夏の恋の後、友人の妊娠が発覚し大変だった。

そして、夏は1年で1番家出少女が多く、犯罪に巻き込まれる少女も多い。

生活安全部の仕事は多種多様だ。

身近なものもあれば、危険なものもある。

悪質商法や風俗事犯、近頃は、ストーカー・DVなどの相談が増えている。

生活安全部少年育成課の高島沙希の主要な仕事は、少年非行防止。早い話が街頭補導だ。

毎夜、センター街など若者に人気がある繁華街を中心に、日中、深夜を問わず、街頭で非行を防止するため補導を行っている。

高島が居る渋谷署の管轄は、原宿などに近く、109など少女に人気がある店舗が多いため、家出少女が多い。

家出少女は、売春など犯罪者になる場合も多いが、被害者になる場合も多い。

少女が犯罪に巻き込まれるきっかけになるのが、ネットだ。

世の中には、「神待ちサイト」と呼ばれるサイトが存在する。

この「神待ちサイト」とは、一言で言うと、家出をした少女たちが泊める場所を確保したり、食事をご馳走したるする、いわゆる「泊め男」を探すためのサイトのことだ。

一見、親切心による行為に思われるが、実際のところはそう甘くはない。

泊める場所や食事を与えた見返りとして、少女に肉体関係を迫る男性がほとんどだ。

プロの女を買う、金もないような男が素人に手を出すためのサイトと考えてもいい。

なかには食事をするだけで何も手を出さない男性もいるようですが、そういう男性は少ない。

逆らうと、暴力を受けることもあり、中には本物の暴力団も居て、そのまま売春に向かうことも多い。

ネットの発達により、家出はより危険なものになったと言える。

少女たちを犯罪から守るためには、有害サイトの廃止と現地での地道な補導活動しか現状では手段がない。

ほとんど、イタチごっこだ。

だが、諦めてはいけない。

高島が、深夜センター街を歩いていると気になる少女が居た。

亜麻色のカールショートヘアで活発そうな少女。

ピンクのタンクトップにデニムのショートパンツ。生足で肌の露出も多い。

16歳、高2くらいだろうか。荒れた感じはなく、遊びたいから家出しましたという感じだ。

そして、大きめのスポーツバッグを脇に抱えている。

典型的な家出初心者だ。

家出を繰り返す少女なら、既に友人や拠点を持っていて軽装だ。

こんなに荷物を持っているのは、典型的な田舎から出てきたばかりの家出初心者だ。

高島は、少女に声をかけた。

名前を聞いても、嘘の名前を言って本当の名前を教えたくない。年齢をたずねても、はぐらかすばかりだ。

強行策もあるが、会話をして関係を築くのが先だ。

そうすれば、家出を防ぐことはできなくても、防犯くらいにはなる。

だが、少女は、高島が一瞬目を離した隙に逃げだした。

必死に追う高島。

だが、少女は思いのほか早く、追いつくことが出来ない。

(警察学校を出たての20代前半の頃だったら、追いつけたのに)

高島は自分の年齢を感じてしまった。

次の日、5作目のスナッフフィルムがネットに上げられた。

内容は、前作と大きな違いはなかったが、出てくる少女には、どこか見覚えがあった。

亜麻色のカールショートヘアに、ピンクのタンクトップ。デニムのショートパンツ。生足。

そして、声。

昨日の夜、出会った少女に、どこか似ていた。

第4話 手がかり

動画を見れば見るほど、昨日の少女に思えてきた。

彼女を見失ったのは、夜の11時頃。

現在は、昼の12時。

夜のうちに撮影され、たった12時間で公開されたことになる。

こんな短時間に、特撮の準備をし、撮影し、編集することが可能なのだろうか。

できるはずがない。

しかし、映像は実在している。

この映像は、魔女が作成したのではないだろうか？

彼女は、魔女の生贄になってしまったのではないだろうか？

どこか、そんな風に考える自分が居た。

そもそも、なぜ、こんな噂が女子高生の間で広がったのだろうか。

単純に映像のためだろうか。

それなら、ネットを中心に、噂が広がるはずではないだろうか。

しかし、この噂は、女子高生の口コミを中心に伝わっている。

噂は、魔女の生贄から逃げ出した少女が居て、その子の話という形態を取っている。

実際に少女がいるのではないだろうか。
だからこそ、少女の間で噂が広がったのではないだろうか。

本当にそんな少女が居るのだろうか？

もしそんな少女が居るとしたら、警察に連絡が来ていてもおかしくはない。

そして、少年育成課で未成年の補導をしている自分の耳に入ってくるのが当然だろう。

補導した女子高生から、本当かどうか質問されたことはあるが、自分はそんな話を警察関係者から聞いたことがない。

やはり、噂なのだろうか。

単に、自分が知らないだけで、他の課の人は知っているのではないだろうか。

署内の喫煙コーナーで、日頃交流がない他の課の人に聞いてみた。

意外なことに、少女は居た。

保護された後、少女が、薬物をやっていたことから、組織犯罪対策部という別組織で対処された。

そのため、情報が来なかったのだ。

『魔女のところから逃げた』という彼女の証言は、薬物による幻覚として処理されていた。

そのため、彼女の話は、まともに取り上げられなかった。

組織犯罪対策部は忙しい部署だ。薬物に関係ない証言に対して、わざわざ裏を取られることはなかった。

同期から特別に調書を借りて読むことができた。

「神待ちサイト」で知り合ったこと。

魔女に廃墟に連れ込まれ事。そこから命からがら地下室から逃げたことなどが書かれていた。

「これって、凄い情報じゃないですか。でも、正規ルートの情報じゃないですよね」

野田浩二が興奮気味に言う。

「そこが問題なのよね。現状では報告できない」

下手に報告すればニュースソースの友人に迷惑がかかりかねない。この情報を元に捜査して、別の確固たる情報なり証拠が必要だ。

「これから、どうするつもりなんですか。高島さんは」

「独自に捜査するしないわね」

「お手伝いします」

廃墟の具体的な住所は書かれていなかったが、エリアは限定された。

後はしらみつぶしに探すだけだ。

今日のシフトだと、勤務終了は0時以降だ。さすがに、その時間からの捜査は辛い。

私と野田は、街頭補導に行くと言って、署を出た。

第5話 廃墟

多くの人で賑う渋谷に廃墟とは意外に感じられるかもしれないが、渋谷には意外と廃墟が多い。

再開発の用地買収が失敗したり、途中だったりで、そのまま放置されているビル・建物が多いいのだ。

そのような物件は、一応所有者はいるが、まともに管理されているとは言い難い。

不審者が簡単に入らないよう、鍵をかけ、シャッターを下ろし、窓にトタンを貼るぐらいで、見回りなんて面倒なことはいらない。

一歩間違えると、麻薬取引など犯罪の温床になる場合があるため、警察は一応把握している。

リストの先頭から調べてみることにした。

運良く、4件目で、それらしい物件にぶつかった。

長い間放置されているツタに覆われた薄汚れた低層の雑居ビル。地下室もあり条件を満たしている。

一応、シャッターは閉じられているが、鍵は壊されていた。

本来警察は、令状なく無断に私有地に入ることは出来ない。そのため、これは完全に違法捜査だ。

シャッターを上げ、中に入ると、窓などが侵入者が入らない用にトタンで塞がれているため、暗く空気は澱んでいてカビ臭い。

入口付近にあるスイッチを入れても、電気は付かない。

しょうがないので、カバンから懐中電灯を取りだし、中を照らす。壁は汚れカビが生え、床には埃や泥で汚れていたが、床に真新しい足跡や物を引きずったような跡があった。

何者かが、出入りしているということだ。
当たったのだろうか。

仲間を呼ぶだろうか。

いや、勇み足の可能性もある。単に、不良が使っているだけかもしれない。

確かめる必要がある。

高島は、地下室へと進んで行った。

地下の空気は、いつそうカビ臭く、さらに何かが腐ったような腐敗臭すらしていた。

『キャバレー オセロ』

扉の側には、そう書かれた古びた電飾看板が置かれていた。

高島は、慎重に扉を開けた。

開けた瞬間、強烈な血と肉の腐った悪臭がした。

思わず口と鼻を押さえる。

ハンカチで口と鼻を押さえながら中に入り、床を照らす。

床は血で汚れ、魔法陣が描かれていた。

壁を照らすと、壁際には怪しい祭壇があった。

撮影場所は、ここで間違いなさそうだ。

映像からは判らなかったが、部屋を大きく見せるため、部屋の中は鏡張りだった。

それにしても、この酷い臭い。たぶん、本物の動物の血を使ったのだろう。

よくこんなところで、撮れたものだと思う。

明かりで奥を照らすと、まだ部屋があった。

近づき、確認してみると、扉には『VIP ROOM』と書かれていた。

扉を開くと、ここだけ消臭剤と防腐剤の臭いがする。

懐中電灯で、中を照らす。

高島は思わず体が震えた。

暗闇の中、女性が席に座っていたのだ。

いや、違う。相手は高島に一切反応しない。

人形だ。

1体だけではなく、綺麗なドレスを着た5体の人形が席に座っていた。

その顔を見ると、映像の中の少女たちに似ている。

これは一体何の意味があるのだろうか。

ガシャン。

背後で扉が閉まる音がする。

急いで振り返ると、そこには、鉄仮面を付け全身を黒いローブで包んだ女が、ナイフを持ち立っていた。

第6話 映画批評

映像は、エンディングロールもなく、唐突に終わった。

「これで、終わりなのか。中途半端だぞ」

「そうみたいです。ホラーでよくある手法といえば、手法ですが」

「この後、婦警さんは、どうなるんでしょうね」

「たぶん、殺されたんじゃないですか。ホラーですから」

「鉄仮面の正体は、何だったんだ」

「判らなかつた。ヒントすらない」

「近頃の日本の奴は、設定を膨らますだけ、膨らませて、オチをつけれないのが多いですからね。」

「予算もないでしょうし、たぶん、そこまで考えないで作ったんじゃないですか」

「確かに、これじゃヒットしないだろうな。映像は残酷なだけで、バリエーションがないし」

「廃墟に行きつくところも、典型的なご都合主義ですしね。残酷な映像に、申し訳ない程度のストーリーを付けた感じですね」

「どうしますか？」

映画を見たが、これといった新規の情報もなし。

明確に判ったのは、『魔女の生贄』の映像が『魔女の鉄槌』という作品から取られているということだ。

つまり、『魔女の生贄』の映像は、偽物。

「女子高生の家出や失踪なんて、毎日あるもんで、ネットの映像と合体して変な噂になっただけだな」

「たぶん、そうだなろうな・・・」

清水の歯切れが、どこか悪い。

「何か気になるところでもあるんですか」

「いやあ、組織犯罪対策部のサーバには入ってなかったなと思って」

「清水さんも心配性ですね。じゃあ、とりあえず、入るだけ入ってみたらどうですか。それで何もなければお終い」

現実には、映画のように、ご都合主義で安易だった。

組織犯罪対策部のサーバに入ったところ、調書があったのだ。内容は完全一致ではないが、廃墟のエリアは記載されていた。

「これって・・・」

「行くしかないだろうな」

手分けをして探すと、一時間程で、条件に合う物件を3件ほど見つけることが出来た。

どれも、映画に出てくる建物とは、少し感じが違うが、調書の条件に合う低層雑居ビルだ。

一番条件に合ったのが、渋谷駅から徒歩で15分ほどの雑居ビルだ。

場所は、ラブホテル街にも近く、活気がなく、あまり人気が多いところではない。

ビルは、ツタに覆われてこそいないが、汚れていて、10年は放置されている感じだ。

壁やシャッターなどは落書きだらけ、ボヤの跡だろうか壁には黒く焦げているところすらある。

幸運なことに、シャッターの鍵は壊れている。

シャッターを開けると、カビ臭いニオイと、何かが腐った強烈なニオイがする。

こんなこともあるのかと、念のために来る途中のマツモ キヨシで買ったマスクを付ける。

「入ってみますか」

近藤を先頭にして、ビルの中に入って行った。

第7話 撮影現場

近藤を先頭にして、ビルの中に入って行くことにした。

ビル内の空気は、いつそうカビ臭く、さらに何かが腐ったような腐敗臭すらしていた。

カバンから懐中電灯を取りだし、中を照らす。

壁は汚れカビが生え、床には埃や泥で汚れていた。

そして、映画と同じように、床に真新しい足跡や物を引きずったような跡があった。

何者かが、出入りしているということだ。

懐中電灯は1人1本。

近藤は工事現場で使うような大型の懐中電灯を持ちながら先頭を進む。

原田は拾った鉄棒を長刀の代わりに持ちながら近藤の後ろをついて行く。

結城はリハビリの成果で、短い距離ならば、ゆっくりと歩けるようになった。

怪物が出てくる『あいの世界』では問題なく歩けるようになるので、重要な戦力としてやはり居てほしい。

そのため、エアガンを構え清水と一緒に最後尾をゆっくり進む。

近藤たちは、地下室へと進んで行った。

狭い階段を降りる。

『クラブ ヘブン』

扉の側には、そう書かれた古びた電飾看板が置かれていた。

まるで、映画のストーリーをなぞっているようだ。

これは一体、何を意味しているのだろうか。

低製作費映画なのだから、撮影に使ったのであれば、同じになるはずだ。

映画との奇妙な一致と違い。妙に気になる。

原田が慎重に扉を開け、近藤が部屋の中を覗いた。

開けた瞬間、マスクを通して、さらに強烈な血と肉の腐った悪臭がした。

近藤の大型懐中電灯が、学校の教室ぐらいの大きさがある部屋を照らす。

壁も床も血で汚れ、部屋中血まみれだ。

床には魔法陣が描かれていた。

壁を照らすと、壁際には怪しい祭壇があった。

祭壇の反対側の壁には、全身を有刺鉄線に縛られた男の死体が磔にされていた。

床には血だまりの跡があり、死因は、全身から血を流しての出血死だろう。

顔には特に有刺鉄線が何重にも巻かれており、顔の判定は出来ない。

映像は固定カメラだった。そのため、カメラアングルの死角になる最大の反対側の壁は、映らなかつたのだろう。

結城と原田が磔の男を調べる一方で、近藤と清水は、祭壇を調べてみた。

悪魔像の類はなく、人体の一部が捧げられているようなこともなかつた。

むしろ、普通に十字架やらマリア像が置かれており、製作者の手抜きが感じられる。

「どうかしたの」

清水が近藤にたずねた。

「いや特に。近くで見ると、悪魔教らしくないなと思ってね」

明かりで奥を照らすと、まだ部屋があった。

扉には『VIP ROOM』と書かれている。

「映画と一緒にだな。撮影場所は、ここで間違いなさうだが．．．」
それにしても、この酷い臭い。たぶん、本物の動物の血を使ったのだろう。

よくこんなところで、撮れたものだと思う。

「本当に、撮影現場なのですか」

原田が呟いた。

どうやら、近藤が感じた違和感を原田も感じていたようだ。

「どういうことだ」

「撮影現場というより、まるで、本物の魔女の儀式が行われた場所みたいですね」

「．．．．．」

確かにその通りだ。

現状では、動物を血を使ったのか、人間の血を使ったのが、見分けがつかない。

「それにしても、映画に取りこまれたみたいないな奇妙な感覚になりますね」

「．．．．．」

お互い、顔を見る。

まずい。

鐘が鳴ってから、『あいの世界』に取り込まれることが多いが、鐘がなくなっても、『あいの世界』に取り込まれることがある。

現実と偽りの境界が曖昧に感じられるということは、『あいの世界』に取り込まれているか、取り込まれる危険性が高くなる。

ガラガラガラガラ

シャッターが閉まる音がする。

閉じ込められないように、ドアには細工したが、シャッターにはしていないかった。

うかつだった。

同時に、ガタンと『VIP ROOM』の方から音がした。

そして、『VIP ROOM』の扉がゆっくり開く。

扉の奥からは、全身を黒いローブで包んだ鉄仮面が、ナイフを持ち現われた。

第8話 鉄仮面

「バラバラにしちゃ。駄目よ」

「判ってますよ」

先手必勝。

結城は、『戦車』のカードを用いて、鈍く銀色に光る甲冑をまとう騎士の姿をした悪魔を召喚する。

騎士が鉄仮面の手足を刺貫くと、鉄仮面は剣の勢いで壁へと跳ね飛ばされた。

さらに、騎士は、結城の胸元から来る途中で食べた焼き鳥の串の束を取りだすと、鉄仮面に向かって投げ、壁に磔にした。

「さすが。やるわね」

「だてに、1日三千本、串を通していません」

座っていても、出来る仕事ということで、結城はアルバイト先で、1日三千本も鳥に串を通していいらしい。

それにしても、焼き鳥屋で串を通してると、投げるのまで上手くなるのだろうか。

「さてと。次は仮面の下も見せてもらいましょうか。近藤、仮面取れ」

「えっ。僕が取るの」

どうやら相手は既に、結城の攻撃で気を失っているが、相手の能力が完全に判っていない以上、近づくのは非常に怖い。

第一、仮面に何らかの細工がしてあるも可能性も否定できない。

近藤は、恐る恐る鉄仮面に近づくと慎重に仮面を取った。

現われた素顔は、角刈の20代前半の男。
しかし、男の顔には、口がなかった。

「・・・誰、こいつ・・・」
「さあ？」

誰だか判らないが、主犯もしくは関係者であることは間違いないだろう。

しかし、口がない以上、自白させるのは無理だ。

清水の能力を使って、頭の中を見る方法もあるが、その時間はなさそうだ。

カツン、カツンと階段を降りてくる足音が聞こえてきた。
シャッターを閉めた人物だろうか。

懐中電灯を持っているのだろう、照らしている明りから直ぐ近くに居ることが判る。

「誰ですか。入ってくる前に両手を上げて、名前を名乗ってください」
「い」

清水が銃を構えながら、階段に居るだろう姿の見えない人物に対して警告した。

「あなたたち、こんなところで何をしているの？」

「あなたこそ、誰なんですか？」

「私は、渋谷署の少年育成課の小泉良子よ」

また、映画とシンクロしている。

そして、微妙に違う。映画だったら、高島沙希なのに、現実では小泉良子か。

あの映画は、現実ではない。一方、完全な偽物ではない。そうか、何でこんな簡単なことに、気が付かなかつたんだろう。あの映画は、『あいの世界』の映画だ。

半分現実で、半分偽り。現実と虚像の境界にある映画。

流行りのフェイク・ドキュメンタリーでもあり、フェイクでもあり、ドキュメンタリーでもある。

ややこしい。

「名乗ったわよ。あなたたちは何をやっているの」

「私たちは、ネットで映像を見て、本物が偽物かを確かめに来ました」

「あなたたちも、あの映画を見たのね」

「そうです。とりあえず、両手を上げて降りてきてください」

「ずいぶん、警戒しているのね」

「そりゃそうですよ。こっちは、鉄仮面に襲われたんですから」

「鉄仮面は本当に居たの？」

「居ました」

「判った。あなたたちの言うとおりにするわ」

現われたのは、ライトグレーのスーツを着た女性。

映画で見た高島沙希と似ていると言えば、似ているが違うと言え
ば違う。

現実と映画は、いつもシンクロしているのだが、どこかがいつも
違う。

「森本」

小泉良子は、壁に礫にされている男を見て、叫んだ。

「あなたたち、森本に何をしたの？ 彼は警察官よ」

第9話 魔女

「襲ってきたので、倒しました。彼が鉄仮面をつけていたのは間違いないですよ」

近藤は、鉄仮面をアピールする。

「そんな」

「いまどき、警官の不祥事なんて珍しくないだろ。少女売春する警察官が居る時代なんだから」

「でも、何で森本が」

「知る訳ないだろ！！今来たばかりだから」

「そりゃそうだ。」

「魔女の正体は、女警察官の同僚か。」

「とすると、あの映画のオチも同じか。」

「パン、パン」

唐突に、清水が、銃で森本の額と心臓を撃ちぬく。

「えっ、死んじゃったんじゃないの。」

「清水さん！！」

原田が叫ぶ。

小泉が清水から銃を取ろうと襲いかかるが、既に足元に茨が伸びており、自由に動けない。

「何よこれ。あなたたち何者なの」

「魔女を狩る魔女よ。男も居るけどね。ところで、誰か、カードを手に入れた」

急いで、ポケットを探るが、誰も手に入れていない。

「こいつは契約者ではないわね。ならば・・・」

清水は、銃を小泉に向けた。

「あなたかもしれないわね」

「大丈夫。あなたが契約者なら死ぬけど。契約者じゃないなら死なないわ」

「清水さん。いくらなんでもやりすぎよ」

原田さんが清水さんを止める。

「ねえ、映画の題名覚えてる」

「魔女の鉄槌でしょ」

「魔女の鉄槌という本があるんだけど、厳密に訳すと『魔女に与える鉄槌』という魔女狩りの教科書なのよね」

「それが何の関係があるんですか」

「あの映像は、魔女が少女を生贄に捧げる映像ではなくて、魔女に罰を与えている映像なのよ。」

つまり、少女たちが魔女で、私たちが魔女だと思っているのは、異端審問官。

確か、あなた少年育成課って言ったわよね。わがままなガキの相手させられて、罰を与えなくなっただんじじゃないの」

「大外れ。私は、あの子たちを救済しているのよ。汚れて行く彼女たちの魂を救済してあげたの」

小泉は、自ら自供し始めた。

その小泉の表情、口調は、まるで霊にでも取りつかれた別のものだった。

「人を殺しておいて、何言っているの」

「死んでないわ。ミイラにしかただけ。心配しなくても、あなたたちが邪魔さえしなければ、彼女たちは生き返るわ。」

それに、たとえ死んだとしても、無実の罪であれば天国に行ける。罪を犯していても、罪は清められ天国に行ける。

生きて罪を重ね地獄に行くより、よっぽど良いわ」

「狂ってわね」

「価値観の違いよ。どうやら、あなたたちにも救済が必要みたいね」

パン、パン

清水が銃を撃つが．．．避けられた。

小泉は、素早く清水との間を詰めると、清水の右手首を掴むと、全身を使って、腕を返して手首と肘、肩を極めて押し倒した。

そして、すぐさま清水の肩を外す。痛みで、うずくまる清水。

柔術だ。警察官だけあって、格闘技経験者だ

(まずい。なんかまずいぞ。)

近藤は困惑した。

肉体強化をしているだろうが小泉の攻撃は、普通の人間のものと変わらない。しかし、その動きは奇怪だった。

予測して避けたというよりも、一瞬、コマが飛んだように見えた。髪の毛の揺れ方から考えると、高速移動ではない。瞬間移動だ。

しかし、それだけではないような気がした。

近藤は、大剣で、小泉に水平切りをするが、いとも簡単に避けられた。

避けたと言うよりも、剣が体をすり抜けたという感じだろうか。その瞬間は見えず、また、コマが飛んだような感じだ。

そして、小泉は、回し蹴りのハイキックを近藤の頭部に入れた。
続いて、近藤の懐に入り、腕とえりもとを掴むと投げ、近藤を床
にたたきつけた。

そして、腕を取るとへし折った。

第10話 裁き

近藤の悲鳴が地下室に響く。

「意識を失った方が、楽なのに」
へし折った腕をさらにねじる。

近藤は痛みあまり意識を失った。

わずか十数秒の間で、近藤と清水がやられてしまった。

相手の攻撃能力は、今までの中で最弱だろう。しかし、最速でやられている。

「どうしたの。かかって来ないの」

パン

清水が背後から銃を撃つが．．．また、避けられた。

「背後から撃つなんて、卑怯じゃない」

銃を持つ清水の腕を銃ごと踏みつぶす。

原田が前に出る。

「原田さん。俺が」

「体術だったら、私の方が上です。この前みたいな失敗はしません」

「体術だったら、私を捕まえられなくても。ずいぶん自信があるのね。何やっていたの」

「合気道です」

「合気道？ 実践で意味あるの」

「やってみれば判りますよ」

小泉は左半身で柔術の構えを、原田も左半身で合気道の構えをし、相手と向かい合った。

しばしの沈黙、二人は構えたまま動かない。

「意外と、できるじゃない」

小泉は、右での中段の突き。

避ける原田。

続いて、小泉が突きと蹴りの連打を続ける。

小泉の猛攻に対して、原田は、受けたり、流したり、後ろに引いたりと防戦一方になる。

しかし、原田も、一瞬のすきを突き、小泉の右の突きを左手で外に払う。

そして、そのまま左手を押し出し、あいの手腕に沿って手刀を繰り出す。

当たったと思った瞬間、小泉の左手が、原田の左手を受け掴み、擦じる。

そのまま、原田の左腕を取り、肘を押え、抑え込もうとする。

しかし、原田も手首をひねり、原田の手から逃れる。

さらに、その体勢から、体を回転させ、小泉の後頭部に対して、回転回し蹴りを行う。

当たる直前、また小泉の体を通り抜けた。

その直後、小泉の上段の突きが顔に、続いて中段蹴りが、原田の腹に入る。

原田がたまらず、後ろに下がり、間合いを広げる。

再び、構えて向かい合う。

「合気道って、殴る蹴るは禁止じゃないの」

「私の師匠は実践派なので」

「なかなか、やるじゃない。警察に入らない」

「お断りします。私は美大生なので」

「そう。残念ね。遊びはお終い。そろそろ本気に行くわよ」

再び、小泉が突きと蹴りの連打。

小泉の猛攻に対して、原田は、受けたり、流したり、後ろに引いたりと防戦一方になる。

小泉の左での上段の突き。

左手で受け掴み、内側にネジリこみ関節技に持っていく原田。

対して、小泉は、体を右回し、右肘を原田の後頭部に入れる。

よろめく原田。

小泉は、その隙を逃さない、原田の腕を掴むと、素早く手首と腕をネジリ、床に倒す。

そして、足で押さえつける。

勝利を確信する小泉。

その瞬間、結城の鎧が、小泉の体を覆った。

身動きが取れない小泉。

「俺は忘れちゃ困るよ」

押えられていた原田が、技を解いて、立ち上がる。

「やっぱり逃げられませんか。どうやら、ダメージを受けそうな時だけ、自動的に魔法が発動するみたいですね。」

隼人さん。良く判ってくれましたね。ありがとございます」

原田は以前、吸血鬼に操られ、結城の鎧により抑えられるという失敗を犯した。

「そりゃ、俺と優奈さんの仲じゃないですか」

原田は魔法を使い、清水と近藤の意識を回復させる。

「悪いな。いつも」

「今日は足引つ張りで、すいません」と近藤。

「大丈夫です」と原田は笑顔で答えた。

原田の魔法は、ダメージを回復させるが、その際、何割かダメージを引き受けてしまう。

骨折した近藤を修復させたので、ひび割れぐらいしているかもしれない。

「さて、どうしたのか。ダメージを与えられないのは厄介だな」

「いや、この状態ならダメージを与えられるんじゃないかな。」

おそらく、この人の能力は、良くアニメや漫画にある奴だよ」

近藤は、そう言つと祭壇とは反対側の壁の棚を探り始めた。

「アングルを考えるとこの辺りにあるはずなんだけど・・・あつた」

近藤は、皆にビデオカメラを見せた。

「コマが飛んだように見えたのは、瞬間移動じゃないなくて、フィルムを止めて、その間に移動したんだよ。」

ある意味、時間停止能力。自由に発動できたら間違ひなく全滅してましたね」

近藤は、ビデオカメラを床に落とし、踏みつけて壊した。

「カメラを壊したからもう能力は使えない。能力が使えたとしても、瞬間移動じゃないから鎧からは出られない」

「殺すなら殺さない」

「別に私たちは、あなたを殺したいわけじゃありません。ただ、女の子とたちを助けたいだけです」

原田の言葉を聞いて、小泉は原田をせせら笑った。

「女の子たちを助ける。そんなこと、あなたたちにできるの。」

彼女たちを助けられるのは、私だけよ。

私は彼女たちを助けようとした。守ろうとした。犯罪から、汚れた男たちから。

なのに彼女たちは私の言うことを聞かず、罪を犯し汚れて行く。私はどうしたら良いの、どうしたら彼女たちを救えるの」

彼女はもう近藤たちのことを見ていない。

一方的に、話し続けている。

「この女。何か、おかしくないか」

「清水さん．．．私のポケットの中にカードが」

原田がポケットから手を出すと、手の中には『審判』のカードがあった。

彼女は、本当に狂ってしまったのだ。

そして、現実の世界でも。

第11話 エビローグ

『VIP ROOM』に入ると、ここだけ違う臭いがする。ハーブや花の爽やかな臭いだ。

懐中電灯で、中を照らす。

部屋は綺麗に清掃され、部屋全体が色とりどり花で飾られていた。

そして、ソファーには、綺麗な純白のドレスを着た5体の少女の死体が席に座っていた。

その死体は綺麗に髪を整えられ、化粧もされ、生きている時よりも、綺麗なのではないかと感じられた。

『あいの世界』から現実の世界に戻ると、ネットを見ると、最初に見た動画や「魔女の鉄槌」の動画はなくなっていた。

動画がなくなり代わりに同じ内容の「魔女の鉄槌」という小説が、「小説を読もう！」(<http://ncode.syosetu.com/n9488p/>)というサイトに上げられていた。

そして、次の日の新聞社会欄を見ると、右下に小さく地下で会った森本についての記事が載っていた。

殉職や2階級特進の内容ではない。

懲戒免職、逮捕の記事だ。

森本は、自分の地位を利用して、少女たちの情報を得ると、少女たちを脅し、肉体関係を迫っていたのだ。

最悪の奴だ。

そう考えると、森本は協力者というよりも、奴隷だったのではないだろうか。

磔にされ殺されていた男も、少女たちに対して何らかの悪いことをしていたのではないだろうか。

そう考えると、近藤には小泉がどこまで悪人なのか、判らなくなってきた。

小泉に関する記事はなかったが、清水がハッキングして調べると、警察病院の精神科に入院していた。

数日後。

原田さんの家に行くと、清水さんがHPを見ていた。

「近藤。このサイト、見てみる」

清水さんが見ていたのは、女性には相応しくない男性向けのAVサイト。

しかも、ロリータを売り物にしているところだ。

「エロサイトじゃないですか。なんでこんなもの見ているんですか」「いいから写真の顔を良く見てみる」

写真には目隠しもモザイクもなく、高校生ぐらいの少女たちの素顔が写っていた。

「この子たち・・・」

そこに居た少女たちの何人かは、地下室の『VIP ROOM』で見た少女に似ていた。

今日も、暑い体育館での演劇の練習。

近藤は、ガリガ 君を食べながら音響をやっていた。

舞台上で頑張っている人には悪いが、ガリガ 君が冷たく、美味しくない。

現在練習しているのは、『マクベス』の第5幕第5場、夫人の死の報せを聞いて、マクベスがつぶやくシーンだ。

このセリフは、名言として有名なので、見せどころのひとつと言える。

ただ、長いセリフなので、マクベス役の鈴木は大変だ。

「明日、また明日、また明日と、日々、決められた最後の一瞬が迫って来ている。

惨めな死への道は明白だ。消えろ、消えろ、燈火よ！

我々は、付いて周る影だ、哀れな役者だ。

舞台上でおおげさにみえをきっても、出場が終われば忘れ去られてしまう。

愚か者の物語だ。

わめき立てる響きと怒りはすさまじいが、意味はなに一つありはしない。」

シエークスピアは、たびたび世界を舞台、人生を物語に例え、人間はその役者にすぎないという。

哀れな役者か・・・確かに、自分は運命に翻弄される哀れな役者

なのかもしれない。

マクベスのように、魔女の予言に振り回される役者なのかもしれない。

結果だけ見ると、愚か者の物語かもしれない。

でも、何一つ意味がないのだろうか。

意味があるものであって欲しいと思うのだが、実際のところ、近藤には判らなかつた。

- - - - -

マクベスのセリフは、一部意識しています。

閑話 その1 名声

もう夜の10時。

廃墟からの帰り道、渋谷のマークシティを歩いていると、どこかで会ったことがあるような女の子が居た。

ギャル系ファッションの男3人にナンパされている女の子3人組の1人だ。

スポーツ系ボーイッシュな感じで、渋谷で夜遅くまで遊んでいるような感じではない。

夏休みの魔力だろうか。

気のせいか、ナンパを嫌がっているように見えるのだが・・・どうにも、若い子のリアクションは判らない。

「どうしたの」

近藤の態度が気になったのか、原田さんが声をかけてきた。

「あそこで、ナンパされている女の子。学校で見たことがあるなと思っ」

「なんか嫌がってない」

「やっぱり、そう見えますか」

「お前には、そう見えないのか」

「嫌よ、嫌よも、好きの内って言うじゃないですか。あれって、交渉術じゃないんですか」

「女の私から見て、あれは100%嫌がっているぞ」

「男の俺から見てもそうだ」

「そうですか・・・男女二人が言うのだから間違いないだろう。」

「.....」

三人とも僕を無言で見る。

「助けないといけないですかね」

「助けないの」

原田さんが軽蔑した眼差しで見る。

「勘違いだと恥ずかしいし．．．それもありがたかったのですが．

．．．」

「その選択は、人間として、どうかと思うよ」

「そうですね．．．」

作戦としては取りあえず、知り合いを装った挨拶。

その後は、流れでアドリブだ。

そんな器用なことが僕に出来るのだろうか。

「助けてほしければ、女の子の方が話を合わすから大丈夫よ」

女の子たちに近づくと、大きな溜息の後、覚悟を決めて声をかけた。

「おひさしぶり」

近藤の挨拶に対して、男たちは近藤を睨みつけ、女の子2人は、げげんな顔をした。

しかし、1人だけは明るい顔になった。

「近藤先輩。こんばんわ。遅いじゃないですか、待ちましたよ」

なるほど、これが女の子方から、話を合わすというやつか。

それにしても、彼女は僕の苗字を知っていた。

僕って、そんなに有名人だったかな。

「ごめん。ごめん。ところでこちらの人たちは」

「先輩が、あまりにも遅いんで、私たちナンパされていたんですよ」

「どうも、すいません」

「連れが居るんじゃない。しょうがないな。じゃあ、また、別の機会に

ね

男たちは、爽やかに去っていた。うーん、引き際を判っているということか。やるな。

「先輩。ありがとうございます。ナンパがしつこくて困っていたんです」

夜遅くまで居るからだと言を言いそうになったが、そこは我慢した。

「今から帰るんだけど、一緒に帰る？」

彼女たちはお互いを見ると「はい」と返事をした。

どうやら、多少は懲りたようだ。

帰る途中で話を聞くと、僕を知っていた生徒は、部室が演劇部のとなりのテニス部に所属していた。

なるほど、だから顔だけ覚えていたのか。

しかし、なんで彼女は、僕の名前を知っていたんだろうか。

彼女は言うのを躊躇ちゅうちゅうしていたが、ようやく話してくれた

「演劇部の三上先輩や山村さんって、有名ですよね」

確かに、三上先輩や山村は、見た目、人脈、行動、態度などで学校では有名人だ。

「先輩は、振り回されている人ってことで有名ですよ」

「.....」

閑話 その2 兄妹

小野寺瞳は、弓道部の練習が終わった後の帰路、友人の上原とマクドナルドに入った。

途中で、友人が小腹が空いたと言いだしたためだ。

ダイエットのためには、間食は良くないのだが・・・正直、小野寺も小腹がすいていた。

それに友達に相談したいこともあった。

コンビニでも良かったが、エアコンが利いていて、お喋りもできるマツで軽食を取ることにした。

100円バーガーを食べながら、小野寺瞳は、昨日見た夢に関して友達に話し、助言を求めた。

夢の中で、久しぶりにお兄ちゃんと会った。

場所は、昔、良く一緒に遊んだ近所の公園。

正確には、面倒を見てくれただろうか。

お兄ちゃんと私は7歳も年の差があったので、お兄ちゃんにとって私と遊ぶという感覚ではなかっただろう。

でも、可愛がってくれたのは間違いない。

私は幼稚園生くらいだろうか。

一番、お兄ちゃんに、遊んでもらいたかった時期に戻っていた。

でも、お兄ちゃんは、二十歳くらいになって・・・カッコ良かった。

福山 治を若くした感じの端正な顔。身長も見上げるほど高くな

っていた。

「ただ、お兄ちゃんは昔から、黒が好きだったから全身黒ずくめ。それだけは、何とかしてほしかった。」

「お兄ちゃんは、昔のように、瞳と遊んでくれた。」

「昔よりも、遊んでくれたかもしれない。」

「お兄ちゃんは、男の友達とばかり遊んで、瞳を相手にしてくれたのは、長くても1時間ぐらい。」

「だから、一日中、お兄ちゃんを独占して、いっぱい遊んでいられるのが嬉しかった。」

「ブランコで休んでいると、お兄ちゃんがいろいろと質問してきた。」

「お兄ちゃんと一緒に学校に入ったんだってな。」

「うん。勉強苦手だけど、頑張つて、勉強したんだから。」

「高校楽しいか。」

「楽しいよ。特に今は夏休みで授業がないから最高。毎日、部活頑張ってるよ。」

「そうか・・・ちゃんと勉強しているのか。」

「しているよ。ちゃんと・・・。」

「本当か？」

「それなりに・・・。」

「判らなかつたら、ちゃんと先生や友達に聞くんだぞ。」

「判つた。約束する。」

「それから・・・彼氏とか居るのか。」

「今は居ない。」

「好きな人は居るのか。」

「うん、居ないかな。」

「そうか・・・。」

「お兄ちゃんは微妙な顔つきをした。」

「お兄ちゃんとしては、彼氏が居るのは、妹を取られたみたいで嫌。」

なんだが・・・あいつも可哀想だなと思って」

「あいつて誰」

「いや、何でもない」

「お兄ちゃんこそ、天国でお姉ちゃんに会えたの」

「会えた。今はあつちで楽しくやっているよ。だから、お前もな」

「判った。お兄ちゃんみたいな良い男見つけるよ」

「お兄ちゃんから離れるよ。相手の子が可哀想だろ」

「良いの」

そう言つと、私とお兄ちゃんは別の話を始めた。

ずっと、こんな時間が続いてほしかった。

でも、夕方になると、お兄ちゃんの友達が現われて、2人の時間を邪魔した。

しかも、お兄ちゃんの友達は、なぜか近藤信也だった。

そして、お兄ちゃんは、私を近藤に紹介する。

さらに、私の好きなもの、嫌いなもの。

過去の失敗、いろんなことを近藤に話し始めた。

「何で近藤なの！！！！！」

私は、叫んだ。

そして、ベットの上で目が覚めた。

「どっと思う。近藤の奴、ひどいと思わない。

せつかくお兄ちゃんの夢を見ているのに、人の夢に入って来て、邪魔をするのよ」

「ひどいって・・・」

夢を見たのは小野寺なのに、文句を言われる近藤に対して、上原は少し気の毒に感じられた。

それにしても、小野寺のブラコンぶりは、ちっとも治っていないと感じられた。

小野寺は可愛いので好意を持つ男も多いのだが、皆、小野寺のブラコンぶりに引いてしまう。

どんな男も、死んで美化された兄に勝てるわけないのだ。

「問題は、なぜ、お兄ちゃんと一緒に近藤を見たのかよ」

「どういうこと」

「もしかしたら、天国のお兄ちゃんからのメッセージかもしれないよ。」

『近藤、妹を頼んだぞ』っていう」

「え、なんで近藤なの」

小野寺は露骨に嫌そうだ。

「そんなに近藤嫌なの。近頃、前より話すようになったじゃない」

「それは、近藤と清水さんが知り合いだからよ」

「ふ、ん。そうなんだ。でもさ、近頃、近藤変わったと思わない」

「どこが？」

「どこかと言われると困るけど。結構、近頃話題になるしさ」

「確かにそうだけだよ」

1年の頃は、一切話題にならない近藤信也だったが、このところは結構話題になっていた。

特に、この間なんて、夜の渋谷で絡まれていた女の子を助けたそうさだ。

近藤が夜の渋谷に居るということ自体似合わないが、女の子を助けたとなると、さらに似合わない。

ミステリアスな男性を好む女性が多い。

なにかと、近頃、怪しい近藤に、一部の女子たちの関心が、少しずつ向いているのは間違いない。

「なんか、近藤ってパシリのイメージだったけど、意外と頼りになる面があつたりしてね」

「私は．．．前の近藤の方が良かったな．．．」

「え？」

上原が驚いたため、小野寺も我に返った。

「何言っているんだろう。私」

小野寺は、自分で自分の気持ちが判らなくなっていた。

閑話 その3 妹兄

朝、近藤が寝ぼけ眼で、台所を歩いていると・・・バキ。

足の下で何か変な音がした。

妹、里桜の携帯だ。

なぜ、こんなところに・・・

そういえば、今日の朝食を作ったのは、里桜だった。

その時、台所に携帯を置き忘れたのだろう。

そして、何らかの原因で、床に落ちて、僕に踏まれたようだ。まずい・・・

女子高生が、命の次に大切なものって、何だっけ。

確か・・・携帯だよな。

小学生は・・・何なんだろう。

まさか・・・携帯じゃないよな。

そんな大切なもの、台所に置いたままにしていないよね。

恐る恐る里桜の居場所を探した。

居間に行くと、里桜は姉たちと一緒にテレビを見ていた。

「どうしたの。お兄ちゃん」

僕の気不味そうな顔から妹の里桜のほうから声をかけてきた。

「お兄ちゃんがそういう顔している時って、何か失敗した時よね。素直に白状しなさい」

さすが妹だ。

「踏んじやった・・・携帯・・・里桜の」

妹の壊れた携帯を見せる。

妹は立ち上がるが、言葉もなく、泣きそうな顔をする。

「買って返すから泣くなよ」

「.....」

「お前が変な所に置くから悪いんだろ。大切なものならちゃんと管理しろよ」

売り言葉に買い言葉だ。

悪循環。

だが、判っていても止まらない。

「.....だからって、踏むことないじゃない.....」

「別に好きで踏んだんじゃない」

妹も僕も言葉が出てこない。

この間が怖い。

妹の口から言葉が先に出た。

「おにいちゃんなんて大っ嫌い。返して携帯」

僕の手から壊れた携帯を奪うと2階へと駆けて行った。

「あゝあ。泣かせちゃった。責任取れ」

「お前が悪い」

姉たちが次々に詰る。

僕にどうしろと言うんだ。

「出かける」

「逃げるのか」

「そつだよ」

僕は、家に居られなくて、外に出た。

どこに行こうかな。

時間はたっぷりある。

どこで時間を潰すかだ。

とりあえず、書店や図書館、喫茶店など時間を潰すところがある
ひばりヶ丘の駅に行ってみることにした。

図書館で時間を潰した後、ひばりヶ丘北口にある携帯ショップに
行ってみた。

妹が持っているのと同じ機種があるかを確認するためだ。
なかった。

夏モデルで新機種が出ていて、同じ機種はなかった。

店を出ると、反対側に喫茶店があるのに気が付いた。

田無にある武蔵野茶房みたいな大正レトロ風の外観だ。

「le reve」
ル・レーヴと読むのだろうか。

こんなところに、喫茶店あったけ。

新装開店とある。

何があったか、思い返す。

前、古本屋さんがあったところだが、たしか閉店して、空き家になっ
ったんだよな。

ここで時間を潰そう。

ドアを開けると、昔ながらのチリン、チリンとベルが鳴る。

中はそんなに広くなくそんなに広くなく、カウンターとテーブル
が二つ程度。

内装も木を基調としたレトロ風。

照明は控えめで、大人向きの感じだ。

店主は、20代後半、長髪で眼鏡をかけた落ち着いた感じの女性
だ。

お客は誰も居なかった。

メニューを見ると、コーヒーの種類は少ないが、紅茶の種類は充実していた。

ダーズリンやアッサムなど、ハーブティを含めて16種類もある。値段は、紅茶・ハーブティともに1杯500円均一。

お代わり自由。

お代わり自由とはなかなか良心的な気がする。

ハーブティを見ると、薬効が書いてある。

『カモミール茶

りんごのような香りがあり、腹痛・風邪・不眠症に効果があります』

『ラベンダー茶

精神的ストレスを和らげ、不安や緊張をほぐして気持ちを穏やかにしてくれます。』

僕は、ラベンダー茶を注文した。

店の中にある雑誌を読んだり、外の人たちを見ながら、時間を潰した。

それにしても、感じの良い店だ。

里桜と仲直りをしたら、今度、店に連れてこよう。

たぶん、気に入ってくれるだろう。

メニュー表を見ると、里桜の好きなチーズケーキもある。

その時は奮発してケーキでもおごろう。

気がつくとき少し気分が楽になっているような気がする。

これが、ラベンダー茶の効果だろうか。

それにしても、僕以外に誰もお客さんが入って来ない。
店の経営は大丈夫なのだろうか。
そんなことなどを考えていると、お店の人が声をかけてきた。

「お代わり、いかがですか」

「お願いします」

「少しは気分が落ち着きましたか」

「・・・」

「お客さん。さっきまで、溜息ばかりでしたよ。誰かと喧嘩でもされたんですか」

「うわ〜心を読まれている」

「妹とね。僕が妹の携帯を壊してしまいました」

「そうですか・・・妹さんには、ちゃんと謝られたんですか」

「謝らなかつたです」

「それは辛いですね」

「辛い？」

「なぜ、僕が辛いのだろうか。」

「携帯を壊してしまったことを後悔して。妹を傷つけたことを後悔して。謝らなかつたことを後悔して。後悔だらけですね」

「・・・そうですね」

「ちゃんと謝れば許してくれますよ」

「そうですかね」

「そうですよ。きっと、もう機嫌直っていますよ」

「そうだと良いんだけど・・・」

僕は、お店のお姉さんの言葉を信じて、喫茶店を出た。

お代は、一杯しか飲まなかつたので500円。

大丈夫なのだろうか、この店は・・・

「お兄ちゃん。どこ行っていたのよ」

「ごめん。携帯壊してごめん。悪かった」

「良いのよ。お兄ちゃん。私もちゃんと管理しなかったのが悪かったから。」

それより・・・お兄ちゃん、新しい携帯買ってきてくれるって言ったよね。」

私買ってほしいのがあるんだ。」

妹の機嫌が直ったのは良いけど・・・なんか出費が怖くなってきた。

「お兄ちゃん。時間あるんでしょ。今すぐ行こう」

妹は、僕の手を引っ張る。

「ああ」

妹と一緒に北口の携帯ショップに行くと・・・喫茶店はなく、以前と同じように空き店舗になっていた。

「何しているの。お兄ちゃん」

「ごめん。ごめん」

妹の後を追い、携帯ショップに入る。

僕は白昼夢を見たのだろうか。

それとも知らない間に、「あいの世界」に入ったのだろうか。財布の中を見ると、500円はちゃんとなくなっていた。

第1話 野々村桜

野々村桜。

俺が彼女と出会ったのは、実は高校の試験の時だった。

端整な表情に、少しウエーブをかけた長髪の落ち着いた感じの女性。

中学校の制服を着ていたが、高校3年生ですと言っても通じそうな物腰の柔らかい大人びた上品な雰囲気だった。

そして、俺は彼女に一目ぼれした。

試験で頭が一杯だったのに、彼女に会ってからは彼女ことで頭がいっぱいになった。

そして、彼女と一緒にの学生生活を夢見た。

偶然、同じクラスになり、彼女の方からの告白。

お互い一目ぼれだった。

でも、このことは彼女には内緒にしておいた。

惚れた弱みを見せなくなかったからだ。

しかし、こんなことってあるのだろうか。

お互いが一目ぼれなんて。

俺は自分の幸運に感謝した。

そして、世界は自分を中心に回っているように感じられた。

毎日会っているのに、毎日話しているのに、彼女と一日中過ごせる。日曜日が待ち遠しかった。

いろいろな話をした。

自分の隣の家に、自分と同じ桜の名前を持った姉妹が居ること。

そして、彼女は一人っ子だけでも、隣の家の子供たちが妹代わり

で、寂しくなく賑やかな生活をしていること。

隣の家の男の子が甘えん坊なこと。

彼女が言うには、男の子と俺は何となく似ているらしい。

彼女は子供好きで、将来は保母さんになりたいこと。

そして、子供は3人以上は欲しいこと。

子供好きの彼女は、妹がいることを話すと妹に会いたいと言いはじめた。

妹を紹介すると、最初、妹は警戒していたが、直ぐに仲良くなった。

そして、俺が、のけ者になった。

そんな日々が、明日も明後日も、続くのが当たり前だと思っていた。

それなのに、今、ここに彼女は居ない。

自殺。

最初、その言葉を信じることができなかった。

昨日まで元気だった彼女が、自殺するなんて。

昨日、笑顔で「また明日ね」なんて言った彼女が自殺するなんてそんなことありえるのだろうか。

言葉だけが頭を通り過ぎて、彼女の死を全く実感できなかった。

彼女の死体を見ても何も、実感できなかった。

彼女の顔は美しくただ寝ているだけだけのように見えた。

彼女の葬儀に行っても、まるでドラマのようでも何も実感できなかった。

彼女の家族が泣いているのも、まるでドラマのようだった。

涙も出ず、悲しみすら感じない。

本来親族しか行かないのだが、火葬場に行き、彼女の棺が焼かれ
・骨を拾っている時・・彼女の死を実感した。
彼女と二度と会えない。

この言葉がどれほど大きいことか。

突然、涙があふれ出し、嗚咽が止まらなかった。

お兄ちゃんが大好きなお姉ちゃんが死んでしまった。

お兄ちゃんだけじゃない、私も大好きだった。

最初はお兄ちゃんを取られたような気がしたけど、お姉ちゃんは私のお姉ちゃんになってくれた。

だから、私も大好きだったのに・・今は、お姉ちゃんのせいで、お兄ちゃんは悲しんでいる。

私の前では泣かないし、パパやママの前でも泣かないけど・・お兄ちゃんが悲しんでいるのは判る。

寝てないし、ごはんも食べてないし、テレビも見ない。

泣きたいのを我慢しているのではなく・・泣きたいけど泣けないんだ。

もう涙が出なくなっちゃんだ。

元気だった彼女が、自殺するなんて。

笑顔で「また明日ね」なんて言った彼女が自殺するなんて。

そんなことありえるのだろうか。

それとも、単に自分が彼女の悩みに気づいていないだけだったの
だろうか。

「愛する人がいれば辛いことがあっても生きていける」
誰かが、そんなことを言っていた。

俺は彼女にとって、愛する人じゃなかったのだろうか。
彼女にとって何だったのだろうか。

それはもう判らない。
だけど、俺にとって、彼女は命よりも大切な人だった。

運命は俺から彼女を奪い去ってしまった。
そして、二度と戻ってくることはない。
俺は自分と神様を呪った。

第2話 隣の子

彼女の死から数日後、彼女の家の隣の子が、おかしなことを言っているとの噂を聞いた。

隣のお姉ちゃんは、アイスホッケーのマスクをした男に襲われたと言っているのだ。

少年の証言を元に、一応、捜査は行われたが、証拠は一切なく、ショックを受けた少年の妄想として片づけられた。

本当にそうなのだろうか。

俺はとりあえず、少年に会ってみることにした。

少年の名前は、近藤信也。

甘えん坊で、弟のような存在だと桜からたびたび話を聞かされていた少年だ。

桜は、結婚したら、瞳のような娘と近藤信也のような息子が欲しいと言っていた。

なんとも、気の早い会話だ。

噂によると現在、少年はショックのあまり外出できなくなり、自宅療養をしているとの話だ。

最初は家に行って、両親の許可をもらい話を聞こうと思ったが、さすがにそれは難しい。

本人も思い出さたくないだろうし、両親も思い出させたくないだろう。

心が痛むが、両親が居なくなった隙を待つことにした。

会ってみたら、その印象は、桜が話してくれたものとは、大きくこ

となっていた。

明るくて、いつもニコニコしている人懐こい少年と言っていたが、目は虚ろで、表情は硬く死んでいた。

最初、俺のことを凄く警戒していた。

しかし、桜の恋人だと言い、桜のことを話し、2人で写っている写真を見せたら、警戒を解いてくれた。

少年は勇気を振り絞り、桜のことを話してくれた。

その内容は、少年の妄想とは思えないほど、凄惨な内容だった。

あまりの内容に、俺は途中で聞くのを止めた。

その凄惨な状況を、見続けさせられた少年と見られ続けた桜の気持ちを考えて、それだけで俺は気が狂いそうになった。

俺は少年の話聞き確信した。

警察は少年の妄想と片づけたが、小学校低学年の子供が、ここまです凄惨な女性がレイプされている状況を妄想できるのだろうか。

出来るはずがない。

何か裏があると確信した。

しかし、いろいろ調べてみても、犯人への手掛かりは、一切見つからなかった。

やはり、少年の妄想だったのだろうか。

目が覚めると、僕は闇の中に居た。

正確には何か、窮屈なところに閉じ込められている。

少し手を動かしても見ると、木製の板に手が触れた。

どうやら箱の中に閉じ込められているようだ。

手で押すと、簡単に板は動かすことができた。
板の隙間から月が見える。

夜空が見えることから、どうやら外に居るようだ。

板を外し、身を起こし辺りを見渡した。

見覚えのあるバスのロータリーに駅、アーケードが見える。

場所は、吉祥寺の北口、サンロード商店街入り口のところだ。

そして、自分が棺の中に居たことが判った。

周囲を良く見ると、棺は自分の物だけではなく、何個も道の上に
転がっている。

なぜ、こんな夢を見ているだろうか。

棺から連想できる言葉は、死だ。

自分は死を望んでいるのだろうか。

そうかもしれない。

死ねば、桜に会える。時よりそんなことを考えている自分が居る。

そんな時、俺を引きとめるのが、友人であり、両親であり、妹だ。

桜に会えないのも辛い、友人や家族に会えないのも辛い。

自分が死んで彼らを悲しませるのも辛い。

そして、何よりも桜自身が、そんなことを望まないだろう。

そんなことを考えていると、棺の1つが動いたように感じられた。

いや、1つだけではない。

周囲の棺のふたが動いている。

そして、何かが起きあがってくる。

自分が棺に入っていたように、自分以外の人も入っていたようだ。

一体誰だろうか？

友人の相田だろうか。

近づいてみると、相田ではないことが判った。

棺の中から出てきたものは、目もなく、口もなく、ただ顔の真ん中にヤツメウナギのような口がある異形の者だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9711n/>

魔法。 ~ 鐘の音が響く街で

2011年3月15日21時33分発行